

甘縄神社遺跡群 (No.177)

長谷一丁目 227 番 24 地点

例 言

1. 本書は鎌倉市長谷一丁目227番24地点に所在する個人専用住宅建設に伴い行われた甘縄神社遺跡群（県遺跡台帳No.177）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は鎌倉市教育委員会が、平成18年3月6日より同年5月1日にかけて鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
3. 本書使用の遺構図及び遺物実測図は調査員が分担し、原稿執筆・編集は福田 誠が担当した。
4. 本書に使用した遺構の全景写真・遺構個別写真撮影は福田、古田土俊一が、遺物写真撮影は須佐仁和、田畑衣理が行った。

5. 発掘調査の体制

主任調査員 福田 誠（鎌倉市教育委員会嘱託）
調 査 員 石元道子、古田土俊一、鈴木絵美
調査補助員 榎岡ケイト、小野夏菜、山口正紀、
作 業 員 鎌倉市シルバー人材センター

整理作業の体制

主任調査員 福田 誠（鎌倉市教育委員会嘱託）
調 査 員 石元道子、須佐仁和、田畑衣理
調査補助員 後藤亜季子、山口亜希子、森谷十美

6. 発掘調査資料（記録図面・写真・出土遺物）は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。

目次

本文目次

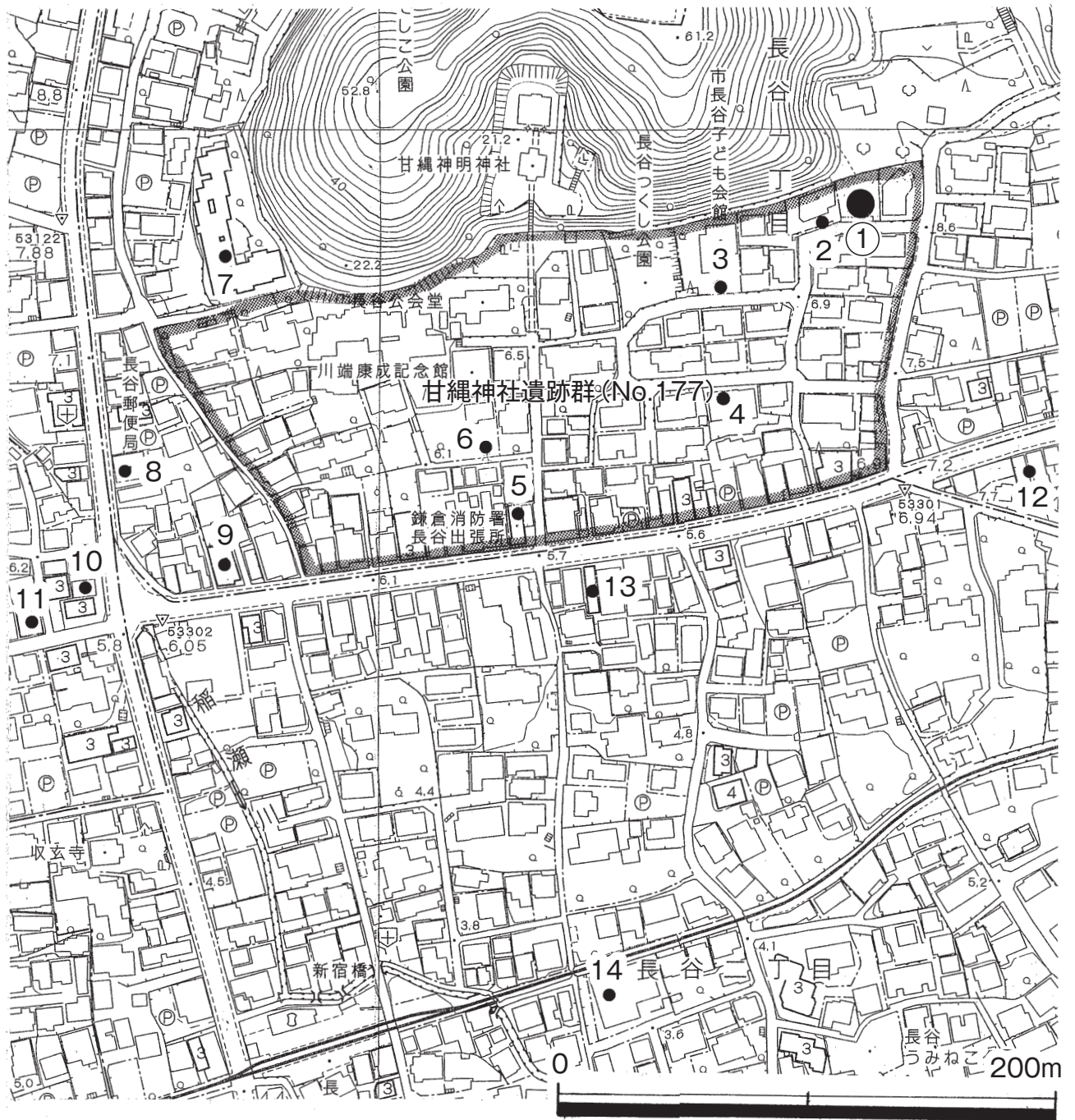
第一章 調査地点の歴史的環境	322
第1節 位置と歴史的環境	
第2節 『吾妻鏡』中から拾える調査地関係の記載	
①甘繩神明神社に関係した記載	
②甘繩の地名に関係した記載	
第二章 調査の経過と土層	330
第1節 調査の経過	
第2節 土層	
第三章 検出された遺構と遺物	330
第1節 第1面の遺構と遺物(図3・図4)	
第2節 第2面の遺構と遺物(図5～図14)	
第3節 第3面の遺構と遺物(図15～図27)	
第4節 第4面の遺構と遺物(図28～図31)	
第5節 第5面の遺構と遺物(図32～図36)	
第四章 まとめ	362
出土遺物点数表	
遺物観察表	

挿図目次

図1 調査地点と周辺の遺跡	321	図19 第3面構成土出土遺物(1)	345
図2 調査区の位置とグリッド設定図	323	図20 第3面構成土出土遺物(2)	346
図3 第1面全測図と調査区壁の土層図及び遺構 エレベーション図	329	図21 第3面構成土出土遺物(3)	347
図4 第1面遺構・構成土出土遺物	331	図22 第3面構成土出土遺物(4)	348
図5 第2面全測図と遺構のエレベーション図	331	図23 第3面構成土出土遺物(5)	349
図6 第2面遺構出土遺物(1)	332	図24 第3面構成土出土遺物(6)	350
図7 第2面遺構出土遺物(2)	333	図25 第3面構成土出土遺物(7)	351
図8 第2面遺構出土遺物(3)	334	図26 第3面構成土出土遺物(8)	352
図9 第2面面上出土遺物(1)	335	図27 第3面構成土出土遺物(9)	353
図10 第2面構成土出土遺物(1)	336	図28 第4面全測図とPit列のエレベーション図	353
図11 第2面構成土出土遺物(2)	337	図29 第4面遺構出土遺物(1)	355
図12 第2面構成土出土遺物(3)	338	図30 第4面遺構出土遺物(2)・面上出土遺物	356
図13 第2面構成土出土遺物(4)	339	図31 第4面構成土出土遺物	357
図14 第2面構成土出土遺物(5)	340	図32 第5面全測図とPit列のエレベーション図	358
図15 第3面全測図と井戸の土層図	341	図33 第5面かわらけ溜り遺物分布図	358
図16 第3面井戸出土遺物(1)	342	図34 第5面かわらけ溜り出土遺物(1)	359
図17 第3面井戸出土遺物(2)	343	図35 第5面かわらけ溜り出土遺物(2)	360
図18 第3面面上出土遺物	344	図36 第5面遺構・面上・構成土出土遺物	361

図 版 目 次

<p>図版 1 376</p> <p> 1. 調査地北壁</p> <p> 2. 調査地東壁</p> <p> 3. 1面全景(西から)</p> <p> 4. 常滑甕</p> <p> 5. 1面全景(東から)</p> <p> 6. 2面全景(西から)</p> <p> 7. 2面全景(東から)</p> <p>図版 2 377</p> <p> 1面 遺構・構成土出土遺物</p> <p> 2面 遺構出土遺物(1)</p> <p>図版 3 378</p> <p> 2面 遺構出土遺物(1)(2)</p> <p>図版 4 379</p> <p> 2面 遺構出土遺物(3)</p> <p>図版 5 380</p> <p> 2面 出土遺物</p> <p>図版 6 381</p> <p> 2面 構成土出土遺物</p> <p>図版 7 382</p> <p> 2面 構成土出土遺物</p> <p>図版 8 383</p> <p> 2面 構成土出土遺物</p> <p>図版 9 384</p> <p> 1. 2面土坑4</p> <p> 2. 調査区西壁</p> <p> 3. 3面全景(西から)</p> <p> 4. 3面全景(東から)</p> <p> 5. 2面出土女瓦</p> <p> 6. 2面出土土製品</p> <p> 7. 3面井戸</p> <p> 8. 3面井戸</p> <p>図版 10 385</p> <p> 3面 井戸出土遺物</p>	<p>図版 11 386</p> <p> 3面 井戸出土遺物</p> <p>図版 12 387</p> <p> 3面 出土遺物</p> <p> 3面 構成土出土遺物</p> <p>図版 13 388</p> <p> 3面 構成土出土遺物</p> <p>図版 14 389</p> <p> 3面 構成土出土遺物</p> <p>図版 15 390</p> <p> 4面 遺構出土遺物</p> <p>図版 16 391</p> <p> 1. 4面全景(西から)</p> <p> 2. 4面全景(東から)</p> <p> 3. 5面全景(西から)</p> <p> 4. 5面全景(東から)</p> <p> 5. 5面かわらけ溜まり</p> <p> 6. 5面かわらけ溜まり</p> <p>図版 17 392</p> <p> 4面 溝状遺構2出土遺物</p> <p> 4面 出土遺物</p> <p>図版 18 393</p> <p> 4面 構成土出土遺物</p> <p> 5面 かわらけ溜り出土遺物</p> <p>図版 19 394</p> <p> 5面 かわらけ溜り出土遺物</p> <p>図版 20 395</p> <p> 5面 かわらけ溜り出土遺物</p> <p>図版 21 396</p> <p> 5面 かわらけ溜り出土遺物</p> <p> 5面 出土遺物</p> <p> 5面 遺構出土遺物</p>
---	--



番号	遺跡名	地番	発掘年	報告書	発行年
①	本調査地点				
	甘縄神社遺跡群(No.177)	長谷一丁目227番24地点	2006年3月	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書29	2013年3月
2	甘縄神社遺跡群(No.177)	長谷一丁目227番25地点	2003年6月	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23-1	2007年3月
3	甘縄神社遺跡群(No.177) 伝 安達泰盛邸跡	長谷一丁目227番地点	1978年1月	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査年報1	1983年3月
4	甘縄神社遺跡群(No.177)	長谷一丁目236番1地点	1991年2月	神奈川県埋蔵文化財調査報告34-No.129	1992年4月
5	甘縄神社遺跡群(No.177)	長谷一丁目271番10地点	1992年12月	甘縄神社遺跡群発掘調査報告書 鎌倉市長谷一丁目271番10	1995年7月
6	甘縄神社遺跡群(No.177)	長谷一丁目262番14外地点	2010年4月	未報告	
7	高德院周辺遺跡(No.327)	長谷一丁目290番1地点	1988年10月	長谷一丁目290-1地点遺跡 高德院周辺遺跡群内、グランフォルム鎌倉 建設に伴う中世遺跡の発掘調査報告書	1989年12月
8	長谷小路周辺遺跡(No.236)	長谷一丁目284番1地点	1987年5月	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4	1988年3月
9	長谷小路周辺遺跡(No.236)	長谷一丁目33番3地点	1997年9月	長谷小路周辺遺跡13 長谷1-33-3地点 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15-2	1998年8月 1999年3月
10	長谷観音堂周辺遺跡(No.296)	長谷三丁目39番4地点	1993年10月	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11-2	1995年3月
11	長谷観音堂周辺遺跡(No.296)	長谷三丁目41番1地点	1992年4月	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10-2	1994年3月
12	長谷小路周辺遺跡(No.236)	由比ガ浜三丁目206番6外	2008年5月	未報告	
13	長谷小路周辺遺跡(No.236)	長谷二丁目252番1地点	1989年7月	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7	1991年3月
14	由比ガ浜南遺跡(No.315)	長谷二丁目122番9、10地点	1989年1月	神奈川県埋蔵文化財調査報告32-No.175	1990年3月

図1 調査地点と周辺の遺跡

第一章 調査地点の歴史的環境

第1節 位置と歴史的環境

調査地は鎌倉市長谷一丁目227番24に所在する。江ノ島電鉄の長谷駅から大仏方面に進み長谷観音前交差点を下馬方面、東に曲がり300m程行くと文学館入口交差点がある。この交差点を文学館に向かい左手に折れた約100m先、文学館入口の脇に位置する。

調査地の南約500mには相模湾に流れ込む稲瀬川の河口、由比ヶ浜が広がり、かつての砂丘地帯の裏側に位置していると考えられる。遺跡名の甘縄神社遺跡群(県台帳NO.177)の名称は隣接する甘縄神明神社の俗称「甘縄神社」に由来するものである。

甘縄神明神社の祭神は天照大神・配祀倉稻魂命・伊邪那美命・武甕槌命・菅原道真命で、例祭は9月14日。元村社、長谷区の氏神社。『相州鎌倉郡御輿山甘縄寺神明宮縁起略』では、和銅三(710)年八月、行基の創設と伝えられる。

源頼義が相模守として下向した時、平直方の女を娶り八幡太郎義家の誕生を祈り、この地で誕生したと伝えられる古社で、この故事から源頼朝・政子の参拝など、甘縄神社、甘縄の地名は『吾妻鏡』の記載の中から41箇所検索することが出来る。

甘縄神明神社は安達泰盛が守護に当たり、かつて社殿近くには安達氏代々の屋敷があったと推察される地域である。

建長三年二月大十日 「天晴る。甘縄の邊焼亡。火は地相法橋が宅より起こる。戌の刻より子の一點に到るまで止まず。東は若宮大路、南は由比の濱、北は中下馬橋、西は佐々目谷なり。相模(北条)右近大夫将監時定・相模(北条)八郎時隆等が第以下數箇所災すと云々。』『吾妻鏡』

正嘉二年正月大十七日 「霽る。丑の剋、秋田城介(安達)泰盛が甘縄の宅失火す。南風しきり扇ぎ、薬師堂の後山を越えて壽福寺に到る。総門・仏殿・庫裏・方丈已下、郭内一字を残さず。餘炎、新清水寺・窟堂ならびにその邊の民屋、若宮の寶藏、同別當坊等を焼失す。』『吾妻鏡』

この文に記述された範囲全てを含むとは思われないが、佐々目から若宮大路近くまでを含む広範囲な地域を「甘縄」と呼んでいたと読みとくことができる。このことから、現在の甘縄の地域は、神明神社付近の極狭い地域をさす呼称となっているが、かつての「甘縄」の範囲は、現在の長谷から佐々目・中下馬・JR鎌倉駅付近までを含む広い範囲を指していたと思われる。

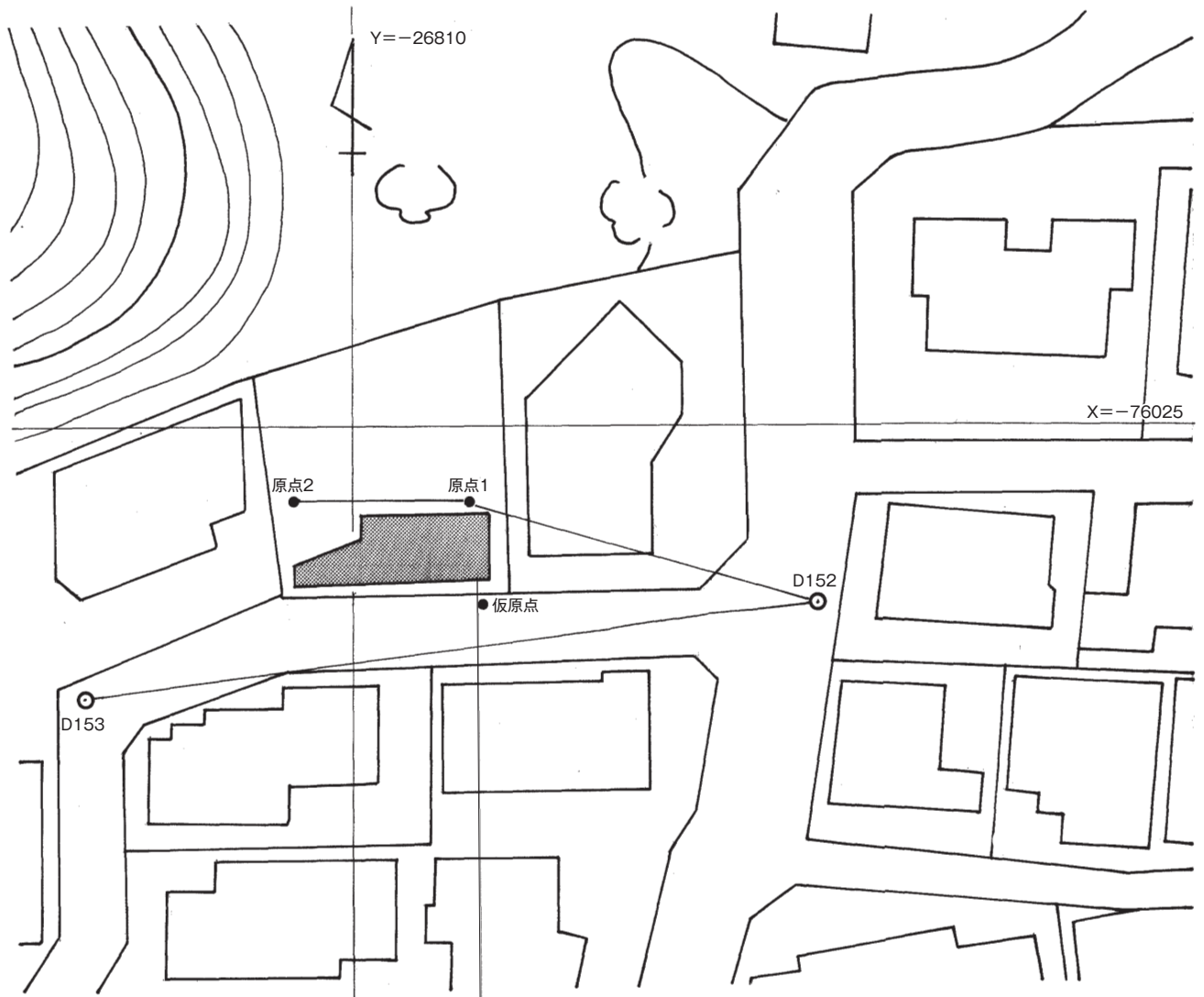
第2節 『吾妻鏡』中から拾える調査地関係の記載

①甘縄神明神社に関係した記載

文治二年 丙午

正月二日 辛巳 暮れに及びて雪ふる。二品ならびに御臺所、甘縄神明宮に御参。御還向の便路をもつて、籐九朗盛長が家に入御すと云々

十月 廿四日 丁酉 甘縄神明の寶殿に修理を加へらる。今日四面の荒垣ならびに鳥居を立つ。籐九朗盛長これを沙汰す。二品監臨したまふ。小山五郎宗政・同七郎朝光・千葉小太郎胤正・佐々木三郎盛



D152 X=-76037.3277 Y=-26777.4239
 D153 X=-76043.8786 Y=-26830.5525
 仮原点 X=-76037.3391 Y=-26801.1443

原点1 x=-76029.5932 y=-26802.0078
 原点2 x=-76029.5924 y=-26815.0072
 レベル三級基準点 (5301) L=6,940m

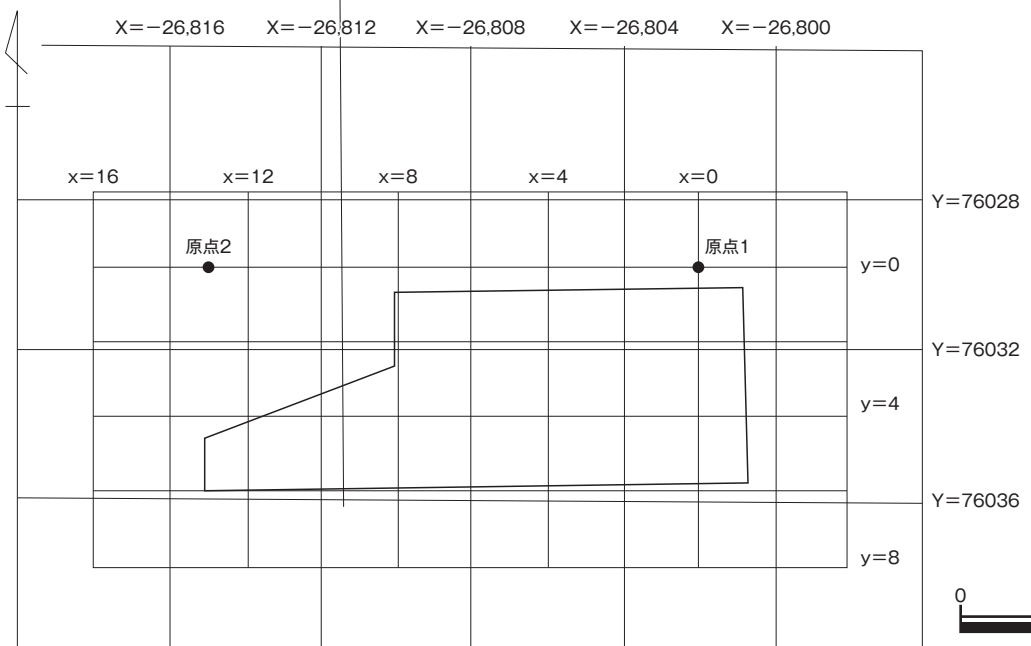


図2 調査区の位置とグリッド設定図

綱・梶原刑部丞朝景・同兵衛尉景定等御共にあり。

文治五年 巳酉

十月十七日 癸卯 御臺所、鶴岡宮ならびに甘繩神明に御参詣。これ報賽の御神拝なり。

建長五年 甲寅

正月大四日 丙寅 甘繩宮・御霊社に御参幣。知家御使たり。

六月大廿六日 甲寅 未明、將軍家、甘繩宮に御参。これ伊勢の別宮なり。

閏八月廿二日 巳卯 將軍家、甘繩宮伊勢の別宮。に参らる。還向の時をもつて籐九郎盛長が家に入御すと云々。

②甘繩の地名に関係した記載

治承四年 庚子

十二月廿日 戊戌 今日、御成始の儀。籐九郎盛長の甘繩の家に入御。盛長、御馬一疋を奉る。佐々木三郎盛綱これを引くと云々。

養和二年 壬戌 五月廿七日壽永元年となす。

正月大三日 甲戌 武衛御成始として、籐九郎盛長が甘繩の家に渡御す。佐々木四郎高綱、御調度を懸けて御駕の傍にあり。足利冠者(義兼)・北条殿(時政)・畠山次郎重忠・三浦介義澄・和田小太郎義盛以下御後に列すと云々。

十二月大七日 癸卯 夜深く人定の後、武衛鶴岳に御参。佐々木三郎盛綱・和田次郎義茂等のほか御共に候ずる人なし。しかうして拜殿において御念誦あり。宮寺の承仕法師榮光咎め來りて云はく、君の御座に著するは誰人ぞや。早く退去すべしと云々。武衛御感の餘りに御前に召し出し、甘繩の邊の田一町を賜ふ。

元暦二年 乙巳 八月十四日文治元年となす。

八月廿八日 丁丑 甘繩の邊の土民字は所司二郎。去夜困の上において立ちながら頓死す。人舉りてこれを見る。家中の輩、群衆の者に語りて云はく、半更に及びて、戸を叩きてこの男の名字をを喚ぶ者あり。この男答へてすなわち戸を開くの刻、再び語らずしてやや久しうす。これを怪しみ、指燭を取りて見るのところ、すでに死門に入ると云々。

文治二年 丙午

六月十日 丙辰 晩頭に甚雨雷鳴す。今日丹後内侍、甘繩の家において病悩す。二品、その體を訪はしめたまはんがために、ひそかきかの所に渡御す。朝光・胤頼のほか御供に候ずるの者なしと云々。

建久二年 辛亥

三月小四日 壬子 陰る。南風烈し。丑の剋、小町大路の邊失火す。江間殿(義時)・相模守(大内惟義)・村上判官代(基國)・比企右衛門尉(能員)・同籐内(朝宗)・佐々木三郎(盛綱)・昌寛法橋・新田四郎(忠常)・工藤小次郎(行光)・佐貫四郎(廣綱)已下の人屋敷十字焼亡す。餘炎飛ぶがごとくにして鶴岡の馬場本の塔婆に移る。この間幕府同じく災す。すなわちまた若宮の神殿・廻廊・経所等ことごとくもつて灰燼と化す。供僧の宿坊等少々、同じくこの災を遁れずと云々。およそ邦房が言、掌を指すがごときか。寅の剋、籐九郎盛長(安達)が甘繩の宅に入御。炎上の事によつてなり。

七月大廿八日 甲戌 寢殿・對屋・御厩等造華の間、今日御移徙の義なり。亥の剋に及びて、籐九郎盛長が甘繩の家より、新御亭に入御。武蔵守(大内義信)・参河守(範頼)・上総介(足利義兼)・伊豆守(山名義範)・越後守(安田義資)・大和守(重弘)・千葉介(常胤)・小山左衛門尉(朝政)・三浦介(義澄)・

畠山二郎(重忠)・八田右衛門尉(知家)・同太郎左衛門尉(知重)・土屋三郎(宗遠)・梶原平三(景時)・和田左衛門尉(義盛)等供奉す。梶原左衛門尉(景季)御剣を役す。

橘右馬允公長御調度を懸く。河勾七郎(政頼)御甲を著く。随兵十六人。おのおの騎馬。

先陣

三浦左衛門尉義連・長江太郎明義・小野寺太郎道綱・比企四郎右衛門尉能員

千葉四郎胤信・葛西三郎清重・小山五郎宗政・梶原三郎兵衛尉景茂

後陣

江間四郎(義時)殿・修理亮(開瀬)義盛・村上左衛門尉頼時・里見太郎義成

工藤左衛門尉祐経・狩野五郎宣安・伊澤五郎信光・阿佐利冠者長義

建久三年

十一月五日 甲戌 卯の剋、新誕の若公御行始成り。籙九郎(安達)盛長が甘繩の家に入御。御輿を用ゐらる。女房大貳局・阿波局等これを扶持したてまつる。供奉人は相模次郎・信濃三郎(南部光行)・小山三郎・三浦兵衛尉(義村)・梶原源太(景季)左衛門尉・下河邊四郎(政義)・佐々木三郎(盛綱)等なり。終日おわします。供奉人等の中に獻盃あり。盛長御剣を獻ず。また御共の男女、同じく贈物あり。女房二人、おのおの小袖一領、相模次郎以下おのおの色革一枚なり。亥の剋、還御と云々。

建久四年 癸丑

七月大二日 丙寅 武蔵守(大内)義信、養子の僧律師と號す。を召し進ず。去夜参著す。これ曾我十朗祐成が弟なり。日來越後國久我窮山にあるの間、参上今に延引すと云々。しかるに今日梟首せらるべきの由を聞き、甘繩の邊において、念佛読経の後自殺すと云々。景時この旨を啓す。將軍家ははなはだ悔い歎かしめたまふ。もとより誅すべきの志にあらず。ただ兄に同意せしむか否か、召し問はれるがためばかりなりと云々。

建久五年 甲寅

正月大八日 庚午 將軍家、籙九郎(安達)盛長が甘繩の家に入御す。

十二月一日 丁巳 將軍家、籙九郎(安達)盛長が甘繩の家に入御。かの奉行の上野國中の寺社は、一向に管領すべきの由、當座において仰せを蒙ると云々。

建久六年 乙卯

正月大四日 庚寅 將軍家、籙九郎(安達)盛長が甘繩の家に入御。三浦介義澄以下供奉せしむと云々。

十二月廿二日 癸酉 將軍家、籙九郎(安達)盛長が甘繩の家に入御。今夜御止宿と云々。

建久十年 己未

八月十九日 己卯 晴る。讒佞の族あり。妾女の事によつて景盛怨恨を貽すの由、これを訴へ申す。よつて小笠原彌太郎(長経)・和田三郎(朝盛)・比企三郎・中野五郎(能成)・細野四郎己以下の軍士等を石の御壺に召し聚め、景盛を誅すべきの由沙汰あり。晩に及びて、小笠原旗を揚げ、籙九郎(安達盛長)入道蓮西が甘繩の宅に赴く。この時に至りて、鎌倉中の壯士等、鉾を争ひて競ひ集まる。これによつて尼(政子)御臺所にはかにもつて盛長が宅に渡御、行光(二階堂)をもつて御使となし、羽林(頼家)に申されて云はく、幕下(頼朝)薨御の後、幾程を歴ず姫君また早世して、悲歎一にあらざるのところ、今鬪戦を好まる。これ亂世の源なり。就中に景盛はその寄あり。先人殊に憐愍せしめたまふ。罪科を聞かしめたまはば、我早く尋ね成敗すべし。事問せず誅戮を加へられれば、定めて後悔を招かしめたまはんか。もしなほ追罰せらるべくは、我まづその箭に中るべしと云々。しかる間、澁りながら軍兵の發向を止められをはんぬ。およそ鎌倉中騒動なり。萬人恐怖せずといふことなし。廣元朝臣云はく、かのごと

きの事は先規なきにあらず。鳥羽院御寵愛の祇園の女御は、源仲宗が妻なり。しかうして仙洞に召すの後、仲宗を隠岐國に配流せらると云々。

正治二年 庚申

八月大廿一日 甲辰 宮城四郎(家業)、御使節として奥州に下向す。これ芝田次郎尋問せらるべき事あるによって、度々召に遣はすといへども、病痾と稱して参らず。よつてこれを追討せられんがためなり。午の剋、宮城首途して、甘繩の宅を出で御所に参ず。家子三人、郎等十餘人を相具し、侍の西南の角に候ずしばらくあって、廣元朝臣、廊根の妻戸に出で、御使を招き、事の由を召し仰す。その後退出するの刻、御馬鞍を置く。を給はる。中野五郎能成庭上に引き立つ。宮城これを給りて退出す。

建暦三年 癸酉

二月大十五日 丙戌 天霽る。千葉介成胤、法師一人を生虜り相州に進ず。これ叛逆の輩の中使なり。信濃國の住人青栗七郎が弟、阿静房安念と云々。合力の奉を望まんがために、かの司馬(成胤)が甘繩の家に向かうところに、忠直を存ずるによつて、これを召し進ずと云々。相州すなはちこの子細を上啓せらる。前大膳大夫(廣元)のごとき評議ありて、山城判官(二階堂)行村が方に渡され、その實否を糺すべきの旨仰せ出さる。よつて金窪兵衛尉行親を相副へらると云々。

五月小三日 癸卯 …前略…將軍家はなはだこれを驚かしめたまひ、防戦の事なほもつて評議せられんと擬す。時に廣元朝臣政所に候ぜしむるの間その、召あり。しかるに凶徒路次に満つ。怖畏なきにあらず。警護の武士を賜りて参上すべきの由、これを申すによって、軍士等を遣はさるるの時、廣元水干葛袴。参上するの後、御立願に及ぶ。廣元御願書を鶴岳に奉らる。この時に當りて大學助(土屋)義清、甘繩より亀谷に入り、窟堂の前の路次を経、旅御所に参ぜんと欲するのところ、若宮の赤橋の砌において、流矢の犯すところ義清命亡ふ。件の箭は北方より飛び來る。これ神謫の由謳歌す。…後略…

貞應三年 甲申

三月小十九日 丙申 晴る。今暁より前奥州(義時)の御祈祷として、百日の泰山府君祭これを始めらる。御使は林太郎。これ殿中に表示等あるが故なり。

丑の刻、甘繩山麓以南三町餘焼亡す。千葉介胤綱が家その中にあり。

安貞三年 己丑 三月五日より寛喜元年となす。

十二月小 己未 今夜窟堂の下の邊焼亡す。時に風烈しく、餘焰飛ぶがごとし。若宮大路・甘繩等の人屋に至ると云々。

寛喜三年 癸卯

正月大廿五日 壬子 霽る。未の刻、名越の邊失火し、越後四郎時幸・町野加賀守康俊が宿所等災す。同時に甘繩の邊の人家五十餘宇焼失す。放火と云々。

十月大十九日 辛未 雨しきりに降る。二階堂の御堂の地を甘繩に改め、城太郎(安達義景)が南、千葉介が北、西山の傍を點定せらる。兩國司また巡検したまふ。今日、橘寺供養の日に相當、不吉なりと云々。よつて陰陽道の數輩これを召し決せらる。泰貞・晴茂・長重・文元一同に申さく、件の寺供養は寛治五年なり。しかうして供養と作事とはおのおの別事なり。はなはだ憚りあるべからずと云々。また斎藤兵衛入道淨圓申して云はく、辛未の日不吉の所見ありと云々。…後略…

寛喜四年 壬辰

二月大十四日 乙丑 甘繩の邊の民居焼亡す。

文暦二年 乙未

正月小廿一日 乙卯 御願の五大堂建立の事、相州(時房)・武州(泰時)度々巡検して、鎌倉中の勝

地を選ばる。去年城太郎(義景)が甘縄の地を定めらるといへども、なほ相叶はず、すこぶる思しめし煩ふところ、幕府の鬼門の方に相當りてこの地あり。毛利蔵人大夫入道西阿が領なり。御祈祷相應の所たるによつて、これを點ぜらる。すなわち地を引かれをはんぬ。よつて今日まづ總門ばかりこれを建てらる。相州・武州・大膳権大夫(師員)以下の數輩相向はる。伊賀式部入道光西・清(清原)判官季氏等奉行たり。

嘉禎四年 戊戌

正月廿日 丁卯 御弓始なり。今年は御物忌たるべきによつて、この儀あるべからざるの由、窮冬定めらるといへども、故にこれを遂げらる。射手の事、昨夕にはかに御前において、始めのごとく義村に仰せ合せらる。催促のために日記(風)を陸奥太郎(實時)に下さると云々。

射手

- 一番 小笠原六郎(時長) 藤澤四郎(清親)
- 二番 横溝六郎(義行) 松岡四郎(時家)
- 三番 岡邊左衛門四郎 本間次郎(信忠)
- 四番 三浦又太郎(氏村)左衛門尉 秋葉小三郎
- 五番 下河邊(行光)右衛門尉 山田五郎

午の刻、將軍家御上洛あるべきによつて、御出門のために秋田城介義景が甘縄の家に入御、御輿に召さる。御立烏帽子、御直垂なり。供奉人の行粧、同じくその體を模したてまつると云々。夜に入りて左京兆ならびに室家、駿河守有時の第に御出門。

仁治二年 辛丑

三月大十七日 乙巳 天霽る。丑の剋、巽の風烈し。前濱の邊の人居より失火起り、甘縄の山麓を限りて數百宇災す。

千葉介(時胤)が舊宅、秋田城介(安達義景)・伯耆前司(葛西清親)等が家その中に有り云々。

仁治四年 癸卯

正月大五日 壬午 天霽る。將軍家、秋田城介(義景)が甘縄の家に入御す。御車を用ゐらる。駿河守(有時)・遠江馬助・備前守(時長)以下供奉す。隱岐(佐々木)太郎左衛門尉政義御調度を懸く。御臺所(家行女)・乙若君おのおの御輿。前右馬権頭(政村)の亭に入御す。若君(頼嗣)ならびに御母儀(親能女)二棟の御方と號す。皆御輿。若狭前司(三浦泰村)が家に渡御す。これ皆御行始の儀なり。面々に御儲はなはだ結構す。御引出物、風流に及ぶと云々。

寛元二年 甲寅

六月小十三日 壬午 將軍家御元服御任官の後、吉書始の儀あり。今日御行始の儀あり。秋田城介義景が甘縄の家に入御したまふ。前大納言家(頼経)、御見物のために御車を小町口の西に立てらる。供奉人布衣、上括。

その砌に侯ず。岡崎僧正道慶同じく車を立てらると云々。未の剋、御出。行列。

まず随兵。三騎相並ぶ。…後略…

寛元四年 丙午

五月大廿二日 己卯 天晴る。寅の剋、秋田城介(安達)義景が家中ならびに甘縄の邊騒動す。緯すでに廣々に及ぶ。

宝治元年 丁未

四月小四日 丁亥 今日、秋田城介(安達)入道覺地俗名景盛、籐九郎盛長が息。高野より下著し、

甘縄の本家にありと云々。

五月十八日 庚午 今夕光物あり。西方より東天に亘る。その光しばらく消えず。時に秋田城介義景が甘縄の家に白旗一流出現す。人これを観ると云々。

六月大五日 丙戌 天晴る。辰の刻、小雨灑く。今晚鷄鳴以後、鎌倉中いよいよ物惣。未明左親衛、まつ萬年入道を泰村が許に遣はし、郎従等の騒動を相愼むべきの由を仰せらる。次に平左衛門盛阿(盛綱)に付けて、御書を同人に遣はさる。これすなはち世上の物惣、もし天魔の人性に入らんか、上計においては貴殿を誅伐せらるべきの構へにあらざるか。この上日來のごとく異心あるべかざるの趣なり。あまりさへ御誓言を載せ加へると云々。泰村御書を披くの時、盛阿詞をもつて和平の子細を述ぶ。泰村殊に喜悅して、また具に御返事を申すところなり。盛阿座を起つ後、泰村なほ出居にあり。妻室みづから湯漬をその前に持ち來りてこれを勧め、安堵の仰せを賀す。泰村一口これを用ゐ、すなわち反吐すと云々。ここに高野入道覺地(安達景盛)、御使を遣はさるるの旨を傳へ聞き、子息秋田城介義景・孫子九郎泰盛のおの兼ねて甲冑を著す。を招き、諷詞を盡して云はく、和平の御書を若州(泰村)に遣わさるるの上は、向後かの氏族ひとり驕を窮め、ますます當家を蔑如するの時、なまじひに對揚の所在を顯さば、かへつて殃に逢ふべきの篠、置きて疑いなし。ただ運を天に任せ、今朝すべからく雌雄を決すべし。かつて後日を期するなかれてへれば、これによつて城九郎泰盛・大曾禰左衛門尉長泰・武藤左衛門尉景頼・橘薩摩十郎公義以下、一味の族、軍士を引率して甘縄の館を馳せ出づ。同門前の小路を東に行き、若宮大路中下馬橋の北に至りて、鶴岡宮寺の赤橋を打ち渡り、相構へて盛阿(平盛綱)歸參以前に、神護寺の門前において時の聲を作る。…後略…

建長三年 辛亥

正月小五日 丙辰 天霽る。二位殿(頼經室)ならびに二棟(大宮局)の御方等御行始。秋田城介義景が甘縄の弟に入御す。

二月大十日 庚子 天晴る。甘縄の邊焼亡。火は地相法橋が宅より起こる。戌の刻より子の一點に到るまで止まず。東は若宮大路、南は由比の濱、北は中下馬橋、西は佐々目谷なり。相模(北条)右近大夫將監時定・相模(北条)八郎時隆等が第以下數箇所災すと云々。

五月大一日 庚申 天霽る。相州の室家の産所松下禪尼の甘縄の第。に御祈祷等を始行せらると云々。

建長五年 癸丑

九月大十四日 己丑 雨降り、雷鳴數聲。城介入道(義景)が百ヶ日の佛事、甘縄の舊宅においてこれを行ふ。導師は若宮僧正隆辨。

正嘉二年 戊午

正月大十七日 丁卯 霽る。丑の剋、秋田城介(安達)泰盛が甘縄の宅失火す。南風しきり扇ぎ、薬師堂の後山を越えて壽福寺に到る。総門・仏殿・庫裏・方丈已下、郭内一字を残さず。餘炎、新清水寺・窟堂ならびにその邊の民屋、若宮の寶藏、同別當坊等を焼失す。

文應二年 辛酉 二月廿日、弘長元年となす。

四月大廿三日 甲子 雨降る。相模(時宗)太郎殿十一歳。御嫁娶。堀内殿。女房甘縄の亭より御出の時、掃部助(押垂)範元御身固に候ず。この御祈として去ぬる廿二日より天曹地府・呪詛・靈氣等の祭これを勤行すと云々。

弘長三年 癸亥

八月大廿五日 壬申 …前略…亥の剋、甘縄に火事あり。北斗堂の邊の民居多くもつて災す。

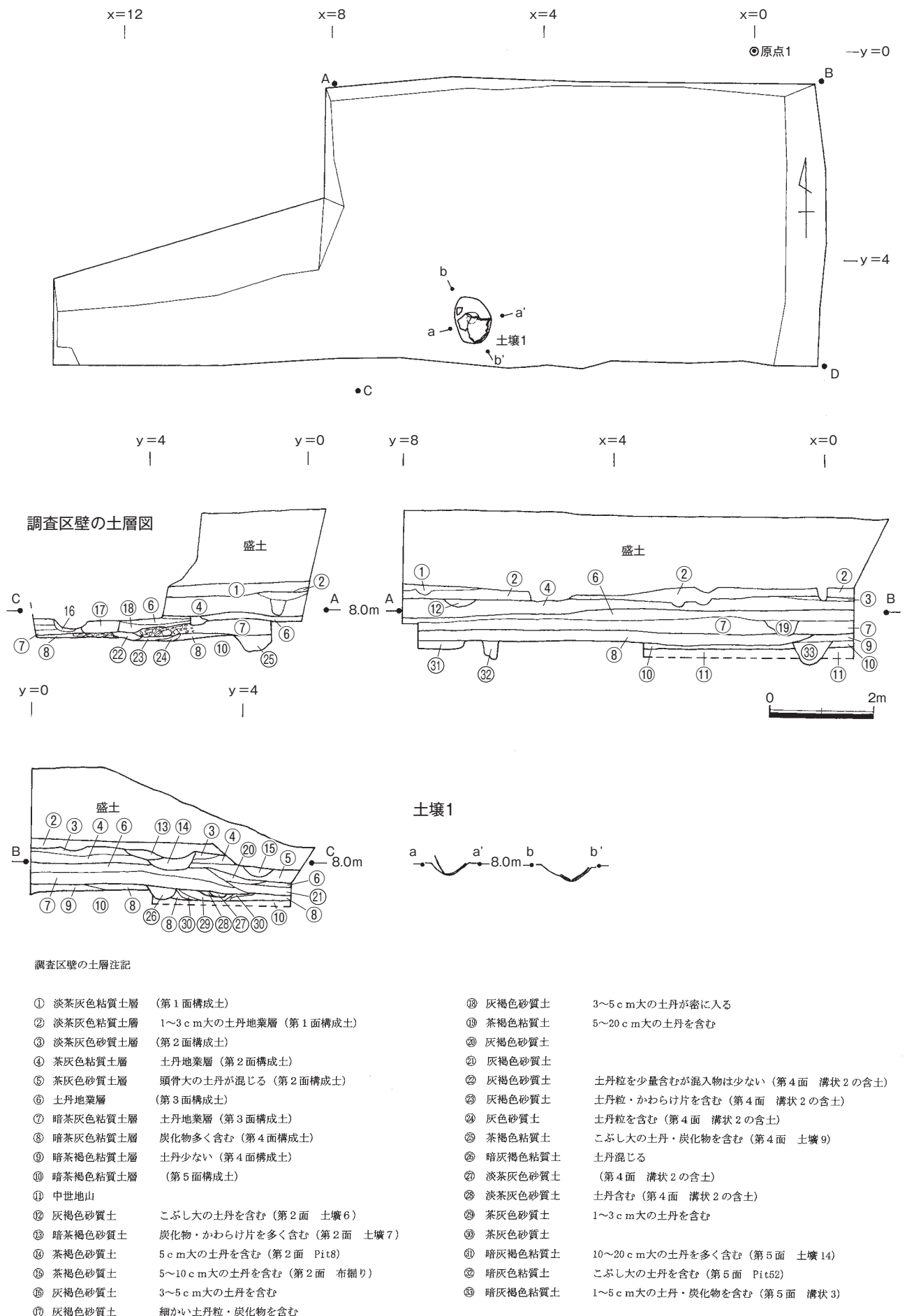


図3 第1面全測図と調査区壁の土層図及び遺構エレベーション図

第二章 調査の経過と土層

第1節 調査の経過

調査に先行して、鎌倉市教育委員会によって行われた試掘調査の結果を基に、本調査は専用住宅建設によって掘削、削平が行われる敷地内の建物建築部分の60㎡に対して行われた。

調査地は南側の市道(海拔7.93 m)より約2 m程高い段差の上(海拔約10 m)に位置している。西隣の住宅に於いて2003年6月に発掘調査が行われ、この時のデータを元にちょうさが進められた。

遺構埋没深度までの表土層は、重機を使用して掘り下げることとした。この掘削作業には調査員が立ち会い、重機が掘り下げる深さと掘削時に出土する遺物に対処した。

第2節 土層

現地表から遺構面(第1面)までの段差(約130cm)はすべて近代の造成による盛土。南側の市道に接している前面部分は道路面とほぼ同じ深さで遺構面(第2面)を検出した。

ベースとなる基盤層は黒褐色粘質土層・暗茶褐色粘質土層。この中世の基盤層からは古代の遺物(須恵器片・土師器片)が出土するが、山際のため流水等による流れ込みと考えられ遺構は確認されていない。このことから、古代の遺構は北の山際(かつて北側の山裾で竈を持った縦穴住居跡が検出された)や谷の奥にあるものと推察される。

調査により明らかにされた第1～5面に渡る生活面は、土丹混じりの淡茶灰色・暗茶灰色・暗茶褐色の粘質土と土丹で地業されている。

第三章 検出された遺構と遺物

第1節 第1面の遺構と遺物(図3・図4)

第1面は、地表から約1.3 m下の第1層目の茶灰色粘質土層を第1面とした。海拔8.4 m。

a. 土壙1

調査区のほぼ中央で検出した、縦約1 m、幅約65cmの土壙である。中には常滑産の甕底部が据えられていた。第1面は全体が大きく削平を受けているものと考えられ、比較的深い土壙1のみが削平を免れ検出されたものと考えられる。

遺物は、土壙1から常滑の底部片。面と構成土から、大小かわらけ、瀬戸折縁鉢片、常滑甕口縁部片、火舎、銭1枚(皇宋通宝)が出土している。

第2節 第2面の遺構と遺物(図5～図14)

第2面は、地表から約1.6 m下の第3層目の淡茶灰色砂質土層を第2面とした。海拔8.2 m。

a. 柱穴1～8・12

第2面では9穴の柱穴を検出した。検出した柱穴の深さが比較的浅いこと、規格性が見いだせないことから、布掘りに沿って設けられた柵列のようなものが考えられる。

柱穴1、かわらけ小4点出土、口縁部に打ち欠きが見られることから燈明皿に使用。柱穴2、かわらけ大小4点、瀬戸1点出土。柱穴3、かわらけ大小5点出土。柱穴5、常滑1点、かわらけ大小3点出土。煤が付着することから燈明皿に使用。

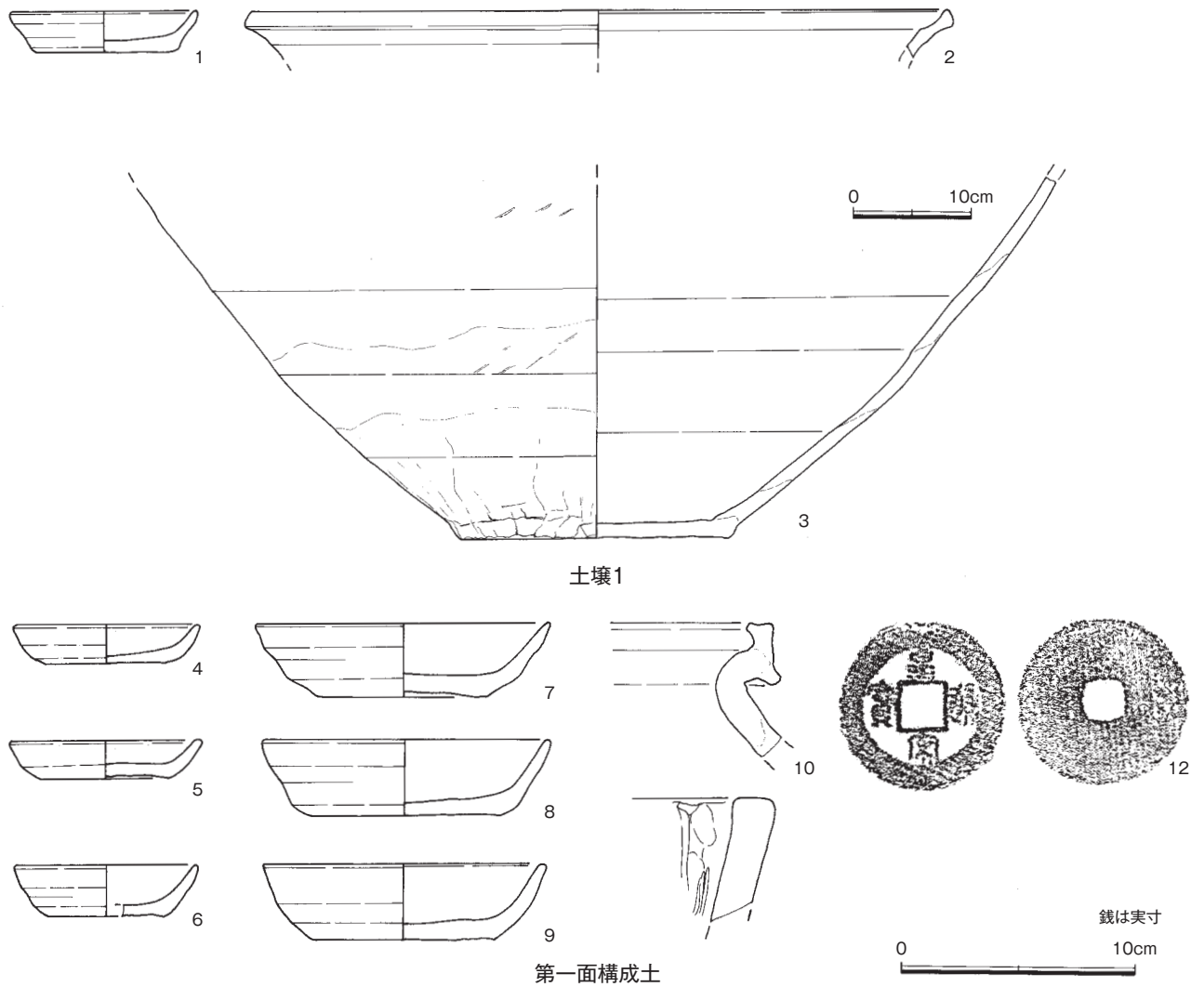


図4 第1面遺構・構成土出土遺物

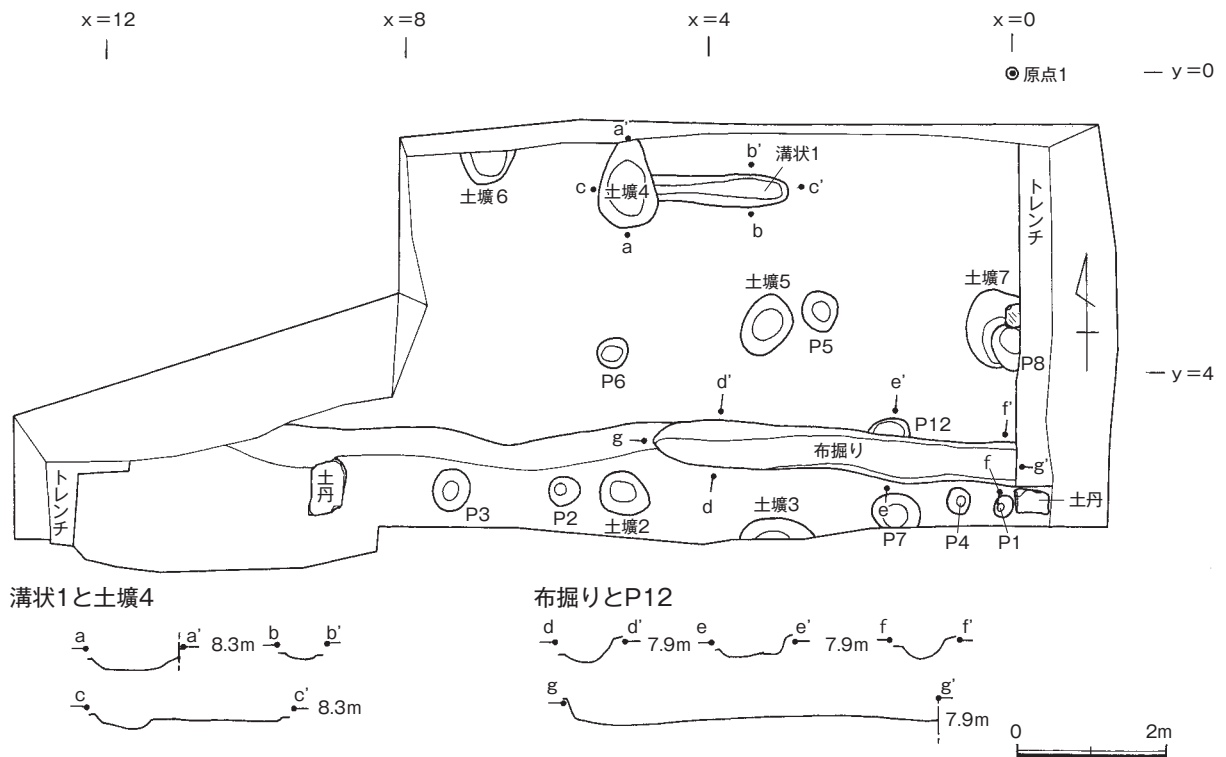


図5 第2面全測図と遺構のエレベーション図

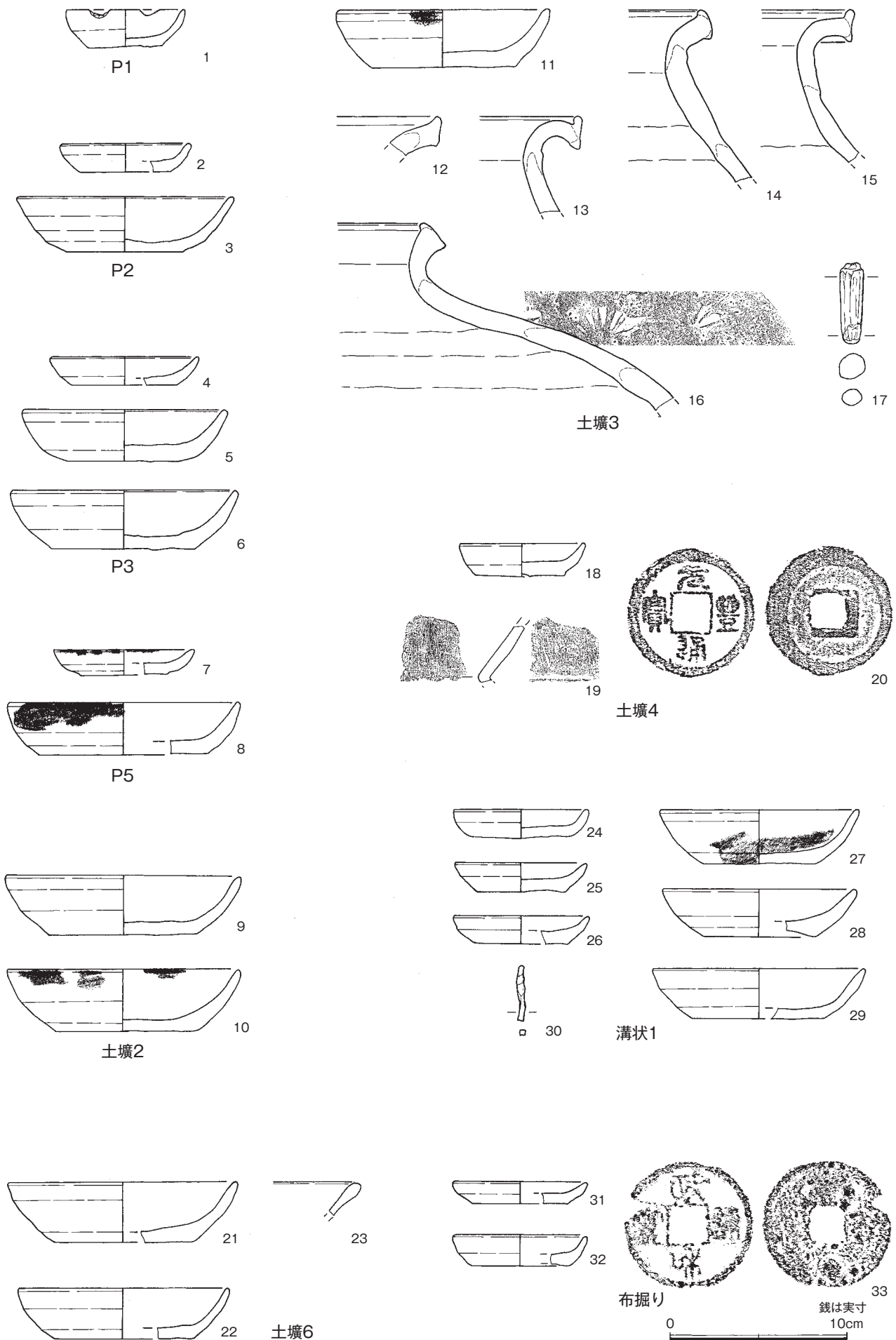


図6 第2面遺構出土遺物(1)

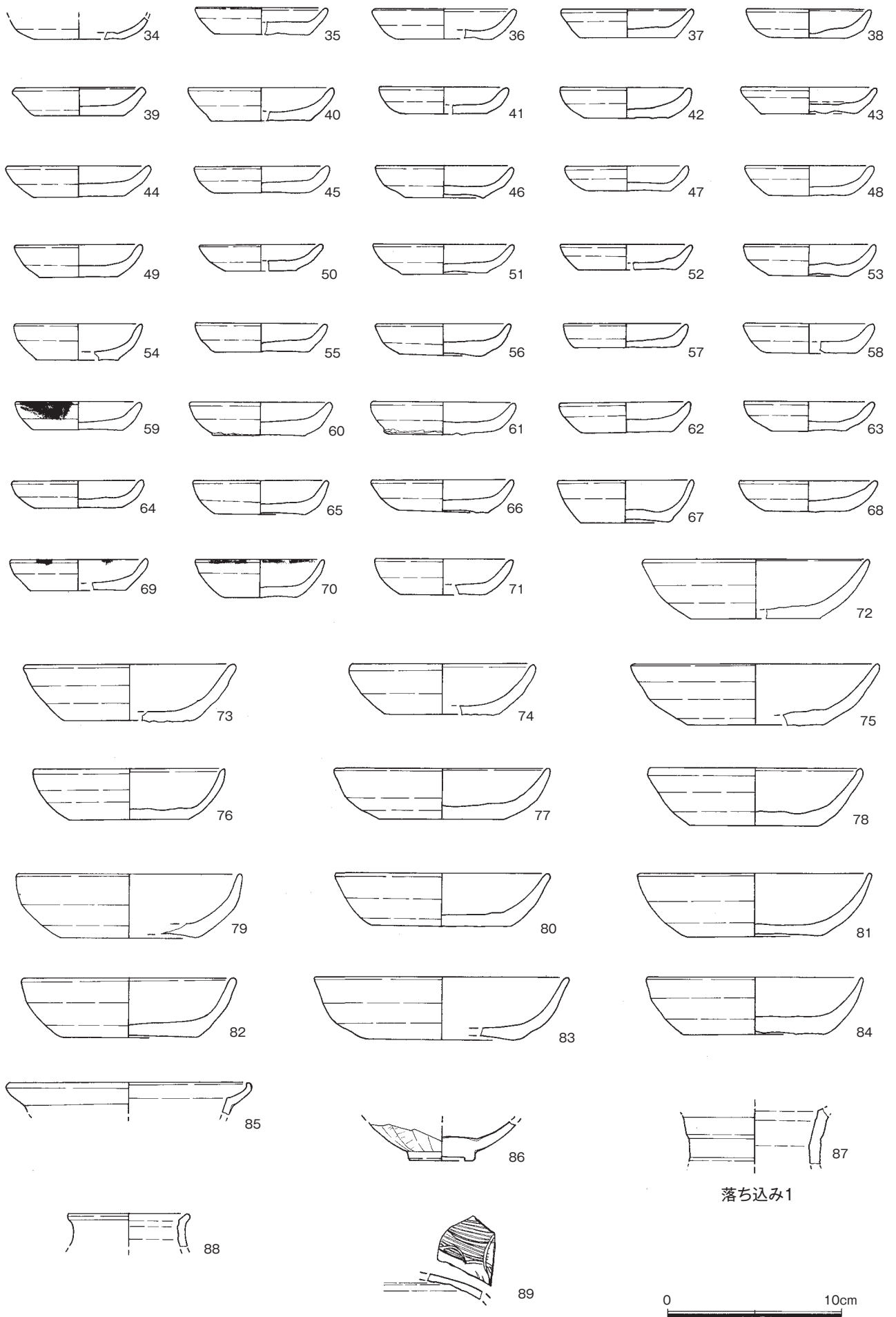


図7 第2面遺構出土遺物(2)

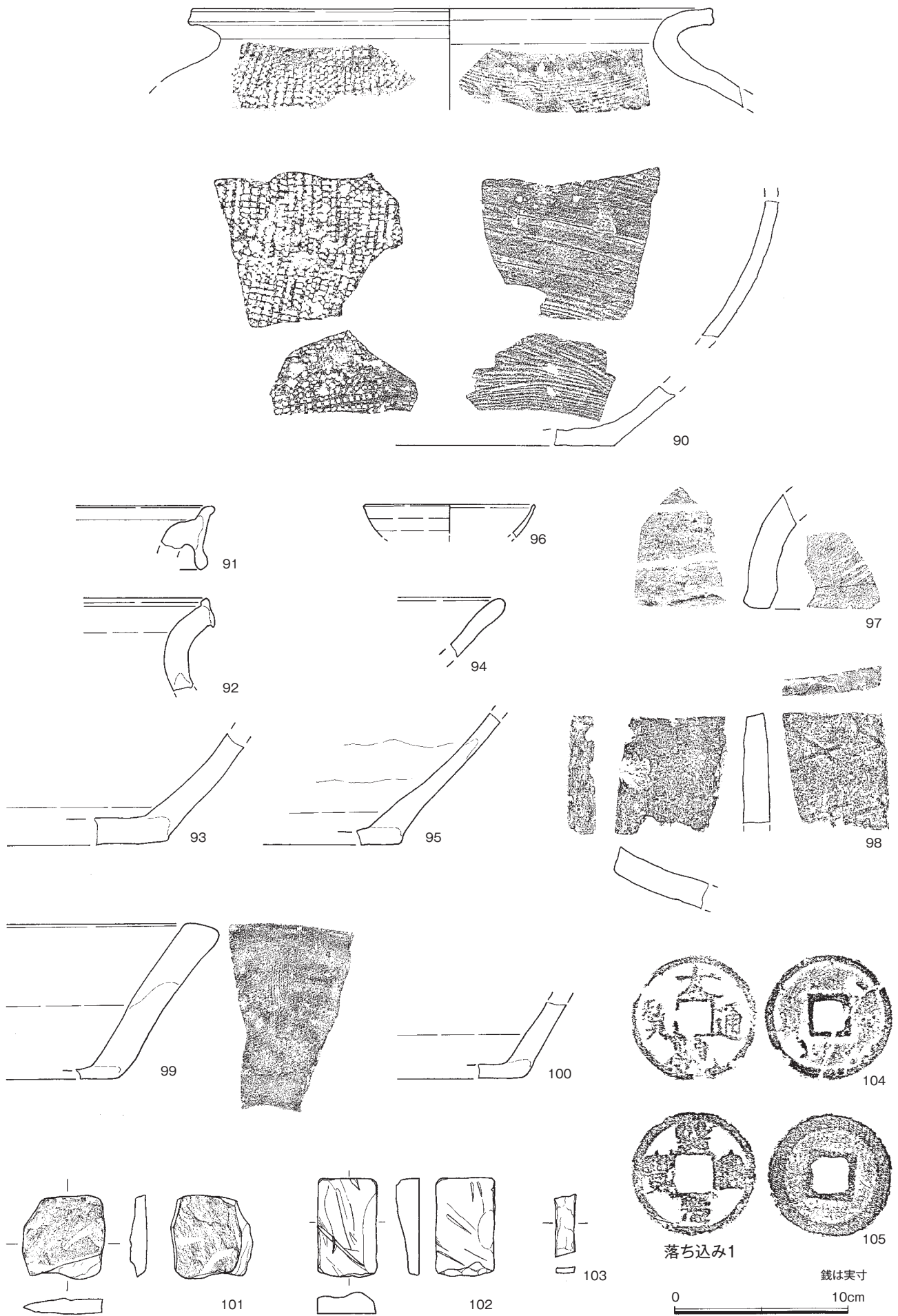


図8 第2面遺構出土遺物(3)

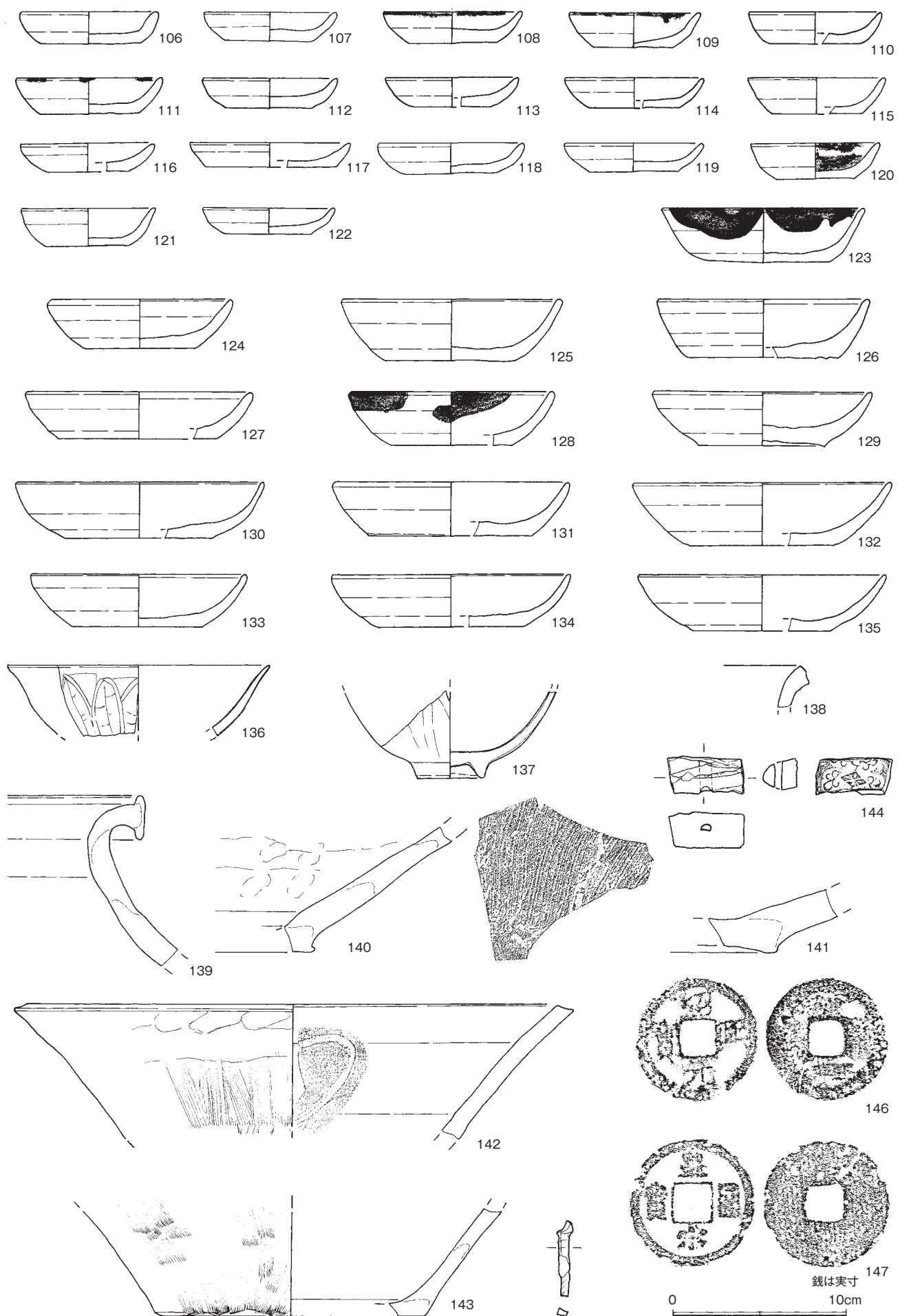


図9 第2面面上出土遺物(1)

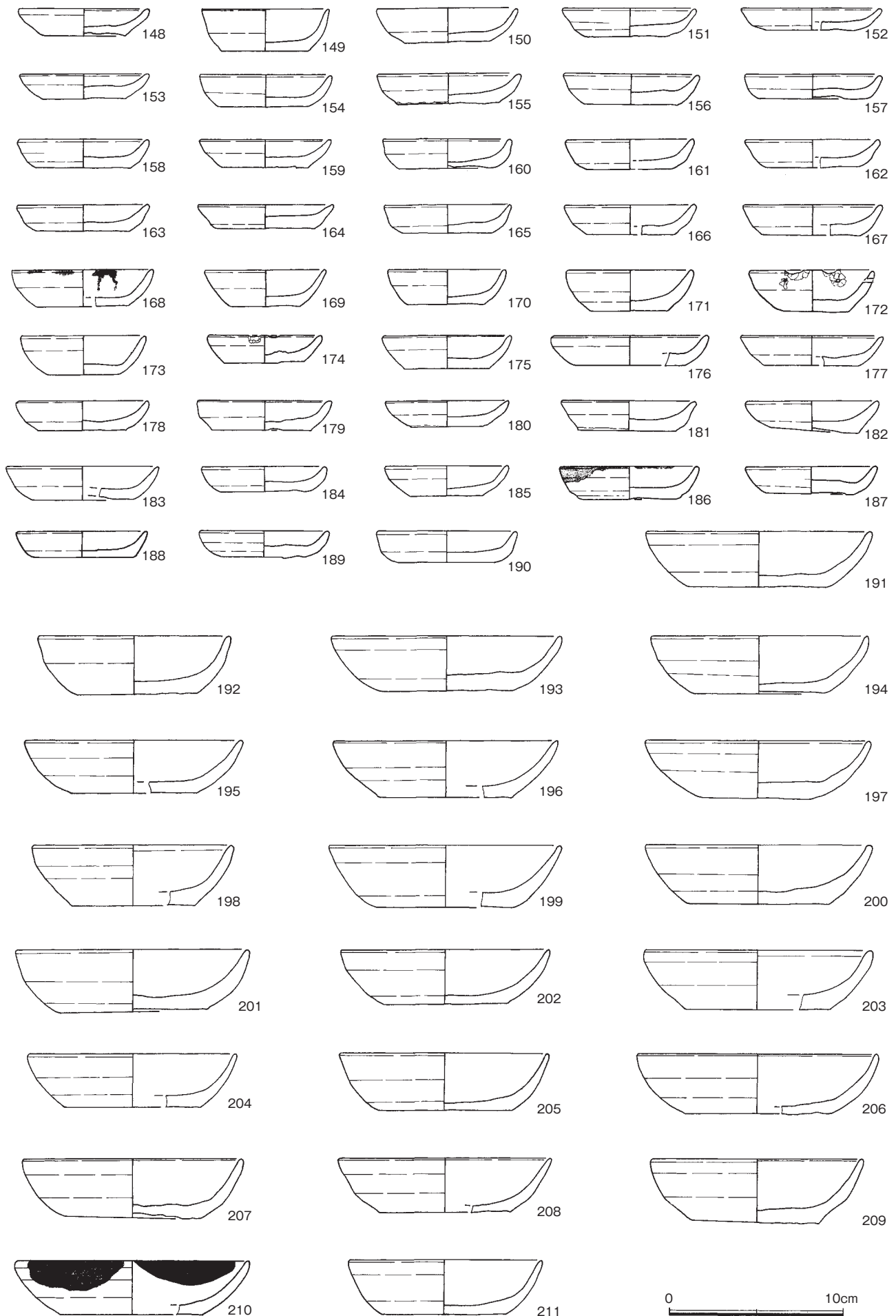


图10 第2面構成土出土遺物(1)

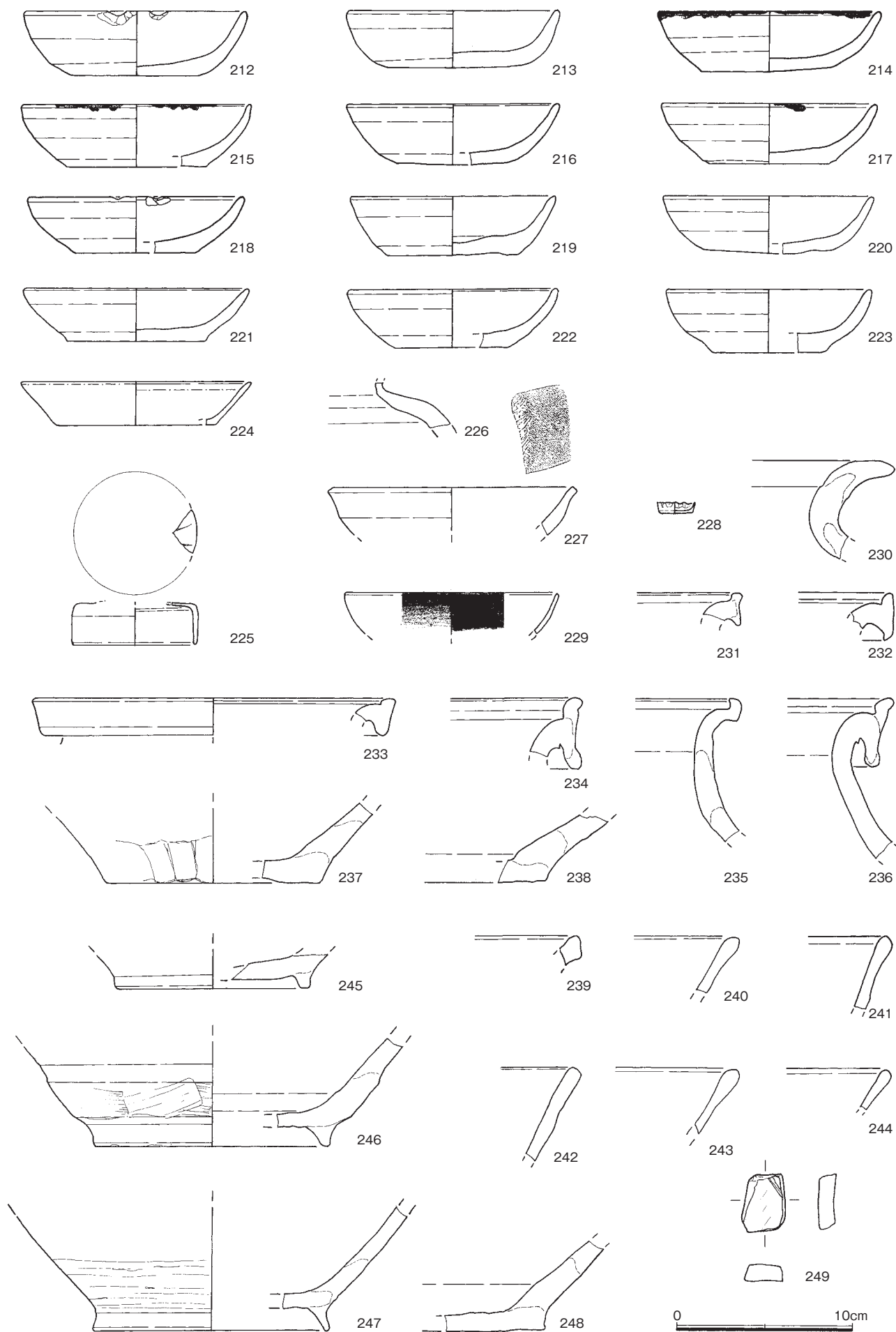


图11 第2面構成土出土遺物(2)

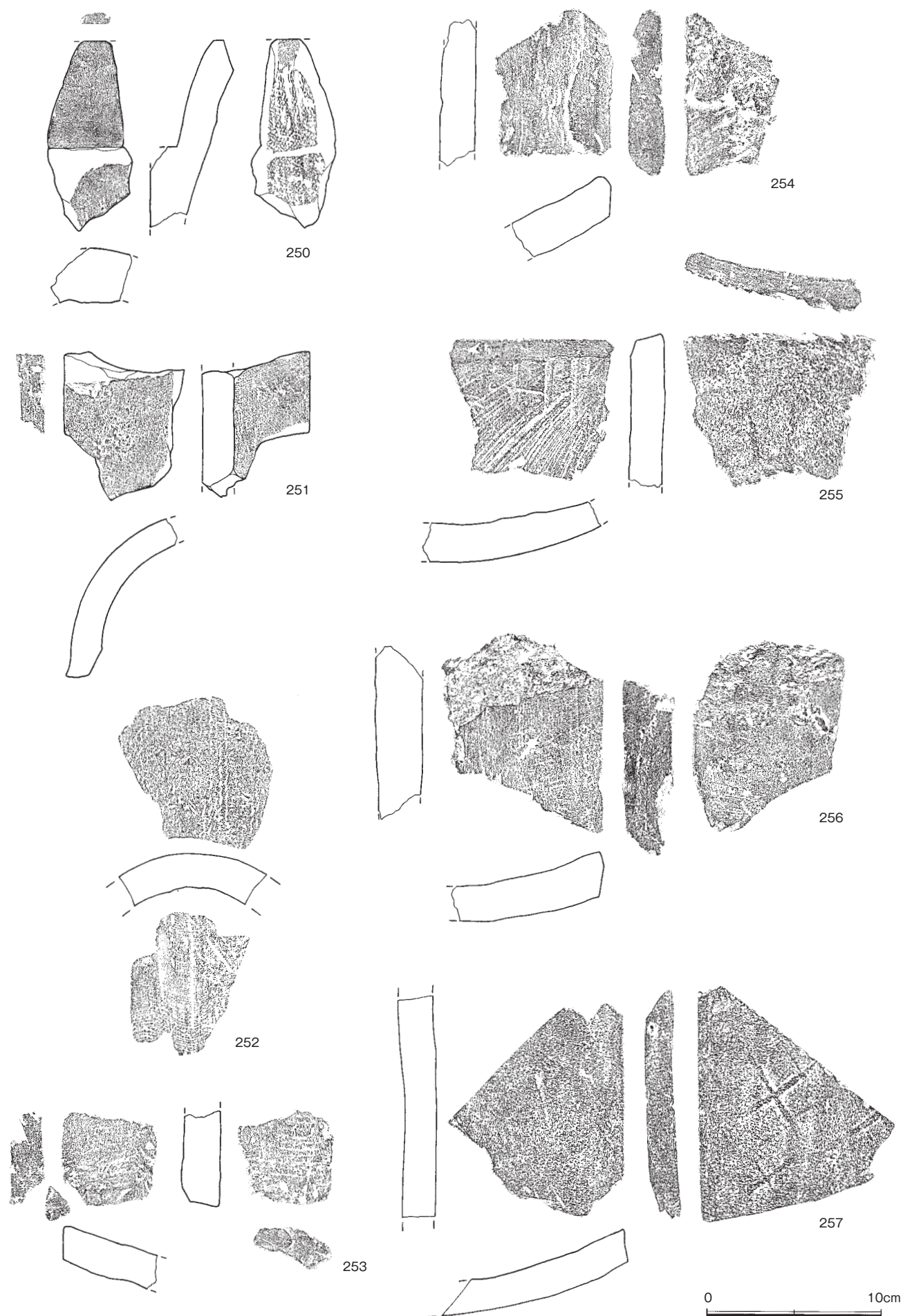


图12 第2面構成土出土遺物(3)

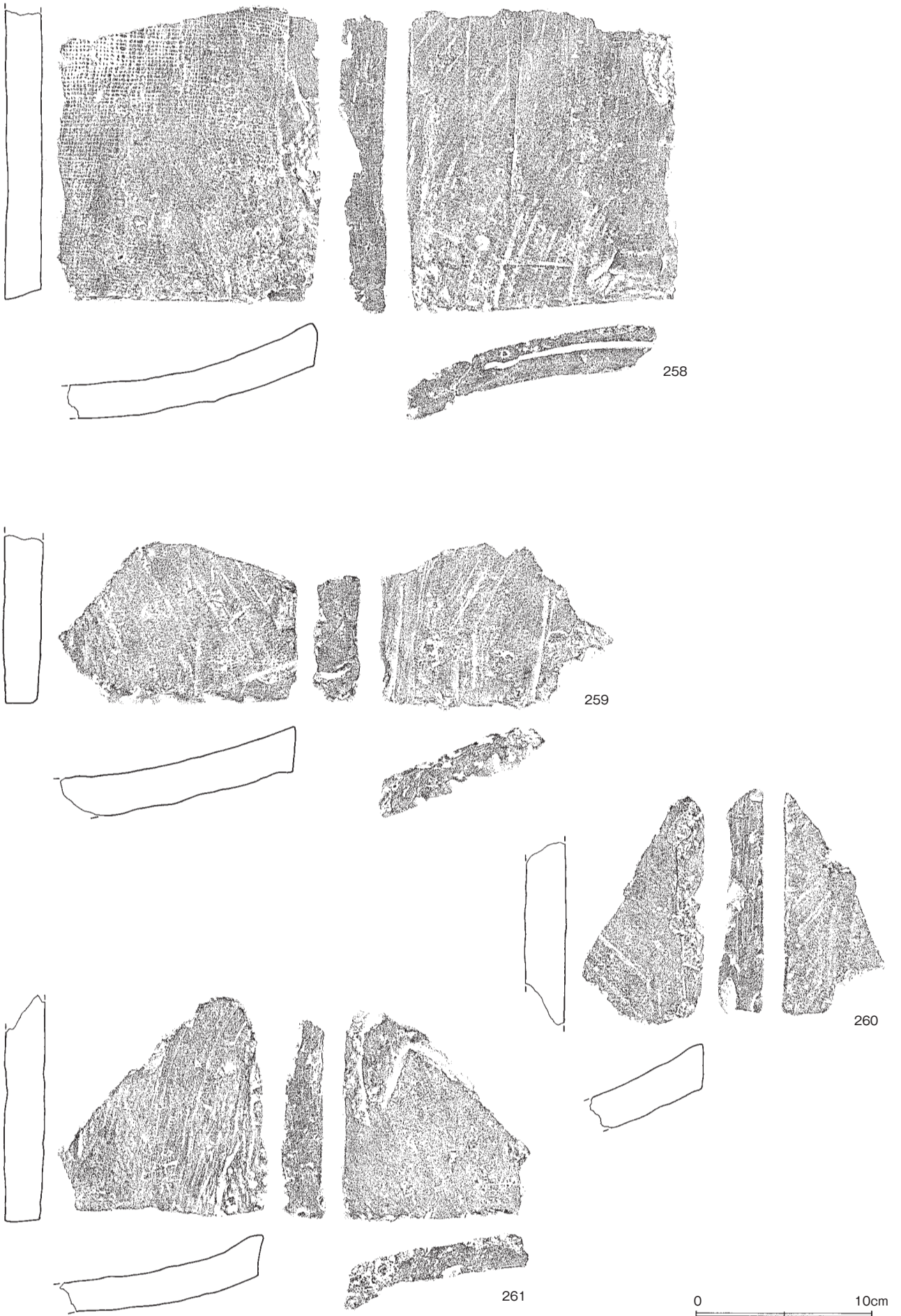


图13 第2面構成土出土遺物(4)

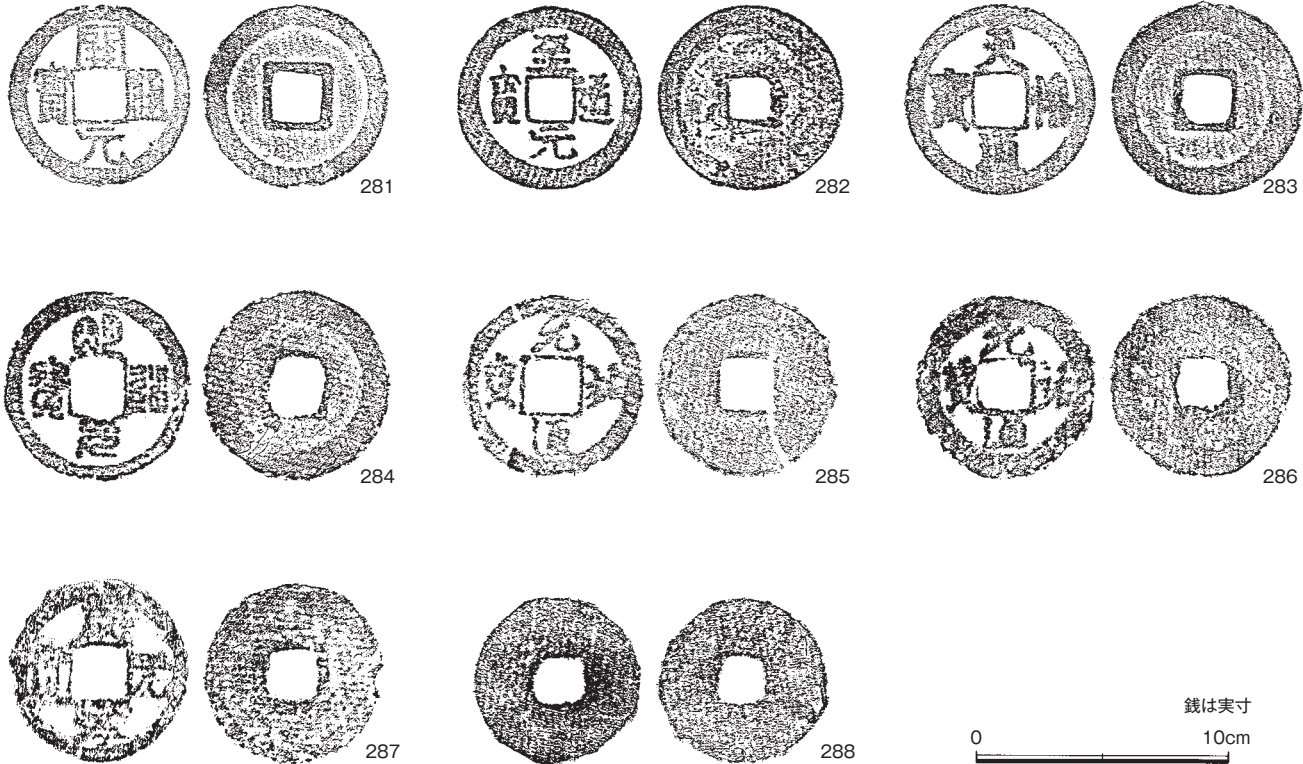
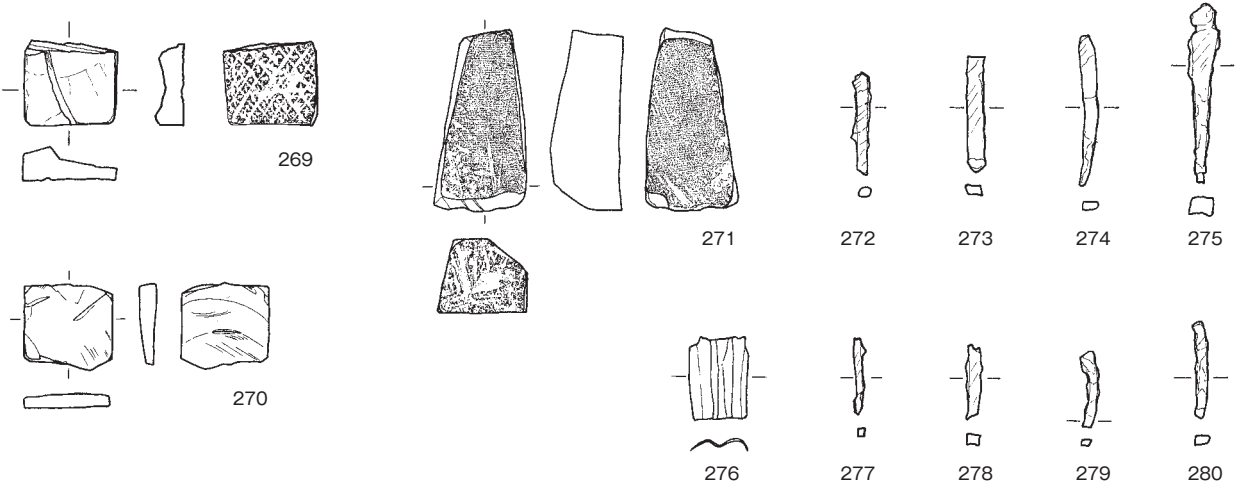
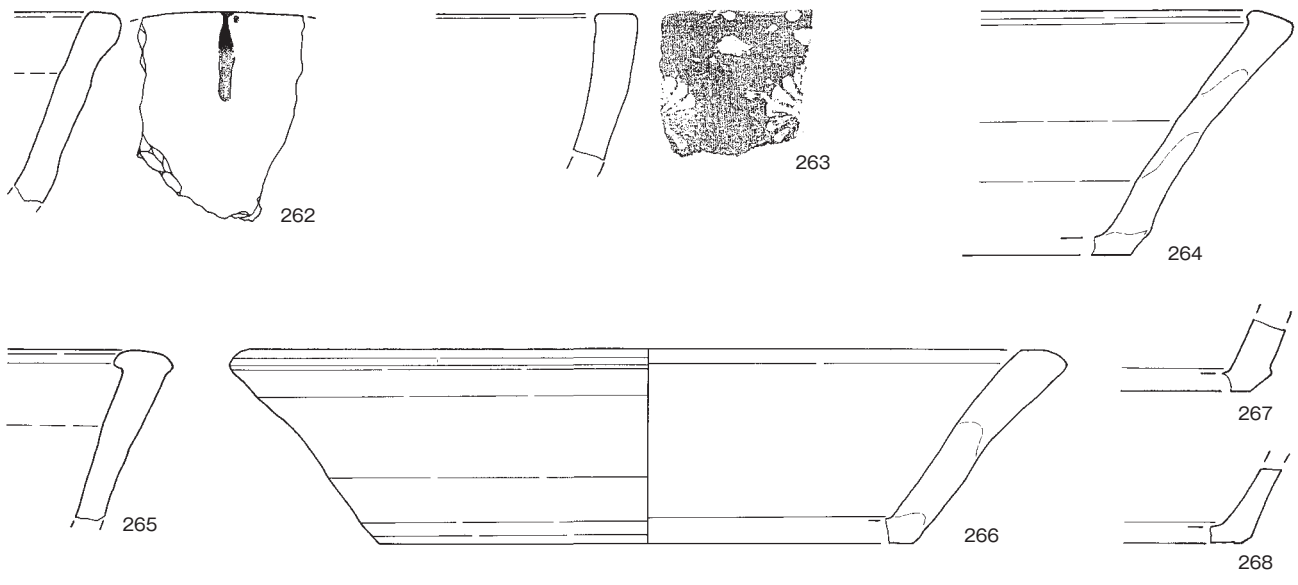


図14 第2面構成土出土遺物(5)

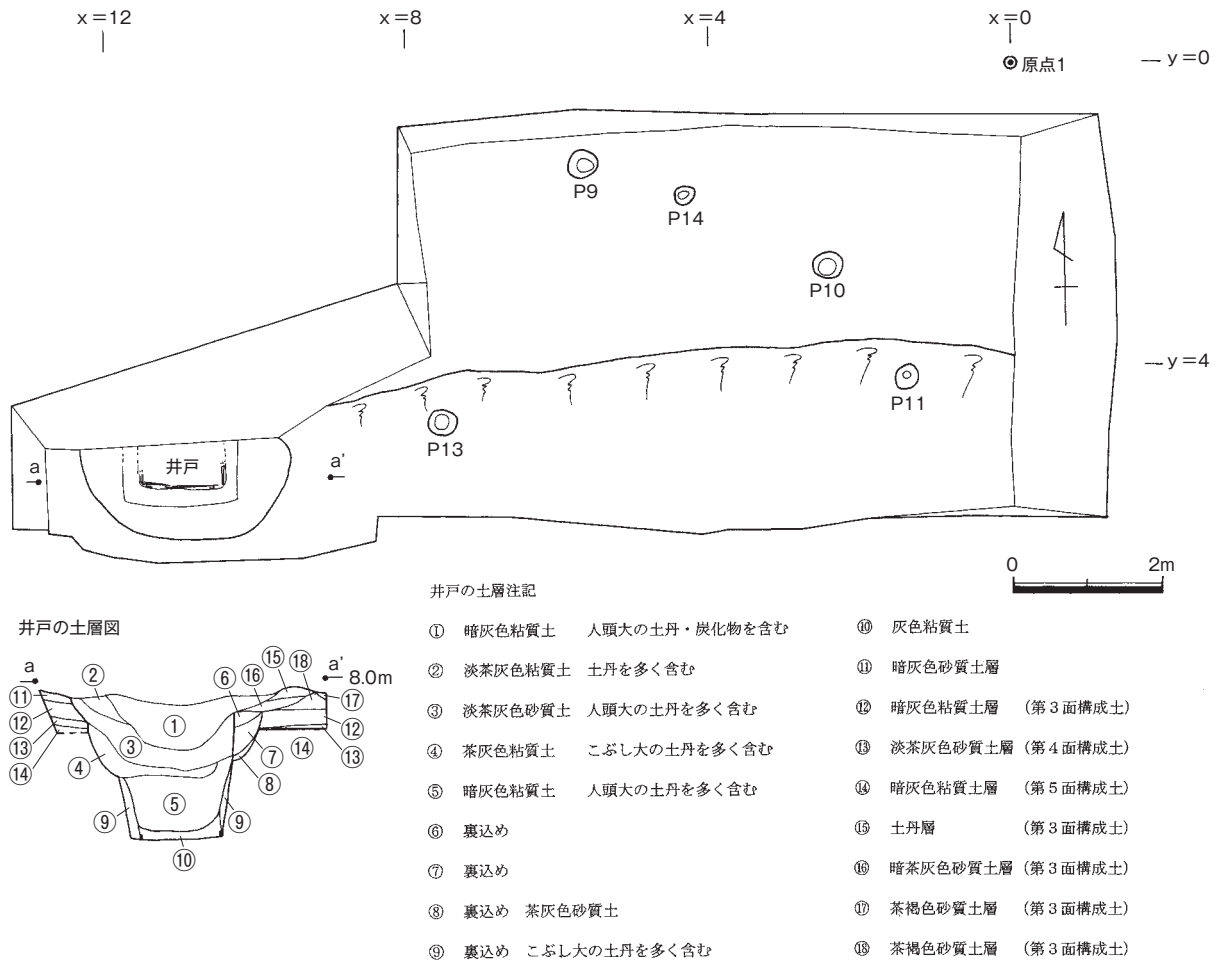


図15 第3面全測図と井戸の土層図

b. 土壌2～7

土壌2、かわらけ大小、常滑甕片1点出土。土壌3、かわらけ5点、常滑甕片21点出土。土壌4、かわらけ大小35点、常滑甕片6点、白磁1点出土。他に土師器片5点出土。土壌5、かわらけ片2点、獣骨1点出土。土壌6、かわらけ大小21点、常滑甕片2点出土。土壌7、かわらけ小1点、瀬戸1点出土。

c. 溝状1

調査区の中央北側で、東西方向に検出した長さ180cm、幅40cm程の遺構である。西側で土壌4に接していることから、何らかの関わりがあると考えられるが詳細は不明。かわらけ大小12点と鉄釘が出土。

d. 布掘り

調査地の東半分にかかる幅50cm、長さ約5mの溝を検出した。調査区の南辺とほぼ平行に穿たれていた。平坦部と斜面地を区画した溝とも考えられるが、委細不明。また溝の底面はほぼ平らで、現況から水を流した時にどちらに流れるかは不明である。かわらけ大小11点と常滑1点、銭1枚(元豊通宝)が出土。

e. 落ち込み1

布掘りの南側が大きく落ち込んで行く。落ち込みを掘り込んで行くと、柱穴や土壌が検出された。面の低いところとも考えられるが、一応遺構とした。

大小の轆轤成形のかわらけが717点、瓦器碗、今回の調査で1点だけ出土した亀山産甕(多くの破片に割れていたが1個体と数えた。)、青磁碗5点、白磁2点、青白磁5点などが出土。

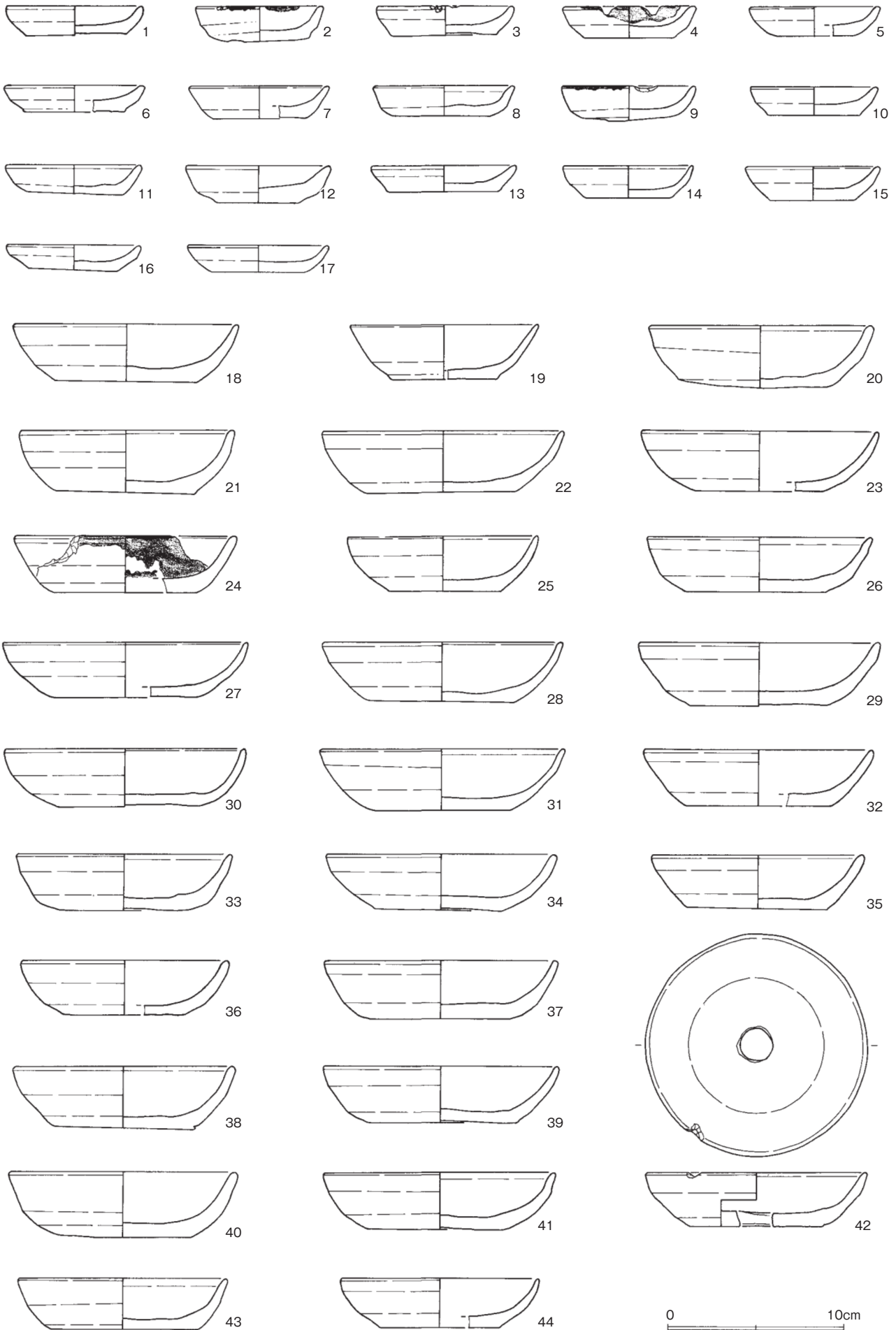


图16 第3面井戸出土遺物(1)

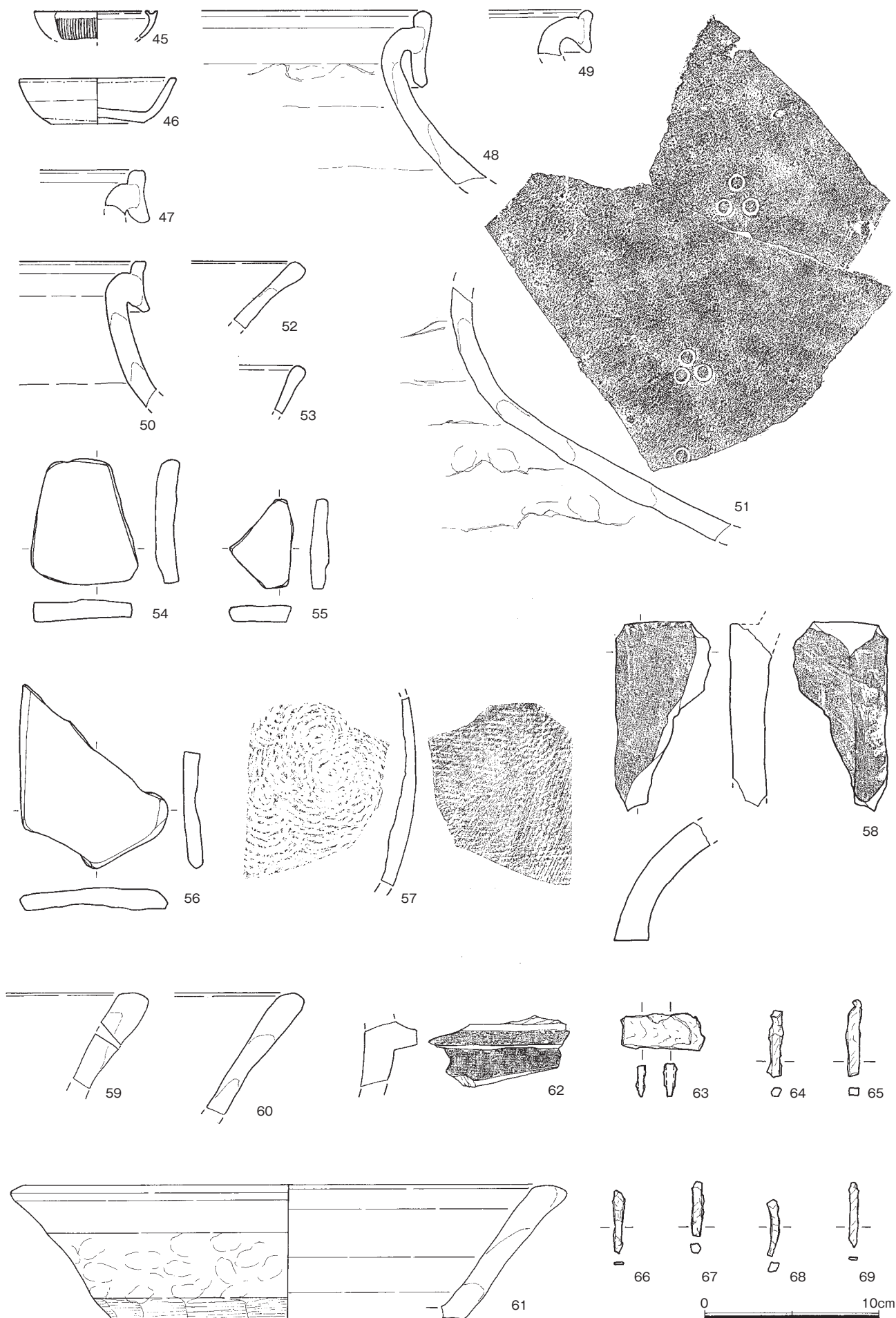


图17 第3面井戸出土遺物(2)

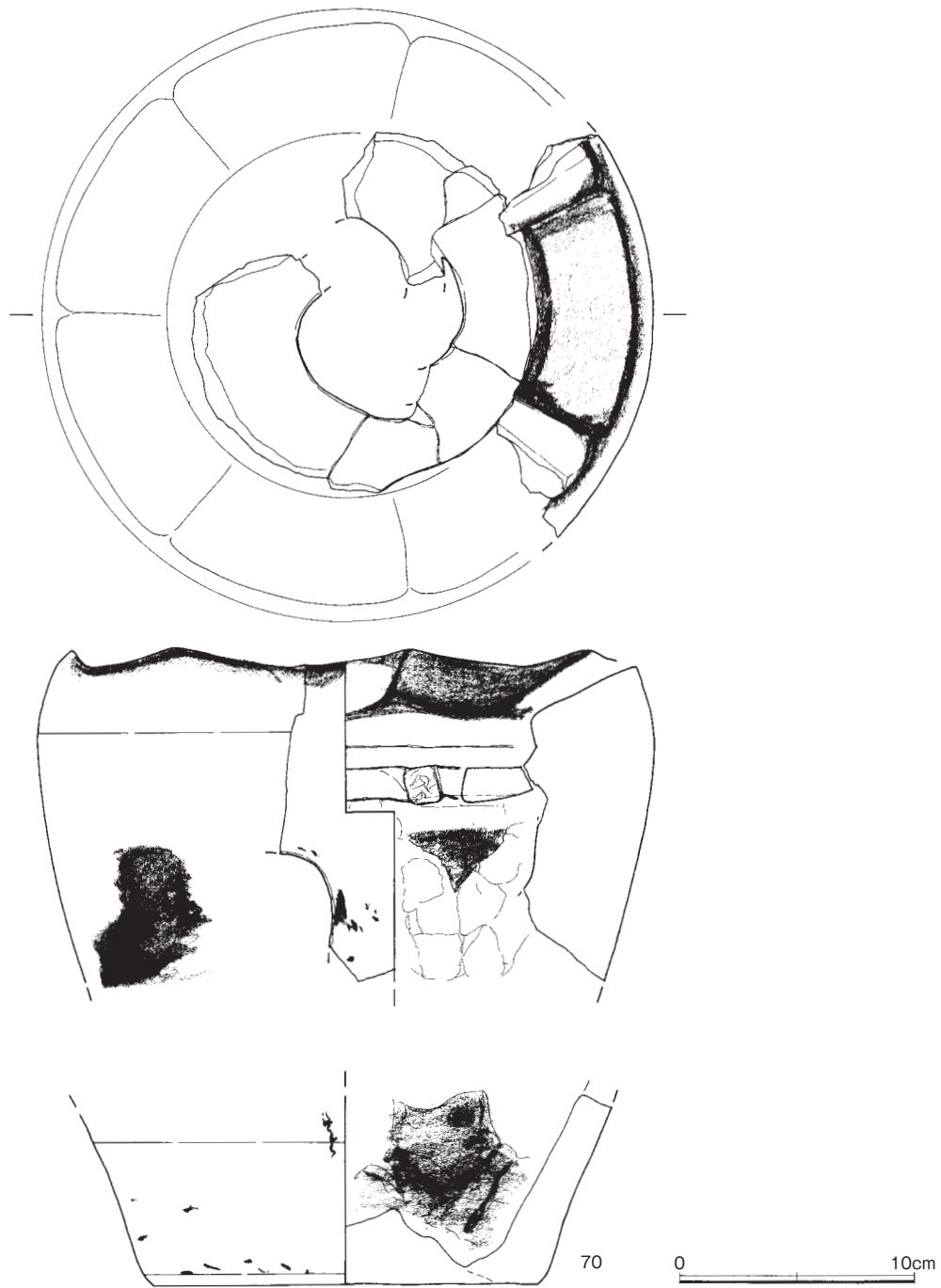


図18 第3面面上出土遺物

第3節 第3面の遺構と遺物 (図15～図27)

第3面は地表から約2.0m下の第6層、土丹地業層を第3面とした。海拔8.0m。柱穴と井戸を検出。

a. 柱穴

第3面では柱穴を5穴検出したが、規則性は見いだせない。

b. 井戸

第3面より掘り込まれた井戸を、調査区西隅で検出した。直径2.8m、深さ1.8m程の掘方で底面に一段だけ一辺1mの木組み(横棧)が遺存していた。北半分が調査区北壁にかかっていたため、南側だけの調査となった。かわらけが大小計297点出土。

c. 不明土製品(図18・図版13)

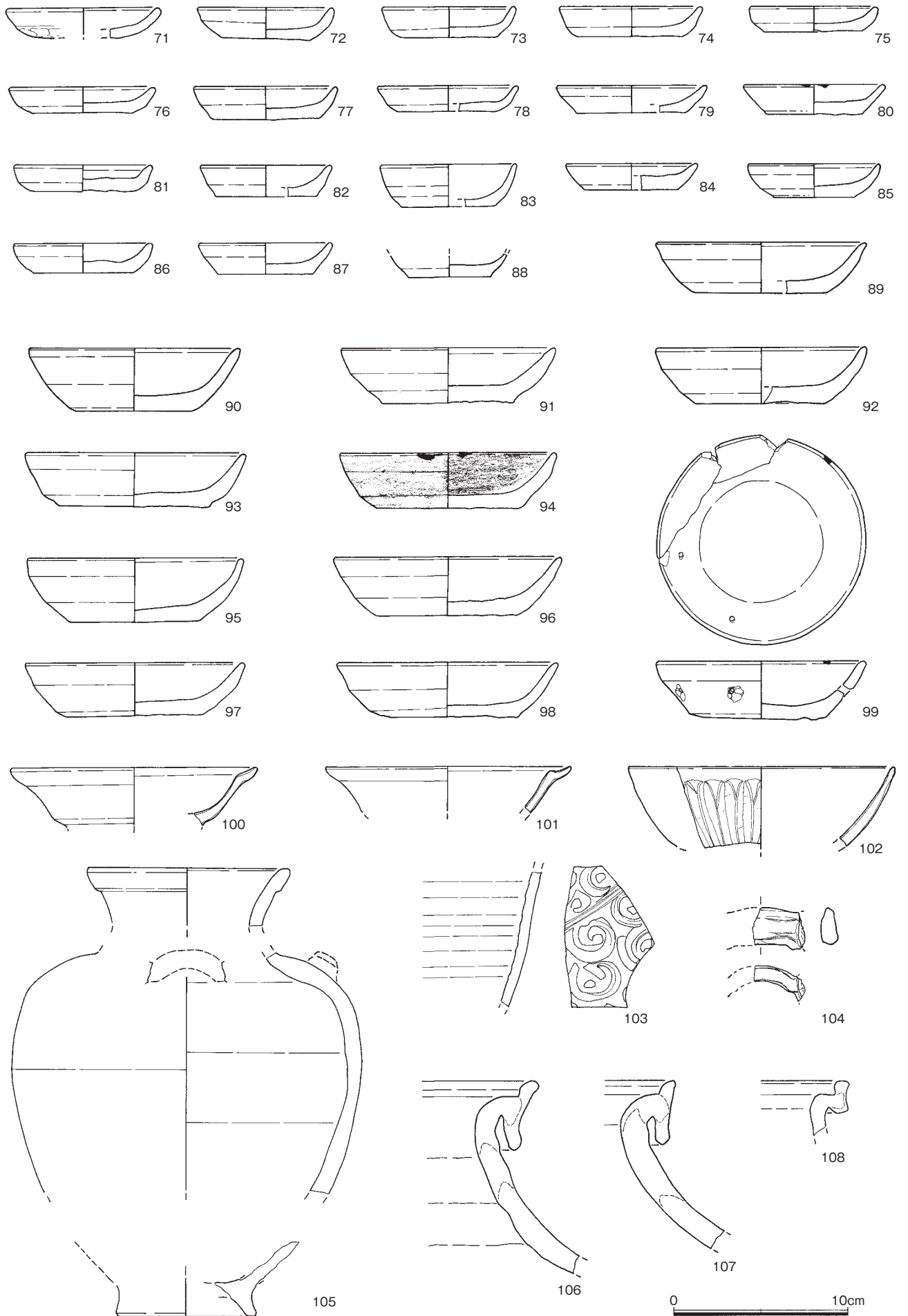


图19 第3面構成土出土遺物(1)

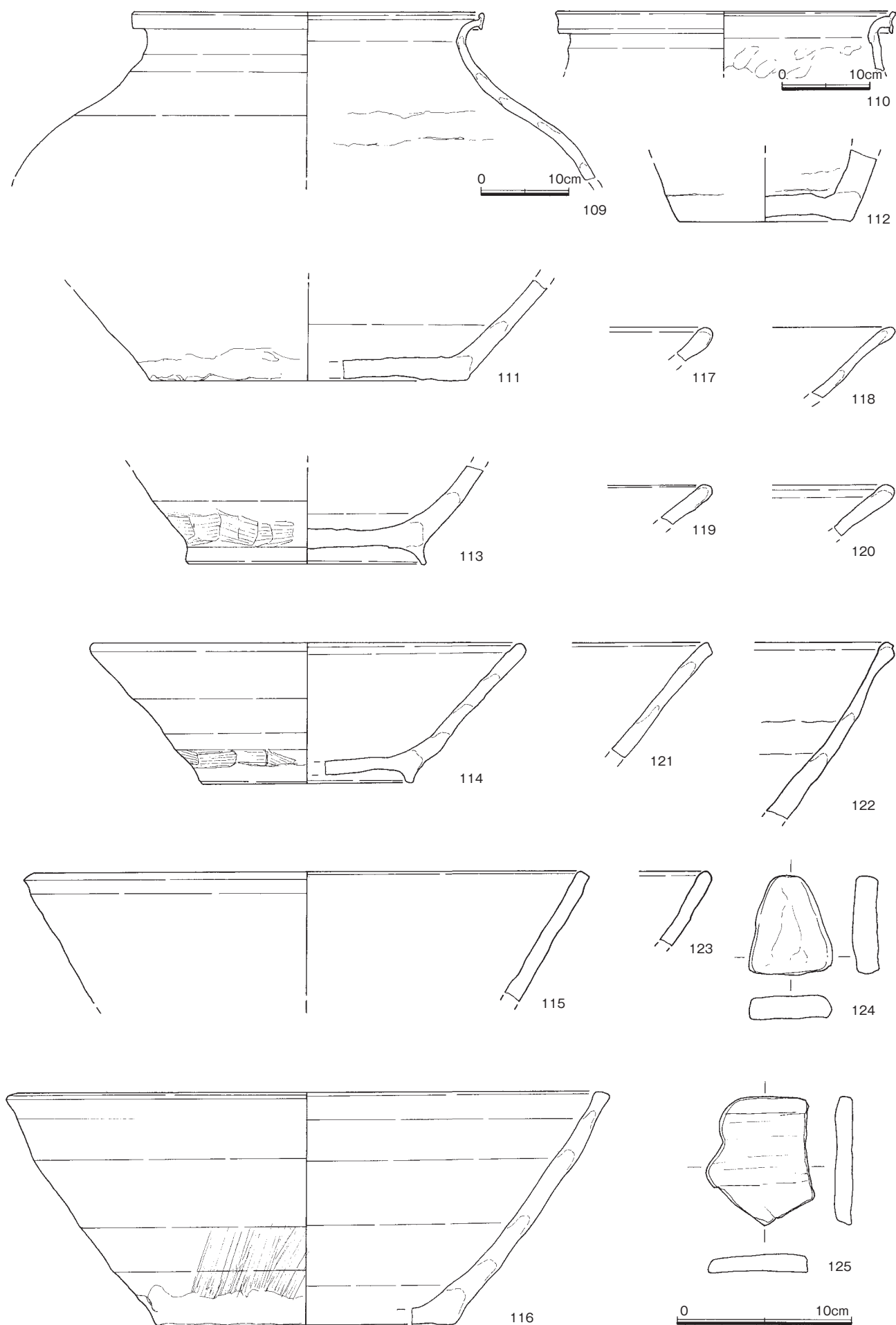


图20 第3面構成土出土遺物(2)

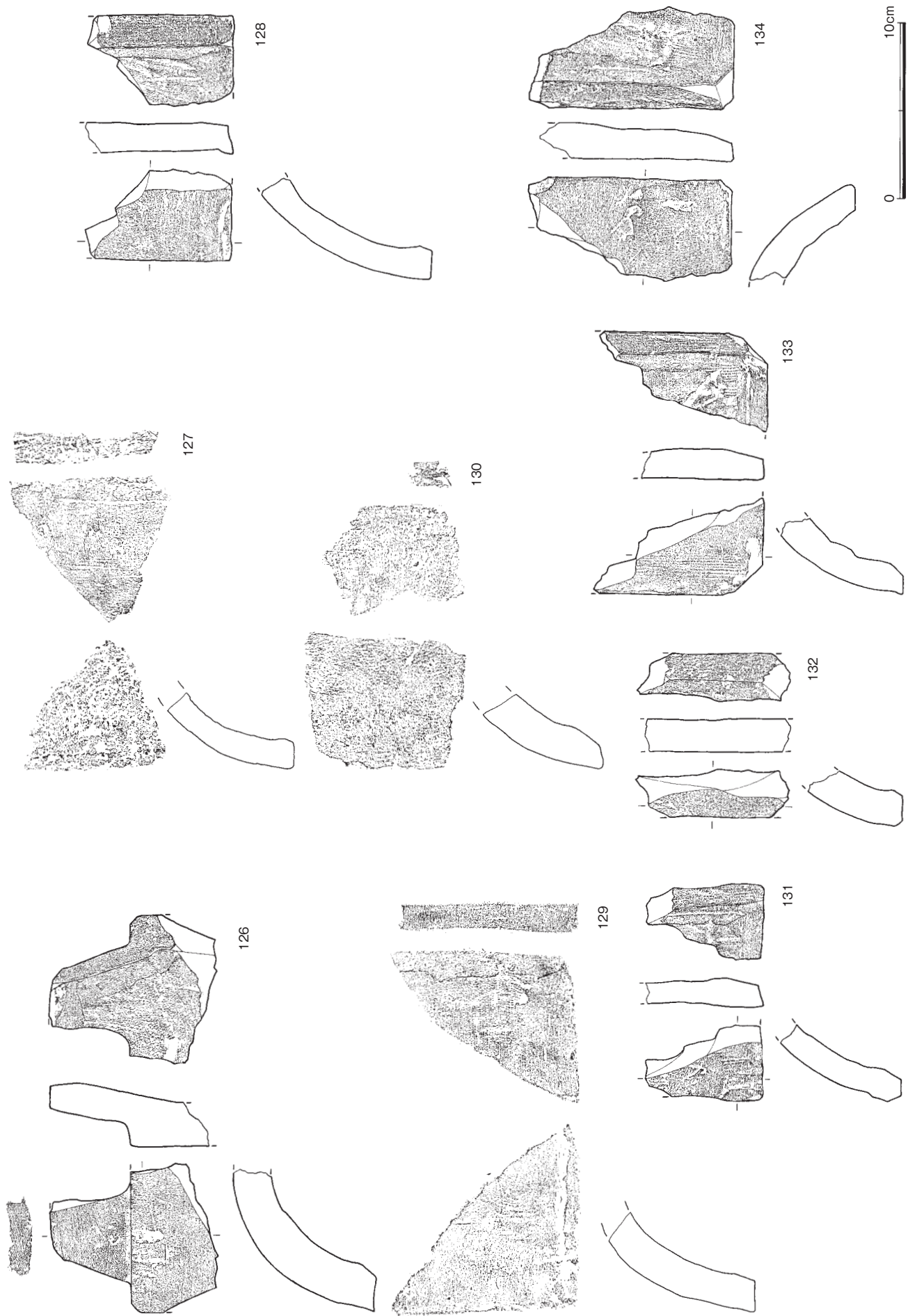


图21 第3面構成土出土遺物(3)

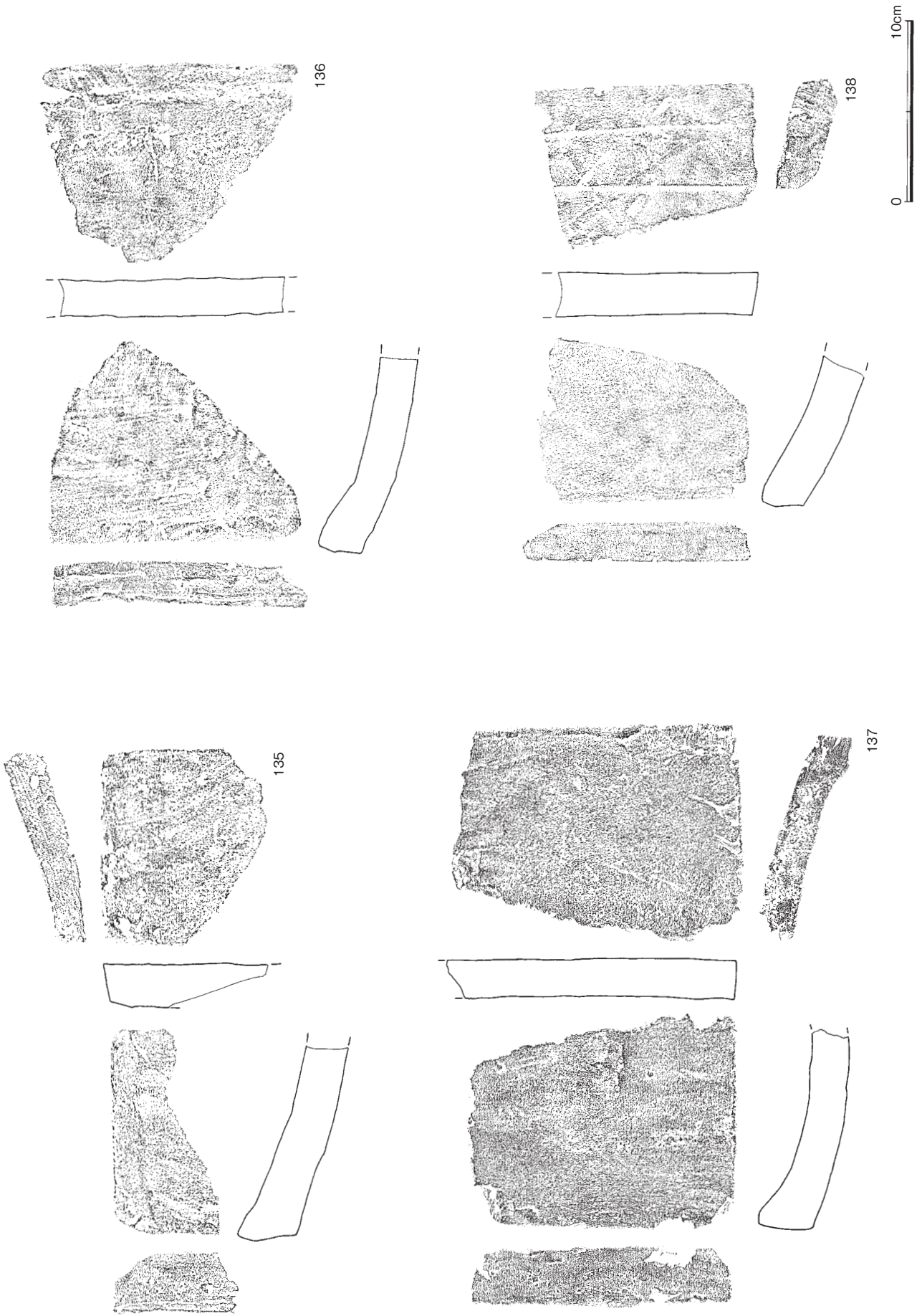


図22 第3面構成土出土遺物(4)

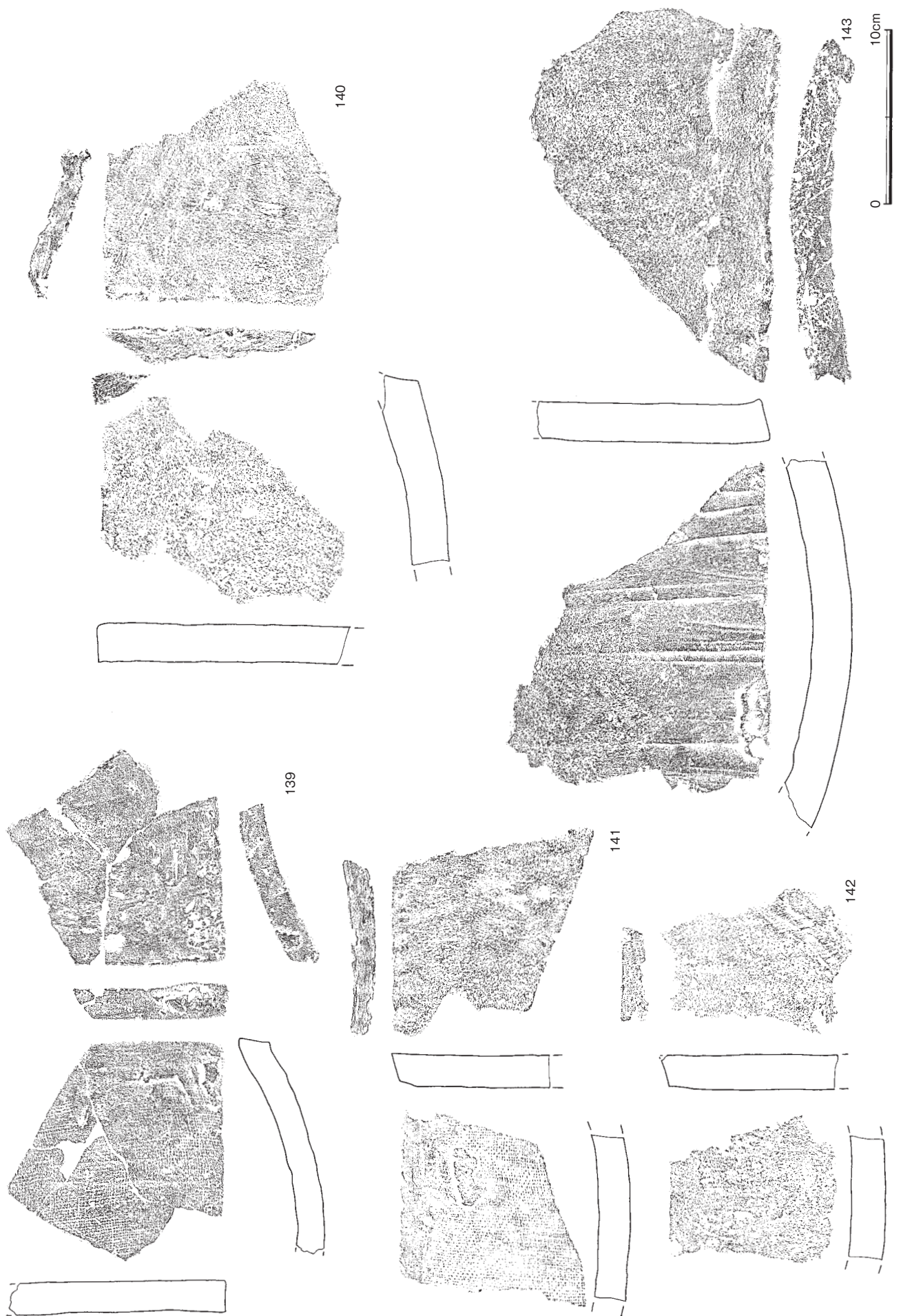


图23 第3面構成土出土遺物(5)

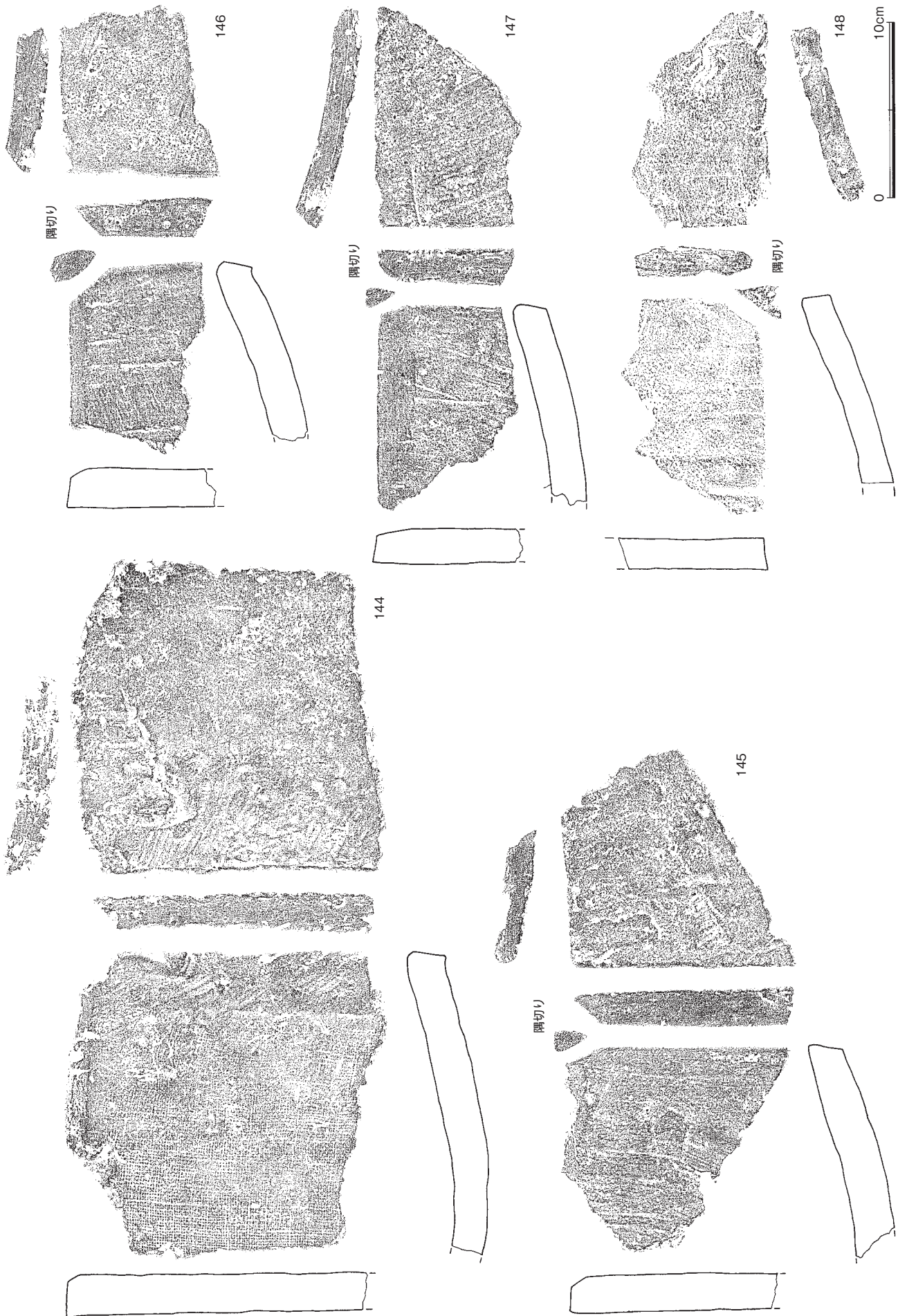


図24 第3面構成土出土遺物(6)

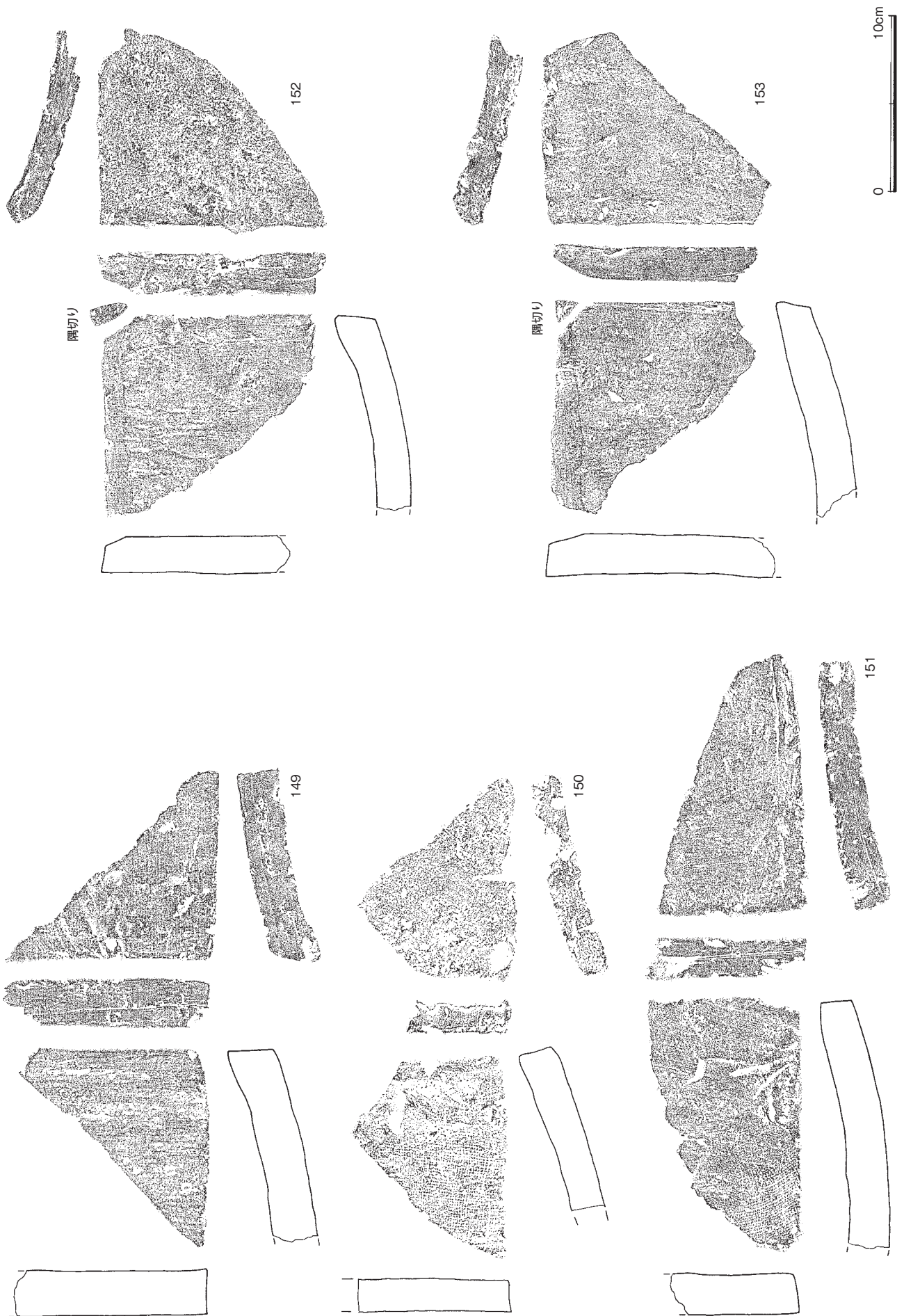


図25 第3面構成土出土遺物(7)

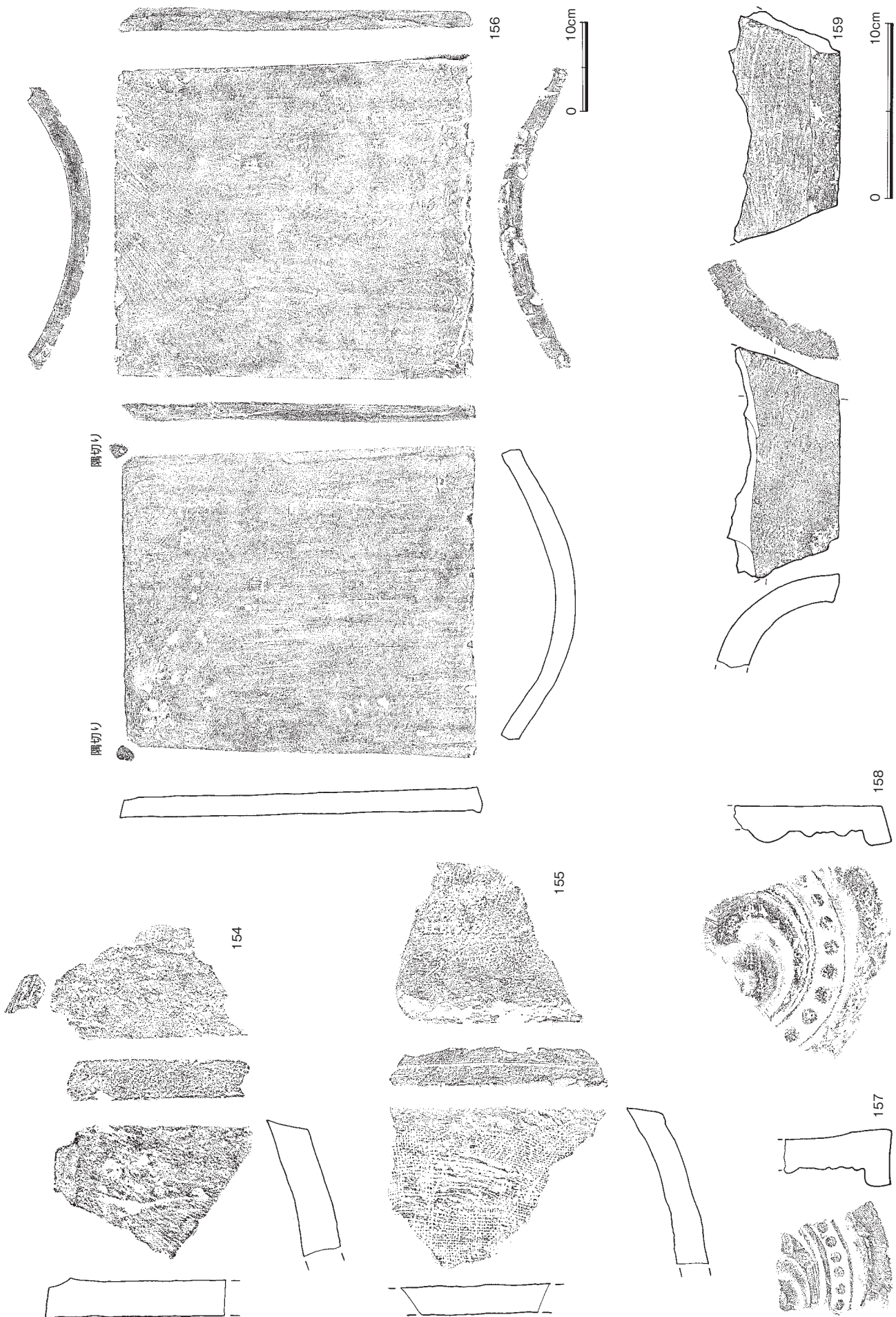


図26 第3面構成土出土遺物(8)

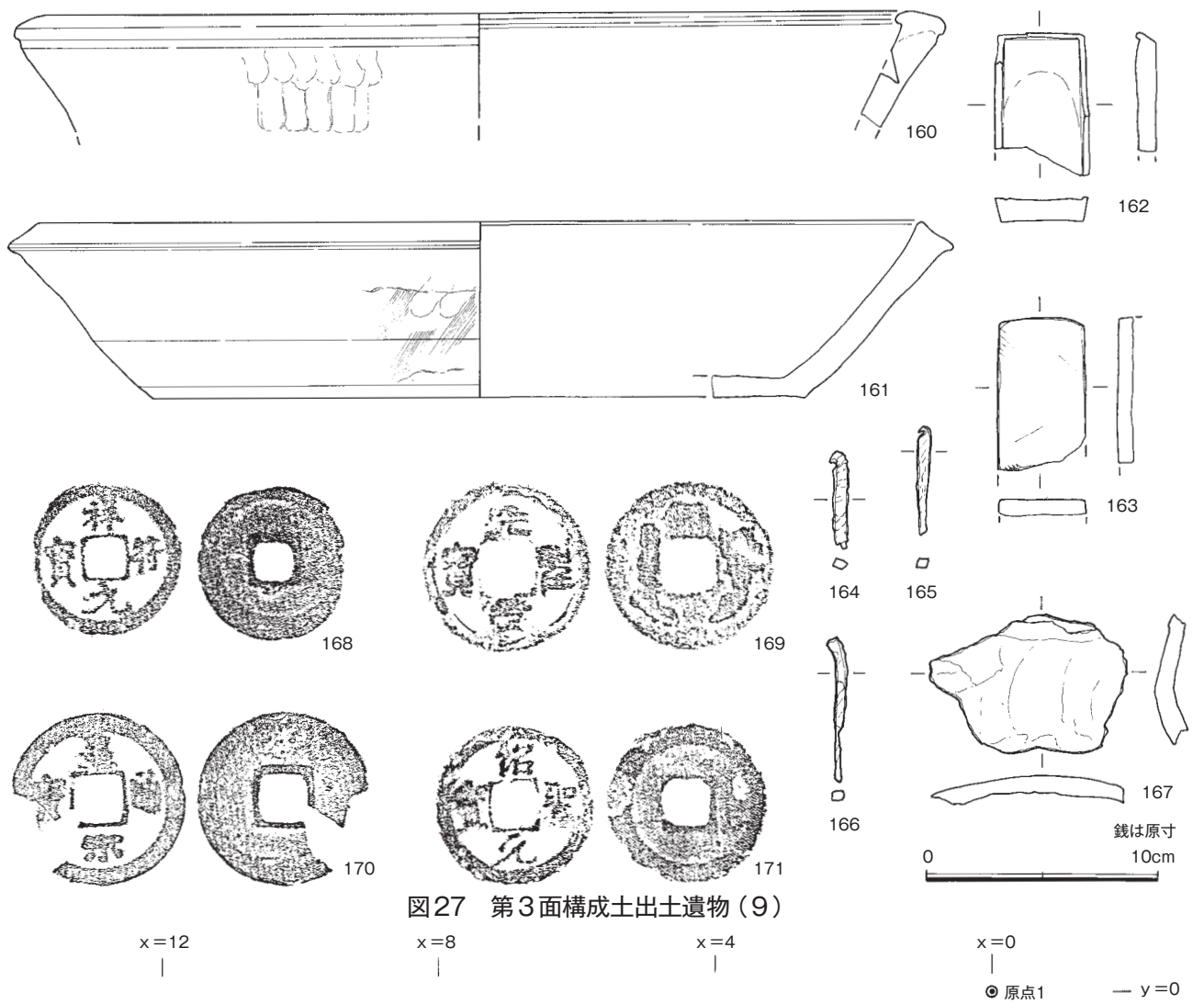


図27 第3面構成土出土遺物(9)

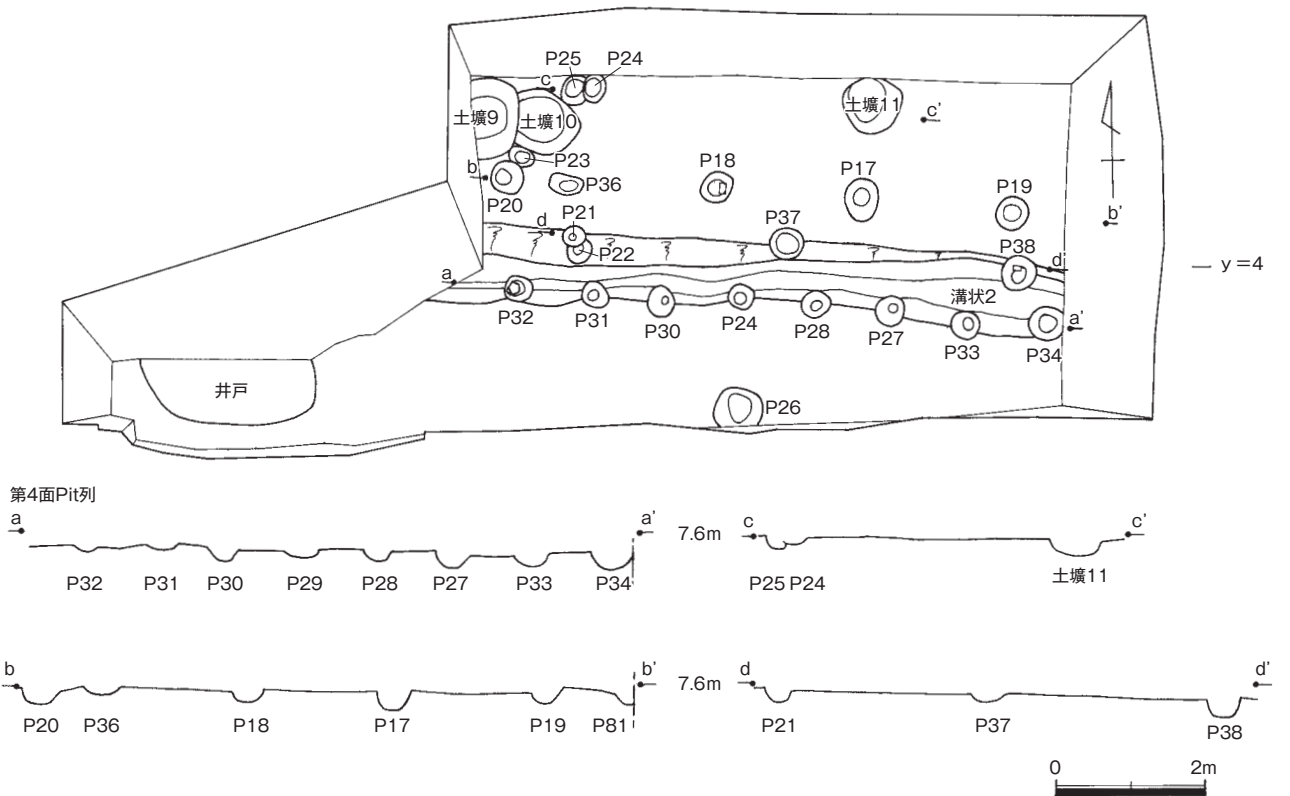


図28 第4面全測図とPit列のエレベーション図

3面出土の遺物で、複数に割れて出土した。当初、表面が焼け強い火を受けた痕跡であることから鑄型あるいは土風呂と考えていたものである。法量は口径24cm、内径13cm、底径16cm、最大径24.5cm、高さ20cm以上。器壁は約5cmもあり色調は明るい茶色、内面に漆喰状の白色土が塗られている。胎土はきめ細かな砂質土。口縁部は七弁の五徳状になり、内面は七輪のように仕切りが付き空気穴が開く。金属加工に用いられる炉のようなものか。

第4節 第4面の遺構と遺物（図28～図31）

第4面は地表から約2.2m下の第8層、暗茶灰色粘質土層を第4面とした。炭化物を多く含んでいる。海拔7.6m。柱穴と溝状遺構、土壌を検出した。

a. 柱穴列

第4面より柱穴を21穴検出した。溝の南肩に沿って95cm間隔で柱穴が7間並び、北側でも肩に沿って2.9m間隔で2間以上伸びる。また、溝の北側でも3間以上の列が確認された。いずれも東西方向のみに伸びて行くことから、建物と云うよりも柵列と考えられる。

b. 溝状2

第2面の布掘りの下に位置し、調査区の南辺と平行に東西方向に伸びる、幅1m、長さ8.3mの溝である。

c. 土壌

北壁際で3つの土壌が検出されている。いずれも直径80cm程、深さ20cm程である。

第5節 第5面の遺構と遺物（図32～図36）

第5面は地表から約2.4m下の第10層、暗茶褐色粘質土層を第5面とした。よく締まり、地山の土に似ている。海拔7.5m。柱穴と土壌、かわらけ溜りを検出した。

a. 柱穴

39穴を検出した。多くの柱穴は重なり合い、規則性は見いだせなかった。

b. 土壌

4つ検出している。いずれも20cm程の深さである。

c. かわらけ溜り

第5面直上、調査区の北東、北壁に一部かかった状態で検出された。範囲は東西300cm、南北250cmで、轆轤成形のかわらけが大363個、小251個が出土した。胎土は粗めで、大の口径の平均は12.16cm。器形も丸深でなく、いわゆる中サイズはほとんど見られないことから、13世紀後半代のものと考えられる。

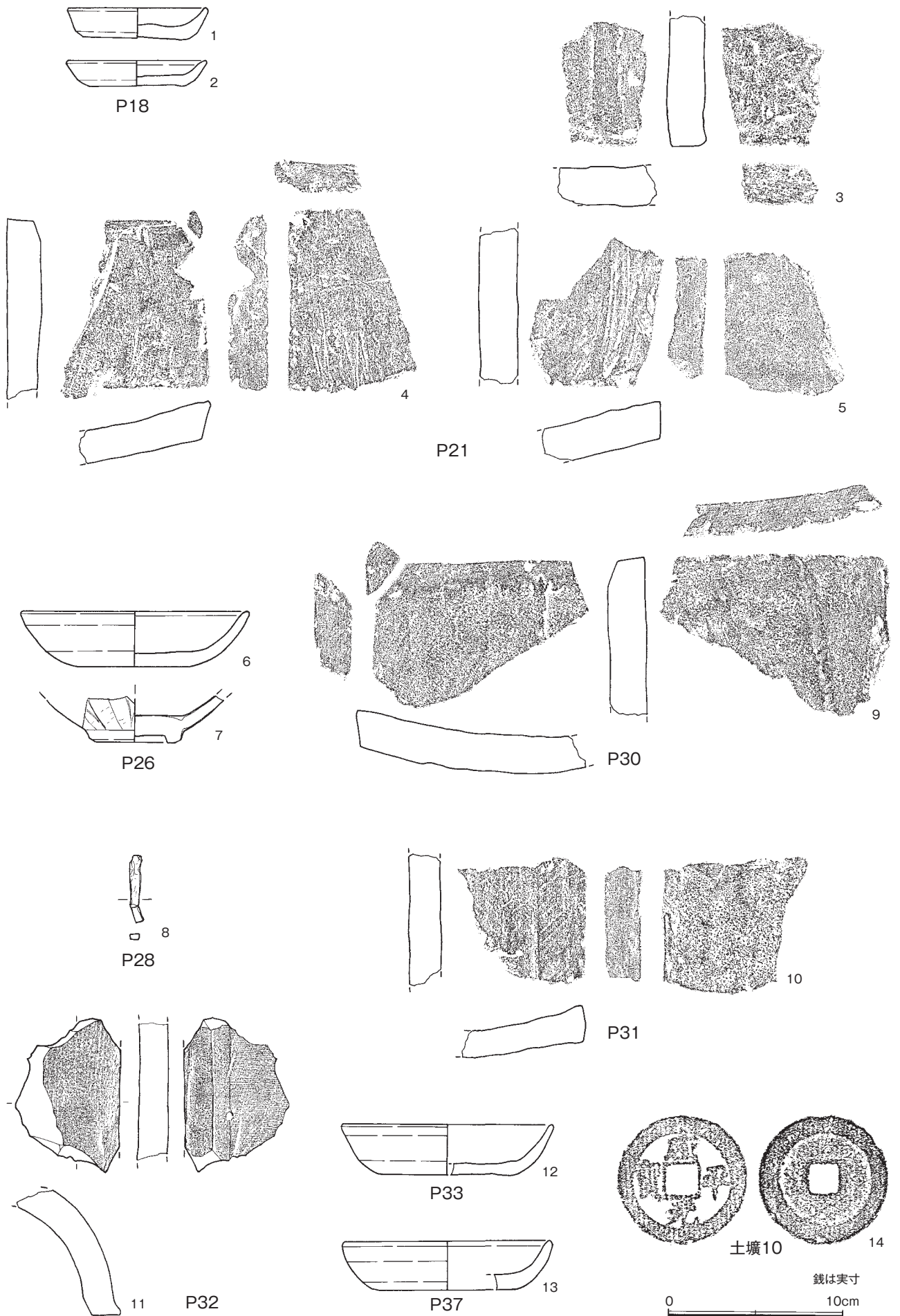
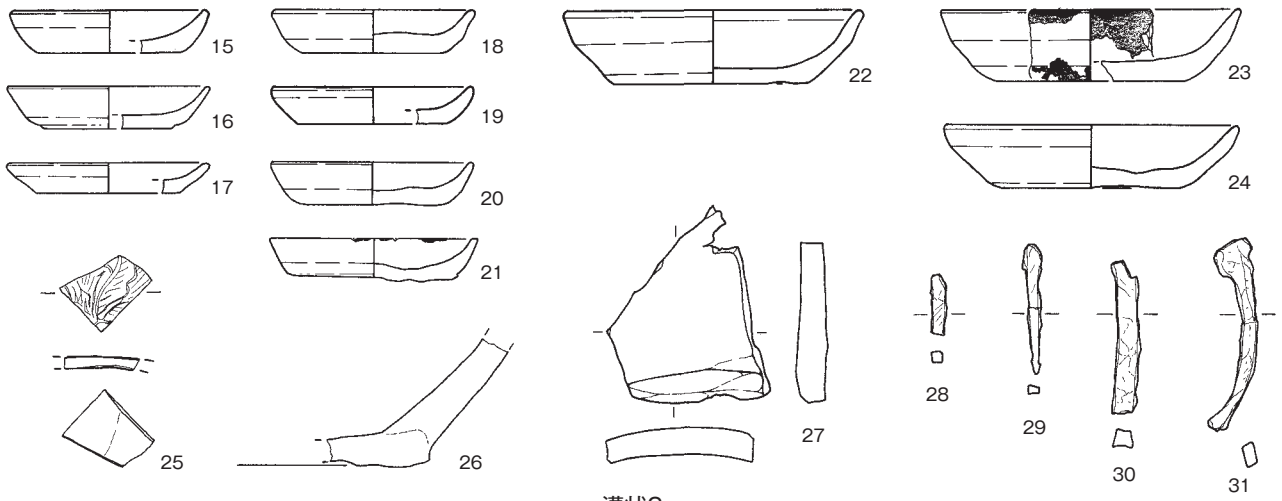
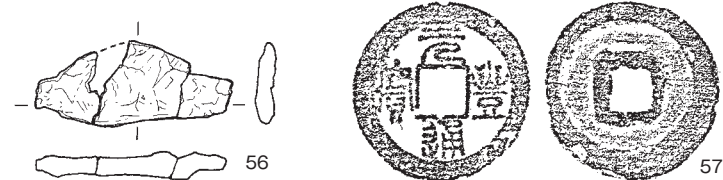
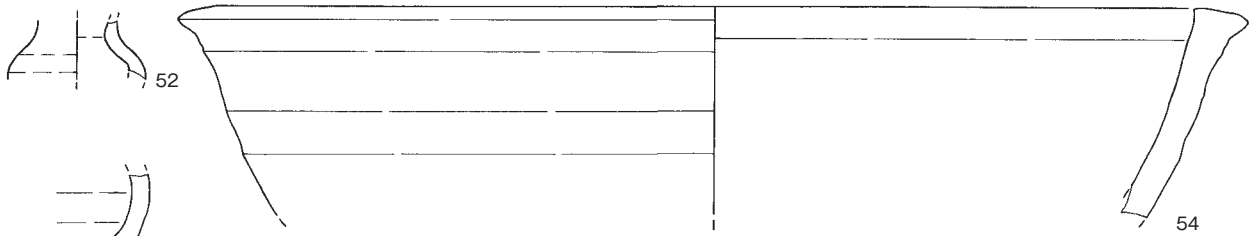
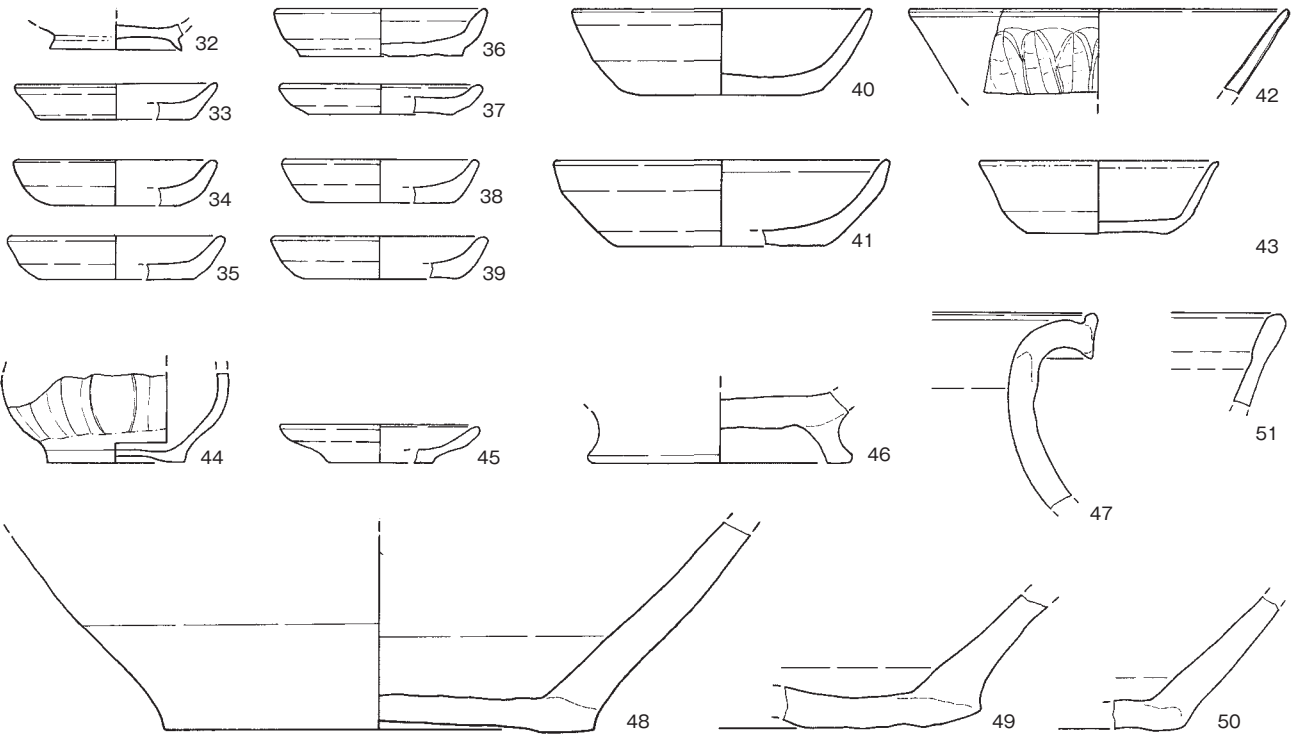


図29 第4面遺構出土遺物(1)

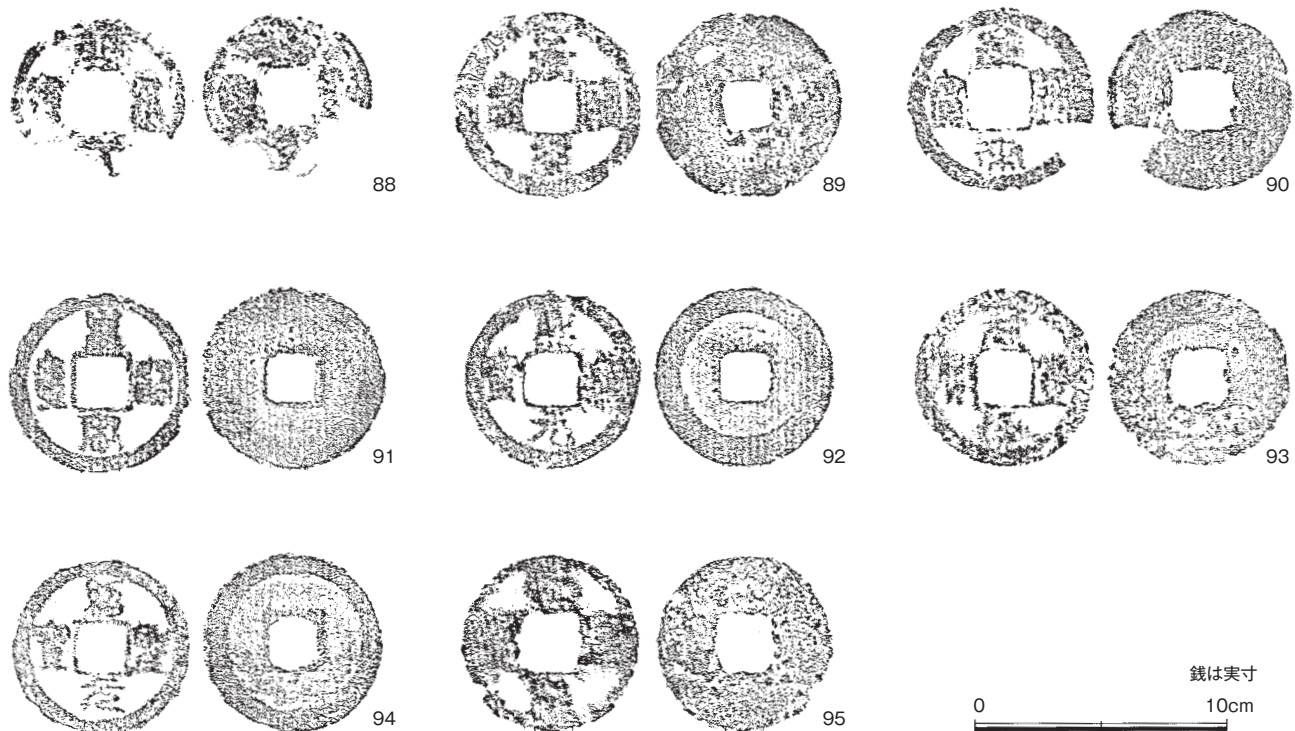
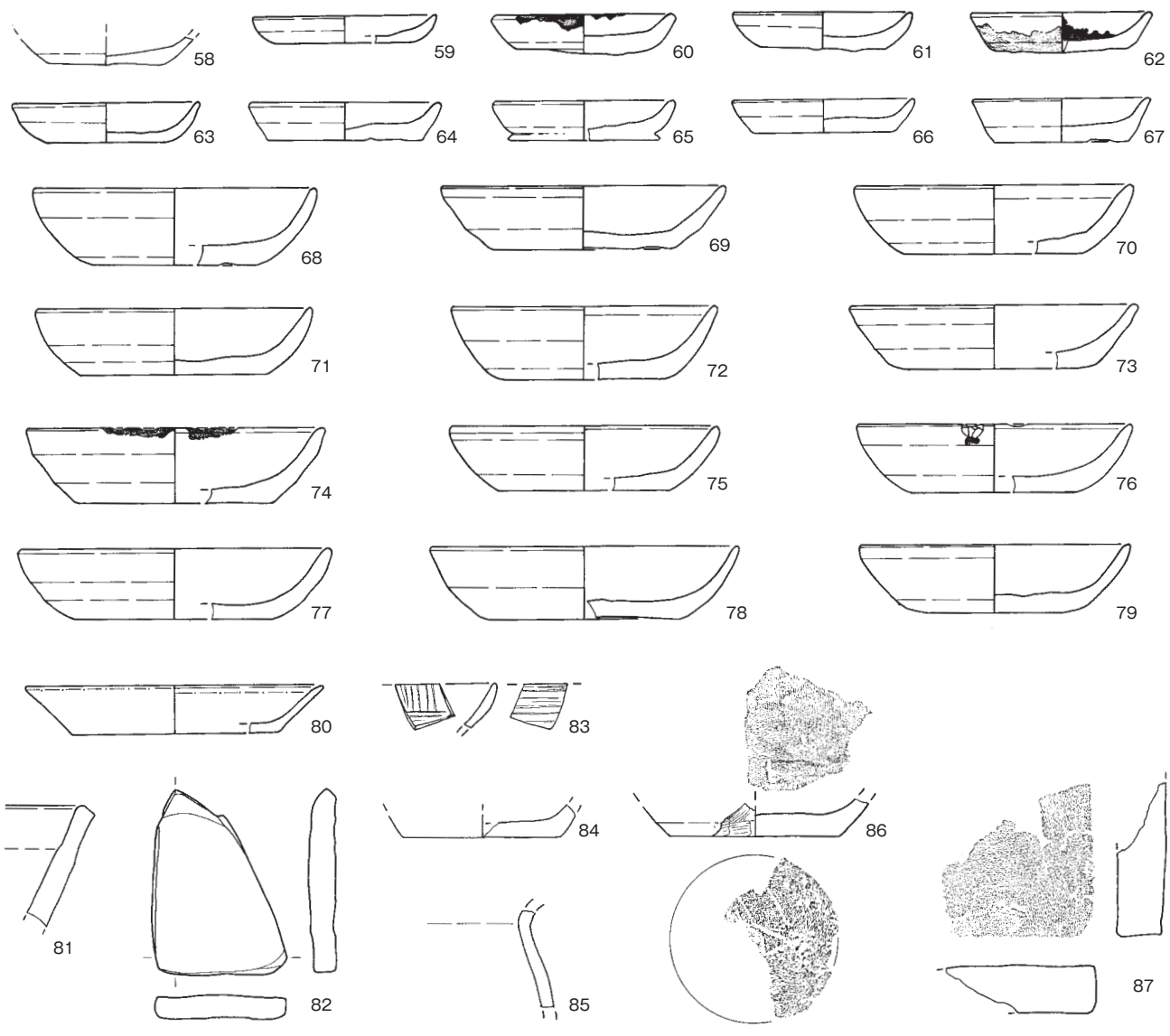


溝状2



第4面面上
 錢は実寸
 0 10cm

图30 第4面遺構出土遺物(2)・面上出土遺物



銭は実寸
0 10cm

図31 第4面構成土出土遺物

x=12

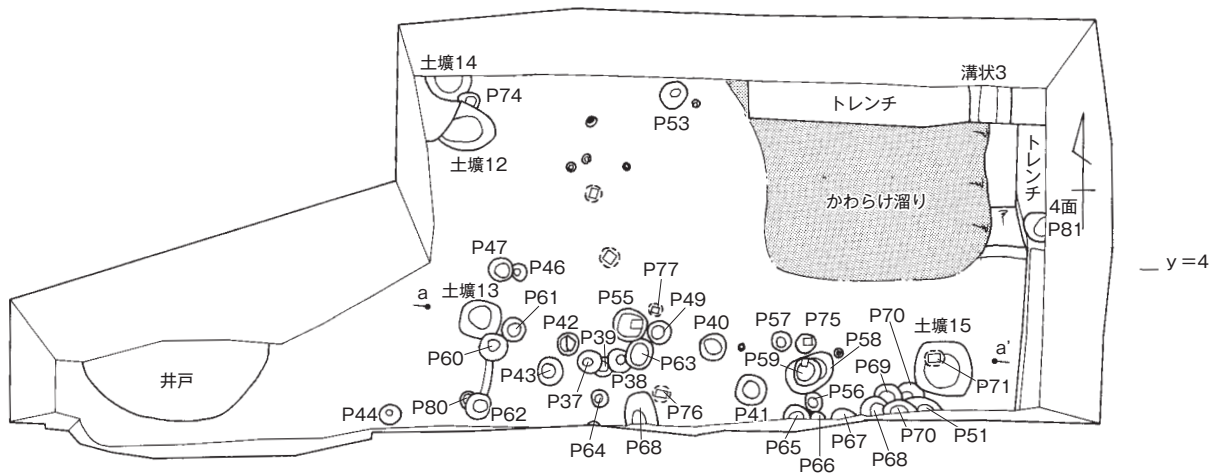
x=8

x=4

x=0

●原点1

_ y=0



第5面Pit列



図32 第5面全測図とPit列のエレベーション図

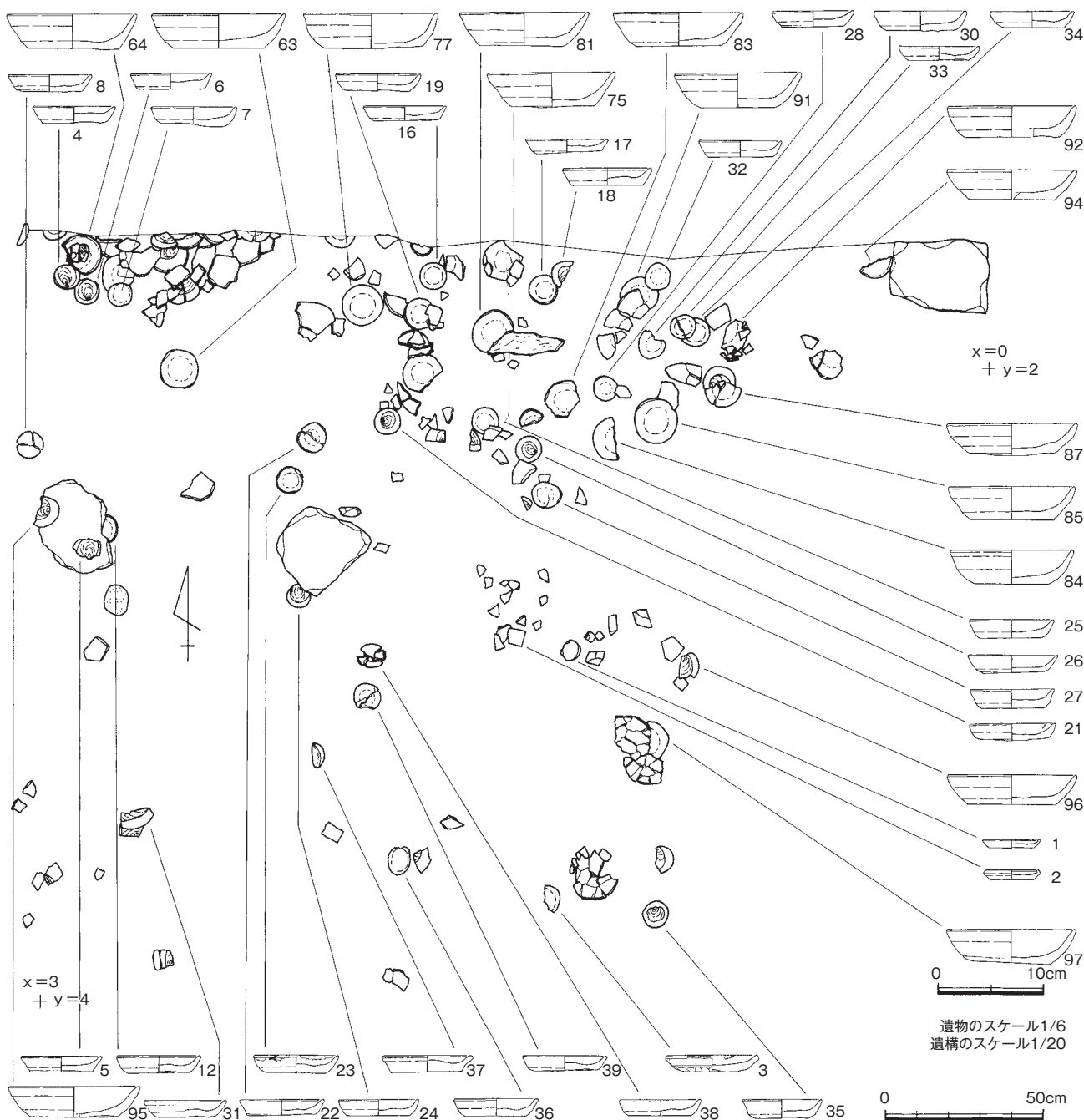


図33 第5面かわらけ溜り遺物分布図

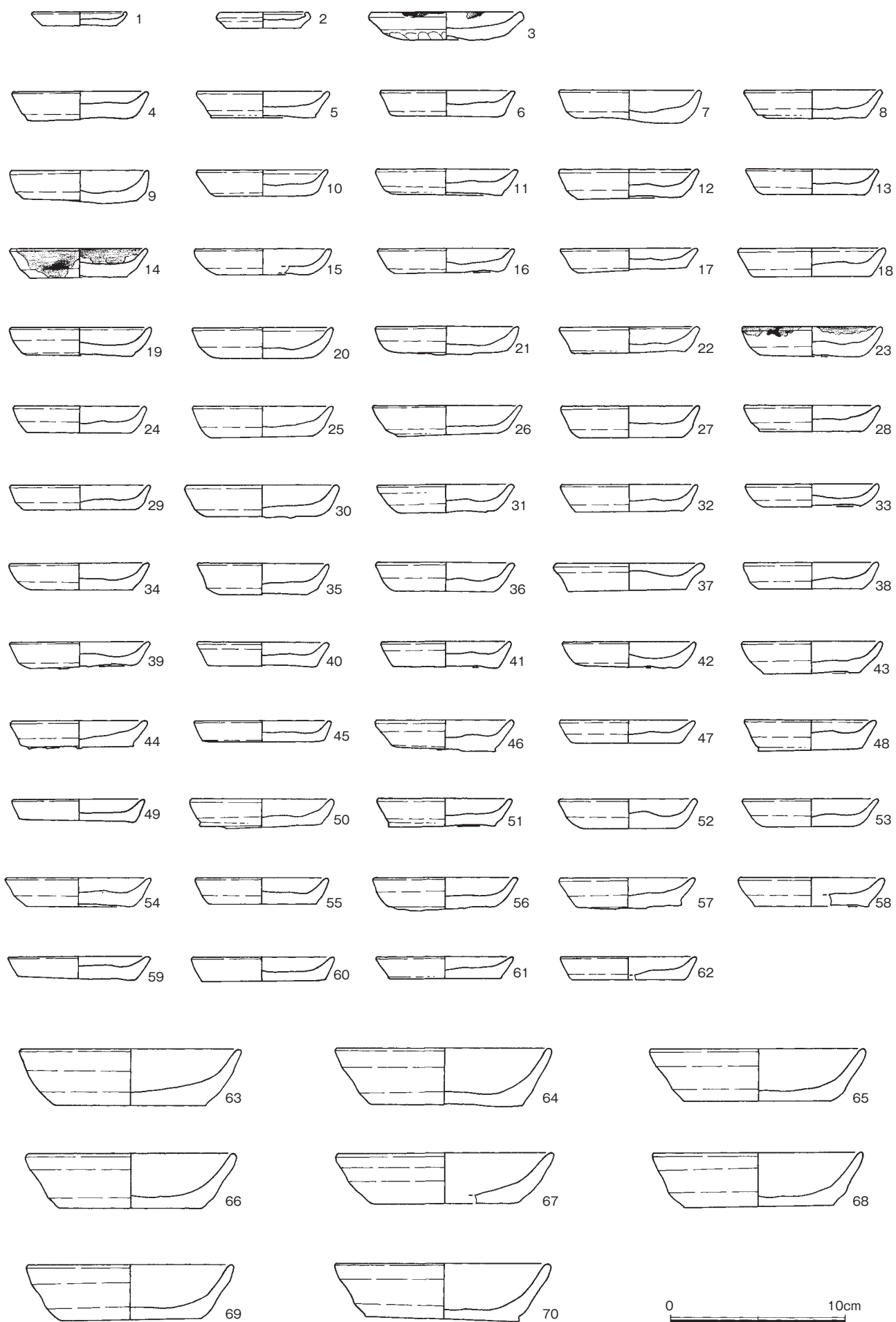


図34 第5面かわらけ溜り出土遺物(1)

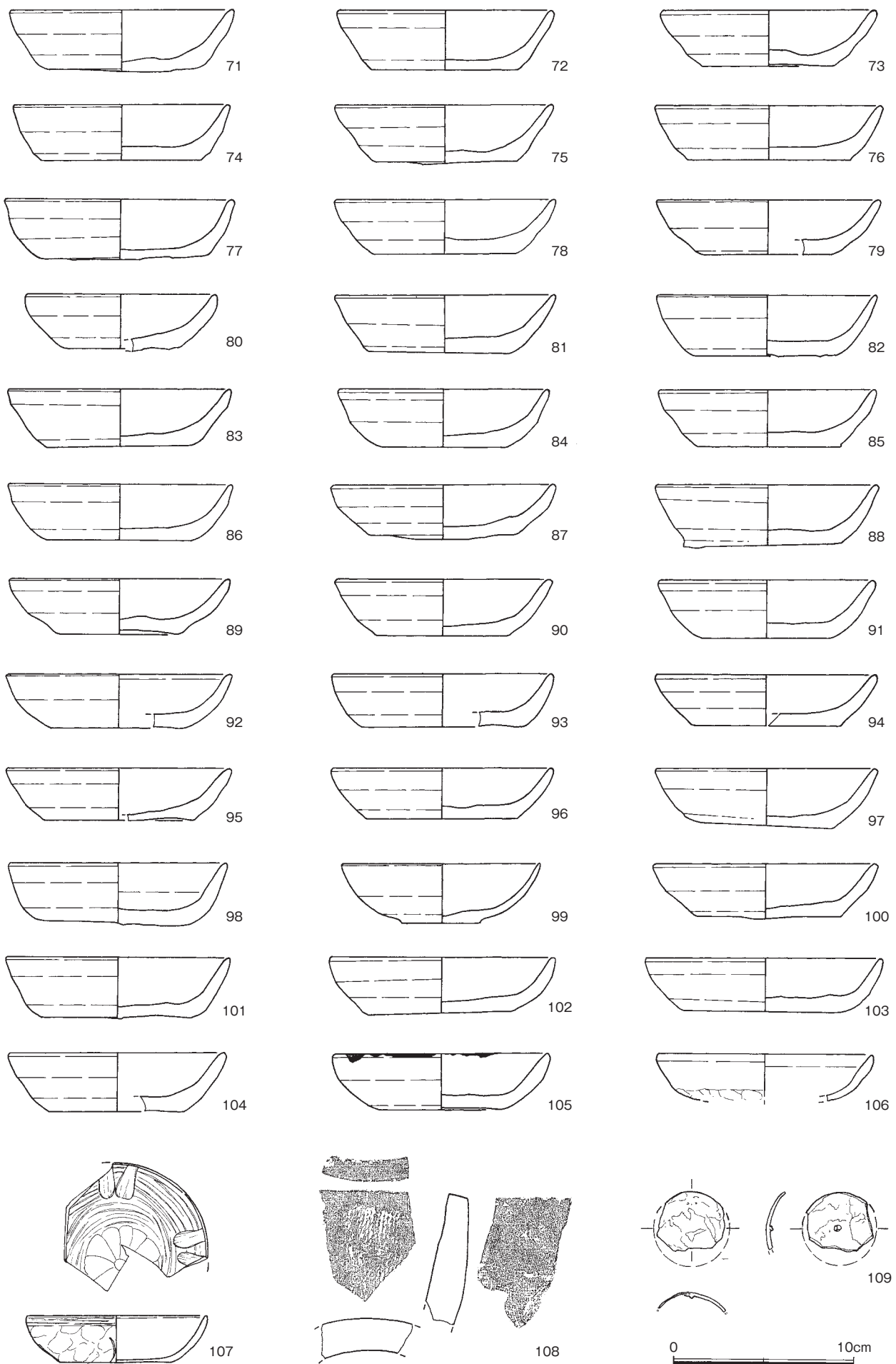


図35 第5面かわらけ溜り出土遺物(2)

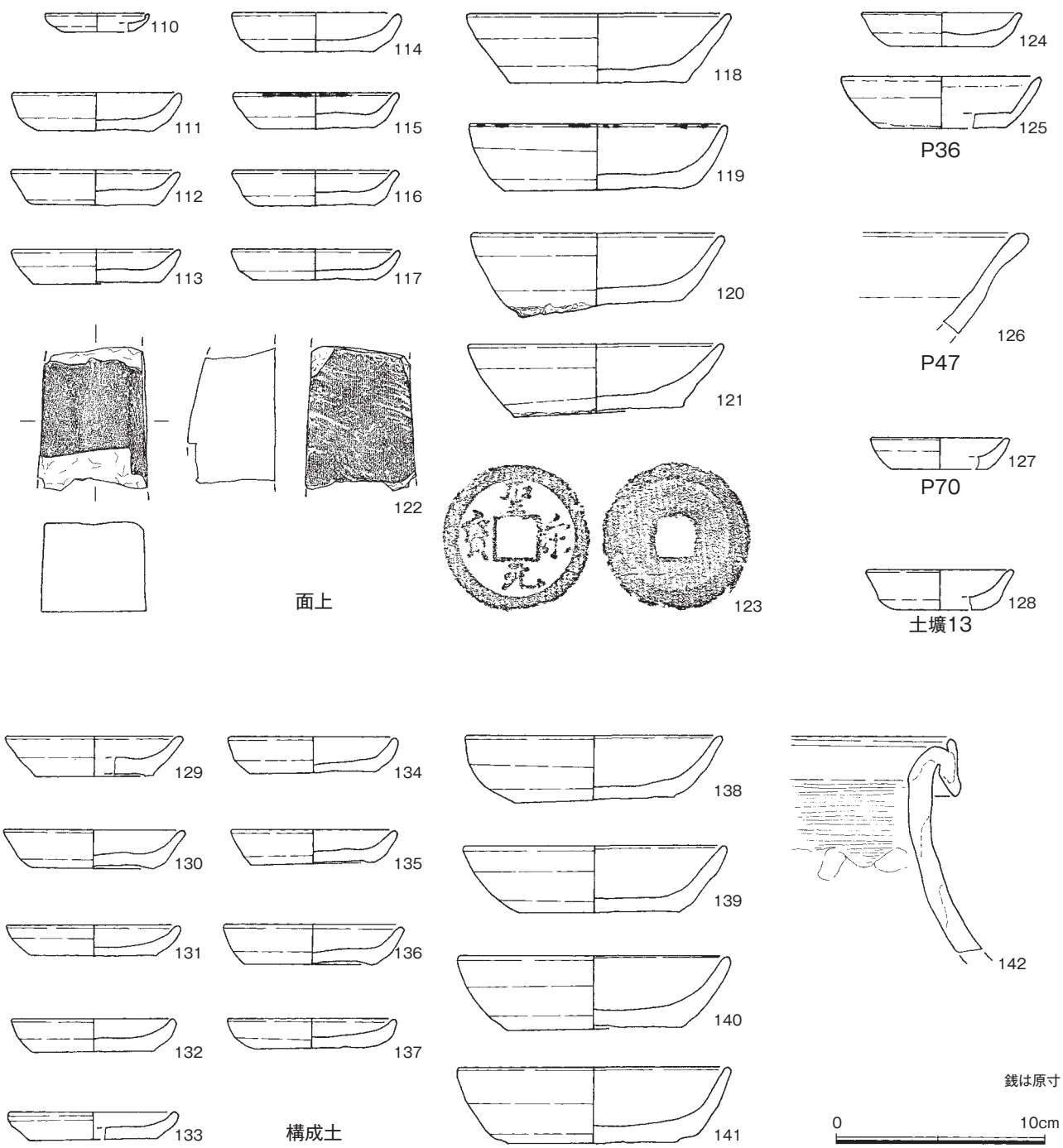


図36 第5面遺構・面上・構成土出土遺物

第四章 まとめ

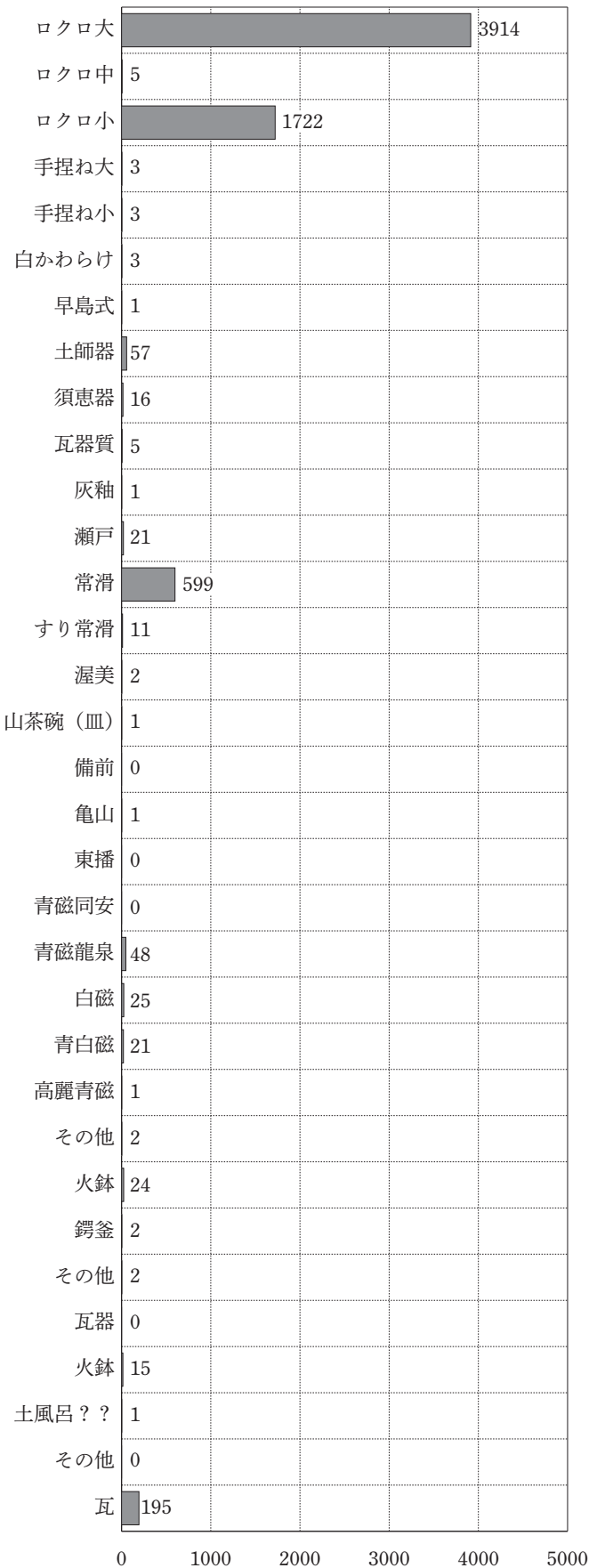
調査地点は、「甘縄神社遺跡群」の北東の一角に位置する。鎌倉以前からある甘縄神明神社や甘縄という字名から、武家屋敷が確認される予想もあったが、有無を確認できるだけの遺構には恵まれなかった。

遺跡の年代は最下層の第5面かわらけ溜りの遺物が13世紀後半、第1面の遺物も14世紀前半代に収まるもので、比較的狭い年代が考えられる。

遺物は総数にして6958点が出土した。この内土器、舶載陶磁器、国産陶器類、瓦といった焼き物の出土点数は6701点であった。遺物の状況を概観すると、かわらけが圧倒的に多く、大小かわらけの合計は5637点、84.1%。常滑は599点出土、8.9%。舶載磁器は計94点、1.4%であった。

常滑甕の口縁から型式を見てゆくと、ほとんどが6a型式に属するもので、年代的には13世紀後半代が考えられる。第5面で検出したかわらけ溜り出土のかわらけの特徴(少し粗めな胎土や12～13cmの口径が中心)を見ても、やはり13世紀後半から14世紀初頭の年代が考えられる。井戸が検出されたにもかかわらず、中から木製品・漆器の出土は確認されなかった。

瓦が破片ではあるが計195点出土している。ほとんどが男瓦、女瓦であるが、2点連珠巴文鐙瓦(鎌倉後期)が出土している。近くに瓦葺きの建物の存在を窺わせるものかもしれない。



出土遺物点数表

図4 第1面 遺構・構成土出土遺物

遺構名	仮図No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
土壌1	1	かわらけ	(7.8)	5.6	1.7	轆轤成形
	2	瀬戸 折縁皿	(29.4)			緑灰釉 ツケガケ
	3	常滑 甕		23.0		
構成土	4	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.6	轆轤成形
	5	かわらけ	8.0	5.6	1.6	轆轤成形
	6	かわらけ	(7.6)	(5.0)	2.1	轆轤成形
	7	かわらけ	12.2	(7.0)	3.1	轆轤成形
	8	かわらけ	12.0	8.0	3.2	轆轤成形
	9	かわらけ	11.8	7.6	3.2	轆轤成形
	10	常滑 甕				6a 型式
	11	火鉢				瓦質 輪花形
	12	銭 皇宋通寶	径2.4	重g3.1		初鑄年1038年(北宋)篆書

図6 第2面 遺構出土遺物 (1)

遺構名	No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
Pit1	1	かわらけ	7.0	5.2	1.8	轆轤成形
Pit2	2	かわらけ	(7.0)	(5.0)	1.6	轆轤成形
	3	かわらけ	(11.8)	(6.5)	3.1	轆轤成形
	4	かわらけ	(8.2)	(5.8)	1.6	轆轤成形
Pit3	5	かわらけ	(11.2)	(6.2)	2.9	轆轤成形
	6	かわらけ	12.9	8.0	3.3	轆轤成形
	7	かわらけ	(7.8)	(4.8)	1.4	轆轤成形 口縁部に煤付着
Pit5	8	かわらけ	(12.8)	(9.6)	2.9	轆轤成形 口縁部・内面に煤付着
	9	かわらけ	13.0	8.2	3.3	轆轤成形
土壌2	10	かわらけ	13.0	8.0	3.5	轆轤成形 口縁部に煤付着
	11	かわらけ	12.0	8.0	3.2	轆轤成形 口縁部に煤付着
土壌3	12	常滑 甕				
	13	常滑 甕				
	14	常滑 甕				
	15	常滑 甕				
	16	常滑 甕				菊花文スタンプ
	17	骨製品 栓	長4.5	幅1.3~1.	厚1.3~0.	9
土壌4	18	かわらけ	7.0	5.2	1.8	轆轤成形
	19	土師器 壺				
土壌6	20	銭 元豊通寶	径2.4	重g2.6		初鑄年1078年(北宋)篆書
	21	かわらけ	(12.8)	(8.0)	3.4	轆轤成形
	22	かわらけ	(11.8)	(7.8)	2.8	轆轤成形
溝状1	23	常滑片口鉢 (I類)				
	24	かわらけ	(7.4)	(5.8)	1.7	轆轤成形
	25	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.6	轆轤成形
	26	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.7	轆轤成形
	27	かわらけ	(11.0)	(6.3)	3.0	轆轤成形 体部内・外面に煤付着
	28	かわらけ	(10.8)	(6.4)	2.6	轆轤成形
	29	かわらけ	(11.8)	(7.4)	2.8	轆轤成形
	30	鉄製品 釘	残長3.0	幅0.3	厚0.3	
布掘り	31	かわらけ	(7.2)	(5.4)	1.2	轆轤成形
	32	かわらけ	(7.4)	(5.6)	1.7	轆轤成形
	33	銭 政和通寶	径2.4	重g1.7		初鑄年1111年(北宋)篆書

図7 第2面 遺構出土遺物 (2)

遺構名	No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
落ち込み1(1)	34	白かわらけ		(5.0)		轆轤成形
	35	かわらけ	(7.4)	(5.4)	1.5	轆轤成形
	36	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.2	轆轤成形
	37	かわらけ	(7.4)	(5.4)	1.6	轆轤成形
	38	かわらけ	(7.0)	(4.2)	1.6	轆轤成形
	39	かわらけ	(7.2)	(5.0)	1.6	轆轤成形
	40	かわらけ	(8.3)	(5.8)	1.9	轆轤成形
	41	かわらけ	(7.2)	(5.0)	1.5	轆轤成形

	42	かわらけ	7.4	4.8	1.8	轆轤成形
	43	かわらけ	7.6	5.6	1.5	轆轤成形
	44	かわらけ	8.2	5.2	1.8	轆轤成形
	45	かわらけ	9.6	5.6	1.5	轆轤成形
	46	かわらけ	7.8	4.6	1.8	轆轤成形
	47	かわらけ	7.0	4.9	1.4	轆轤成形
	48	かわらけ	(7.2)	(4.6)	1.7	轆轤成形
	49	かわらけ	(7.2)	(4.4)	1.8	轆轤成形
	50	かわらけ	(7.0)	(4.0)	1.5	轆轤成形
	51	かわらけ	(8.0)	(5.0)	1.8	轆轤成形
	52	かわらけ	(7.4)	(5.5)	1.4	轆轤成形
	53	かわらけ	(7.4)	(4.5)	1.8	轆轤成形
	54	かわらけ	(7.4)	(4.5)	2.1	轆轤成形
	55	かわらけ	7.4	5.5	1.6	轆轤成形
	56	かわらけ	7.6	5.0	1.7	轆轤成形
	57	かわらけ	6.8	5.9	1.5	轆轤成形
	58	かわらけ	(7.4)	(5.2)	1.8	轆轤成形
	59	かわらけ	(7.0)	(5.2)	1.6	轆轤成形 口縁部・外面に煤付着
	60	かわらけ	8.0	5.4	1.9	轆轤成形
	61	かわらけ	8.0	6.5	1.9	轆轤成形
	62	かわらけ	7.4	5.4	1.7	轆轤成形
	63	かわらけ	7.5	4.2	1.7	轆轤成形
	64	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.5	轆轤成形
	65	かわらけ	7.9	5.1	1.9	轆轤成形
	66	かわらけ	8.0	5.3	1.9	轆轤成形
	67	かわらけ	7.6	5.2	2.4	轆轤成形
	68	かわらけ	7.8	4.9	1.8	轆轤成形
	69	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.8	轆轤成形 口縁部に煤付着
	70	かわらけ	(7.4)	(4.2)	2.2	轆轤成形 口縁部に煤付着
	71	かわらけ	(7.8)	(4.9)	2.0	轆轤成形
	72	かわらけ	(12.8)	(7.3)	3.4	轆轤成形
	73	かわらけ	(11.8)	(7.4)	3.2	轆轤成形
	74	かわらけ	(10.4)	(6.0)	2.9	轆轤成形
	75	かわらけ	(13.8)	(7.6)	3.5	轆轤成形
	76	かわらけ	10.8	6.8	2.9	轆轤成形
	77	かわらけ	(12.0)	(7.2)	2.9	轆轤成形
	78	かわらけ	(12.0)	(7.0)	3.5	轆轤成形
	79	かわらけ	(12.7)	(7.6)	3.7	轆轤成形
	80	かわらけ	(12.0)	(8.0)	3.0	轆轤成形
	81	かわらけ	(13.0)	(7.7)	3.6	轆轤成形
	82	かわらけ	12.0	7.9	3.4	轆轤成形
	83	かわらけ	(14.4)	(9.4)	3.7	轆轤成形
	84	かわらけ	(12.2)	(8.4)	3.2	轆轤成形
	85	青磁 折縁鉢	(13.4)			
	86	青磁 蓮弁文碗			3.6	
	87	白磁				器種不明
	88	青白磁 壺	(6.8)			
	89	青白磁 梅瓶				牡丹唐草文

図8 第2面 遺構出土遺物 (3)

遺構名	No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
落ち込み1(2)	90	亀山	(30.0)	(23.0)		残高 上5.0、中7.8、下3.3
	91	常滑 甕				
	92	常滑 甕				
	93	常滑 甕				
	94	常滑片口鉢 (I類)				
	95	常滑片口鉢 (II類)				
	96	瓦器質 碗	(9.6)			
	97	男瓦			厚1.6	
	98	女瓦			厚1.5	
	99	火鉢			8.9	
	100	火鉢				

	101	砥石	長4.5	幅4.9	厚1.1	産地不明仕上砥
	102	砥石	残長5.6	幅3.3	厚1.2	鳴滝産仕上砥
	103	鉄製品 器種不明	残長3.	幅1.0	厚0.3	
	104	銭 大観通寶	径2.3	重g2.7		初鑄年1107年(北宋)
	105	銭 熙寧元寶	径2.3	重g3.2		初鑄年1068年(北宋)篆書

図9 第2面 直上出土遺物

遺構名	No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
2面直上	106	かわらけ	7.7	5.8	1.8	轆轤成形
	107	かわらけ	7.6	5.1	1.7	轆轤成形
	108	かわらけ	7.8	5.0	1.8	轆轤成形 口縁部に煤付着
	109	かわらけ	(7.4)	4.6	2.0	轆轤成形 口縁部に煤付着
	110	かわらけ	(7.4)	(5.3)	1.8	轆轤成形
	111	かわらけ	(8.2)	(5.6)	2.1	轆轤成形 口縁部に煤付着
	112	かわらけ	(7.6)	(4.8)	1.7	轆轤成形
	113	かわらけ	(7.5)	(4.6)	1.7	轆轤成形
	114	かわらけ	(7.9)	(5.2)	1.7	轆轤成形
	115	かわらけ	(7.8)	(5.1)	2.1	轆轤成形
	116	かわらけ	(7.6)	(4.6)	1.6	轆轤成形
	117	かわらけ	(9.1)	(7.6)	1.4	轆轤成形
	118	かわらけ	(8.2)	(5.4)	1.7	轆轤成形
	119	かわらけ	(7.8)	(5.1)	1.6	轆轤成形
	120	かわらけ	7.7	4.6	2.0	轆轤成形 口縁部・内面に煤付着
	121	かわらけ	(7.6)	(4.8)	2.2	轆轤成形
	122	かわらけ	7.4	5.0	1.5	轆轤成形
	123	かわらけ	11.4	7.0	3.1	轆轤成形 口縁部に煤付着
	124	かわらけ	(10.2)	(6.2)	2.8	轆轤成形
	125	かわらけ	(12.4)	(7.4)	3.5	轆轤成形
	126	かわらけ	(12.0)	(8.6)	3.3	轆轤成形
	127	かわらけ	(12.6)	(9.0)	2.7	轆轤成形
	128	かわらけ	(11.4)	(6.8)	3.1	轆轤成形 口縁部に煤付着
	129	かわらけ	(12.4)	(7.2)	3.1	轆轤成形
	130	かわらけ	(14.0)	(8.2)	3.2	轆轤成形
	131	かわらけ	(13.2)	(9.2)	3.1	轆轤成形
	132	かわらけ	(14.6)	(8.3)	3.6	轆轤成形
	133	かわらけ	12.2	7.4	3.0	轆轤成形
	134	かわらけ	(13.4)	(7.8)	3.0	轆轤成形
	135	かわらけ	(14.0)	(7.8)	3.2	轆轤成形
	136	青磁 蓮弁文碗	(14.8)			
	137	青磁 蓮弁文碗				
	138	白磁 四耳壺				
	139	常滑 甕				
	140	常滑 甕				
	141	常滑 甕				
	142	常滑片口鉢(Ⅱ類)	(32.0)			8～9期
	143	常滑片口鉢(Ⅱ類)		(17.4)		
	144	滑石 スタンプ	残長1.8	幅4.2	厚2.0	唐草・花菱
	145	鉄製品 釘	残長4.3	幅0.5	厚0.3	
	146	銭 紹熙元寶	径2.3	重g(1.5)		初鑄年1190年(南宋)背四
	147	銭 皇宗通寶	径2.4	重g2.8		初鑄年1038年(北宋)真書

図10 第2面 構成土出土遺物(1)

遺構名	No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
	148	かわらけ	(7.4)	4.8	1.5	轆轤成形
	149	かわらけ	(7.2)	4.8	2.4	轆轤成形
	150	かわらけ	(8.0)	4.6	1.9	轆轤成形
	151	かわらけ	(7.4)	(4.4)	1.6	轆轤成形
	152	かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.2	轆轤成形
	153	かわらけ	(7.2)	(4.8)	1.4	轆轤成形
	154	かわらけ	7.4	5.2	1.8	轆轤成形
	155	かわらけ	(8.0)	5.6	1.7	轆轤成形
	156	かわらけ	(7.6)	5.2	1.8	轆轤成形

	157	かわらけ	(7.6)	6.2	1.3	轆轤成形
	158	かわらけ	(7.4)	5.4	1.6	轆轤成形
	159	かわらけ	(7.4)	5.0	1.6	轆轤成形
	160	かわらけ	(7.2)	5.4	1.7	轆轤成形
	161	かわらけ	(7.2)	(4.8)	1.7	轆轤成形
	162	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.6	轆轤成形
	163	かわらけ	(7.4)	(5.2)	1.5	轆轤成形
	164	かわらけ	(7.6)	(5.6)	1.3	轆轤成形
	165	かわらけ	(7.2)	(5.4)	1.6	轆轤成形
	166	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.7	轆轤成形
	167	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.7	轆轤成形
	168	かわらけ	(8.0)	(5.4)	2.1	轆轤成形 口縁部に煤付着
	169	かわらけ	7.0	4.0	2.1	轆轤成形
	170	かわらけ	6.7	4.5	2.0	轆轤成形
	171	かわらけ	7.2	4.5	2.3	轆轤成形
	172	かわらけ	7.0	4.2	2.4	轆轤成形 体部に穿孔1箇所
	173	かわらけ	(7.0)	4.0	2.2	轆轤成形
	174	かわらけ	6.3	4.6	1.6	轆轤成形
	175	かわらけ	(7.2)	(4.8)	1.9	轆轤成形
	176	かわらけ	(8.8)	(6.0)	1.2	轆轤成形
	177	かわらけ	(8.0)	(5.4)	1.7	轆轤成形
	178	かわらけ	7.4	5.0	1.7	轆轤成形
	179	かわらけ	7.5	5.6	1.7	轆轤成形
	180	かわらけ	7.0	4.0	1.5	轆轤成形
	181	かわらけ	7.6	5.6	1.7	轆轤成形
	182	かわらけ	7.1	5.1	1.8	轆轤成形
	183	かわらけ	(8.6)	(5.8)	2.0	轆轤成形
	184	かわらけ	7.0	3.3	1.4	轆轤成形
	185	かわらけ	(7.0)	(4.2)	1.7	轆轤成形
	186	かわらけ	7.7	5.8	1.9	轆轤成形 口縁部に煤付着
	187	かわらけ	7.3	4.8	1.6	轆轤成形
	188	かわらけ	7.2	6.0	1.5	轆轤成形
	189	かわらけ	(7.1)	(4.7)	1.5	轆轤成形
	190	かわらけ	(7.7)	(6.1)	1.8	轆轤成形
	191	かわらけ	12.8	8.0	3.2	轆轤成形
	192	かわらけ	(10.8)	(7.0)	3.3	轆轤成形
	193	かわらけ	(13.0)	(7.4)	3.1	轆轤成形
	194	かわらけ	12.4	7.55	3.3	轆轤成形
	195	かわらけ	(12.2)	(7.2)	3.0	轆轤成形
	196	かわらけ	(12.8)	(7.4)	3.3	轆轤成形
	197	かわらけ	(12.8)	(6.2)	3.3	轆轤成形
	198	かわらけ	(11.4)	(7.0)	3.4	轆轤成形
	199	かわらけ	(13.2)	(8.0)	3.6	轆轤成形
	200	かわらけ	12.8	8.0	3.4	轆轤成形
	201	かわらけ	13.2	8.4	3.6	轆轤成形
	202	かわらけ	(11.8)	(7.0)	3.1	轆轤成形
	203	かわらけ	(12.8)	(8.2)	3.4	轆轤成形
	204	かわらけ	(11.8)	(7.6)	3.0	轆轤成形
	205	かわらけ	(11.8)	(7.8)	3.3	轆轤成形
	206	かわらけ	(13.6)	(8.2)	3.4	轆轤成形
	207	かわらけ	12.3	7.1	3.4	轆轤成形
	208	かわらけ	(12.0)	(7.4)	3.1	轆轤成形
	209	かわらけ	11.8	7.2	3.7	轆轤成形
	210	かわらけ	13.2	(8.2)	3.1	轆轤成形 口縁部に煤付着
	211	かわらけ	(11.0)	(7.0)	3.1	轆轤成形

図11 第2面 構成土出土遺物(2)

遺構名	No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
構成土	212	かわらけ	12.5	7.25	3.6	轆轤成形
	213	かわらけ	12.0	7.2	3.2	轆轤成形
	214	かわらけ	12.4	7.3	3.5	轆轤成形 口縁部に煤付着
	215	かわらけ	(12.7)	(7.9)	3.6	轆轤成形 口縁部に煤付着

216	かわらけ	(11.7)	(6.4)	3.4	轆轤成形
217	かわらけ	(12.0)	(6.7)	3.5	轆轤成形 口縁部に煤付着
218	かわらけ	(12.0)	(6.6)	3.2	轆轤成形
219	かわらけ	(11.4)	(7.4)	3.4	轆轤成形
220	かわらけ	(11.8)	(7.4)	3.3	轆轤成形
221	かわらけ	(12.4)	(7.6)	3.0	轆轤成形
222	かわらけ	(11.6)	(6.4)	3.4	轆轤成形
223	かわらけ	(11.2)	(6.6)	3.6	轆轤成形
224	白磁 口元皿	(12.8)	(9.0)	2.4	景德鎮
225	青白磁 梅瓶蓋	(6.8)			
226	瀬戸 片口小瓶				
227	瀬戸 卸皿	(13.4)			緑灰釉 ツケガケ
228	瀬戸 入子	2.1	1.8	0.6	花卉8
229	瓦器質 黒緑皿	(11.8)			
230	渥美 甕				
231	常滑 甕				
232	常滑 甕				
233	常滑 甕		(20.6)		
234	常滑 甕				
235	常滑 甕				
236	常滑 甕				
237	常滑 甕		(12.2)		
238	常滑 甕				
239	常滑片口鉢 (I類)				
240	常滑片口鉢 (I類)				
241	常滑片口鉢 (I類)				
242	常滑片口鉢 (I類)				
243	常滑片口鉢 (I類)				
244	常滑片口鉢 (I類)				
245	常滑片口鉢 (I類)		(10.8)		
246	常滑片口鉢 (I類)		(13.4)		
247	常滑片口鉢 (I類)		(13.3)		
248	常滑片口鉢 (II類)				
249	磨り常滑	長3.2	幅2.4	厚1.0	

図12 第2面 構成土出土遺物 (3)

遺構名	No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
構成土	250	男瓦			厚2.0	
	251	男瓦			厚1.8	
	252	男瓦			厚2.0	
	253	女瓦			厚2.0	
	254	女瓦			厚2.0	
	255	女瓦			厚2.0	
	256	女瓦			厚2.2	
	257	女瓦			厚1.9	永福寺女瓦A類

図13 第2面 構成土出土遺物 (4)

遺構名	No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
構成土	258	女瓦			厚2.1	
	259	女瓦			厚2.2	
	260	女瓦			厚2.2	
	261	女瓦			厚2.1	

図14 第2面 構成土出土遺物 (5)

遺構名	No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
構成土	262	火鉢				土器質 煤付着
	263	火鉢				菊家文スタンプ
	264	火鉢		(24.0)	9.6	瓦質
	265	火鉢				土器質
	266	火鉢	(31.4)	(11.0)	7.6	
	267	火鉢				
	268	火鉢				

269	滑石 スタンプ	残長3.2	残幅3.6	残厚1.2	花菱の集合体
270	砥石	残長3.2	幅3.4	厚0.7	鳴滝仕上砥
271	砥石	残長7.2	幅3.0	厚2.6	鳴滝中砥
272	鉄製品 釘	残長4.0	残幅0.5	残厚0.4	
273	鉄製品 釘	残長4.5	残幅0.6	残厚0.4	
274	鉄製品 釘	残長5.9	残幅0.6	残厚0.3	
275	鉄製品 釘	残長7.0	残幅0.8	残厚0.6	
276	銅製品 器種不明	残長3.2	残幅2.3	残厚0.1	
277	鉄製品 釘	残長3.0	残幅0.3	残厚0.3	
278	鉄製品 釘	残長2.9	残幅0.5	残厚0.4	
279	鉄製品 釘	残長3.1	残幅0.4	残厚0.2	
280	鉄製品 釘	残長3.8	残幅0.5	残厚0.4	
281	銭 開元通寶	径2.4	重g2.5		初鑄年960年(南唐) 隸書
282	銭 至道元寶	径2.5	重g3.8		初鑄年995年(北宋) 行書
283	銭 天禧通寶	径2.5	重g3.0		初鑄年1017年(北宋) 隸書
284	銭 明道元寶	径2.4	重g2.9		初鑄年1032年(北宋) 篆書
285	銭 元祐通寶	径2.4	重g3.3		初鑄年1086年(北宋) 行書
286	銭 元祐通寶	径2.4	重g2.3		初鑄年1086年(北宋) 行書
287	銭 咸淳元寶	径2.4	重g3.4		初鑄年1265年(南宋) 背四か
288	磨り銭	径2.2	重g1.8		

図16 第3面 井戸出土遺物(1)

遺構名	No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
井戸	1	かわらけ	7.6	5.6	1.2	轆轤成形
	2	かわらけ	7.0	5.7	2.0	轆轤成形 口縁部に煤付着
	3	かわらけ	7.5	5.6	1.7	轆轤成形
	4	かわらけ	(7.2)	4.9	1.8	轆轤成形 口縁部に煤付着
	5	かわらけ	(7.0)	(4.2)	1.6	轆轤成形
	6	かわらけ	(7.6)	(5.6)	1.5	轆轤成形
	7	かわらけ	(7.7)	(5.2)	1.8	轆轤成形
	8	かわらけ	7.7	5.4	1.7	轆轤成形
	9	かわらけ	7.3	5.4	1.9	轆轤成形 口縁部に煤付着
	10	かわらけ	6.9	5.2	1.6	轆轤成形
	11	かわらけ	7.4	5.5	1.6	轆轤成形
	12	かわらけ	(8.0)	(4.4)	2.1	轆轤成形
	13	かわらけ	(8.0)	6.2	1.5	轆轤成形
	14	かわらけ	(7.2)	4.7	1.8	轆轤成形
	15	かわらけ	(7.3)	(4.8)	1.9	轆轤成形
	16	かわらけ	7.4	6.9	1.4	轆轤成形
	17	かわらけ	(7.8)	5.2	1.5	轆轤成形
	18	かわらけ	12.5	7.9	3.3	轆轤成形
	19	かわらけ	(10.4)	(7.8)	3.1	轆轤成形
	20	かわらけ	12.3	8.5	3.5	轆轤成形
	21	かわらけ	11.8	7.7	3.5	轆轤成形
	22	かわらけ	13.4	8.3	3.5	轆轤成形
	23	かわらけ	(13.2)	(7.0)	3.4	轆轤成形
	24	かわらけ	(12.2)	(8.0)	3.2	轆轤成形 口縁部・内側に煤付着
	25	かわらけ	10.5	6.2	3.1	轆轤成形
	26	かわらけ	12.5	7.9	3.1	轆轤成形
	27	かわらけ	(13.6)	(8.0)	3.1	轆轤成形
	28	かわらけ	13.3	8.0	3.4	轆轤成形
	29	かわらけ	(13.2)	(7.6)	3.6	轆轤成形
	30	かわらけ	13.4	7.9	3.3	轆轤成形
	31	かわらけ	13.5	7.5	3.5	轆轤成形
	32	かわらけ	(12.7)	(8.0)	3.2	轆轤成形
	33	かわらけ	(11.8)	7.2	3.2	轆轤成形
	34	かわらけ	12.7	7.1	3.2	轆轤成形
	35	かわらけ	11.7	8.0	3.0	轆轤成形
	36	かわらけ	(11.4)	(6.8)	3.1	轆轤成形
	37	かわらけ	(12.8)	(7.8)	3.3	轆轤成形
	38	かわらけ	12.1	7.8	3.5	轆轤成形
	39	かわらけ	13.1	8.3	3.2	轆轤成形

	40	かわらけ	12.6	7.5	3.7	轆轤成形
	41	かわらけ	12.9	7.5	3.2	轆轤成形
	42	かわらけ	12.2	7.5	3.0	轆轤成形 穿孔
	43	かわらけ	11.5	8.4	2.9	轆轤成形
	44	かわらけ	(11.0)	(6.6)	2.8	轆轤成形

図17 第3面 井戸出土遺物(2)

遺構名	No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
井戸	45	白磁 合子の身	(7.0)	内径 (5.6))	
	46	白磁 口兀皿	(8.6)	5.2	2.5	
	47	常滑 甕				縁帯幅3.0 6a型式
	48	常滑 甕				縁帯幅3.3 7型式
	49	常滑 甕				縁帯幅2.4 6a型式
	50	常滑 甕				6a型式
	51	常滑 甕				竹管φ1.0
	52	常滑片口鉢 (I類)				
	53	常滑片口鉢 (I類)				
	54	磨り常滑	長5.1	幅3.5	厚1.1	
	55	磨り常滑	長7.0	幅6.0	厚1.2	
	56	磨り常滑	長10.6	幅8.2	厚1.0	
	57	須恵器				
	58	男瓦			厚1.8	
	59	火鉢				瓦質 内面からの貫通孔有り
	60	火鉢				瓦質
	61	火鉢	30.0	20.0	7.6	瓦質
	62	滑石 鍋				
	63	鉄製品 刃物か	残長4.7	幅1.9	厚0.6	
	64	鉄製品 釘	残長3.8	幅0.5	厚0.5	
65	鉄製品 釘	残長4.4	幅0.5	厚0.4		
66	鉄製品 釘	残長3.5	幅0.5	厚0.1		
67	鉄製品 釘	残長3.0	幅0.6	厚0.5		
68	鉄製品 釘	残長3.2	幅0.5	厚0.6		
69	鉄製品 釘	残長3.7	幅0.5	厚0.2		

図18 第3面 直上出土遺物

遺構名	No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
3面直上	70	土製品 器種不明	24.0	16.0		最大径25.4、内径13.0

図19 第3面 構成土出土遺物(1)

遺構名	No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
構成土	71	かわらけ	(8.4)			手捏ね成形
	72	かわらけ	7.6	5.0	1.7	轆轤成形
	73	かわらけ	7.4	5.4	1.7	轆轤成形
	74	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.7	轆轤成形
	75	かわらけ	(7.2)	(5.6)	1.4	轆轤成形
	76	かわらけ	(8.2)	5.8	1.4	轆轤成形
	77	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.8	轆轤成形
	78	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.4	轆轤成形
	79	かわらけ	(8.4)	(6.2)	1.5	轆轤成形
	80	かわらけ	(7.9)	(5.2)	1.7	轆轤成形 口縁部に煤付着
	81	かわらけ	(7.7)	(6.0)	1.5	轆轤成形
	82	かわらけ	(7.5)	(5.8)	1.8	轆轤成形
	83	かわらけ	(7.6)	(5.2)	2.4	轆轤成形
	84	かわらけ	(7.4)	(5.3)	1.5	轆轤成形
	85	かわらけ	(7.4)	(4.6)	1.9	轆轤成形
	86	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.7	轆轤成形
	87	かわらけ	(7.2)	(5.2)	1.8	轆轤成形
	88	かわらけ		(4.6)		轆轤成形
	89	かわらけ	(11.7)	(7.4)	2.9	轆轤成形
	90	かわらけ	(11.7)	(6.4)	3.6	轆轤成形
	91	かわらけ	(12.0)	7.4	3.1	轆轤成形
	92	かわらけ	(11.6)	(7.2)	3.2	轆轤成形

	93	かわらけ	(12.4)	(8.4)	3.0	轆轤成形
	94	かわらけ	12.4	8.2	3.2	轆轤成形 全体に煤付着
	95	かわらけ	(12.2)	7.4	3.6	轆轤成形
	96	かわらけ	(12.8)	8.0	3.3	轆轤成形
	97	かわらけ	12.4	7.8	3.0	轆轤成形
	98	かわらけ	12.4	7.8	3.1	轆轤成形
	99	かわらけ	11.6	7.8	3.3	轆轤成形 体部に二箇所穿孔有り
	100	青磁 無文鉢	(13.8)			貫入有り
	101	青磁 無文鉢	(13.8)			貫入有り
	102	青磁 蓮弁碗	(13.0)			
	103	青白磁 梅瓶				
	104	白磁 四耳壺耳部		耳幅2.0	厚0.8	
	105	瀬戸 四耳壺	(11.2)	(7.8)		
	106	常滑 甕				7 型式
	107	常滑 甕				6a 型式
	108	常滑 甕				縁帯幅1.8 6a 型式

図20 第3面 構成土出土遺物(2)

遺構名	No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
構成土	109	常滑 甕	39.8			縁帯幅1.8 6a 型式
	110	常滑 甕	19.0			縁帯幅2.4 6a 型式
	111	常滑 甕		(18.0)		
	112	常滑 壺			9.8	
	113	常滑片口鉢 (I類)		(13.4)		
	114	常滑片口鉢 (I類)	(24.4)	(11.8)	7.9	
	115	常滑片口鉢 (II類)	(31.1)			
	116	常滑片口鉢 (II類)	(33.0)	(17.0)	13.2	
	117	常滑片口鉢 (I類)				
	118	常滑片口鉢 (I類)				
	119	常滑片口鉢 (I類)				
	120	常滑片口鉢 (I類)				
	121	常滑片口鉢 (II類)				
	122	常滑片口鉢 (I類)				
	123	常滑片口鉢 (I類)				
	124	磨り常滑	長5.6	幅4.8	厚1.4	常滑の加工品(甕・鉢不明)
	125	磨り常滑	長7.3	幅5.8	厚0.9	常滑片口鉢 I類の加工品

図21 第3面 構成土出土遺物(3)

遺構名	No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
構成土	126	男瓦 玉縁			厚2.4	
	127	男瓦			厚1.5	
	128	男瓦			厚1.6	
	129	男瓦			厚2.0	
	130	男瓦			厚2.2	
	131	男瓦			厚1.3	
	132	男瓦			厚1.9	
	133	男瓦			厚1.8	
	134	男瓦			厚2.0	

図22 第3面 構成土出土遺物(4)

遺構名	No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
	135	女瓦			厚2.3	
	136	女瓦			厚2.0	
	137	女瓦			厚2.0	
	138	女瓦			厚2.3	

図23 第3面 構成土出土遺物(5)

遺構名	No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
	139	女瓦			厚1.7	
	140	女瓦			厚2.2	
	141	女瓦			厚1.8	
	142	女瓦			厚2.0	

	143	女瓦			厚2.2	
--	-----	----	--	--	------	--

図24 第3面 構成土出土遺物(6)

遺構名	No	遺物名	法量(cm)			備考
			口径	底径	器高	
	144	女瓦			厚2.2	
	145	女瓦			厚2.2	隅切瓦
	146	女瓦			厚2.2	隅切瓦
	147	女瓦			厚2.0	隅切瓦
	148	女瓦			厚1.6	隅切瓦

図25 第3面 構成土出土遺物(7)

遺構名	No	遺物名	法量(cm)			備考
			口径	底径	器高	
	149	女瓦			厚2.5	
	150	女瓦			厚1.8	
	151	女瓦			厚2.2	
	152	女瓦			厚2.0	隅切瓦
	153	女瓦			厚2.3	隅切瓦

図26 第3面 構成土出土遺物(8)

遺構名	No	遺物名	法量(cm)			備考
			口径	底径	器高	
	154	女瓦			厚2.0	
	155	女瓦			厚1.5	
	156	女瓦	長40.7	幅32.6	厚2.1~2.	隅切瓦 隅切2箇所
	157	軒丸瓦			厚1.7	
	158	軒丸瓦			厚1.5	
	159	面戸瓦			厚1.8	

図27 第3面 構成土出土遺物(9)

遺構名	No	遺物名	法量(cm)			備考
			口径	底径	器高	
構成土	160	火鉢	(37.0)			瓦質
	161	火鉢	(38.0)	28.0	7.5	土器質
	162	石製品 硯	残長5.2	幅4.0	厚1.0~0.	鳴滝産
	163	砥石	残長6.3	幅3.8	厚(0.7)	鳴滝産仕上砥
	164	鉄製品 釘	残長4.1	幅0.5	厚0.5	
	165	鉄製品 釘	残長4.5	幅0.4	厚0.4	
	166	鉄製品 釘	残長6.1	幅0.5	厚0.4	
	167	鉄製品 器種不明	残長5.5	残幅8.2	残厚0.8	
	168	銭 切符元寶	径2.2	重g1.9		初铸年1008年(北宋)
	169	銭 天聖元寶	径2.4	重g1.5		初铸年1023年(北宋)篆書
	170	銭 皇宗通寶	径2.5	重g(1.9)		初铸年1038年(北宋)真書
171	銭 紹聖元寶	径2.4	重g2.0		初铸年1094年(北宋)行書	

図29 第4面 遺構出土遺物(1)

遺構名	No	遺物名	法量(cm)			備考
			口径	底径	器高	
Pit18	1	かわらけ	7.8	5.9	1.7	轆轤成形
	2	かわらけ	(7.8)	5.4	1.5	轆轤成形
Pit21	3	女瓦			厚2.1	
	4	女瓦			厚1.9	
	5	女瓦			厚2.1	
Pit26	6	かわらけ	(12.9)	(8.0)	3.4	轆轤成形
	7	青磁 蓮弁文碗		4.4		
Pit28	8	鉄製品 釘	残長3.8	幅0.5	厚0.3	
Pit30	9	女瓦			厚2.2	
Pit31	10	女瓦			厚1.7	
Pit32	11	男瓦			厚1.7	
Pit33	12	かわらけ	(11.8)	(8.0)	2.9	轆轤成形
Pit37①	13	かわらけ	(11.6)	(8.6)	2.8	轆轤成形
土壙10	14	銭 咸平元寶	径2.5	重g3.8		初铸年998年(北宋)

図30 第4面 遺構出土遺物(2)・面上出土遺物

遺構名	No	遺物名	法量(cm)			備考
			口径	底径	器高	
溝状2	15	かわらけ	(7.4)	(5.4)	1.7	轆轤成形

	16	かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.7	轆轤成形
	17	かわらけ	(7.7)	(5.6)	1.2	轆轤成形
	18	かわらけ	(7.7)	(5.3)	1.7	轆轤成形
	19	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.4	轆轤成形
	20	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.7	轆轤成形
	21	かわらけ	8.2	6.2	1.6	轆轤成形 口縁部に煤付着
	22	かわらけ	11.4	7.7	2.9	轆轤成形
	23	かわらけ	(11.6)	(7.3)	2.8	轆轤成形
	24	かわらけ	(11.4)	(7.0)	2.5	轆轤成形
	25	高麗青磁 蓋か				模様：牡丹か
	26	常滑 甕				
	27	磨り常滑	長7.6	幅5.7	厚1.1	
	28	鉄製品 釘	残長2.4	幅0.4	厚0.4	
	29	鉄製品 釘	残長5.1	幅0.4	厚0.3	
	30	鉄製品 釘	残長5.8	幅0.6	厚0.6	
	31	鉄製品 釘	残長7.5	幅0.5	厚0.8	
4面上	32	かわらけ		(5.2)		早島
	33	かわらけ	(7.8)	(5.9)	1.4	轆轤成形
	34	かわらけ	(7.6)	(5.0)	1.8	轆轤成形
	35	かわらけ	(8.3)	(6.0)	1.7	轆轤成形
	36	かわらけ	(8.1)	(6.4)	1.9	轆轤成形
	37	かわらけ	(7.7)	(5.6)	1.2	轆轤成形
	38	かわらけ	(7.4)	(5.6)	1.7	轆轤成形
	39	かわらけ	(8.2)	(5.8)	1.7	轆轤成形
	40	かわらけ	(11.6)	(8.0)	3.5	轆轤成形
	41	かわらけ	(12.9)	(8.0)	3.4	轆轤成形
	42	青磁 蓮弁碗	(14.8)			
	43	白磁 口兀皿	9.4	5.6	2.8	
	44	青白磁 合子		5.4		八花卉
	45	須恵器 皿	(7.8)	(4.0)	1.5	
	46	瀬戸 四耳壺	底部	10.0		
	47	常滑 甕				6a 型式
	48	常滑 甕		(17.0)		
	49	常滑 甕				
	50	常滑 甕				
	51	常滑片口鉢 (I 類)				
	52	花瓶				土器質
	53	鶯口壺				土器質
	54	火鉢	(42.2)			瓦質
	55	鉄製品 釘	残長3.5	幅0.3	厚0.3	
	56	鉄製品 火打金	残長7.4	幅3.1	厚0.7	
	57	銭 元豊通寶	径2.3	重g2.7		初铸年1078年(北宋)篆書

図31 第4面 構成土出土遺物

遺構名	No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
構成土	58	白かわらけ		(5.0)		轆轤成形
	59	かわらけ	(7.8)	(5.9)	1.2	轆轤成形
	60	かわらけ	7.6	5.8	1.7	轆轤成形 口縁部に煤付着
	61	かわらけ	7.6	5.3	1.6	轆轤成形
	62	かわらけ	7.6	6.0	1.8	轆轤成形 口縁部に煤付着
	63	かわらけ	8.0	5.5	1.7	轆轤成形
	64	かわらけ	(8.0)	(6.8)	1.7	轆轤成形
	65	かわらけ	(7.7)	(6.6)	1.7	轆轤成形
	66	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.5	轆轤成形
	67	かわらけ	(7.6)	(5.9)	1.9	轆轤成形
	68	かわらけ	(12.1)	(7.1)	3.4	轆轤成形
	69	かわらけ	(12.2)	(7.6)	2.8	轆轤成形
	70	かわらけ	(11.8)	(7.7)	3.0	轆轤成形
	71	かわらけ	(11.8)	(8.0)	2.9	轆轤成形
	72	かわらけ	(11.3)	(6.6)	3.2	轆轤成形
	73	かわらけ	(12.2)	(9.0)	2.8	轆轤成形
	74	かわらけ	(12.5)	(8.4)	3.3	轆轤成形 口縁部に煤付着

75	かわらけ	(11.5)	(7.4)	2.8	轆轤成形
76	かわらけ	(11.8)	(7.2)	3.0	轆轤成形 口縁部に煤付着
77	かわらけ	(13.2)	(8.6)	3.1	轆轤成形
78	かわらけ	(13.1)	(8.2)	3.2	轆轤成形
79	かわらけ	(11.6)	(7.6)	3.0	轆轤成形
80	白磁 口元皿(景	(12.8)	(9.0)	2.1	
81	常滑片口鉢(Ⅱ類)				
82	磨り常滑	長8.0	幅5.7	厚1.0	
83	瓦器質 皿				
84	須恵器 皿		(7.0)		
85	土師器 長頸壺				
86	古代 壺		(7.4)		外底面に木葉痕
87	不明				
88	錢 開元通寶	径2.3	重g(1.0)		初鑄年621年(唐)
89	錢 景祐元寶	径2.4	重g2.5		初鑄年1034年(北宋)篆書
90	錢 皇宗通寶	径2.4	重g(1.7)		初鑄年1038年(北宋)篆書
91	錢 皇宗通寶	径2.4	重g3.2		初鑄年1038年(北宋)篆書
92	錢 熙寧元寶	径2.3	重g3.1		初鑄年1068年(北宋)真書
93	錢 元豐通寶	径2.4	重g2.6		初鑄年1078年(北宋)篆書
94	錢 紹聖元寶	径2.3	重g2.6		初鑄年1094年(北宋)篆書
95	錢 不明	径2.3	重g1.5		

図32 第5面 かわらけ溜まり出土遺物(1)

遺構名	No	遺物名	法量(cm)			備考
			口径	底径	器高	
かわらけ溜ま	1	かわらけ	5.5	4.2	0.8	轆轤成形
	2	かわらけ	(5.4)	(4.2)	0.9	轆轤成形
	3	かわらけ	(8.8)	(7.2)	1.6	手握ね成形 口縁部に煤付着
	4	かわらけ	7.8	6.0	1.6	轆轤成形
	5	かわらけ	7.6	6.0	1.5	轆轤成形
	6	かわらけ	7.7	6.5	1.5	轆轤成形
	7	かわらけ	8.1	6.1	1.7	轆轤成形
	8	かわらけ	7.9	5.7	1.6	轆轤成形
	9	かわらけ	7.9	6.4	1.8	轆轤成形
	10	かわらけ	7.5	5.6	1.5	轆轤成形
	11	かわらけ	8.1	6.2	1.5	轆轤成形
	12	かわらけ	8.0	5.9	1.7	轆轤成形
	13	かわらけ	7.6	5.8	1.4	轆轤成形
	14	かわらけ	7.9	5.6	1.7	轆轤成形 口縁部・体部に煤付着
	15	かわらけ	(7.8)	(5.2)	1.5	轆轤成形
	16	かわらけ	7.8	5.9	1.4	轆轤成形
	17	かわらけ	7.8	6.1	1.3	轆轤成形
	18	かわらけ	8.2	6.6	1.6	轆轤成形
	19	かわらけ	8.1	6.0	1.6	轆轤成形
	20	かわらけ	(8.0)	(5.7)	1.7	轆轤成形
	21	かわらけ	8.1	6.6	1.6	轆轤成形
	22	かわらけ	8.0	6.4	1.5	轆轤成形
	23	かわらけ	8.0	5.8	1.7	轆轤成形 口縁部に煤付着
	24	かわらけ	7.6	6.0	1.5	轆轤成形
	25	かわらけ	8.0	6.0	1.8	轆轤成形
	26	かわらけ	8.5	5.7	1.7	轆轤成形
	27	かわらけ	7.9	5.8	1.8	轆轤成形
	28	かわらけ	7.8	5.9	1.5	轆轤成形
	29	かわらけ	(8.0)	(6.4)	1.4	轆轤成形
	30	かわらけ	(8.8)	(6.2)	1.8	轆轤成形
	31	かわらけ	7.8	5.5	1.6	轆轤成形
	32	かわらけ	7.8	6.2	1.6	轆轤成形
	33	かわらけ	7.6	5.4	1.3	轆轤成形
	34	かわらけ	8.0	5.7	1.5	轆轤成形
	35	かわらけ	7.5	5.0	1.8	轆轤成形
	36	かわらけ	7.9	5.6	1.7	轆轤成形
	37	かわらけ	8.6	6.7	1.6	轆轤成形
	38	かわらけ	7.7	5.9	1.5	轆轤成形

39	かわらけ	8.0	5.7	1.4	轆轤成形
40	かわらけ	7.5	6.1	1.4	轆轤成形
41	かわらけ	7.4	5.9	1.5	轆轤成形
42	かわらけ	7.6	5.3	1.4	轆轤成形
43	かわらけ	8.1	5.4	1.8	轆轤成形
44	かわらけ	7.8	6.4	1.6	轆轤成形
45	かわらけ	7.8	6.9	1.2	轆轤成形
46	かわらけ	7.9	5.5	1.7	轆轤成形
47	かわらけ	7.7	6.1	1.3	轆轤成形
48	かわらけ	7.5	5.9	1.7	轆轤成形
49	かわらけ	7.5	6.6	1.2	轆轤成形
50	かわらけ	8.2	7.0	1.6	轆轤成形
51	かわらけ	7.7	6.1	1.6	轆轤成形
52	かわらけ	7.9	5.1	1.7	轆轤成形
53	かわらけ	7.7	5.4	1.6	轆轤成形
54	かわらけ	8.3	6.0	1.6	轆轤成形
55	かわらけ	7.6	6.1	1.5	轆轤成形
56	かわらけ	8.2	6.1	1.8	轆轤成形
57	かわらけ	7.7	6.0	1.7	轆轤成形
58	かわらけ	(8.4)	(6.6)	1.6	轆轤成形
59	かわらけ	8.1	6.5	1.3	轆轤成形
60	かわらけ	8.1	7.0	1.4	轆轤成形
61	かわらけ	(7.8)	(6.4)	1.3	轆轤成形
62	かわらけ	(7.8)	(6.4)	1.3	轆轤成形
63	かわらけ	12.6	8.6	3.2	轆轤成形
64	かわらけ	12.3	8.6	3.3	轆轤成形
65	かわらけ	12.3	8.3	3.0	轆轤成形
66	かわらけ	(12.0)	8.0	3.0	轆轤成形
67	かわらけ	(12.4)	(8.4)	2.9	轆轤成形
68	かわらけ	12.0	8.4	3.1	轆轤成形
69	かわらけ	11.8	8.0	3.2	轆轤成形
70	かわらけ	12.3	8.8	3.2	轆轤成形

図35 第5面 かわらけ溜まり出土遺物(2)

遺構名	No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
かわらけ溜ま	71	かわらけ	(12.4)	(8.0)	3.4	轆轤成形
	72	かわらけ	(12.0)	8.2	3.3	轆轤成形
	73	かわらけ	(12.0)	7.2	3.1	轆轤成形
	74	かわらけ	(12.0)	(8.8)	3.1	轆轤成形
	75	かわらけ	12.1	7.8	3.2	轆轤成形
	76	かわらけ	(12.6)	(9.0)	3.0	轆轤成形
	77	かわらけ	12.7	9.3	3.3	轆轤成形
	78	かわらけ	(12.2)	(8.0)	3.0	轆轤成形
	79	かわらけ	(12.4)	(7.2)	3.0	轆轤成形
	80	かわらけ	(10.6)	(6.4)	3.0	轆轤成形
	81	かわらけ	12.2	7.7	3.2	轆轤成形
	82	かわらけ	12.1	7.8	3.4	轆轤成形
	83	かわらけ	12.3	8.1	3.2	轆轤成形
	84	かわらけ	(11.6)	(6.8)	3.2	轆轤成形
	85	かわらけ	12.0	7.8	3.2	轆轤成形
	86	かわらけ	(12.4)	(8.0)	3.1	轆轤成形
	87	かわらけ	(12.4)	(8.2)	3.0	轆轤成形
	88	かわらけ	12.3	8.7	3.3	轆轤成形
	89	かわらけ	(12.2)	(6.6)	3.1	轆轤成形
	90	かわらけ	(12.0)	(7.4)	3.1	轆轤成形
	91	かわらけ	(12.0)	(7.0)	3.2	轆轤成形
	92	かわらけ	(12.4)	(7.5)	3.0	轆轤成形
	93	かわらけ	(12.2)	(8.8)	3.0	轆轤成形
	94	かわらけ	(12.2)	(8.2)	2.8	轆轤成形
	95	かわらけ	(12.4)	(8.4)	2.9	轆轤成形
	96	かわらけ	(12.2)	(8.2)	2.8	轆轤成形
	97	かわらけ	12.2	7.2	3.1	轆轤成形

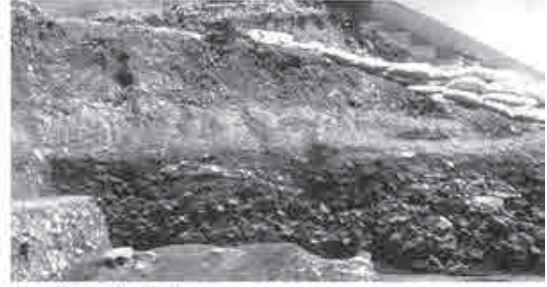
	98	かわらけ	12.0	8.5	3.4	轆轤成形
	99	かわらけ	(10.9)	(4.3)	3.3	轆轤成形
	100	かわらけ	12.4	8.0	3.0	轆轤成形
	101	かわらけ	12.4	8.3	3.4	轆轤成形
	102	かわらけ	12.4	7.8	3.1	轆轤成形
	103	かわらけ	13.1	8.5	3.0	轆轤成形
	104	かわらけ	(12.0)	(7.5)	3.3	轆轤成形
	105	かわらけ	(12.0)	(6.4)	3.1	轆轤成形 口縁部に煤付着
	106	白かわらけ	(11.8)			手捏ね成形
	107	瓦器質 皿	9.8	6.0	2.5	暗文 菊花
	108	男瓦			厚1.8	玉縁
	109	鉄製品 器種不明	(4.0)			内側中心に突起

図36 第5面 遺構・面上・構成土出土遺物

遺構名	No	遺物名	法量 (cm)			備考
			口径	底径	器高	
5面上	110	かわらけ	(4.8)	(3.0)	0.8	轆轤成形
	111	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.8	轆轤成形
	112	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.6	轆轤成形
	113	かわらけ	7.8	6.0	1.6	轆轤成形
	114	かわらけ	(7.6)	(5.6)	1.8	轆轤成形
	115	かわらけ	7.6	5.4	1.7	轆轤成形 口縁部に煤付着
	116	かわらけ	(7.6)	(5.6)	1.6	轆轤成形
	117	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.4	轆轤成形
	118	かわらけ	(12.4)	8.4	3.2	轆轤成形
	119	かわらけ	12.2	8.6	3.1	轆轤成形 口縁部に煤付着
	120	かわらけ	11.8	8.2	3.3	轆轤成形
	121	かわらけ	12.0	8.0	3.2	轆轤成形
	122	砥石	長 (6.1)	幅4.9	厚4.1	天草産中砥
Pit36	124	銭 聖宋元寶	径2.4	重g3.3		初铸年1101年(北宋)行書
	125	白磁 口元皿	(9.2)	6.0	2.4	
Pit47	126	常滑片口鉢 (I類)				
Pit70	127	かわらけ	(6.4)	(4.6)	1.5	轆轤成形
土壙13	128	かわらけ	(6.7)	(4.0)	1.9	轆轤成形
構成土	129	かわらけ	(8.2)	(5.6)	1.9	轆轤成形
	130	かわらけ	(8.4)	(5.8)	1.8	轆轤成形
	131	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.4	轆轤成形
	132	かわらけ	7.6	5.9	1.5	轆轤成形
	133	かわらけ	(7.8)	(6.0)	3.0	轆轤成形
	134	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.7	轆轤成形
	135	かわらけ	7.6	6.0	1.6	轆轤成形
	136	かわらけ	8.4	6.2	1.8	轆轤成形
	137	かわらけ	7.8	5.7	1.3	轆轤成形
	138	かわらけ	12.0	7.5	3.1	轆轤成形
	139	かわらけ	12.4	8.2	3.1	轆轤成形
	140	かわらけ	(12.8)	(8.2)	3.4	轆轤成形
	141	かわらけ	(12.6)	8.0	3.6	轆轤成形
	142	常滑 甕				6a型式



1. 調査地北壁



2. 調査地東壁



3. 1面全景(西から)



5. 常滑甕



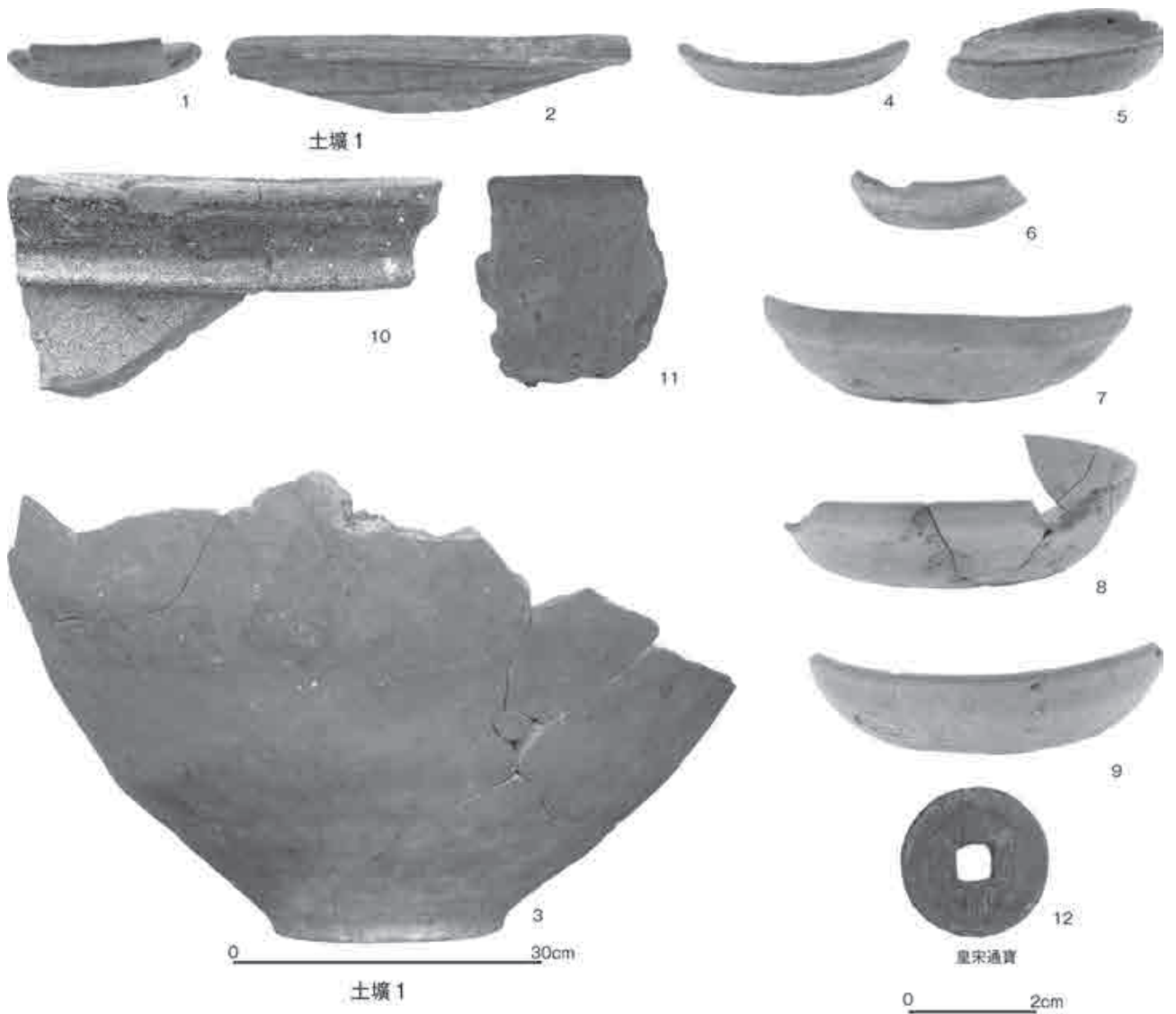
4. 1面全景(東から)



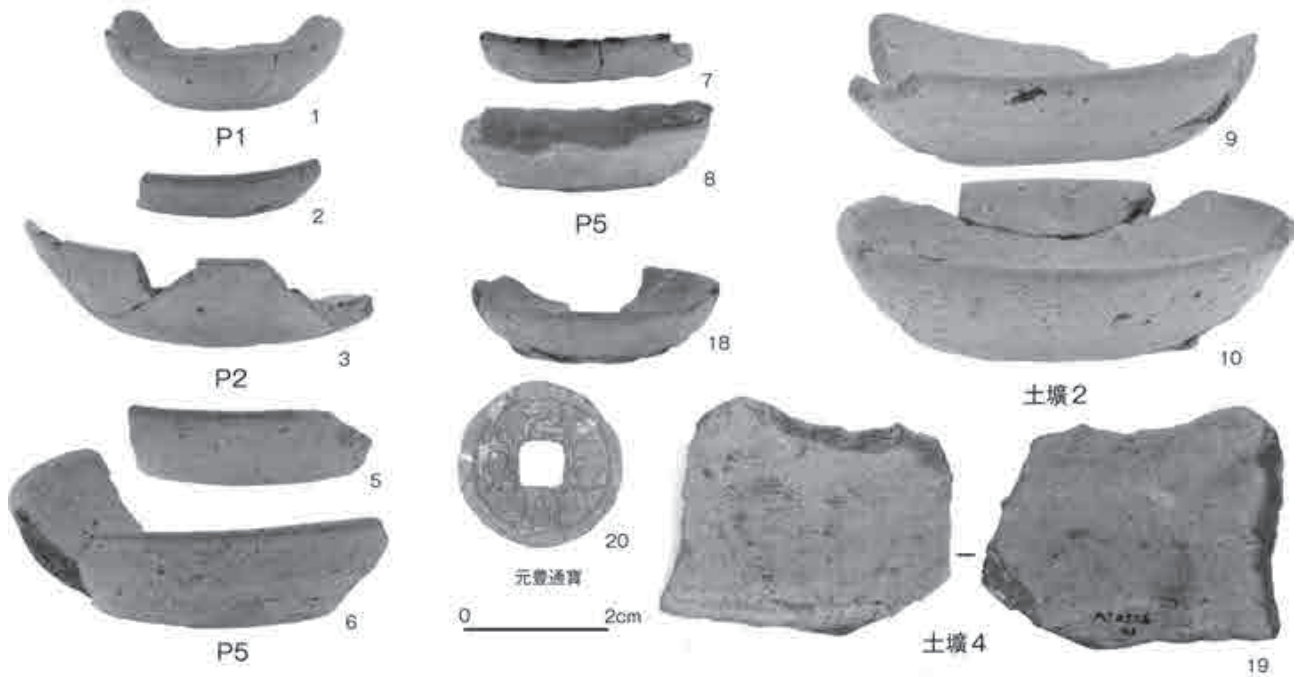
6. 2面全景(西から)



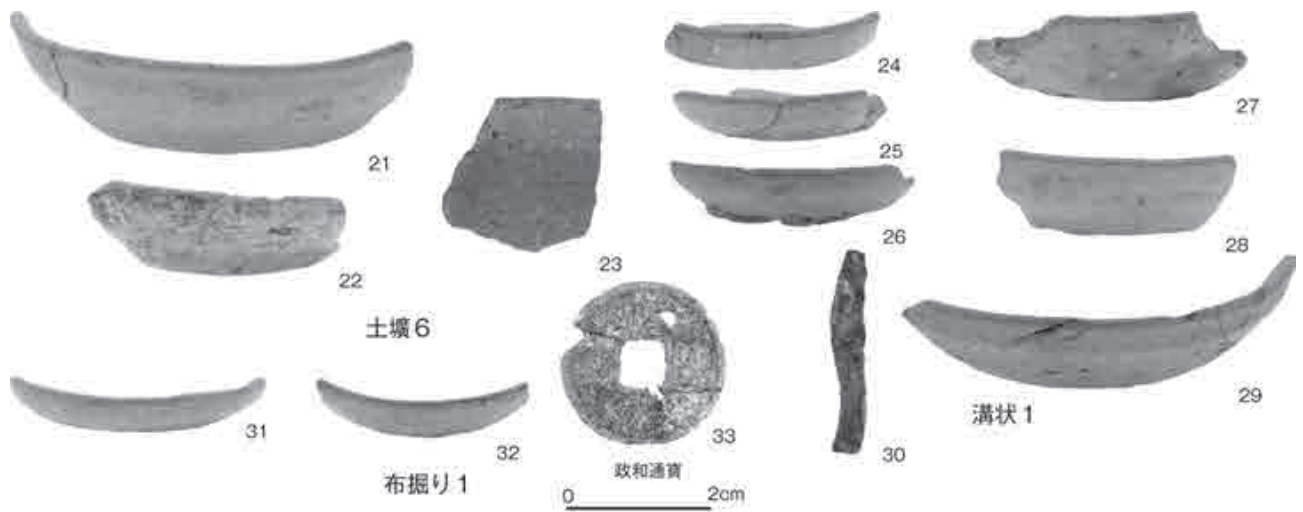
7. 2面全景(東から)



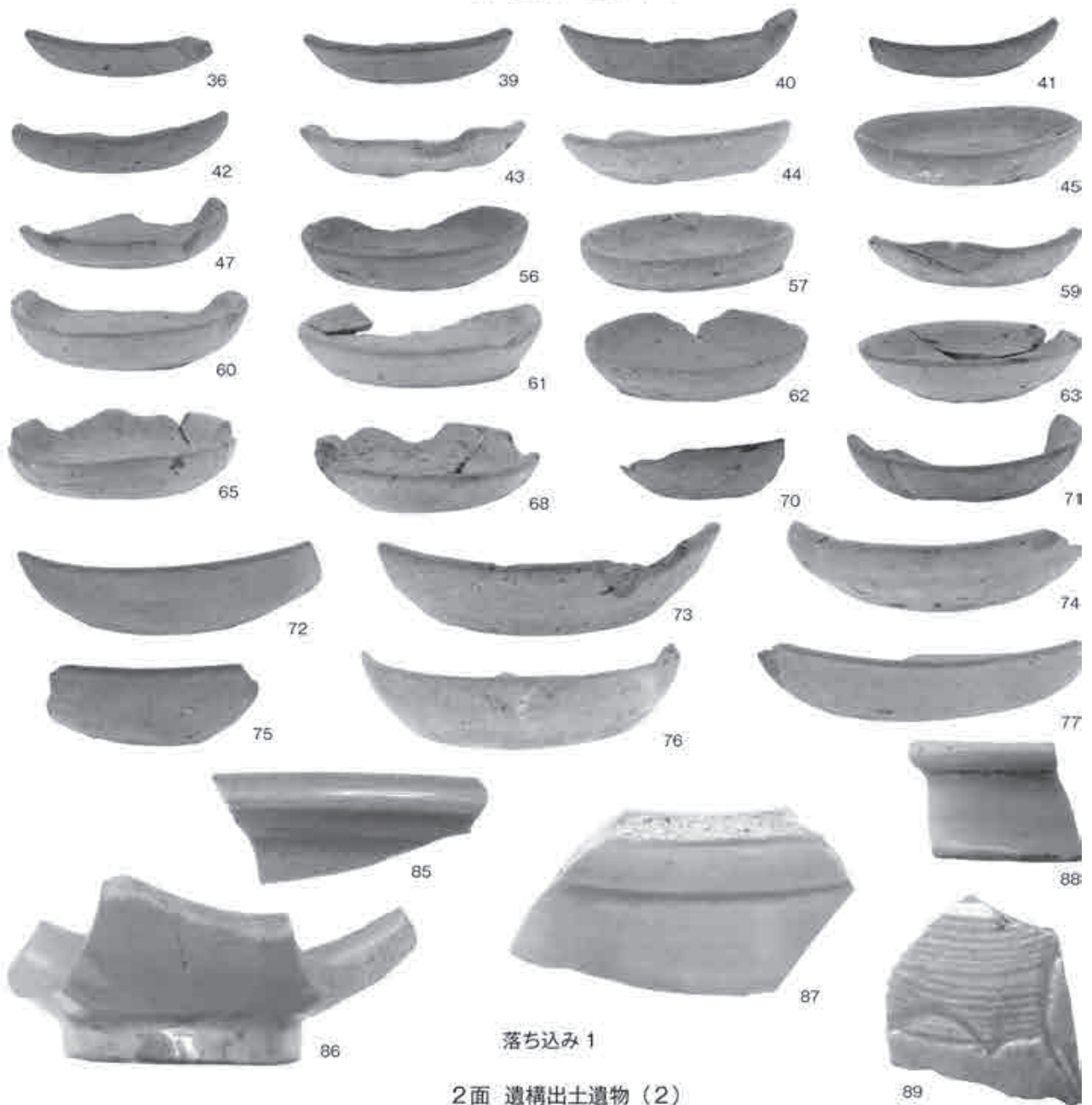
1面 遺構・構成土出土遺物



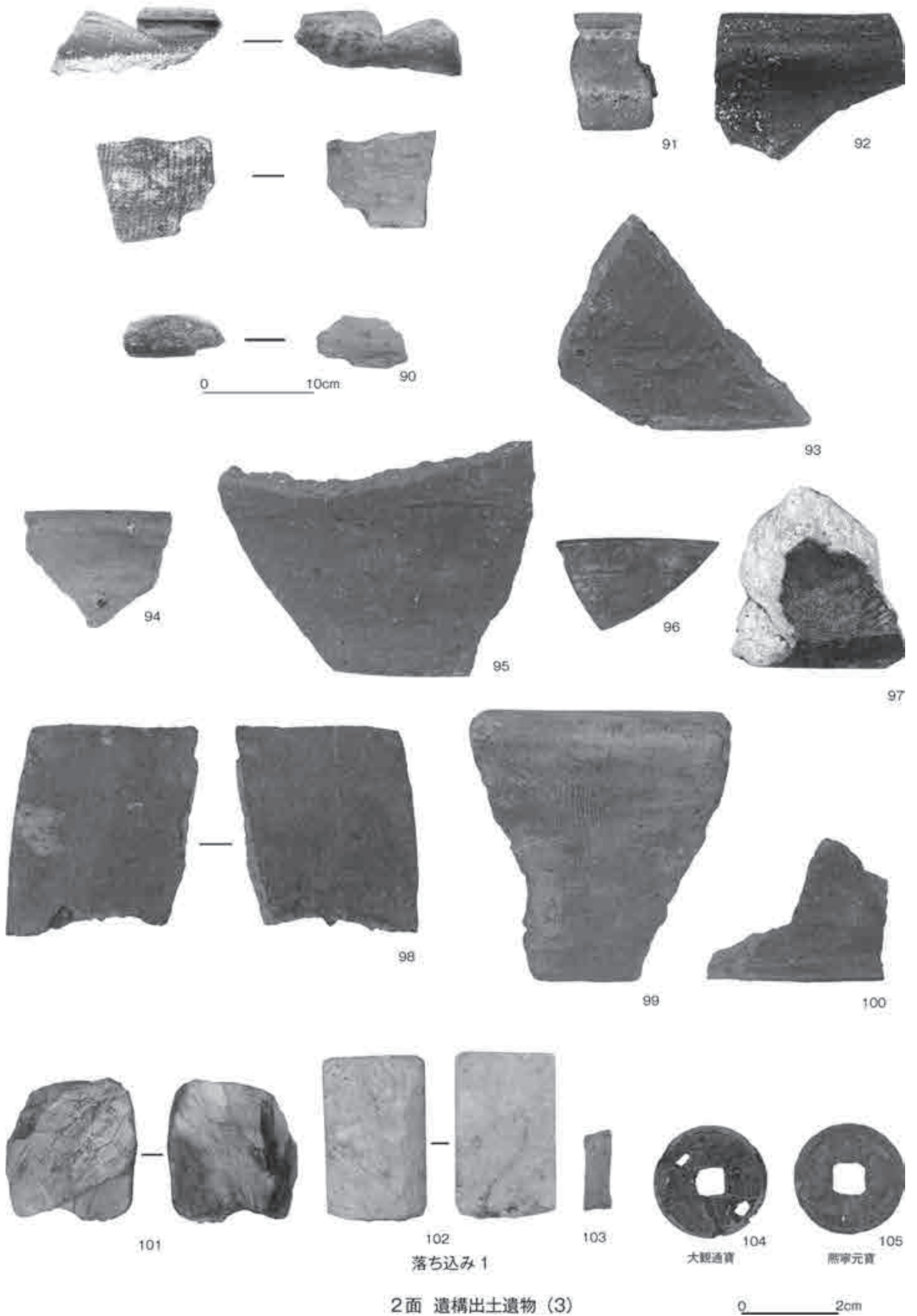
2面 遺構出土遺物 (1)



2面 遺構出土遺物 (1)

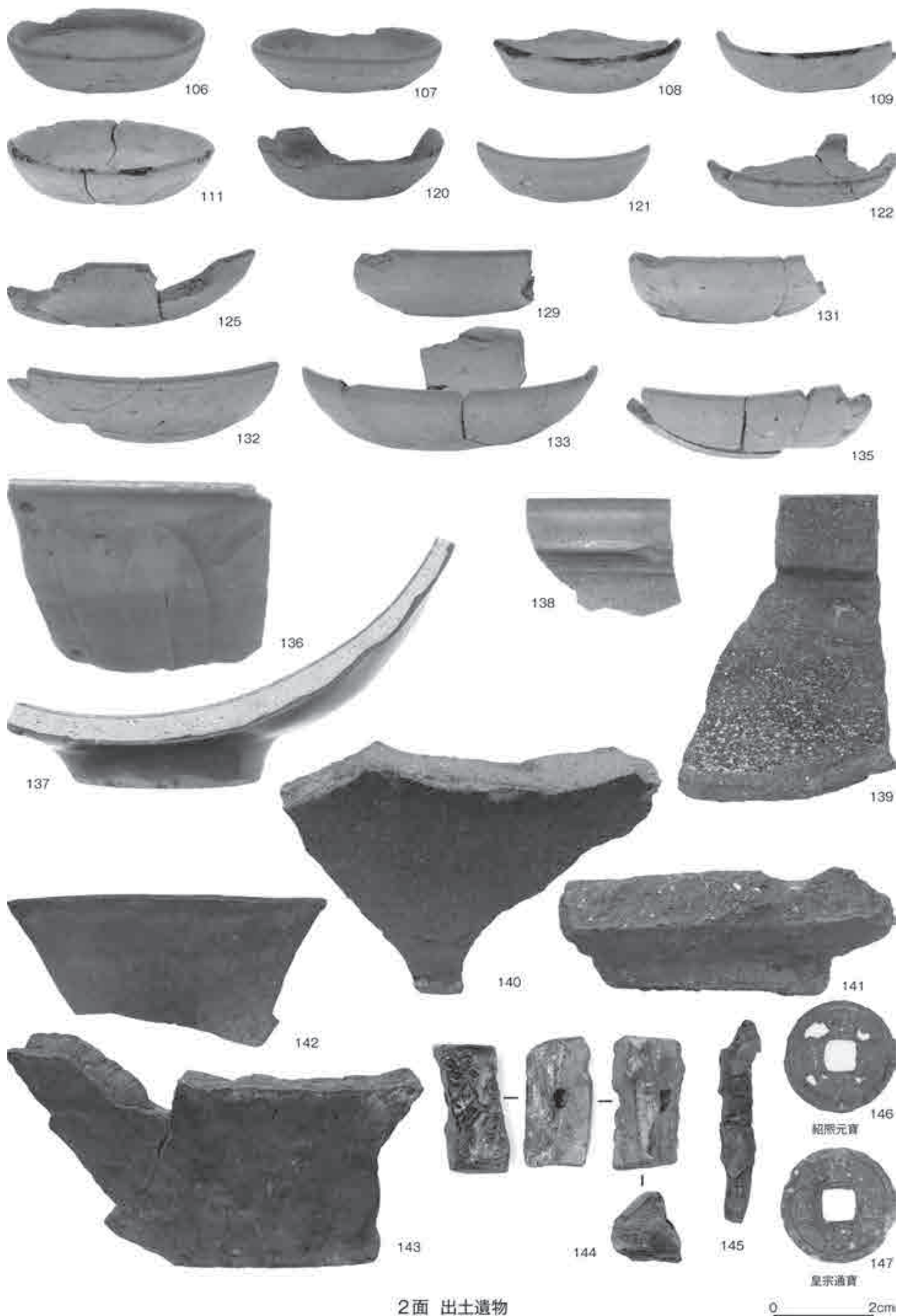


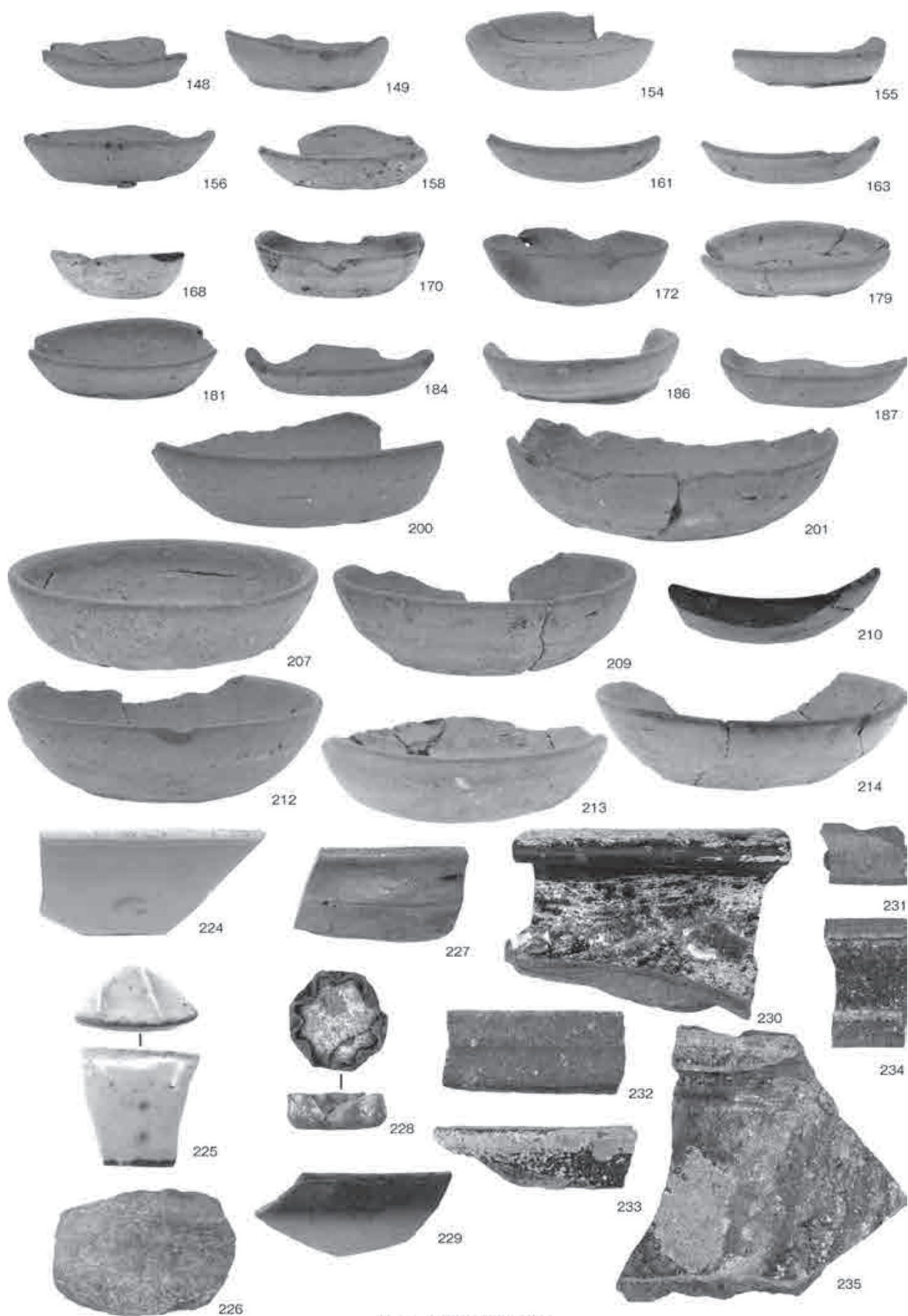
2面 遺構出土遺物 (2)



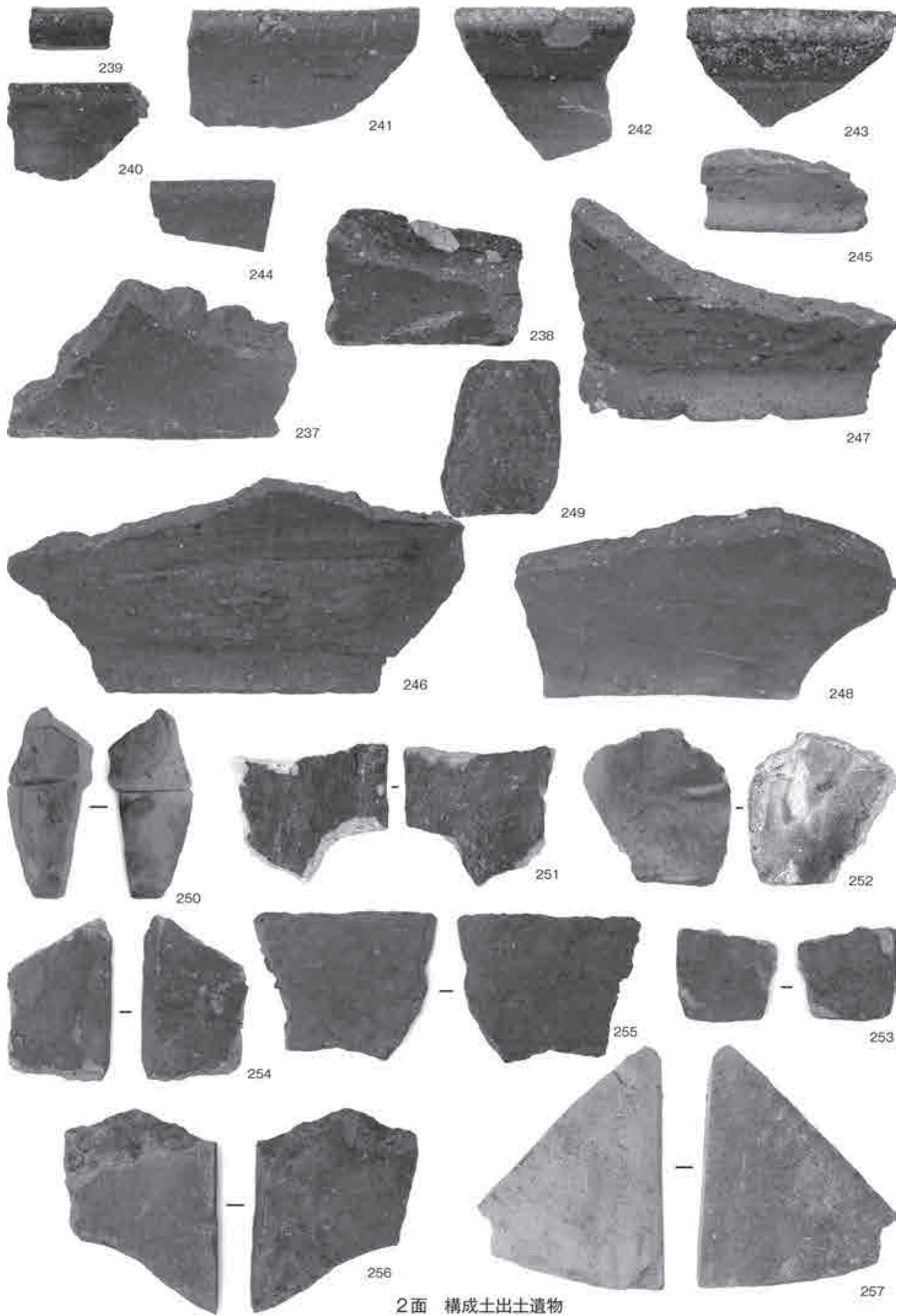
2面 遺構出土遺物 (3)

图版5



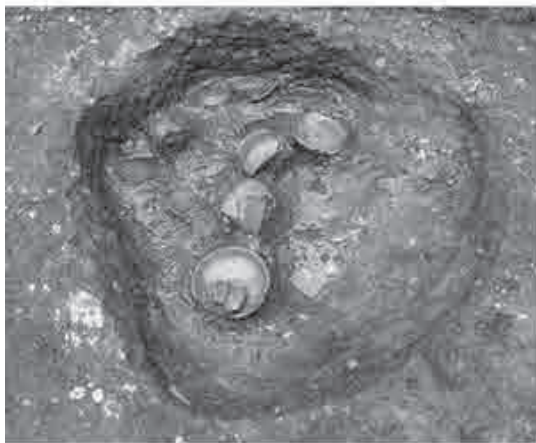


2面 構成土出土遺物



2面 構成土出土遺物





1. 2面土坑4



2. 調査区西壁



5. 2面出土女瓦



6. 2面出土土製品



3. 3面全景(西から)



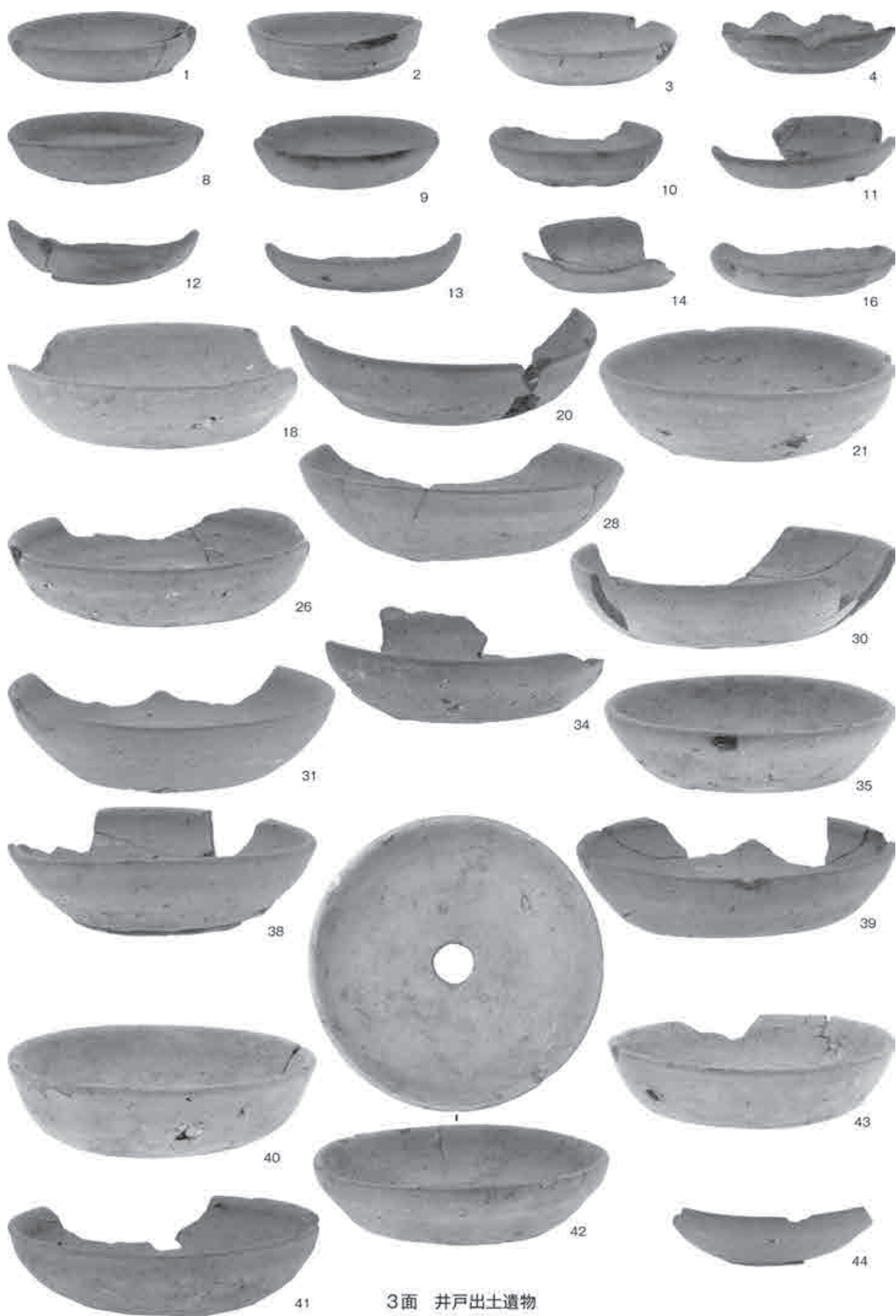
4. 3面全景(東から)



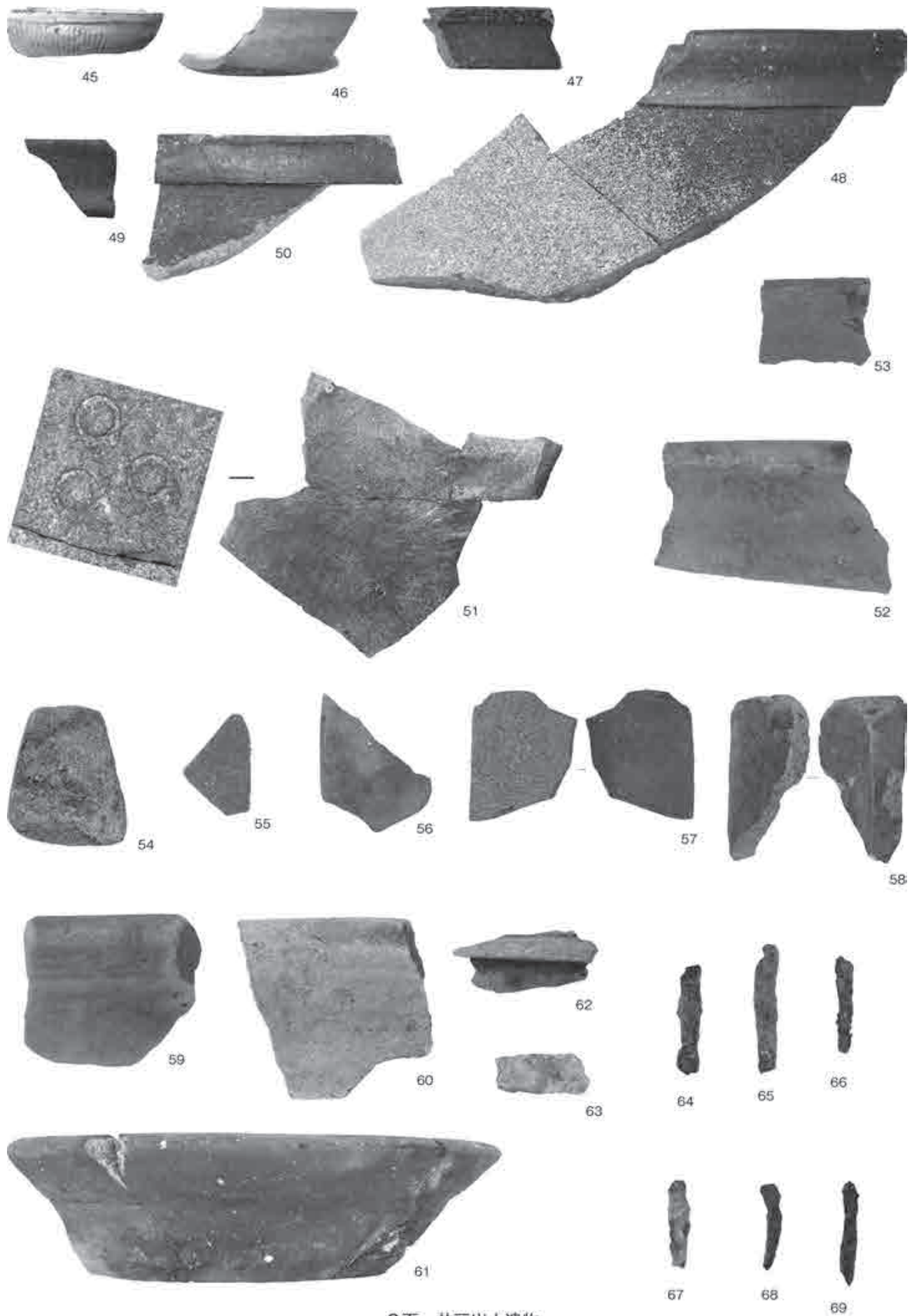
7. 3面井戸



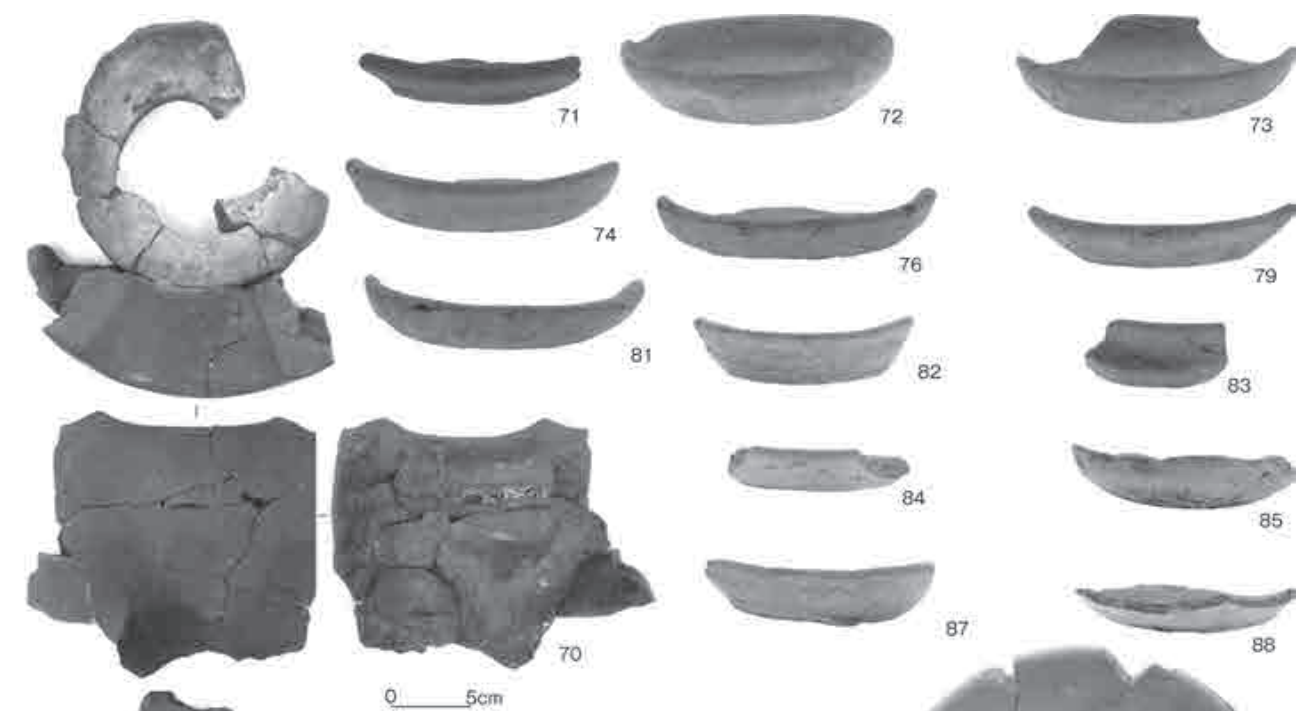
8. 3面井戸



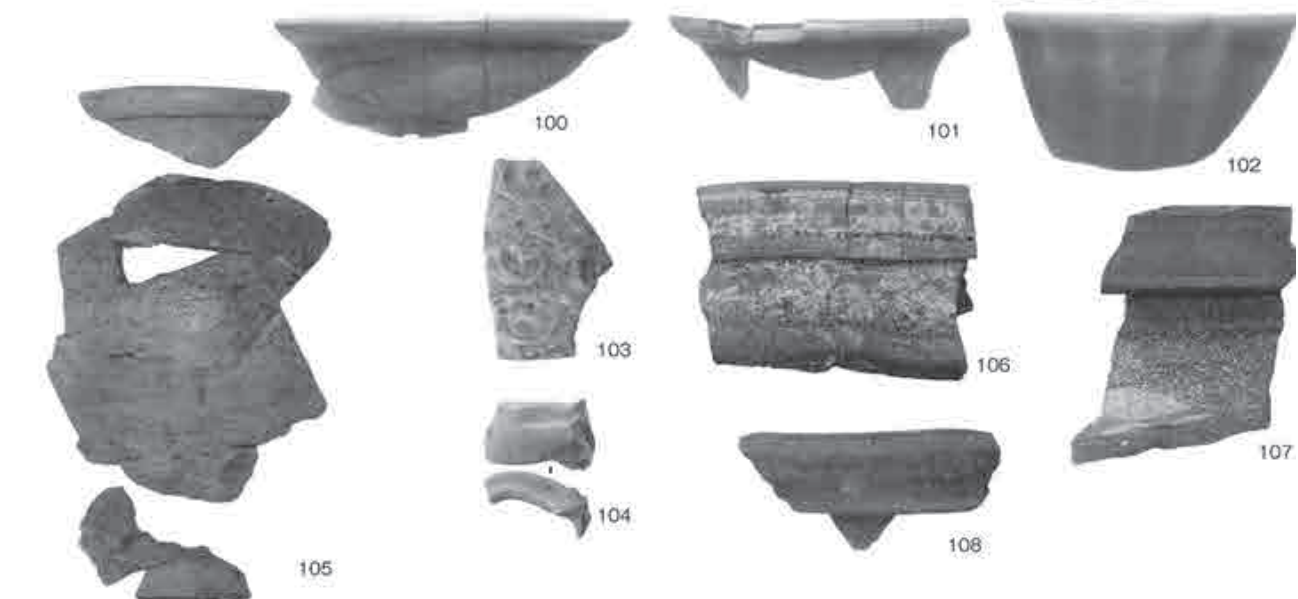
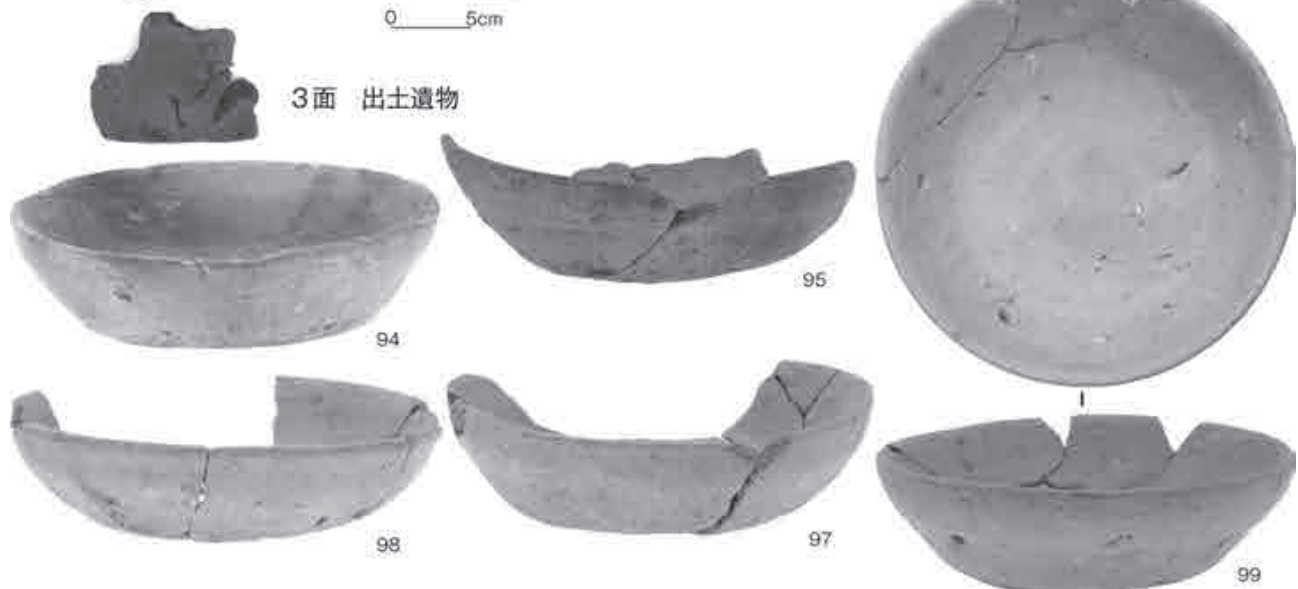
3面 井戸出土遺物



3面 井戸出土遺物



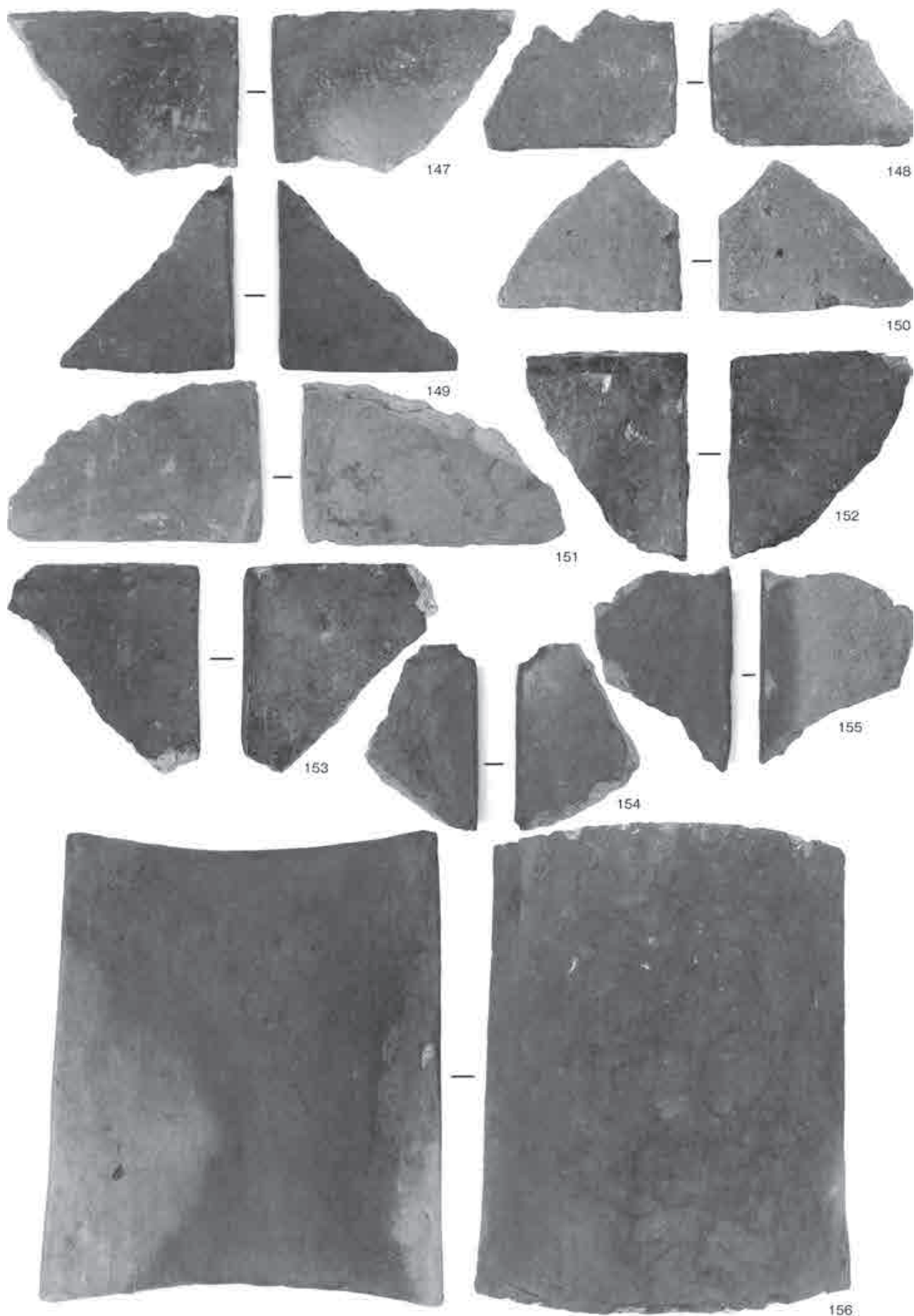
3面 出土遺物



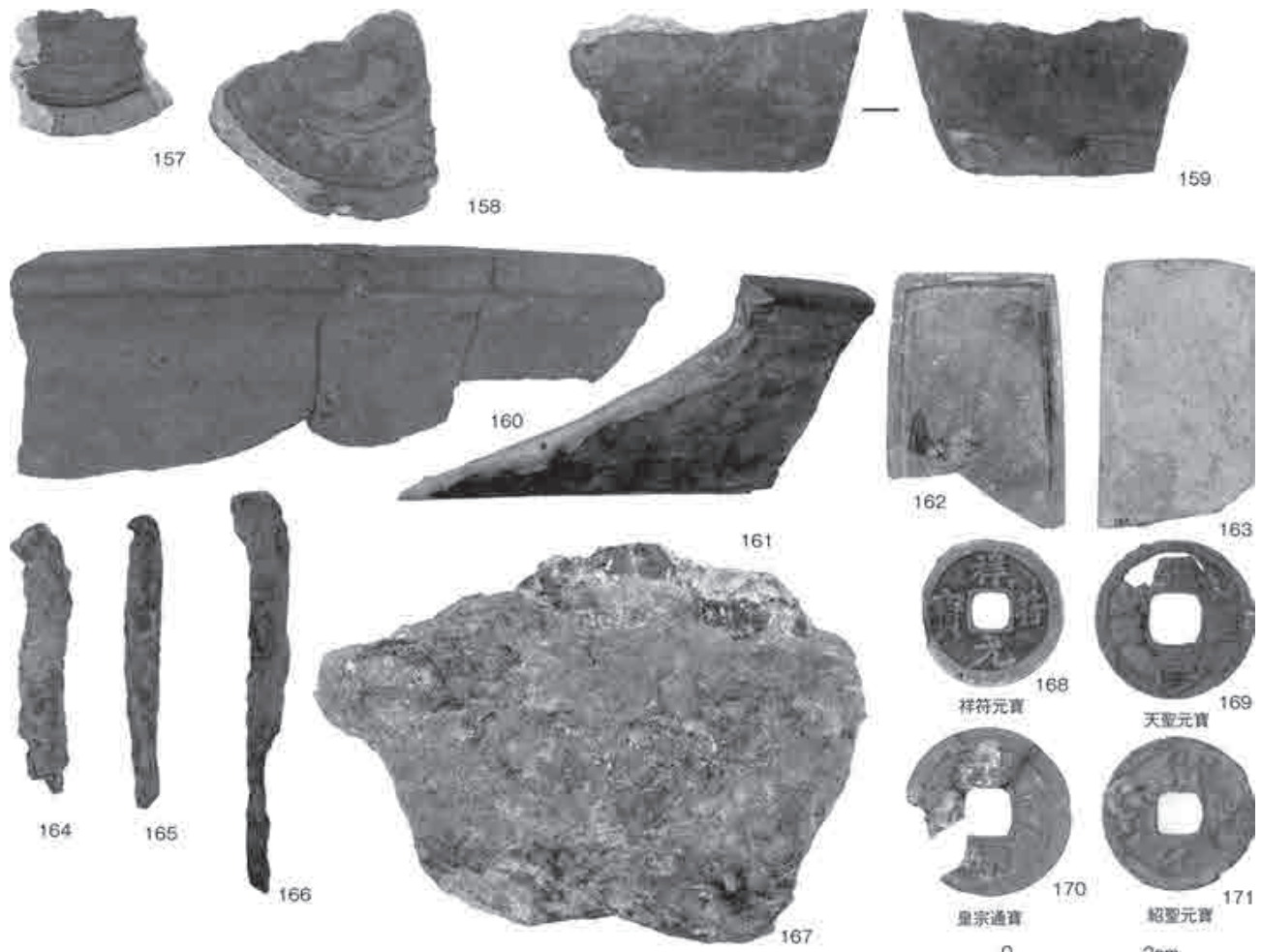
3面 構成土出土遺物



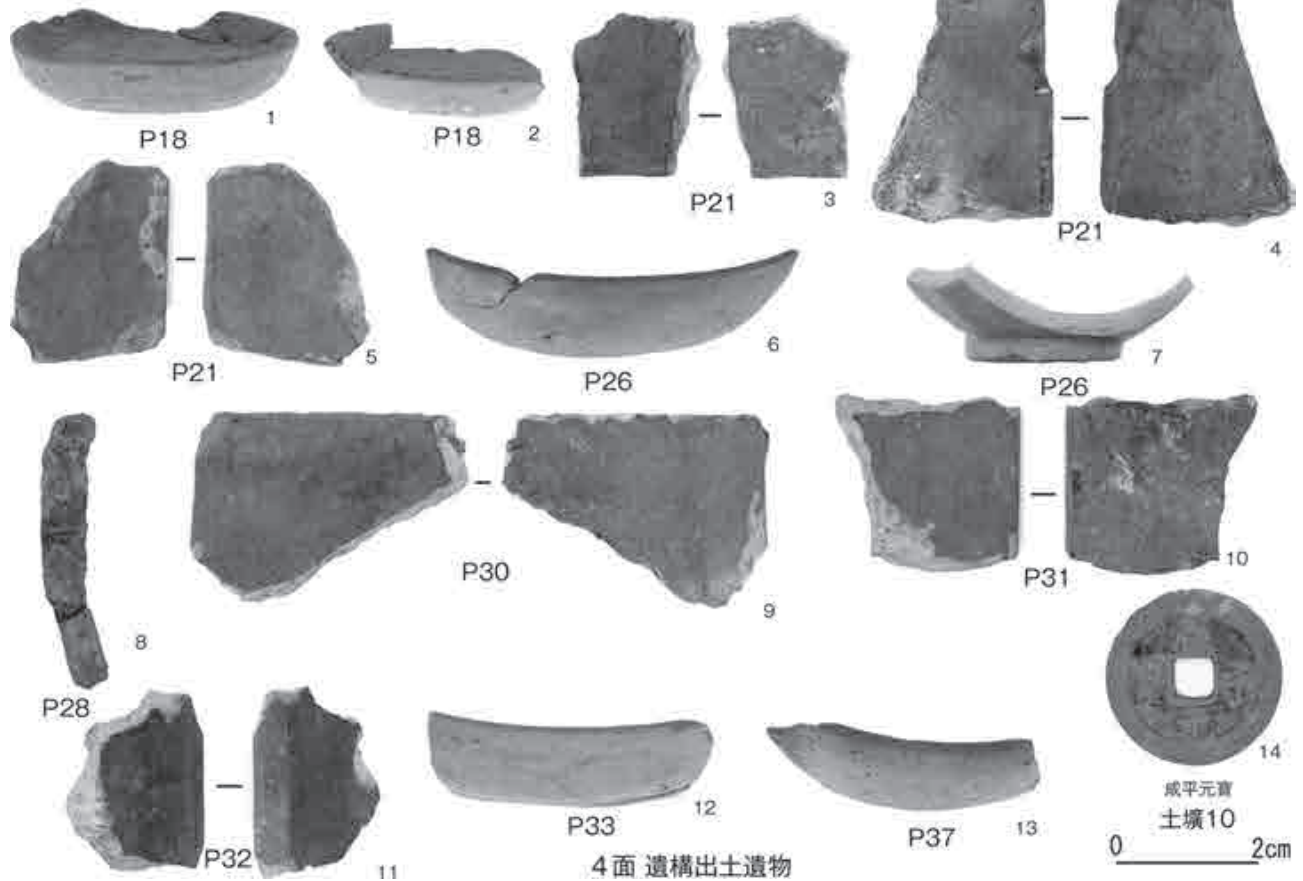
3面 構成土出土遺物



3面 構成土出土遺物



3面 構成土出土遺物



4面 遺構出土遺物

1. 4面全景(西から)



2. 4面全景(東から)



3. 5面全景(西から)



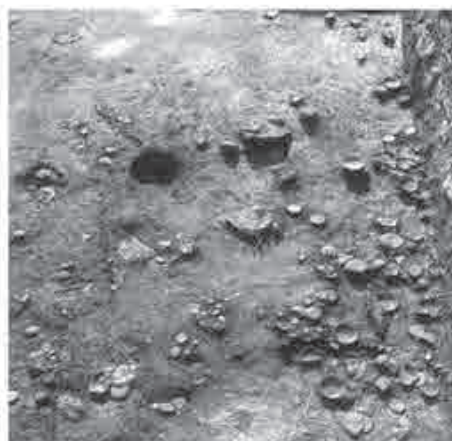
4. 5面全景(東から)



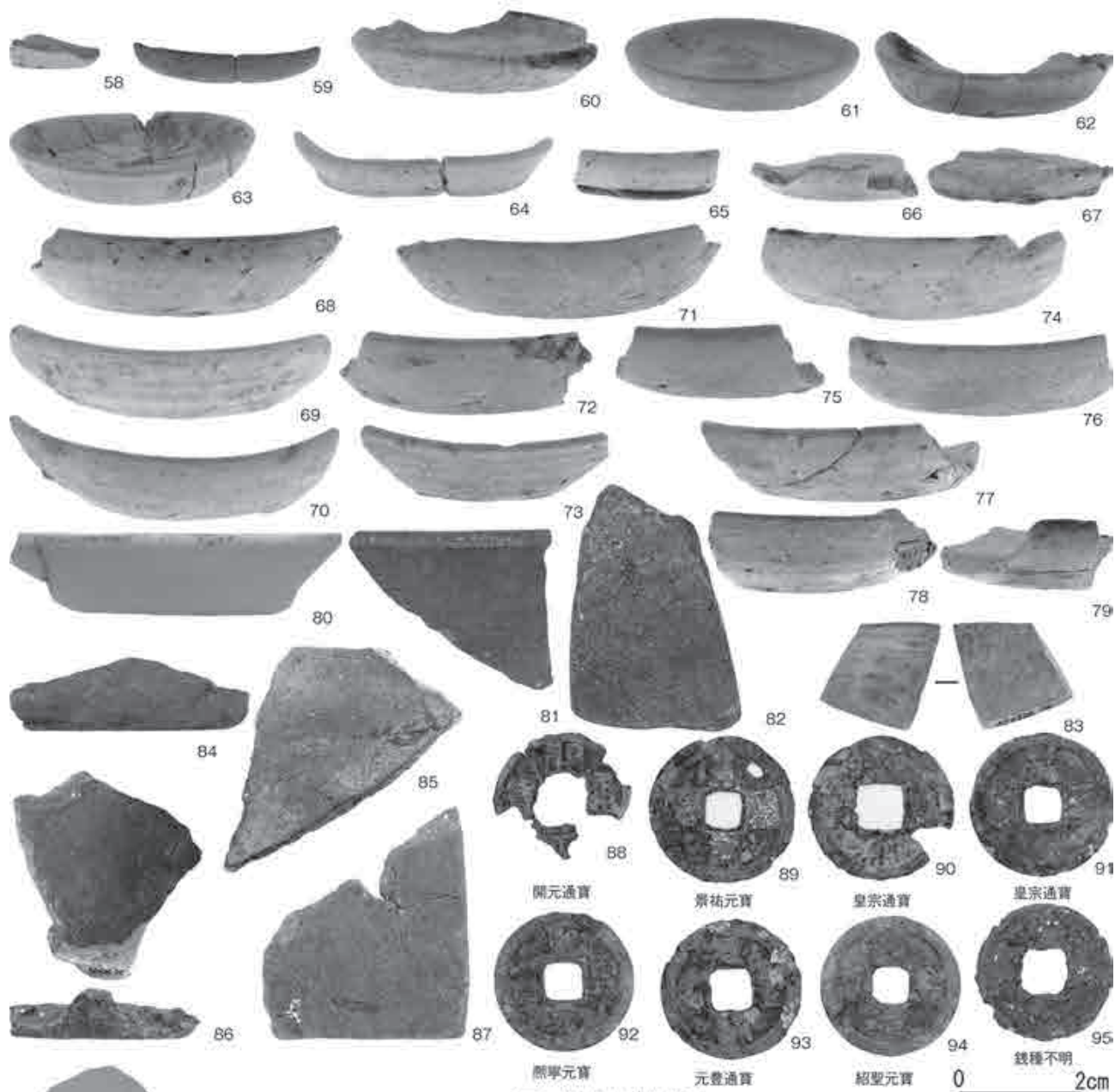
5. 5面かわらけ溜まり



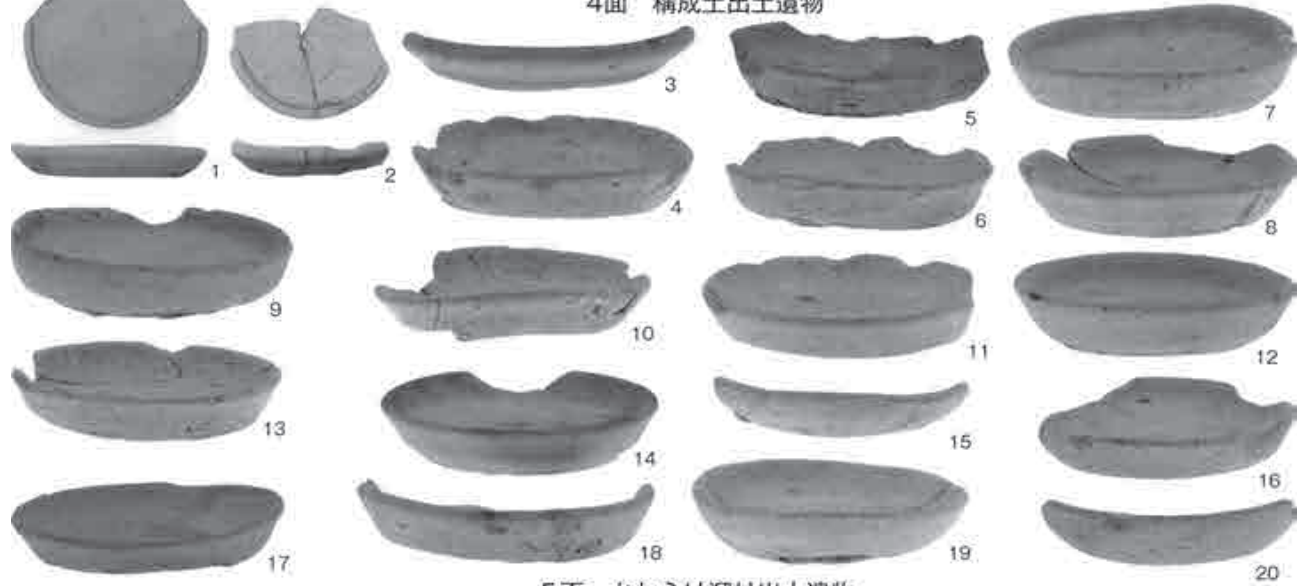
6. 5面かわらけ溜まり



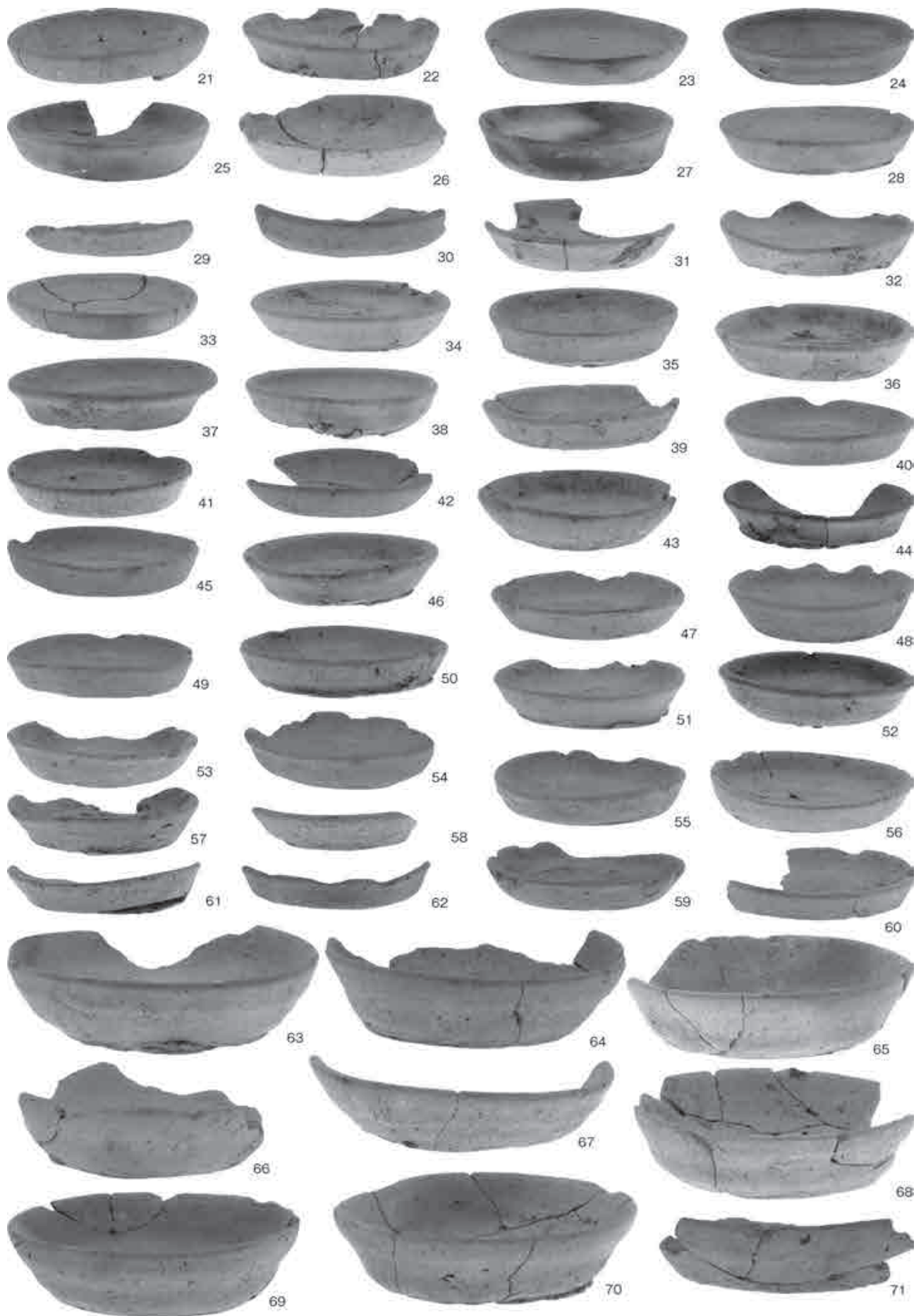




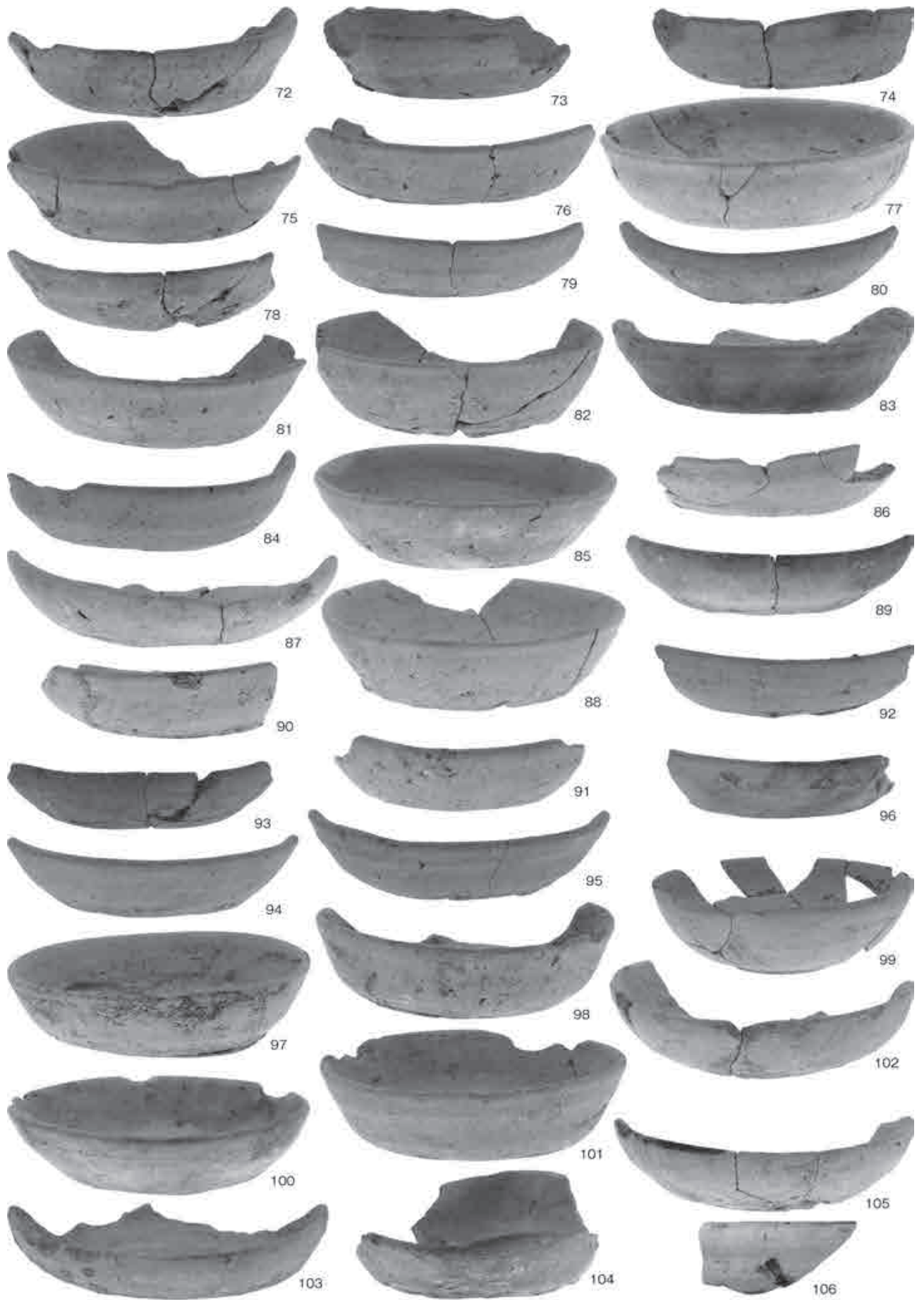
4面 構成土出土遺物



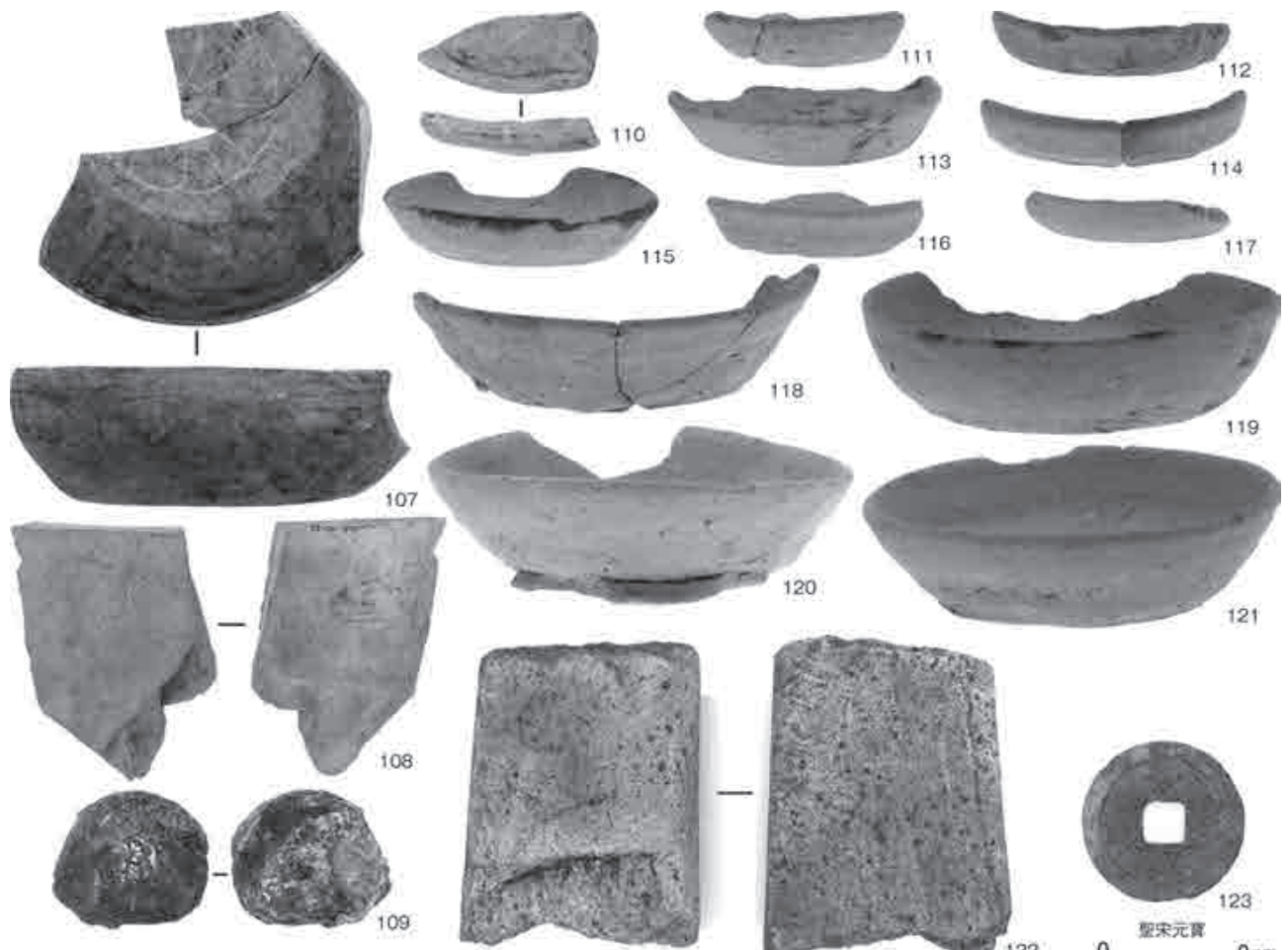
5面 かわらけ溜り出土遺物



5面 かわらけ溜り出土遺物

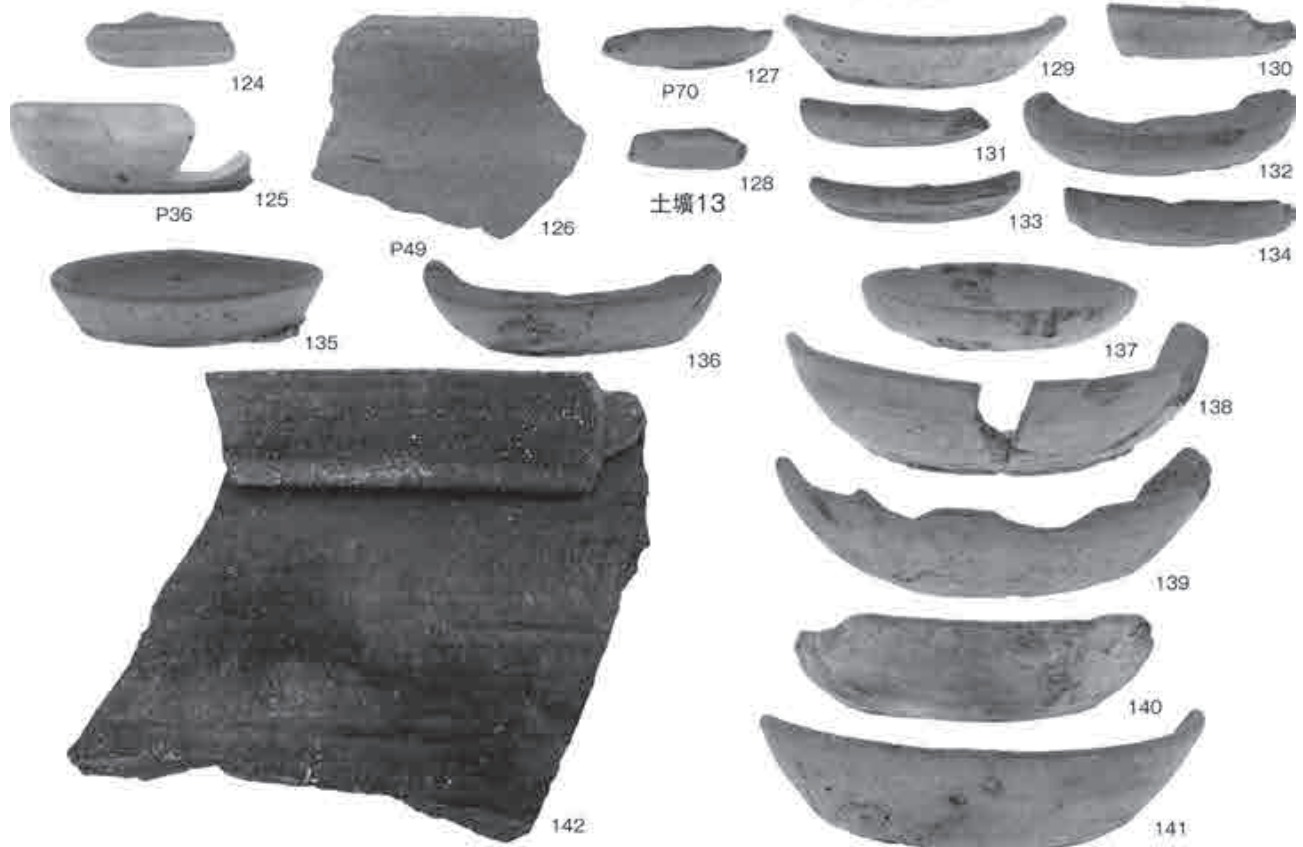


5面 かわらけ溜り出土遺物



5面 かわらけ溜り出土遺物

5面 出土遺物



5面 遺構出土遺物

下馬周辺遺跡 (No.200)

由比ガ浜二丁目 19 番 4 地点

例 言

1. 本報は「下馬周辺遺跡」内、由比ガ浜二丁目19番4における埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査期間 2006年4月24日～同年6月13日
調査面積 82.40㎡
3. 本調査地点の略称はGY2191とした。
4. 調査体制
担 当 者 馬淵和雄
調 査 員 松原康子・沖元道（資料整理）・根本志保（資料整理）
調査補助員 鈴木弘太・岩崎卓治（資料整理）
作 業 員 安達越郎・鯉沼稔・藤枝正義・沼上三代治（社団法人鎌倉シルバー人材センター）
5. 本報作成分担
遺構図整理 沖元
遺物実測 松原・岩崎
同 墨 入 れ 松原・岩崎
同 観 察 表 松原
同写真撮影 沖元
原稿執筆 馬淵・沖元・根本
編 集 沖元
6. 現地調査及び資料整理に際して以下の方々からご助言とご協力を戴いた。記して感謝の意を表したい（敬称略、五十音順）。
汐見一夫・原廣志

目次

本文目次

第一章 遺跡の概観	401
1. 位置と立地	
2. 歴史的環境	
第二章 調査の概要	409
1. 調査にいたる経緯	
2. 調査方法	
3. 調査の経過	
第三章 調査結果	411
第1節 概要	
1. 層序	
第2節 各説	
1. 近世	
2. I面	
3. II面(海成砂層面)	
4. 最終確認深掘り	
5. 遺物計量比について(表5)	
第四章 まとめと考察	432
1. 遺跡の変遷と年代	
2. まとめに代えて	

挿図目次

図1 周辺の遺跡	402	図10 土坑9、同出土遺物	417
図2 明治15年頃の調査地点周辺(『迅速測図』)	405	図11 竪穴4～8、竪穴4・5出土遺物	418
図3 調査区設定図	410	図12 土坑1～3・13、土坑2・3・13出土遺物	419
図4 調査区土層断面図	412	図13 土坑11・12・14～17、同出土遺物	420
図5 近世遺構全図	413	図14 I面小穴出土遺物	421
図6 近世竪穴建物	413	図15 II面遺構全図	422
図7 I面遺構全図	414	図16 深掘り設定図・深掘り土層断面	423
図8 I面出土遺物、溝1・竪穴1、同出土遺物	415	図17 遺構外出土遺物(1)	424
図9 竪穴2・3、同出土遺物	416	図18 遺構外出土遺物(2)	425

表目次

表1 出土遺物観察表(1)	427	表4 出土遺物観察表(4)	430
表2 出土遺物観察表(2)	428	表5 出土遺物計量表	431
表3 出土遺物観察表(3)	429		

図 版 目 次

<p>図版 1 435</p> <p>1 - 1 六地蔵方向から調査地点を望む</p> <p>1 - 2 下馬四ツ角方向から調査地点を望む</p> <p>1 - 3 近世竪穴 (西から)</p> <p>1 - 4 近世竪穴 (北から)</p> <p>図版 2 436</p> <p>2 - 1 1区全景 (南から)</p> <p>2 - 2 1区全景 (西から)</p> <p>2 - 3 2区全景 (東から)</p> <p>2 - 4 2区全景 (南から)</p> <p>2 - 5 溝 1 (南から)</p> <p>2 - 6 溝 1 北壁土層断面</p> <p>図版 3 437</p> <p>3 - 1 溝 1 内瀬戸香炉 (図 8-3) 出土状況 (西から)</p> <p>3 - 2 1区竪穴 3 (南から)</p> <p>3 - 3 2区竪穴 3 (東から)</p> <p>3 - 4 2区竪穴 3 (南から)</p> <p>3 - 5 1区竪穴 3 内土坑 9 (南から)</p> <p>3 - 6 1区北壁土層断面竪穴 3 部分</p> <p>図版 4 438</p> <p>4 - 1 1区竪穴 4 (南から)</p> <p>4 - 2 1区竪穴 4 東壁束柱痕 (南西より)</p> <p>4 - 3 1区竪穴 6 床面検出状況 (北から)</p> <p>4 - 4 1区竪穴 6 掘り方 (北から)</p> <p>4 - 5 2区竪穴 7 柱穴列 (南から)</p> <p>4 - 6 2区竪穴 7 (東から)</p>	<p>図版 5 439</p> <p>5 - 1 2区竪穴 8 (東から)</p> <p>5 - 2 2区土坑 2 (南から)</p> <p>5 - 3 2区土坑 3 (東から)</p> <p>5 - 4 土坑 3 中央ベルト土層断面 (南から)</p> <p>5 - 5 (左から) P.12、P.13、P.21 (東から)</p> <p>5 - 6 P.14 (左)、土坑 15 (東から)</p> <p>図版 6 440</p> <p>6 - 1 2区確認深掘り全景 (南から)</p> <p>6 - 2 2区確認深掘り西壁土層断面</p> <p>6 - 3 1区風成砂下の確認面 (南から)</p> <p>6 - 4 1区風成砂下層の小穴 (北から)</p> <p>6 - 5 1区海成砂層面全景 (南から)</p> <p>6 - 6 2区海成砂層面全景 (南から)</p> <p>図版 7 441</p> <p>7 - 1 2区西壁土層断面</p> <p>7 - 2 1区西壁土層断面</p> <p>図版 8 442</p> <p>出土遺物 1</p> <p>図版 9 443</p> <p>出土遺物 2</p> <p>図版 10 444</p> <p>出土遺物 3</p>
---	--

第一章 遺跡の概観

1. 位置と立地

調査地点は由比ガ浜二丁目19番4に所在する。下馬周辺遺跡(県遺跡台帳No.200)の範囲内に位置し、北側を県道鎌倉葉山線、南東側を江ノ島電鉄に挟まれている。

鎌倉市の旧市街地は北の鶴岡八幡宮を頂点とし、南の相模湾に面した三角形の沖積低地、及び砂丘地帯があり、それを取り巻く丘陵の谷戸地、十二所に源を發し東北丘陵の裾を流れる滑川低地から形成されている。砂丘の裾は地点112の発掘調査でも確認されており、砂丘の頂部が一ノ鳥居辺りと現今小路辺りにあったと考えられる。先の三角形の沖積地の中央を鶴岡八幡宮から由比ガ浜へ向かって南北に貫くのが若宮大路である。調査地点の150m東には現在「下馬四ツ角」と呼ばれる交差点があり、調査地点の北を東流する佐助川はこのあたりで滑川に合流している。上本進二によれば鎌倉時代この一帯は砂丘後背地(旧砂丘)である(上本2000)。調査地点の海拔は6m前後であり、下馬四ツ角は3.8mと低い。下馬四ツ角を中心に、南東になだらかに上がっていき、東は滑川右岸でぐんと高まり、鉄道踏切を過ぎたあたりで6.6mほどになる。

2. 歴史的環境

図1の狭い範囲内ではあるが各時代の遺跡の変遷を見ていきたい。

縄文時代

縄文時代は鎌倉駅西口ロータリーあたりの地点41・42・48・53・75・109・112・115・124・126で土器が発見されている。海岸砂丘地帯での出土例は現在までないようである。遺構の確認もない。海進・海退期の水位と遺物分布の関係が検討される必要がある。

弥生時代

弥生土器の分布は縄文土器の分布域をやや南下したところに集まるが、やはり海岸砂丘での出土は見られない。地点41・42・75・84・87・88・109・124があげられる。土器の年代は概ね弥生時代後期のものであるが、地点87・88には中期後半宮ノ台期に遡る資料も多い。この辺りは砂丘地帯であり、砂丘頂部は現今小路辺りにあると見られている。遺構の検出はないが集落が砂丘丘陵上、もしくは裾部に存在した可能性は否めない。

古墳時代

古墳時代前期の遺物分布は全体に分散するが、若宮大路より西側に比較的多い。海岸砂丘地帯では一旦空闲地を隔てた後、若干南に寄る(地点26・27・36)。北側では地点41・42・84・88・105・109・123・124があげられる。中期の土器の出土地点は少なく、地点53・84・124のみであるが、地点53では竪穴住居が検出されており、集落の存在は疑いない。

古墳時代後期はさらに減少傾向にあり、分布に何かしらの傾向を見出すことは難しい(地点9・25・39・41・42・72・87・123・124)。また砂丘地帯では祭祀遺構が点在する。古墳時代後期の遺構として地点72・123で後期の竪穴住居址各1軒が検出されている。地点は離れているが、いずれも後世の度重なる削平によって消滅した可能性のある集落の存在を思わせる。またこの時期、横穴墓も多い(千葉ヶ谷横穴)。調査地点から南に約400m南下したところには現在「和田塚」と呼ばれる中世石塔の戴る塚があり、それはかつて「無常堂塚」という名の円墳であったという。「采女塚」という円墳も人物埴輪の出土で知られる。周辺は古い字を「向原(むかいはら)」といい、高塚式の向原古墳群があったとされる。円筒埴輪片が地点41・42・43など数地点で出土している。

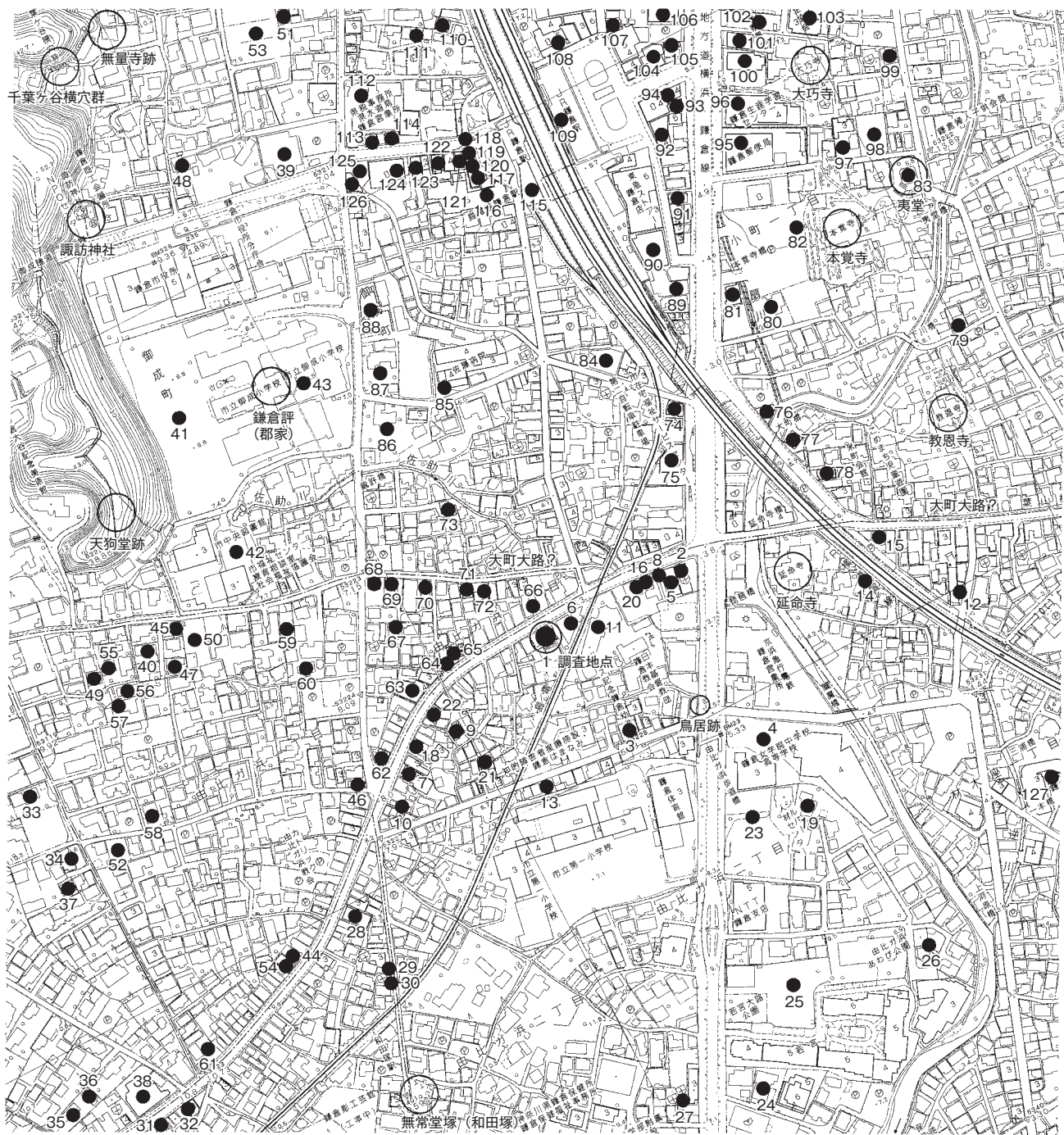


図1 周辺の遺跡

馬周辺遺跡(NO.200) 1. 調査地点 由比ガ浜二丁目19-4(2-19-1) 2. 由比ガ浜二丁目2-2(1988福田) 3. 由比ガ浜二丁目27-9(1998田代) 4. 由比ガ浜二丁目1011-1 (1989大河内) 大河内1998『下馬周辺遺跡発掘調査報告書』下馬周辺遺跡発掘調査団 5. 由比ガ浜二丁目2-10 (1990福田) 6. 由比ガ浜二丁目4-41 (1990宗基) 宗基1992『下馬周辺遺跡』下馬周辺遺跡発掘調査団 7. 由比ガ浜2-107-1 (1995馬淵・汐見) 汐見1997『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13鎌倉市教育委員会 8. 由比ガ浜二丁目2-12 (1998齋木・熊谷) 熊谷1998『下馬周辺遺跡発掘調査報告書』4下馬周辺遺跡発掘調査団・鎌倉遺跡調査会 9. 由比ガ浜二丁目110-5 (1999菊川) 菊川2001『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17鎌倉市教育委員会 10. 由比ガ浜二丁目106-6・7 (2000汐見) 汐見2000『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18鎌倉市教育委員会 11. 由比ガ浜二丁目18-1 (2001汐見) 12. 由比ガ浜二丁目975-6 (2003宮田・

森) 森2006『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』22鎌倉市教育委員会 13. 由比ガ浜二丁目39-14 (2004原) 原2010『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』26鎌倉市教育委員会 14. 材木座一丁目1002-1 (2004福田) 福田2008『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』24鎌倉市教育委員会 15. 大町二丁目1001-4 (2005馬淵) 馬淵2011『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』27鎌倉市教育委員会 16. 由比ガ浜二丁目3-7 (2005田代) 18. 由比ガ浜二丁目107-5(2007鈴木) 19. 由比ガ浜二丁目1058-5(2008森) 20. 由比ガ浜二丁目3-6(2008滝沢) 21. 由比ガ浜二丁目54-15(2008伊丹) 22. 由比ガ浜二丁目113-5 (2009伊丹) 23. 由比ガ浜二丁目1075 (2010植山・馬淵) 由比ガ浜中世集団墓地遺跡(NO.372) 24. 由比ガ浜二丁目1015-29 (1989大河内) 大河内1991『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』7鎌倉市教育委員会 25. 由比ガ浜二丁目1034-1 (1990原・汐見) 原1993

『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9 鎌倉市教育委員会 **26**. 由比ガ浜二丁目 1037-1 (1992 原) 佐藤 1992 『鎌倉考古』22 鎌倉考古学研究所 **27**. 由比ガ浜二丁目 1203-20 (1998 原) 原 2000 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16 鎌倉市教育委員会

長谷小路周辺遺跡 (NO.236) 28. 由比ガ浜三丁目 223-11 (1989 齋木・汐見) **29**. 由比ガ浜三丁目 228・229 (1991 宗基) 宗基 1993 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9 鎌倉市教育委員会 **30**. 由比ガ浜三丁目 228-2 (1991 宗基) 宗基 1998 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14 鎌倉市教育委員会 **31**. 由比ガ浜三丁目 254-15 (1999 原・福田) 福田 2001 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17 鎌倉市教育委員会 **32**. 由比ガ浜三丁目 254-1 (2006 鈴木)

笹目遺跡 (NO.207) 33. 笹目町 324・311-3 (1988 田代・原) 田代 1990 『昭和 63 年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』笹目遺跡内やぐら発掘調査団 **34**. 笹目町 425-1 (1993 田代・継) 継 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10 鎌倉市教育委員会 **35**. 笹目町 285-1 (1999 齋木・伊丹) 伊丹 2001 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17 鎌倉市教育委員会 **36**. 笹目町 286-1 (1999 齋木・伊丹) 伊丹 2001 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17 鎌倉市教育委員会 **37**. 笹目町 302-11 (2000 継・土屋) 宗基 2002 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18 鎌倉市教育委員会 **38**. 笹目町 287-1 外 (2003 田代)

今小路西遺跡 (NO.201) 39. 御成町 15-5 (1980 手塚) 手塚 1982 『千葉地遺跡』千葉地遺跡発掘調査団 **40**. 由比ガ浜一丁目 148-11 (1983 赤星) 赤星 『発掘調査概要』鎌倉市由比ガ浜一丁目 148-11 所在遺跡発掘調査団 **41**. 御成町 625-3 (1984 河野) 河野 1990 『今小路西遺跡 (御成小学校) 内』発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会 河野 1993 『今小路西遺跡 (御成小学校) 内』第 5 次発掘調査概報』鎌倉市教育委員会 **42**. 御成町 625-2 (1989 河野・宮田) 宮田・清水他 1993 『今小路西遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会 **43**. 御成町 625-3 (1989 河野) 河野 1990 『今小路西遺跡 (御成小学校) 内』平成元年度試掘及び確認調査概報』鎌倉市教育委員会 **44**. 由比ガ浜 1-213-3 (1991 宗基) 宗基 1993 『今小路西遺跡』今小路西遺跡発掘調査団 **45**. 由比ガ浜 1-148-1 (2000 野本) 野本 2002 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18 鎌倉市教育委員会 **46**. 由比ガ浜 1-183-1 (2000 汐見) 汐見 2002 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18 鎌倉市教育委員会 **47**. 由比ガ浜 1-148-5 (2000 宮田・滝沢) 宮田他 2004 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』20 鎌倉市教育委員会 **48**. 御成町 200-2 の一部 (2003 原) 原 2006 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』22 鎌倉市教育委員会 **49**. 由比ガ浜一丁目 157-7 外 (2005 馬淵) **50**. 由比ガ浜一丁目 141-5 外 (2006 小林) 香川他 2007 『今小路西遺跡発掘調査報告書』玉川文化財研究所 **51**. 御成町 176-7 (2006 宮田・滝沢) **52**. 由比ガ浜一丁目 197-2 外 (2006 瀬田) 瀬田 2007 『今小路西遺跡発掘調査報告書』(有) 鎌倉遺跡調査会 **53**. 御成町 171-1 外 (2006 菊川) 菊川 2008 『今小路西遺跡 (NO.201) 発掘調査報告書』斉藤建設 **54**. 由比ガ浜一丁目 213-12 (2007 熊谷) 熊谷他 『今小路西遺跡』(NO.201) 発掘調査報告書』(有) 鎌倉遺跡調査会 **55**. 由比ガ浜一丁目 151-1 の一部 (2007 熊谷) **56**. 由比ガ浜一丁目 147-2 外 (2007 原) **57**. 由比ガ浜一丁目 147-1 の一部 (2007 齋木) **58**. 由比ガ浜一丁目 165-2 (2008 齋木) **59**. 由比ガ浜一丁目 136-1 の一部 (2008 滝沢) **60**. 由比ガ浜一丁目 134-4 (2008 伊丹) **61**. 由比ガ浜一丁目 211-18・19 (2009 熊谷) 熊谷 2010 『第 20 回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』NPO 法人鎌倉考古学研究所他

若宮大路周辺遺跡群 (NO.242) 62. 由比ガ浜一丁目 129-5 (1993 清水) 清水 1995 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 **63**. 小町二丁目 1-14 (1986 福田) **64**. 由比ガ浜一丁目 120-2 (2008 齋木) **65**. 由比ガ浜一丁目 120-6 (1991 原) **66**. 由比ガ浜一丁目 117-1 (1988 齋木・汐見) 齋木 1991 『由比ガ浜 1-117-1 地点遺跡』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 **67**. 由比ガ浜一丁目 127-1 (2003 鈴木・田代) 宗基 2006 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』22 鎌倉市教育

委員会 **68**. 由比ガ浜一丁目 126-1 (2005 齋木・熊谷) 熊谷 2009 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』25 鎌倉市教育委員会 **69**. 由比ガ浜一丁目 126-1 (2005 熊谷) 2009 熊谷 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』25 鎌倉市教育委員会 **70**. 由比ガ浜一丁目 123-5 (1994 馬淵) 馬淵 1995 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11 鎌倉市教育委員会 **71**. 由比ガ浜一丁目 188 (1995 田代) 継 1997 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13 鎌倉市教育委員会 **72**. 由比ガ浜一丁目 127 (2003 鈴木) 宗基 2006 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』22 鎌倉市教育委員会 **73**. 御成町 727-12・19 (1990 木村) **74**. 御成町 872-14 (1991 木村) 木村 1992 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』8 鎌倉市教育委員会 **75**. 御成町 884-6 (1997 宮田) 宮田 1999 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 **76**. 小町一丁目 2028-1 (1990 大河内) 大河内 1992 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』8 鎌倉市教育委員会 **77**. 大町一丁目 1034-2 (1982 松尾) **78**. 御成町 790-7 (2006 田代・浜野) **79**. 大町一丁目 1084-4 (2007 宇都) **80**. 小町一丁目 276-18 (2005 宮田) 宮田 2006 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』(株)博通 **81**. 小町一丁目 287-13 (1992 齋木) 齋木 1992 『鎌倉考古』鎌倉考古学研究所 **82**. 小町一丁目 302 外 (1982 齋木) 齋木 1989 『よみがえる中世』3 (株)平凡社 **83**. 小町一丁目 302 (1977 齋木) 齋木 1983 『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』1 鎌倉市教育委員会 **84**. 御成町 868 (1990 木村) 木村 1993 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会 **85**. 御成町 778-1 (1988 田代) **86**. 御成町 763-5 (2007 齋木) **87**. 御成町 783-1 外 (2005 齋木) 齋木 2009 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』(有) 鎌倉遺跡調査会 **88**. 御成町 786-1 (1999 齋木) 齋木 2002 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団・鎌倉遺跡調査会 **89**. 小町一丁目 83-3 (2007 宮田・滝沢) 宮田他 2000 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』(株)博通 **90**. 小町一丁目 83-1 (1990 (株)四門) 四門 1993 『鎌倉市早見芸術学園改装工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(株)四門 **91**. 小町一丁目 81-1 (1980 鎌倉市教育委員会) **92**. 小町一丁目 81-8 (1991 木村) 木村 1995 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 **93**. 小町一丁目 81-23 (1988 田代) **94**. 小町一丁目 81-18 (1998 宮田) 宮田 2000 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16 鎌倉市教育委員会 **95**. 小町一丁目 305・308 (1975 齋木) 齋木 1983 『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』1 鎌倉市教育委員会 **96**. 小町一丁目 891 (1979 齋木) 齋木 1985 『(推定) 藤内定員邸跡遺跡』鎌倉市教育委員会 **97**. 小町一丁目 333-2 (2007 原・山口) 山口 2008 『第 18 回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会 **98**. 小町一丁目 333-5 (2010 押木) **99**. 小町 1-329-1 (2010 宮田・滝沢) **100**. 小町一丁目 309-4 (1979 齋木) 齋木 1983 『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』1 鎌倉市教育委員会 **101**. 小町一丁目 309-5 (1982 齋木) 齋木 1983 『小町一丁目 309 番 5 地点発掘調査報告書』(推定) 藤内定員邸跡発掘調査団 **102**. 小町一丁目 319-2 (1978 齋木) 齋木 1983 『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』1 鎌倉市教育委員会 **103**. 小町一丁目 322-1 (1992 宮田) 宮田 1997 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 **104**. 小町一丁目 75-1 (1979 齋木) 齋木 1982 『小町 1 丁目 75 番 1 地点発掘調査報告書』鎌倉考古学研究所 **105**. 小町一丁目 75-1 (1979 齋木) 齋木 1982 『小町 1 丁目 75 番 1 地点発掘調査報告書』鎌倉考古学研究所 **106**. 小町一丁目 67-2 (1987 福田) 福田 1994 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会 **107**. 小町二丁目 65-21 (1979 齋木・河野) 齋木・河野 『小町 1 丁目 65 番地 21 号発掘調査報告書』鎌倉考古学研究所 **108**. 小町一丁目 107-7 外 (2010 宮田) **109**. 小町一丁目 103-9 (1982 調査会) 調査会 1984 『蔵屋敷遺跡』鎌倉駅舎改装にかかわる遺跡調査会 **110**. 御成町 123-3 (2004 福田) 福田 2009 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』25 鎌倉市教育委員会 **111**. 御成町 126-1 (2003 汐見) 汐見 2007 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』23 鎌倉市教育委員会 **112**. 御成町 12-18 (1984 服部) 服部 1986 『千葉地東遺跡』神

奈川県埋蔵文化財センター 113.御成町228-2・130-1 (1985 齋木) 齋木1987『御成町228番2地点遺跡』千葉地東遺跡発掘調査団 114.御成町130-6 (1984 松尾) 115.御成町822-2 (1981 手塚) 手塚1983『蔵屋敷東遺跡』江ノ電鎌倉ビル発掘調査団 116.御成町802-2外 (2002 瀬田) 瀬田2003『第13回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会 117.御成町11-2 (1979 齋木) 齋木1982『鎌倉考古学研究所研究報告第2集』鎌倉考古学研究所 118.御成町 (1080 松尾) 宇田川1981『鎌倉考古』5 鎌倉考古学研究所 119.御成町819-1 (1984 玉林) 120.御成町819-1 (1989 菊川) 1999 菊川『若宮大路周辺

遺跡群発掘調査報告書』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 121.御成町818-1 (1991 松尾) 松尾・継『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9 鎌倉市教育委員会 122.御成町811(1991 松尾・継) 123.御成町806-9(1981 齋木) 齋木1982『鎌倉考古学研究所研究報告第2集』鎌倉考古学研究所 124.御成町806-5 (1981 齋木) 1985『諏訪東遺跡』諏訪東遺跡調査委員 125.御成町808-6(2005 浜野) 126.御成町788-3・788-5(1995 菊川) 菊川1997『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13 鎌倉市教育委員会 材木座町屋遺跡 (NO.261) 127.材木座一丁目910 (2000 森) 森2001『材木座町屋遺跡発掘調査報告書』材木座町屋遺跡発掘調査団

古代

古代は遺物、遺構とも急増し市域全体に検出されるが、大きく分けて、鎌倉評(地点41・43)を中心とした地域と、古東海道と考えられる現県道(旧国道134号線)沿いを中心とした地域を見ていきたい。

評(郡家)を中心とした古代遺物出土地点は、地点41～43・45・48～50・53・80・84・86・87・89・96・109・112・115・117・120・122～124・126である。調査地点から北に300mの地点41・43の今小路西遺跡(御成小学校地点)で鎌倉評もしくは郡家の政庁が発見されている。検出遺構は掘立柱建物12棟・礎石建物5棟・柵9条・池状凹地1基・溝3条などであり、8世紀前半から10世紀代まで遺構を5期に区分している。I期では天平五年(733)銘の木簡の出土がある。

政庁に関連すると考えられる周辺の遺跡をいくつかあげたい。地点41・43に程近く真南に位置し、調査地点より北西に260mの地点42では政庁と同時期の掘立柱建物3棟・土坑・溝の検出がある。政庁の真北、調査地点より北に550mの地点53では掘立柱建物10棟・竪穴住居址1棟・溝・柱穴が発見され、7世紀中葉から9世紀以降の時期をあて、5期に区分している。政庁に先行する時代の建物を省けば同時代の6棟の掘立柱建物が検出されている。調査地点から北東に390mの地点122では8世紀後半の掘立柱建物3棟・竪穴建物3軒が発見されている。その隣接地、調査地点より北東390mの地点119では掘立柱建物2棟・竪穴建物(1～4号住居)4軒が確認されている。遺構は8世紀前半から10世紀中葉に位置づけられており、地点41で検出された基壇状遺構とどう関わるか課題となろう。

調査地点から南東に430m、政庁から730mと離れた地点127に注目したい。6棟の掘立柱建物が検出されている。報告者は建物の構成や遺跡の立地から、一般集落ではなく、8世紀前半段階の水陸両方の交通・運搬に関する機関とそれに付属する建物(居館)と指摘している(森2001)。大上周三はこの遺跡に対し、断定は避けながらも、検出された遺構・遺物から水上交通、とりわけ郡衙の港湾施設、郡津も視野に入れたい、とする(大上2009)。

評(郡家)に関連する遺物として、現在の鎌倉駅西口周辺に瓦の出土が多い。古代瓦は砂丘域の集落からも多量に出土するが、評家とはまた別な瓦を持つ建物の存在が窺われる。石帯が地点34・42で出土している。

地点41・43から現在の今小路を挟んだ東隣接地で地点86・87が調査されている。

地点86では竪穴建物3軒の報告がある。いずれも竈、柱穴といった付帯施設が明確なかたちでは捉えられなかったため、住居とはしていない。報告者は、調査地点の立地、遺構の検出状況(後世の削平によって遺構が消滅している可能性も含め)や竪穴建物に限られること、その帰属年代が評家・郡家の第I期8世紀前葉までに収まることから、「郡衙」中枢域から一定の空閑地を隔てた別の機能空間が展開していたとし、一般集落を構成するものではなく、郡衙もしくは関連遺構の造営、あるいは官衙機能の一端を担った建物との見方もできるとしている(2009 齊木)。地点87では河道から弥生時代中期から古代にわたる土器片が出土している。河道は地点112・113・126で検出された「河川」の下流部として、

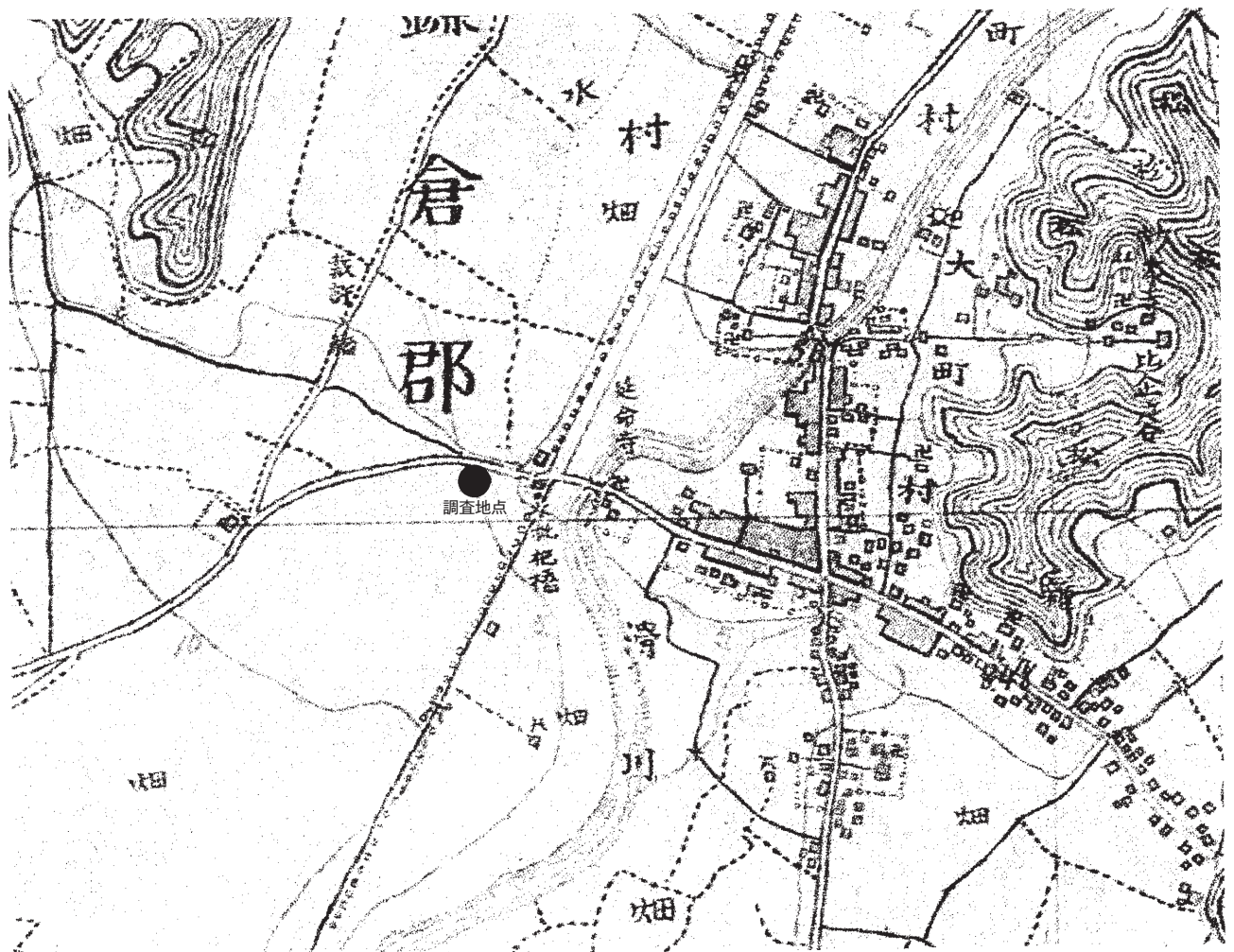


図2 明治15年頃の調査地点周辺(『迅速測図』)

その流路や正式名称は判明していませんが、寿福寺方面に源流を発する「扇ヶ谷川」ではないかと報告者は捉えている(2002降矢)。地点73・115でも河川が検出されている。

一方、県道沿いを中心とした地域では、地点9・10・13～15・29～31・35・36・44・46・62・67・72～74・127で古代遺構・遺物の出土があり、そのうち地点67では竪穴住居址が検出されている。

調査地点の北側に接する県道鎌倉葉山線には古東海道説がある。大化改新(645)直後から宝亀二年(711)の五畿七道制の改編まで、鎌倉を東海道駅路が通過していた。経路ははまだ確実にされていないが、相模国府から海岸沿いに鎌倉郡に至り稲村ヶ崎と霊山ヶ崎の間の鞍部を越えて鎌倉湾側に抜け、稲瀬川河口付近から鎌倉郷に入った可能性がある。相模国中枢部からの官道として、海老名から藤沢市下土棚を経て藤沢市川名から鎌倉に入る道も想定されている。近年の研究は海老名に国府の存在したことを疑問視しているため、この場合は相模国分寺から鎌倉郡にいたる伝路ということになる。またこの道は、明治時代に敷設された横須賀水道路(すいどうみち)にほぼ重なる(木下1997)。ただし相模国府が平塚市四宮付近にあったとすれば、相模川を渡った後、駅路がこの道の途中に合流した可能性は少ない。いずれにせよ、国府の年代的な変遷も考慮に入れる必要があろう。

古東海道駅路が鎌倉郷を横断する経路にも二系統が想定される。一つは現在の六地藏交差点から下馬四ツ角交差点を東に渡り、現大町四ツ角から南下して小坪方面に抜ける経路。もう一つは、六地藏交差点から私立中高校の北側を通り元八幡宮の前を通り小坪に抜ける経路である(木下1997)。この元八幡の前を通る経路は評家地域の項で紹介した地点127の前も通ることになるので、より有力であると考え

る。先に県道沿いの古代の遺構・遺物の出土地点をあげたが現六地藏交差点から御成中学校を結ぶ道沿いには出土例が少なく、評家域と区別が付くと共に古東海道が背景に浮かぶのではないか。

中世

「下馬」の名称は、鶴岡八幡宮に対して下馬の礼を取るところから来ている。したがって、この地名は鎌倉時代初期におこったものであろう。『吾妻鏡』の中では「中(の)下馬橋」「下(の)下馬橋」が出てくる。「下馬」の近くに作られた橋のため「下馬橋」と呼ばれたと言われている。観応三年(1352)九月三日付將軍足利尊氏御教書(『県史資料編』3 - 4185)に「若宮少(小)路三箇所橋造営」と見えることから、若宮大路上・中・下それぞれの下馬に橋が架かっていた可能性が高いが、「上(の)下馬橋」は史料に現れない。

『吾妻鏡』によると「中下馬橋」の初見は建保元年(1213)五月一日条で、今の二ノ鳥居付近であることがわかる。「下下馬橋」は県道鎌倉葉山線が若宮大路と交差する今の下馬四ツ角付近にあったと思われる。『吾妻鏡』による「下下馬橋」の初見は仁治二年(1241)十一月二九日条であり、それによれば、下下馬の辺りは「好色家」が並び、武士達の「酒宴乱舞会」の催される繁華な場所であった。しかし『快元僧都記』天文三年(1534)六月一六日条に出てくる「下ノ下馬」は「七度行路」と共に「下馬橋二ヶ所」修理の勧進状であり、この頃には若宮大路の荒廃と共に中ノ下馬橋、下ノ下馬橋はしばしば破損し修理を要する状態であったようだ。

中世都市鎌倉の大路造成に関わる事を記載すると、治承四年(1180)、源頼朝が鎌倉に入り大倉に幕府を開いた。このとき鶴岡八幡宮と若宮大路が置かれ、現代まで続く町並みの骨格が出来上がる。若宮大路を中心に小町大路とほぼ対称位置に現在の今小路はある。今小路について斉木秀雄は、道筋の再検討の必要性に言及している。地点86の調査結果を見る限り、今小路が今の道筋であった可能性は低いとし、安達泰盛邸を地点53に推定するとすれば、少なくとも鎌倉時代の初めから本地点は甘縄でしかも浜地であり、ここに若宮大路に並行する今小路、あるいはそれに準ずる幹線道路が鎌倉時代初めに造られていたとは考えられず、仮に造られたとすれば鎌倉市役所北東の信号から鎌倉駅を結ぶラインあたりで、そこから砂丘を避けて御成小学校の校内あるいは御成商店街に沿って曲がる可能性を指摘している(斉木2009)。しかし、図1の分布では現今小路から東側に13世紀中頃から竪穴建物が展開する。遺跡の分布を見ても現在の今小路を挟んだ東西は様相が異なり、それが砂丘という立地的な理由だけではなく何かしらの境界線が今の道筋にあったことに疑いの余地はあるまい。貞享二年(1685)成立の『新編鎌倉誌』は、「今小路」を寿福寺前から南、長谷までの間をいうとする。17世紀後半には現在とは変わらぬ形で存在していたことになる。寿福寺は源義朝の居館「鎌倉之楯」であり、少なくともこの地から南へ延びる道筋は古くからあったと考えるべきだろう。

大路では、おそらく東西道とみられる「大町大路」「車大路」も造成されている。ただ、田代郁夫は『吾妻鏡』に見られる「小町大路」の様々な記事を検討した上で、夷堂橋以南の南北道を「大町大路」というのではないかといっている(田代1998)。これに対し馬淵和雄は、西は御成中学校の下から東は安国論寺までの道を、鎌倉の平坦部を横断する唯一の道であり、これが「大町大路」ではないかとしている(馬淵2007)。押木弘己は県道に近い米町遺跡周辺の調査例を挙げ東西に伸びる道路遺構を紹介し、大規模な道路の存在を示した。それらは主要な交通機能を担っており、「大町大路」との関わりも視野に入ってくるとしている(押木2011)。

また、「車大路」は『吾妻鏡』のなかでは、大倉幕府から小坪に行く途中にあったことを窺わせる記事にとどまる。が、小山下入道生西の家の推定を『吾妻鏡』から起こすと安貞二年(1228)十月十二日条で

は車大路に面していることになり、嘉禎二年(1236)四月四日条では若宮大路に面していることから、小山生西家は若宮大路と車大路の交差するところにあることになる。すなわち「車大路」は若宮大路と直交する東西道であろう。

周辺の遺跡では全地点中世の遺構が検出されている。馬淵は竪穴建物の分布は砂丘・砂堆地であり、前浜(二ノ鳥居東南一帯)、地点41の今小路西遺跡(御成小学校内)に見られる高級武家屋敷前面とし、倉庫としては「恒久的」なものではなく基本的には貨物の一時的な集積施設であり、転送が終ると壊されそれを繰り返すものであり、それは砂地だから可能と言っている(馬淵1994・1995)。しかし分布を見る限り立地に差異はなく、沖積低地にも竪穴建物は分布し、切り合いも多いので、以下では立地に関係なく、大きく三つの地域、掘立柱建物地域(屋敷地)、掘立柱建物と竪穴建物が混在する地域(町屋)、竪穴建物地域(倉庫)、に分ける。

掘立柱建物地域 地点39・41・42・43・48・53を含む現今小路より西側で地点42より北側を中心とする。地点41・53では高級武家屋敷の様相が確認できた。地点43では、報告者は掘立柱建物の検出された西街区を被官屋敷とし、竪穴建物の並ぶ北街区を倉庫地域、竪穴建物と掘立柱建物、井戸が整然と区画内に配置される南街区を商人・職人の居住地域としている(河野1993)。地点84を中心とする地点74・75・89・105・109の南北地域にも掘立柱建物が並ぶ、狭い調査区ながらも、やや小ぶりの建物が想定され、地点43との位置関係から被官級の屋敷も想定される。地点73は鎌倉時代前期(13世紀初頭～13世紀中葉)に掘立柱建物が並び、鎌倉時代後期(13世紀中葉～14世紀初頭)には竪穴建物が構築される。

掘立柱建物と竪穴建物の混在地域 この地域では調査区は一様に狭く、柱穴は検出されるが建物として並ばないことも多い。また後出する竪穴建物に壊されていることも少なくないため、建物としての確認はより困難をとまなう。現今小路沿いの地点126がその様相をよく示す。掘立柱建物は一軒分の柱並びの確認ができたものがなく、大型の遺構に一部を壊されたものと思われ、「方形竪穴」(竪穴建物)より古い可能性がある。と報告者は指摘している。また今小路西遺跡(御成小学校内)と年代観は一致し、遺構・遺物の様相から庶民居住区の一画であることは間違いのないと言っている(菊川1997)。地点39は小規模な竪穴建物も各面1～2軒建つが主体は掘立柱建物であり、注目すべきは鎌倉市役所北側の東西道に並行して検出された鎌倉時代後期の道である。遺跡の性格としては出土遺物から寺院址の可能性があるとしつつも、寺院の外れの日常生活を営んだ地区としている(手塚1982)。

調査地点より西に300m程の辺りでは調査地点毎に様相を異にする。地点45・49は掘立柱建物が並び、地点47・50は竪穴建物が検出されている。いずれも狭い調査区内でのことであるが、掘立柱建物と竪穴建物が混在する様相をよく表している。すぐ北東には地点42があり、掘立柱建物を主体としつつも、調査区を南北に縦断する道路を挟み東西で様相は変わる。東側では地点41・43の流れを汲む大型柱穴が並び、屋敷の様相を示す掘立柱建物が立つ、西側では小規模な掘立柱建物と竪穴建物が検出され町屋の様相と指摘される(清水・宮田1993)。先述の地点45周辺は地点42の西側と連続しているのだろうか。また地点50は未焼成の土師器皿が土塊等と共に出土していることから、地点付近に焼成施設を伴う製作工房の存在が想定できる、と報告者は言う(香川2007)。地点87では調査区の北東で13世紀前半には作られた板壁建物と井戸がある。掘立柱建物は検出されていないが、都市民の住居と捉えこの地域に入れた。鎌倉駅を挟み地点92・94・104・105は建物の検出はないが井戸や土坑が検出され、決定的要素を欠くが町屋地域に納めたい。

竪穴建物地域 掘立柱建物(屋敷)地域を除く全域に分布する。倉庫としたが竪穴建物の性格把握には立地環境と付属施設、出土資料も含めた総合的判断が必要であることはいうまでもない。しかし、図1

上の狭い範囲内では倉庫的性格の強い検出例が多く、また住居的、工房的な要素の強い例については個別に紹介していきたい。なお、倉としたうち、地点41の武家屋敷裏の基壇上に立つ外周を土居にした掘立柱建物は省く。また小規模な掘立柱建物の内にも倉庫はあろうが、含めない。

まず、現今小路を隔てた地点43の対面位置でも、砂丘上に地点86・87で竪穴建物地域は広がる。地点86では調査区東側を中心に竪穴建物は幾度も立て替えられ展開する。また井戸、土坑等も検出され、これに対し報告者は地点43の町屋の様相とはやや異なるといい、河川運搬との関係や、区画された町屋とは別の性格を考える必要があるとしている。また、この近辺に近世・近代に「蔵屋敷」の町名が残っていることと、中世に「方形竪穴建物」(竪穴建物)が集中しているのは興味深い、と指摘している。またこの地は砂丘であり、土坑墓が2基検出される。寺院跡も推定されないこの地が15世紀には「浜」的な性格に戻っていった可能性が高いと指摘している(斉木2009)。「浜」的というのは葬地の意であろうか。地点87はやはり砂丘上である。調査区北東部に河川と思われる落ち込みが検出され、報告者は西側を河岸砂層上とし東側を河岸内低地とに分け、西側の河岸砂層上で検出された竪穴建物群を地点43の「町屋地域」に似ているとし、流通に関わる人々の生活空間としているが、地点43のような区画された町屋とは様相を異にしているので竪穴建物地域(倉庫)の一群として捉えた。報告者は、先にふれた砂丘は周辺の発掘調査結果から少なくとも13世紀前半には利用されていないことになり、13世紀前半頃に遺跡のある地点39から地点43にかけての海拔5m前後の生活面の東側に海拔7m以上の砂丘が存在し、そこは利用されていないこととし、由比ガ浜地域の砂丘の開発時期を知る上で興味深い事実であると指摘している(降矢2002)。

地点88以北で今小路以東の鎌倉駅西口一带に、地点23を中心として調査は集中するが、何れも竪穴建物が検出されている。若宮大路を越えて東側の地点80・81・95・96・97・101・103も竪穴建物地域である。北に幕府を構え公的色彩の濃い土地柄でありながら竪穴建物は繰り返し建て替えられている。「蔵屋敷」の遺称はこの一带を指す。

地点80・96では足金物や兜金等の鋳型が出土している。地点68・69・70・71・72は軒並み竪穴建物地域であり、それ以南も連続する。しかし、地点7には板囲い建物が検出されており、地点9・13には掘立柱建物の検出がある。竪穴建物に囲まれるこの一角はやや様相を異にするのだろうか。

地点24では布堀状遺構の検出があり、地点27には柱穴と土坑等が検出されている。今回の調査地点の隣接地である地点6では、竪穴建物の中央に囲炉裏の可能性のある遺構が検出されており、居住空間の可能性が指摘されている(宗墓1999)。地点10で解体痕の残る獣魚骨が数点出土している。地点29でも磨耗陶片・砥石・硯製作用材の端材・多量の獣骨加工片などが出土しており、石材と骨材を用いた工芸活動がされていたことを示す。地点44では13世紀末から15世紀初頭まで続く南北道路とその側溝の検出が主体であったが、多数の銭の鋳型と鋳造失敗品が井戸底から出土している。鋳造施設は発見されなかったものの銭の摸鋳が近隣で行われていたであろうことをうかがわせる。図1からはもれるが、長谷小路周辺遺跡では竪穴建物から骨製品の未成品や鞆羽口、鋳滓、砥石、とりべが多数出土し、竪穴建物の工房的側面を見せている。

(根本)

※引用・参考文献は第四章末に一括

第二章 調査の概要

1. 調査にいたる経緯

由比ガ浜二丁目19番4において、店舗併用住宅建設の照会があった。工法は鋼管杭打ち込みによる基礎工事を含むものであり、設計変更は困難と判断された。この地点は鎌倉駅から400mほど南に位置し、近隣の調査から中世の遺構が存在することが予想された。地下の遺構の損壊を免れないため、鎌倉市教育委員会により発掘調査が実施されることになった。

調査は2006年4月24日に表土掘削を行い、同25日より本格的に始められた。

2. 調査方法

掘削方法

掘削にあたっては残土を場内処理とし、置き場所の確保のため面積82.40㎡の調査区を南北に二分割した。そして前半(南半部)を「1区」、後半(北半部)を「2区」と仮称し、1区の調査時には2区を、2区の調査時は1区をそれぞれ残土置場とした。

両区とも地表下15～65cm前後の表土部分を重機で掘削し、以下を人力で掘削した。

測量基準

調査区北側前面の道路にほぼ直交する軸を概念上の基準軸とし、測量はこれに直交または平行する軸線を5m間隔で設定しておこなった。のち資料整理の際、世界測地系の数値を導入した。調査区はX - 75 880 ～ - 75 900 Y - 25 905 ～ - 25 915の間にある。

3. 調査の経過

調査は2006年4月24日に始まり、6月13日に終了した。その間の経過は以下の通り。

- 4月24日 重機により、1区表土掘削
- 4月25日 機材搬入
- 5月17日 1区I面全景写真撮影
- 5月23日 1区海成砂層面写真撮影
- 5月25日 重機により、2区表土掘削
- 6月6日 2区I面全景写真撮影、海成砂層面写真撮影
- 6月7日 最終深掘り写真撮影
- 6月13日 機材撤収

(沖元)

県道鎌倉葉山線 (311号)



図3 調査区設定図

第三章 調査結果

第1節 概要

1. 層序

地表面

地表面の標高は、調査区北辺で7.10 m前後、南辺で6.15 m前後と、北に向かって傾斜している。後述するように、地山層は南の海岸に向かってなだらかに落ちていくが、地表面は逆に北が低い。これは近代以降、江ノ島電鉄線や県道鎌倉葉山線(旧国道134号線)敷設の際、削平された可能性がある。

近世(図5)

表土および攪乱層は、凹凸激しくかなり深部に及んでおり、とくに南側では厚さ150cm、攪乱坑中では290cmにも達するところがある。これを除くと、中世層である灰色砂層が現れるが、そこに切り込まれた焦げ茶色の砂の小塊を多く含む層があり、これを近世の土とした。ただし、切り込まれた面そのものはほとんど全く残っていない。

I面(図7)

ほぼ鎌倉時代後期(13世紀後半～14世紀前半)から室町時代前期(15世紀前半)にいたる時代の層であり、おおむね灰色を基調とする砂層である。遺物片・炭化物を含み、締まりは弱く、乾くと灰白色を呈する。大半の遺構がこの層から切り込まれており、中世の遺構面をなす。

II面(海成砂層面)(図8)

面にもなって検出された遺構は見られず、人的営為を積極的に認めることはできない。II面とした海成砂層(図4土層番号21)が基盤層となる。

(馬淵)

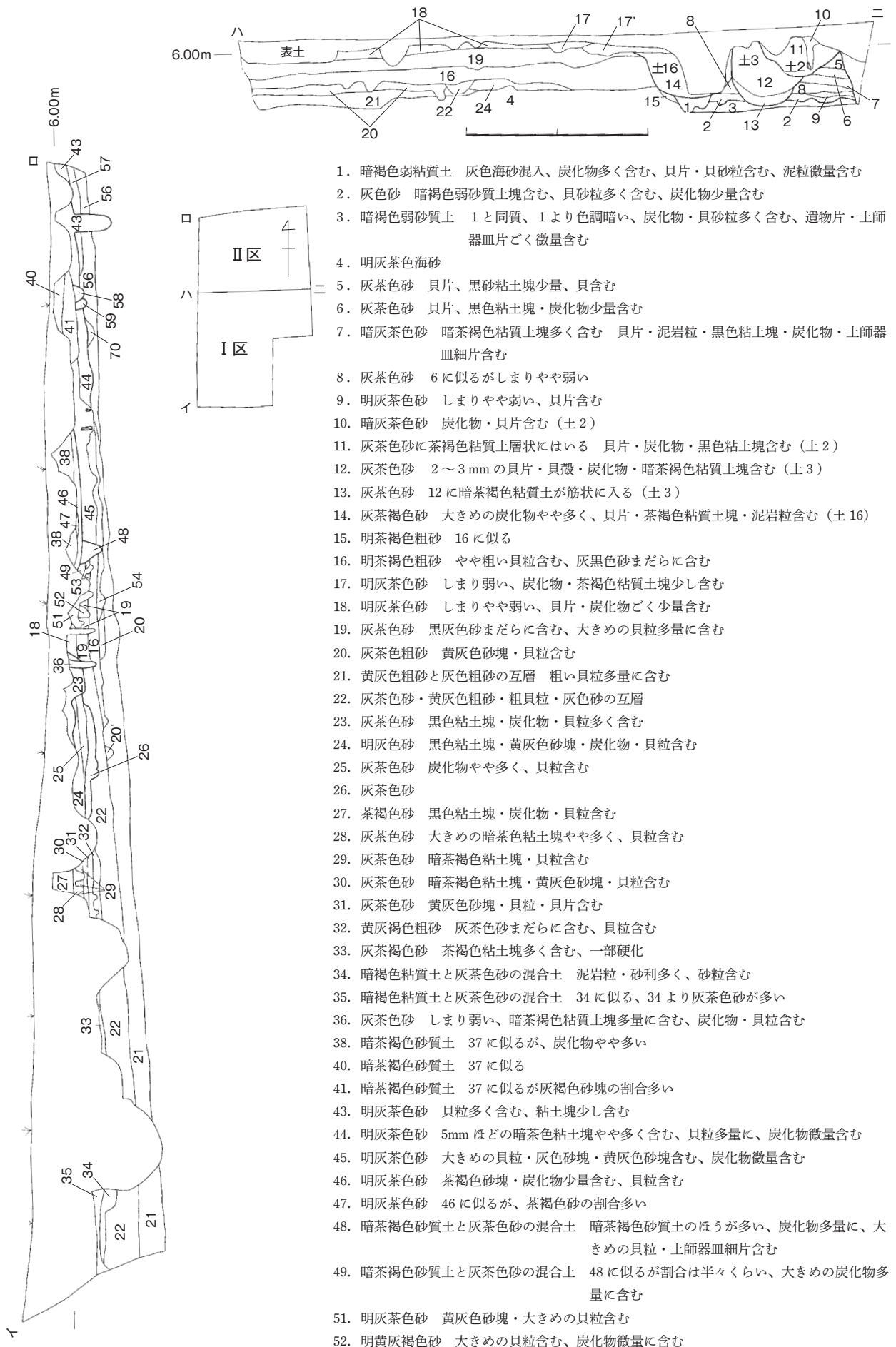


図4 調査区土層断面図

- 53. 明灰褐色砂 黄灰色砂塊混ざる
- 54. 灰色砂 淡橙色粗砂大塊全体に混ざる
- 55. 灰色砂 54に似るが灰色砂の割合多い
- 56. 灰色砂 黄灰色砂大塊多く含む
- 57. 明灰茶色砂 黄灰色砂塊・炭化物・貝粒含む

- 58. 明灰茶色砂と暗茶褐色砂質土の混合土 砂粒・炭化物含む
 - 59. 明灰茶色砂と暗茶褐色砂質土の混合土 58に似るが暗茶褐色砂質土と炭化物多い
 - 60. 明灰茶色砂 大きめの貝粒多い、炭化物微量に含む
- 37・39・42・50は欠番

第2節 各説

1. 近世

面の概要(図5)

検出遺構：近世竪穴建物

近世竪穴建物(図6)

位置：X(-75 885.27) ~ -75 886.04 Y-25 910.16 ~ (-25 913.09) 平面形：方形 規模：東西2.88 m × 南北(0.63 m) 主軸方位：N - 12° - W 重複関係：攪乱坑により、切込み面削平される 出土遺物：図化可能なものなし 特記事項：攪乱土坑の底部で検出、構造からみて近世のものと判断。

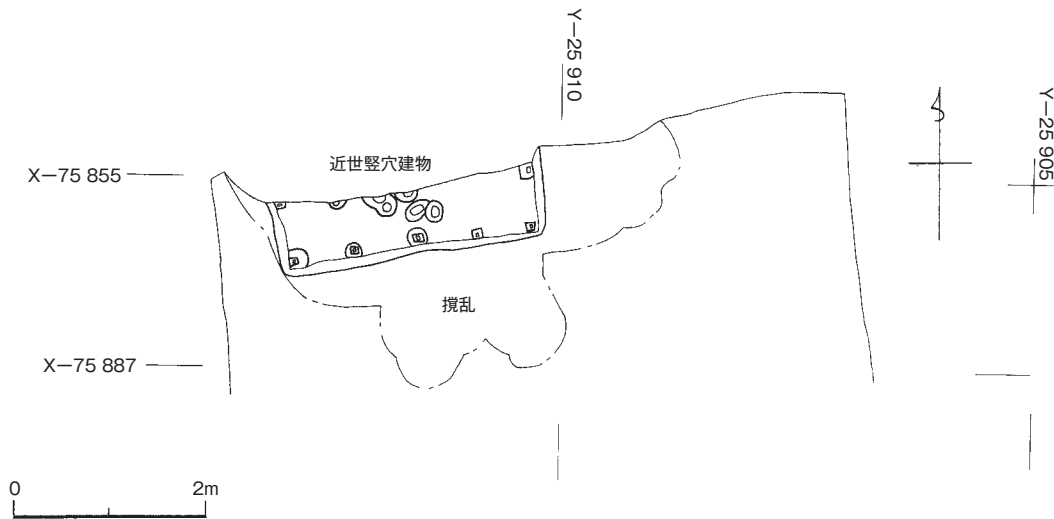


図5 近世遺構全図

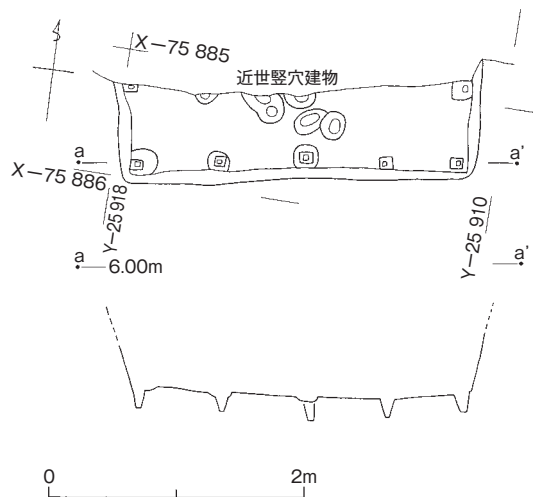


図6 近世竪穴建物

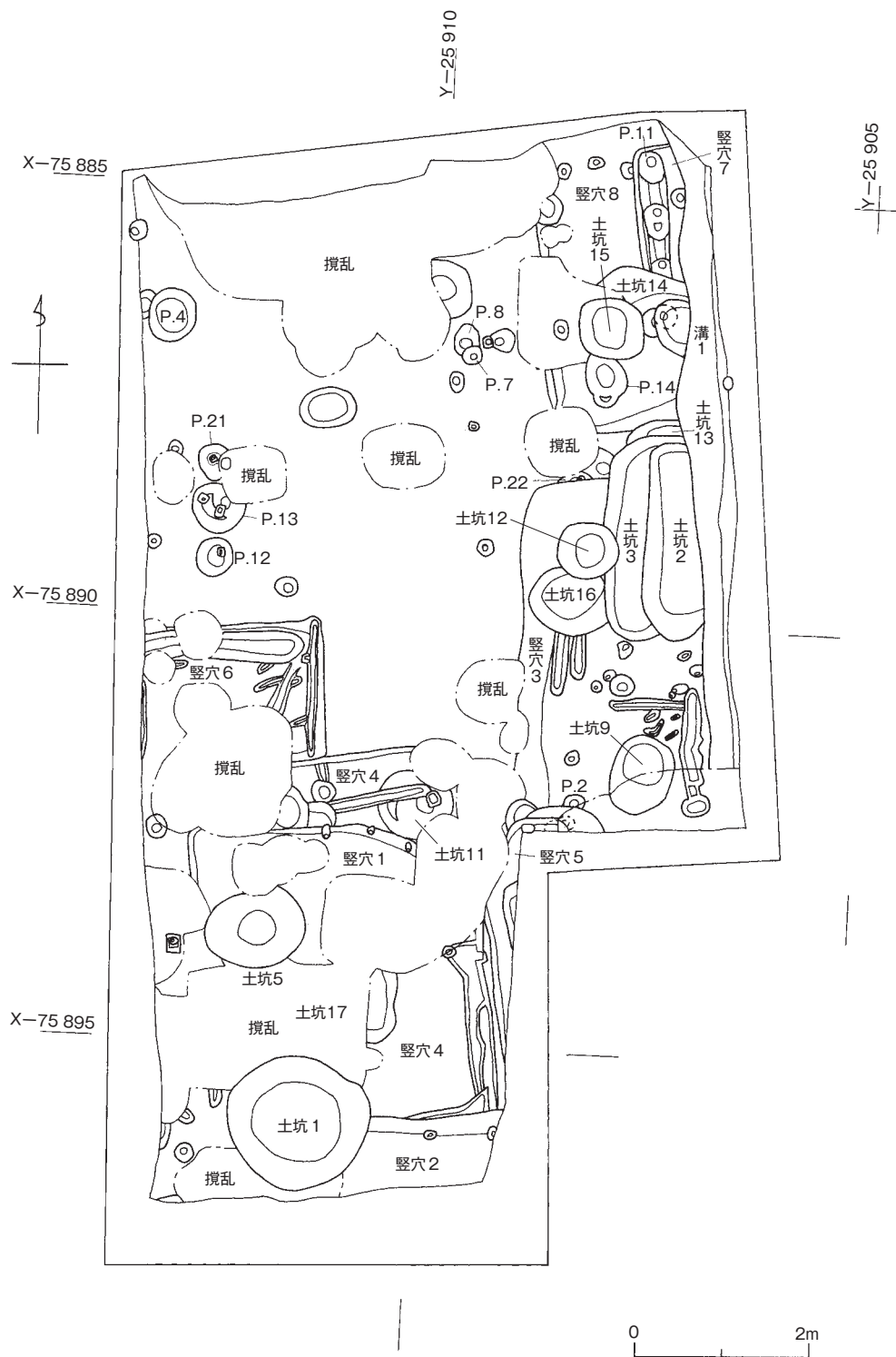


図7 I面遺構全図

2. I面

面の概要 (図7・8)

検出遺構：竖穴建物8基・土坑14基・小穴28口 I面出土遺物：土師器皿R種小型(1・2)

溝1 (図8)

位置：X(-71 948.39)～-71 949.45 Y(-28 737.67)～-28 738.78 断面形：V字形ないし逆台形
規模：幅(0.72 m)×長さ(7.56 m)×深さ1.06 m(底面高4.96 m) 主軸方位：N-8°-W 重複関係：

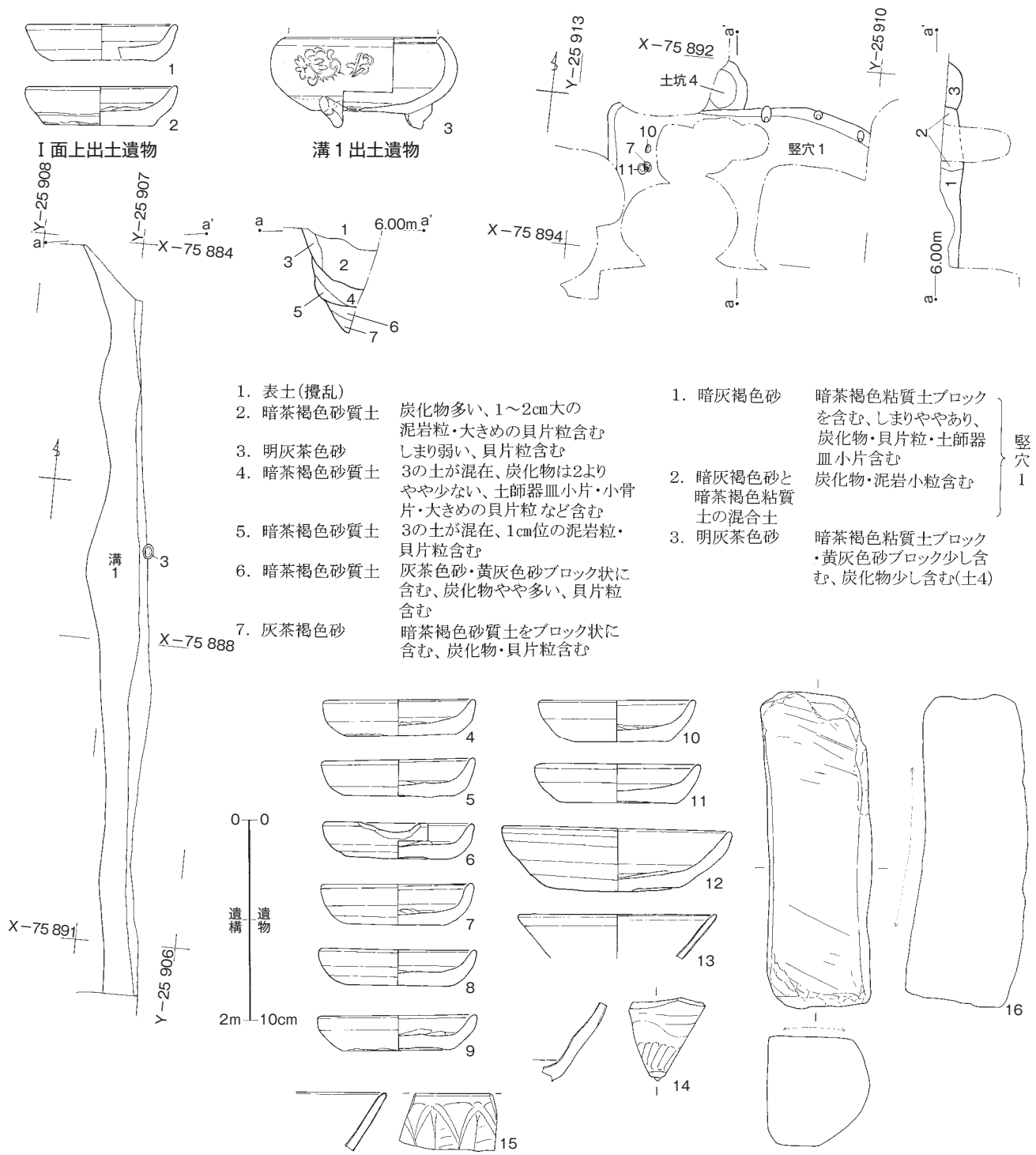
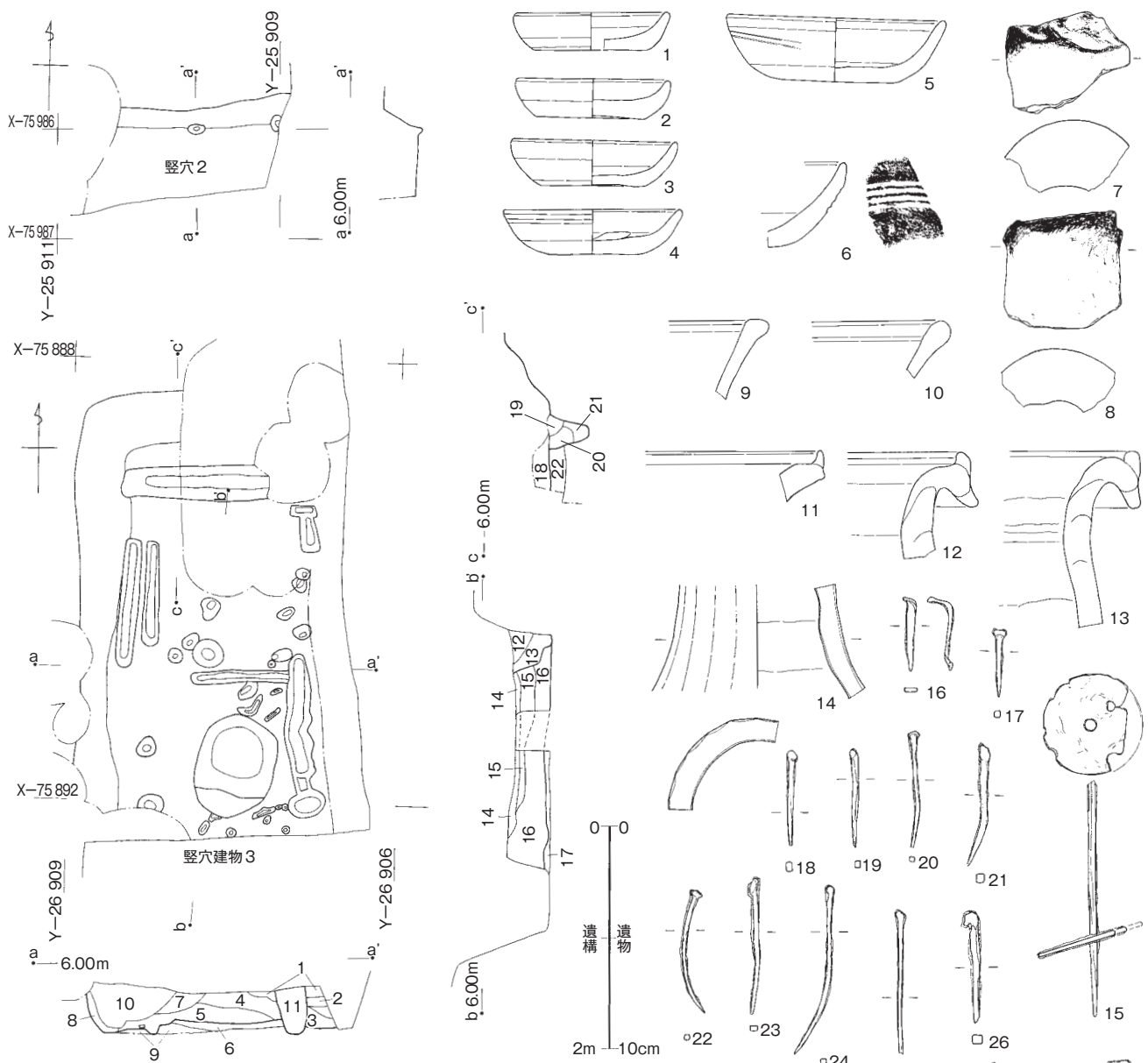


図8 I面出土遺物、溝1・竪穴1、同出土遺物

竪穴3・7・8、土坑2・3・13・14を切る 出土遺物：瀬戸香炉(3) 特記事項：切込み面を攪乱に切られるが、切合い及び土層断面からみて最も新しい遺構のひとつと思われる。溝最底部から出土した香炉は古瀬戸中Ⅱ期のものか。内底部中心に穴が穿たれ、欠損部の縁はきれいに整えられており、転用したものと思われる。

竪穴建物1(図8)

位置：X-75 892.43 ~ (-75 894.23) Y(-25 910.05) ~ (-25 913.30) 規模：東西191cm以上×南北109cm以上×深さ30cm(底面高5.38 m) 平面形：不明 断面形：逆台形 主軸方位：N-3°-W 重複関係：土坑5・7に切られる 出土遺物：土師器皿R種小型(4~11)・土師器皿R種大型(12)・白



1. 灰茶色砂 暗褐色弱砂質土多量に混在、大きめの炭化物・貝砂粒含む
2. 灰茶色砂 灰色海砂・暗褐色弱砂質土混在、大きめの炭化物・泥岩粒・貝砂粒含む
3. 灰茶色砂 灰色海砂が2より多めに混在、暗褐色弱砂質土塊混入、大きめの炭化物・貝砂粒含む
4. 灰茶色砂 3と同質、明茶灰色砂(地山土)・灰色海砂・暗茶褐色弱砂質土混入、大きめの炭化物・貝砂粒・泥微細粒・土師器皿片・貝片粒含む
5. 暗褐色弱砂質土 灰色海砂混入、炭化物多く含む、貝片・貝砂粒含む、泥粒微量含む
調査区土層断面1層と同じ
6. 灰色砂 暗褐色弱砂質土塊含む、貝砂粒多く含む、炭化物少量含む 調査区土層断面2層と同じ
7. 灰茶色砂 4・5・10に比べ灰色海砂多く、色調明るい、貝砂粒多量に含む、炭化物少量含む、土師器皿片微量含む
8. 灰茶色砂 暗褐色弱砂質土・灰色海砂多量に混入、暗茶灰色砂(地山土)塊含む、貝砂粒少量含む、貝片・泥粒微量含む
9. 灰色海砂 貝砂粒多量に含む(地山漸移層)
10. 暗褐色弱砂質土 5と同質、5より色調暗い、炭化物・貝砂粒多く含む、遺物片・土師器皿片ごく微量含む
調査区土層断面3層と同じ
11. 灰色砂
12. 明灰茶色砂 やや砂粒細かい、暗茶褐色粘質土塊・炭化物少し含む、土師器皿片・貝片含む } 土
13. 灰茶色砂 12より砂粒やや細かい、暗茶褐色粘質土塊・炭化物・泥岩粒・貝片少し含む } 3
14. 灰茶色砂 炭化物・貝片含む
15. 灰茶色砂 暗茶褐色粘質土塊混在、炭化物・貝片含む
16. 灰茶色砂 炭化物やや多く混じる、貝・土師器皿片・泥岩粒少量含む
17. 明灰茶色砂 炭化物含む
18. 暗褐色砂 しめった海砂と汚れた暗褐色砂混入、大きめの炭化物・礫片含む
19. 暗褐色砂 18と同質、炭化物やや多い
20. 灰茶色砂 海砂内に暗褐色砂やや多く含む、炭化物含む
21. 灰茶色砂 20に比べ色調暗い
22. 灰色砂 地山海砂に近い、暗褐色砂を含む、若干の炭化物含む

1~29
竪穴建物3出土

30・31
竪穴建物3床下出土

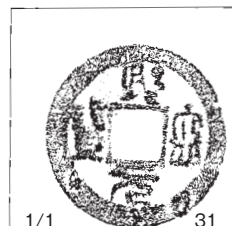


図9 竪穴建物2・3、同出土遺物

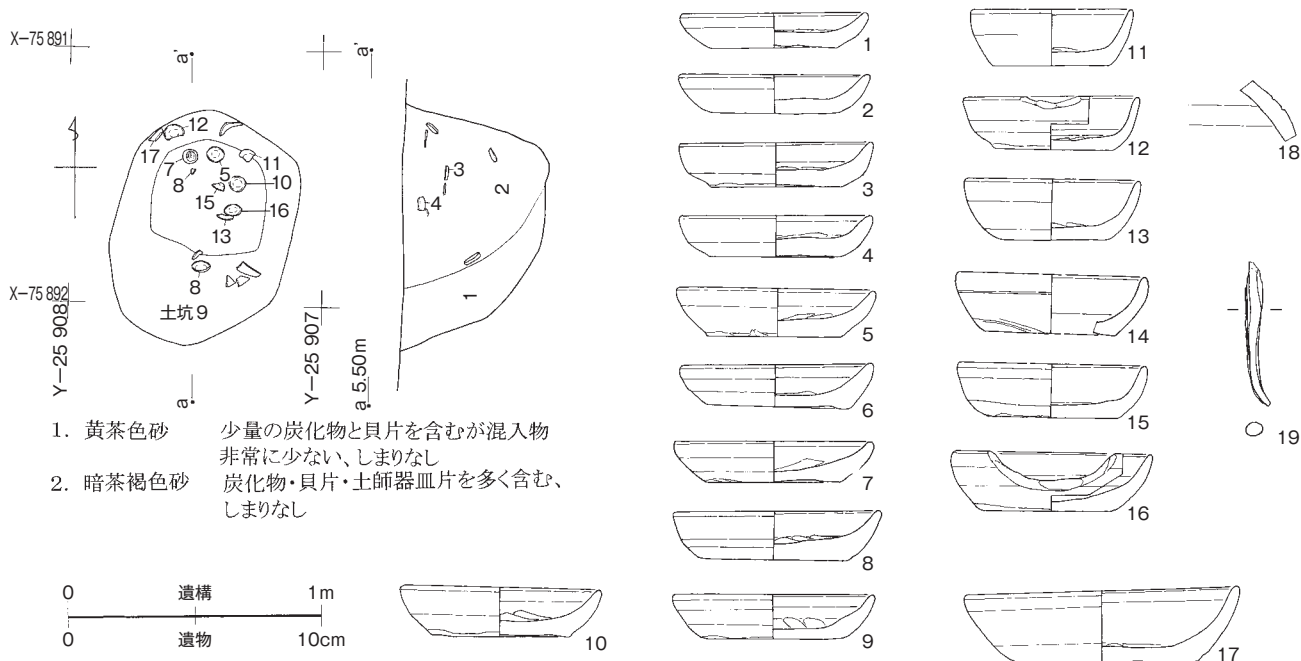


図10 土坑9、同出土遺物

磁口はげ皿 (13)・吉州窯天目茶碗 (14)・竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗 (15)・砥石中砥 (16)

竪穴建物2 (図9)

位置：X - 75 985.68 ~ (- 75 986.77) Y(- 25 908.90) ~ (- 25 911.77) 規模：東西255cm以上×南北158cm以上×深さ22cm (底面高5.72 m) 平面形：(隅丸方形) 断面形：浅い箱形 主軸方位：N - 11° - W 重複関係：竪穴4を切る、土坑1に切られる 出土遺物：図化可能遺物なし

竪穴建物3 (図9)

位置：X - 75 887.70 ~ (- 75 892.32) Y(- 25 906.23) ~ - 25 909.34 規模：東西247cm以上×南北408cm以上×深さ39cm (底面高5.39 m) 平面形：隅丸方形 断面形：逆台形 主軸方位：N - 4° - W 重複関係：溝1・土坑2・3・12・16に切られる 出土遺物：土師器皿R種小型(1~4)・土師器皿R種中型(5)・土師器皿R種大型(6)・鞆羽口(7・8)・尾張型片口鉢(9)・常滑片口鉢I類(10)・常滑甕(11~13)・竜泉窯青磁米色花瓶(14)鉄製品紡錘車か(15)・鉄釘(16~30)・熙寧元宝(17) 特記事項：床面から土坑9を検出した。恐らく竪穴建物3に伴うものである。9の尾張型片口鉢は瀬戸ないし猿投産と思われる。

土坑9 (図10)

位置：X - 75 891.24 ~ - 75 892.16 Y - 25 907.09 ~ - 25 907.16 規模：東西70cm×南北94cm×深さ57cm (底面高4.80 m) 平面形：不整楕円形 断面形：深鉢形 主軸方位：N - 7° - E 重複関係：なし 出土遺物：土師器皿R種小型(1~16)・土師器皿R種中型(17)・常滑壺(18)・鉄釘(19) 特記事項：前述したように、竪穴3に伴う土坑と思われる。

竪穴建物4 (図11)

位置：X(- 75 891.48) ~ (- 75 895.83) Y - 25 908.98 ~ (- 25 911.53) 規模：東西126cm以上×南北435cm以上×深さ21cm (底面高5.61 m) 平面形：(隅丸長方形) 断面形：浅い箱形 主軸方位：N - 9° - W 重複関係：竪穴1・2・6・土坑1・17に切られる 出土遺物：土師器皿R種小型(1)・鉄釘(2・3)・鉄釘ないし鉄製火箸(4) 特記事項：壁際床面の窪みは、切石ないし根太材の抜き痕か。

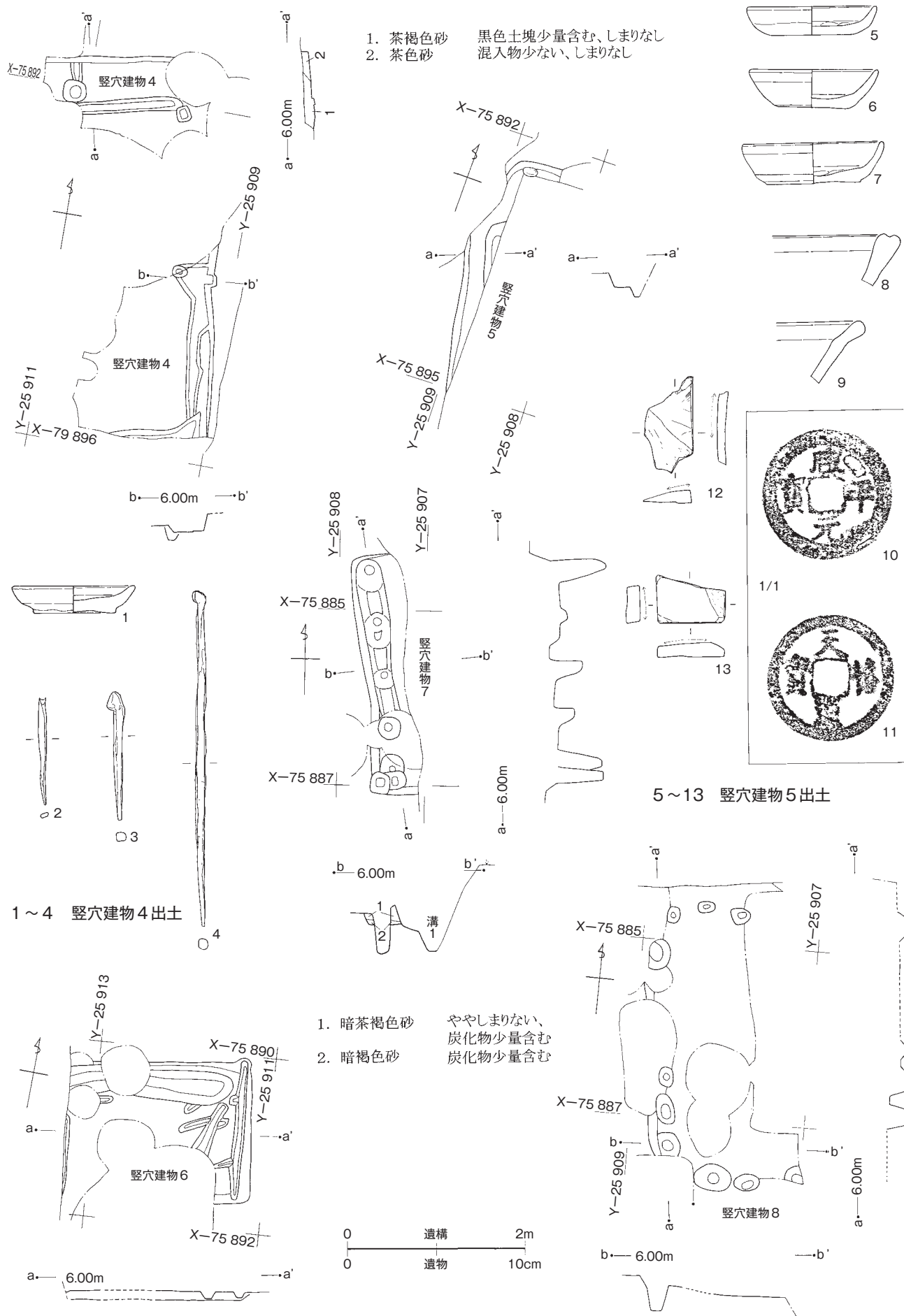


図11 竪穴建物4~8、竪穴建物4・5出土遺物

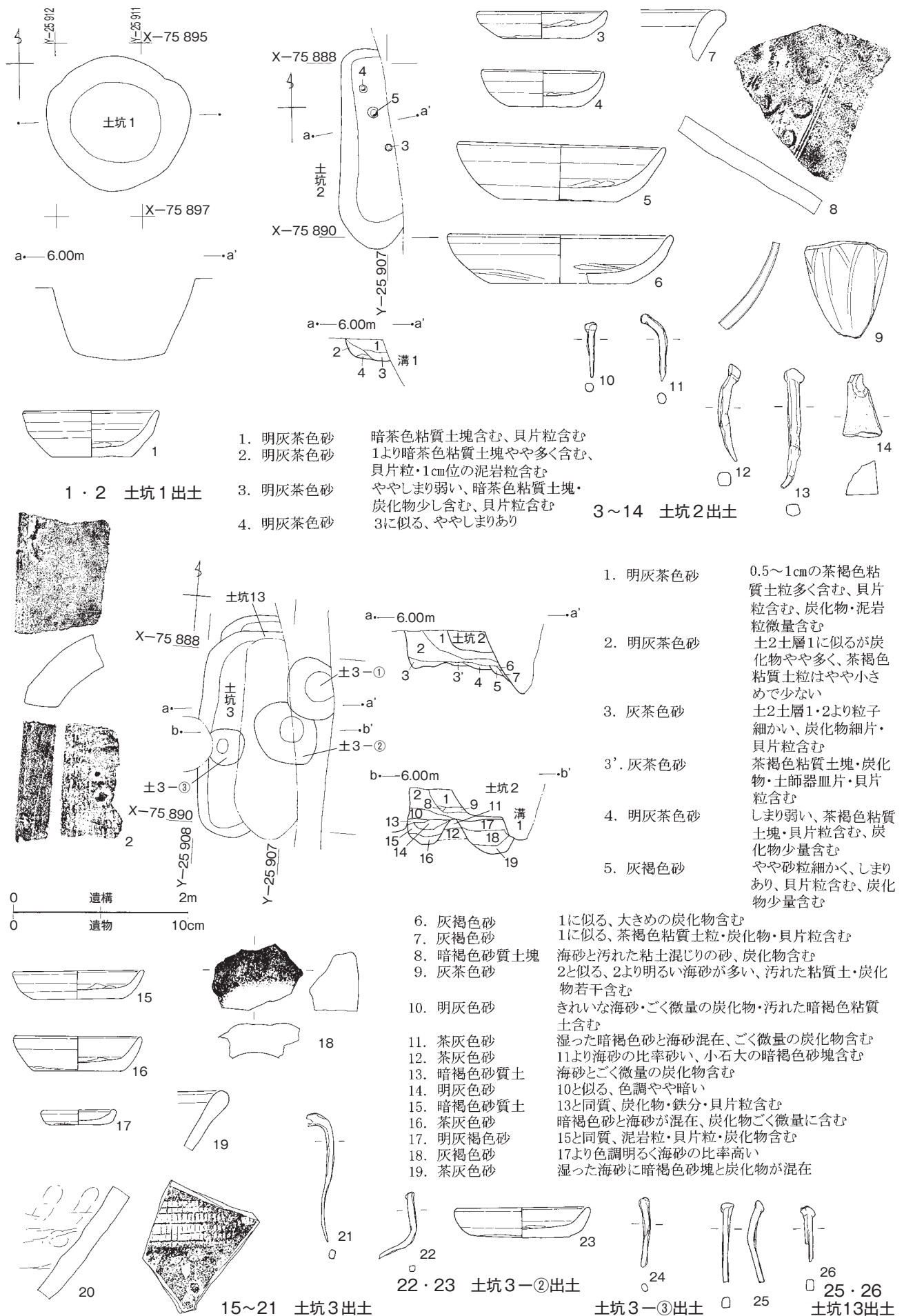


図12 土坑1~3・13、土坑2・3・13出土遺物

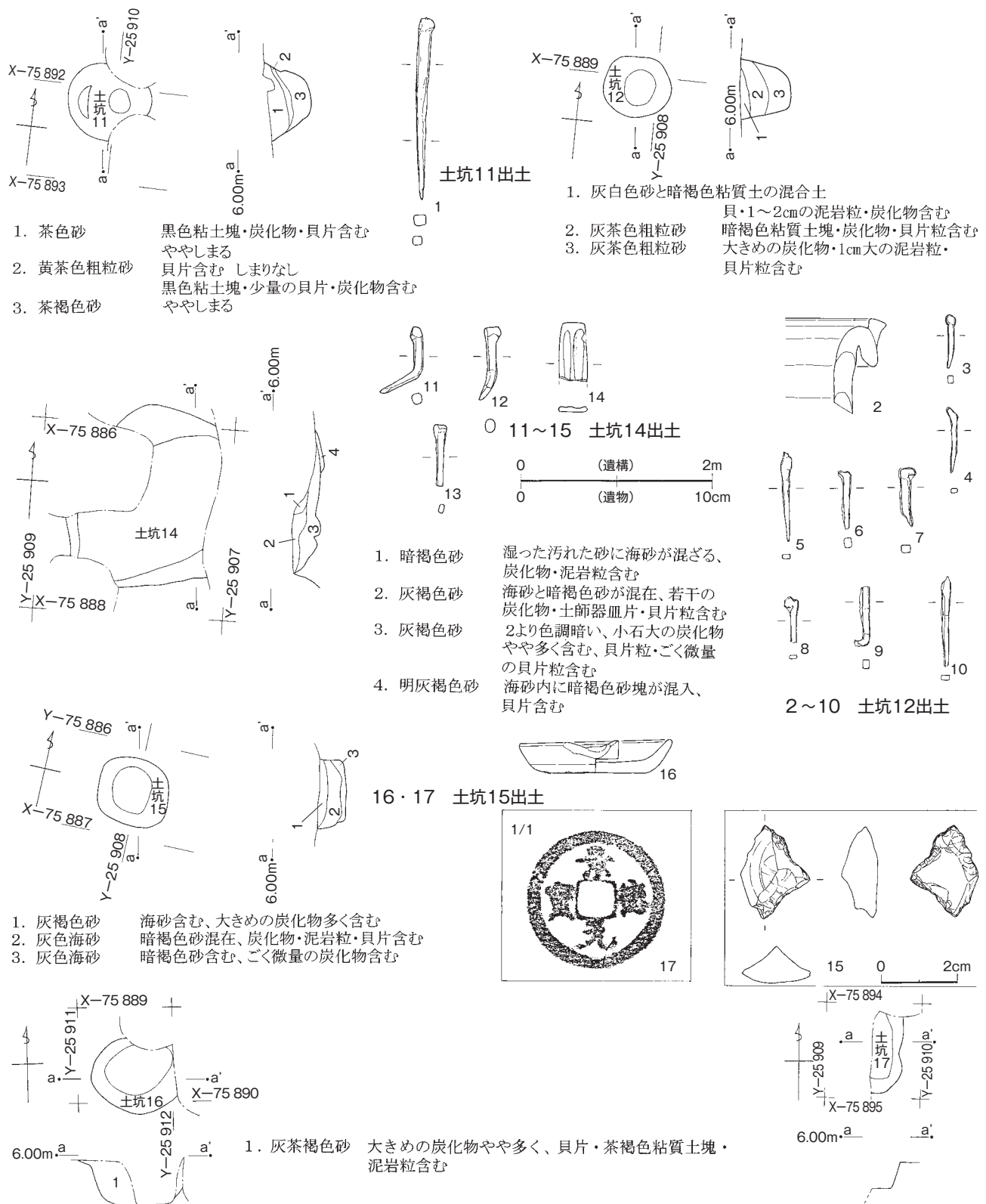


図13 土坑11・12・14~17、同出土遺物

竪穴建物5 (図11)

位置：X - 75 892.24 ~ (- 75 895.05) Y (- 25 908.41) ~ - 25 909.19 規模：東西72cm以上×南北281cm以上×深さ29cm (底面高5.53m) 平面形：隅丸長方形か 断面形：逆台形か 主軸方位：N - 7° - W 重複関係：竪穴建物3を切る 出土遺物：土師器皿R種小型 (5~7)・尾張型片口鉢 (8)・瀬戸折縁深皿 (9)・咸平元寶 (10)・天禧通寶 (11)・砥石仕上げ砥 (12・13)

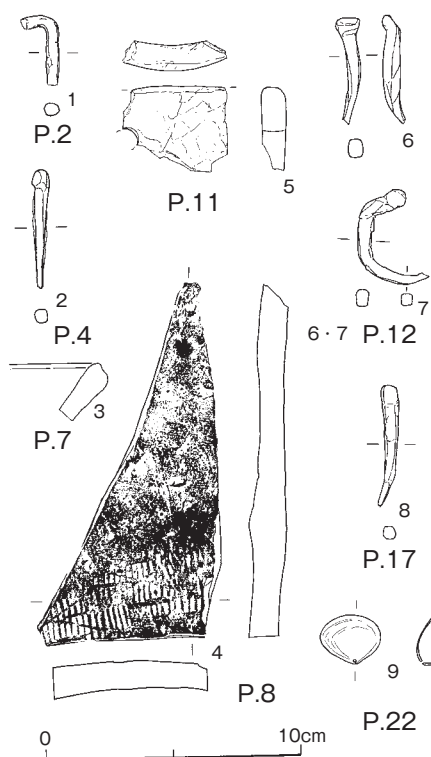


図14 I面小穴出土遺物

竪穴建物6 (図11)

位置：X - 75 890.03 ~ - 75 891.71 Y - 25 911.14 ~ (- 25 913.32)
 規模：東西207cm以上×南北164cm以上×深さ21cm (底面高5.61 m)
 平面形：隅丸方形 断面形：浅い逆台形 主軸方位：N - 6° - W
 重複関係：竪穴建物4を切る 出土遺物：凶化可能遺物なし 特記事項：根太材の抜き痕と思われる窪みは、竪穴の掘方より上面で検出。

竪穴建物7 (図11)

位置：X - 75 884.46 ~ - 75 887.11 Y(- 25 907.02) ~ - 25 907.87
 規模：東西60cm以上×南北274cm以上×深さ13cm (底面高5.40 m)
 平面形：隅丸長方形か 断面形：浅い箱形 主軸方位：N - 11° - W
 重複関係：溝1・土坑14に切られる 出土遺物：凶化可能遺物なし 特記事項：竪穴の壁際に、柱穴と思われる小穴列を検出。

竪穴建物8 (図11)

位置：X(- 75 884.53) ~ (- 75 887.79) Y(- 25 907.94) ~ (- 25 908.95)
 規模：東西171cm以上×南北330cm以上×深さ24cm (底面高5.54 m)
 平面形：隅丸長方形か 断面形：浅い箱形 主軸方位：N - 4° - W
 重複関係：竪穴建物8・土坑14・15に切られる 出土遺物：凶化可能遺物なし 特記事項：明確な掘り込みは確認できず、柱穴配置から竪穴建物と判断した。

出土遺物：凶化可能遺物なし 特記事項：明確な掘り込みは確認できず、柱穴配置から竪穴建物と判断した。

土坑1 (図12)

位置：X - 75 895.15 ~ - 75 896.71 Y - 25 910.46 ~ - 25 912.11 規模：東西167×南北157cm×深さ87cm (底面高4.80 m)
 平面形：不整楕円形 断面形：逆台形 主軸方位：N - 2° - W 重複関係：竪穴建物2・4を切る 出土遺物：土師器皿R種小型(1)・丸瓦(2)

土坑2 (図12)

位置：X - 75 887.83 ~ - 75 890.13 Y(- 25 906.82) ~ - 25 907.57 規模：東西72cm以上×南北232cm×深さ24cm (底面高5.57 m)
 平面形：不整長楕円形 断面形：浅皿形 主軸方位：N - 2° - E 重複関係：竪穴建物3・土坑3を切る、溝1に切られる 出土遺物：土師器皿R種小型(3・4)・土師器皿R種大型(5・6)・常滑片口鉢I類(7)・常滑甕(8)・竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗(9)・鉄釘(10~13)・鹿角加工品(14)

土坑3 (図12)

位置：X - 75 887.75 ~ - 75 890.14 Y(- 25 906.82) ~ - 25 908.04 規模：東西(115cm)×南北238cm×深さ42cm (底面高5.39 m)
 平面形：不整長楕円形 断面形：箱形 主軸方位：N - 5° - W 重複関係：竪穴建物3・土坑16を切る、溝1・土坑2・12に切られる 出土遺物：土師器皿R種小型(15・16)・土師器皿R種極小型(17)・轆羽口(18)・尾張型片口鉢(19)・常滑甕(20)・鉄釘(21・22) 特記事項：土坑底面より3基の小穴を検出。これらは土坑3に帰属するものと判断した。

土坑3-②出土遺物

土師器皿R種小型(23)

土坑3-③出土遺物 (図12)

土坑13 (図12)

位置：X - 75 887.54 ~ (- 75 887.91) Y(- 25 906.93) ~ (- 25 907.85) 規模：東西70cm以上×南北19cm以上×深さ24cm (底面高5.56 m)
 平面形：楕円形か 断面形：浅皿形 主軸方位：N - 84° - E 重

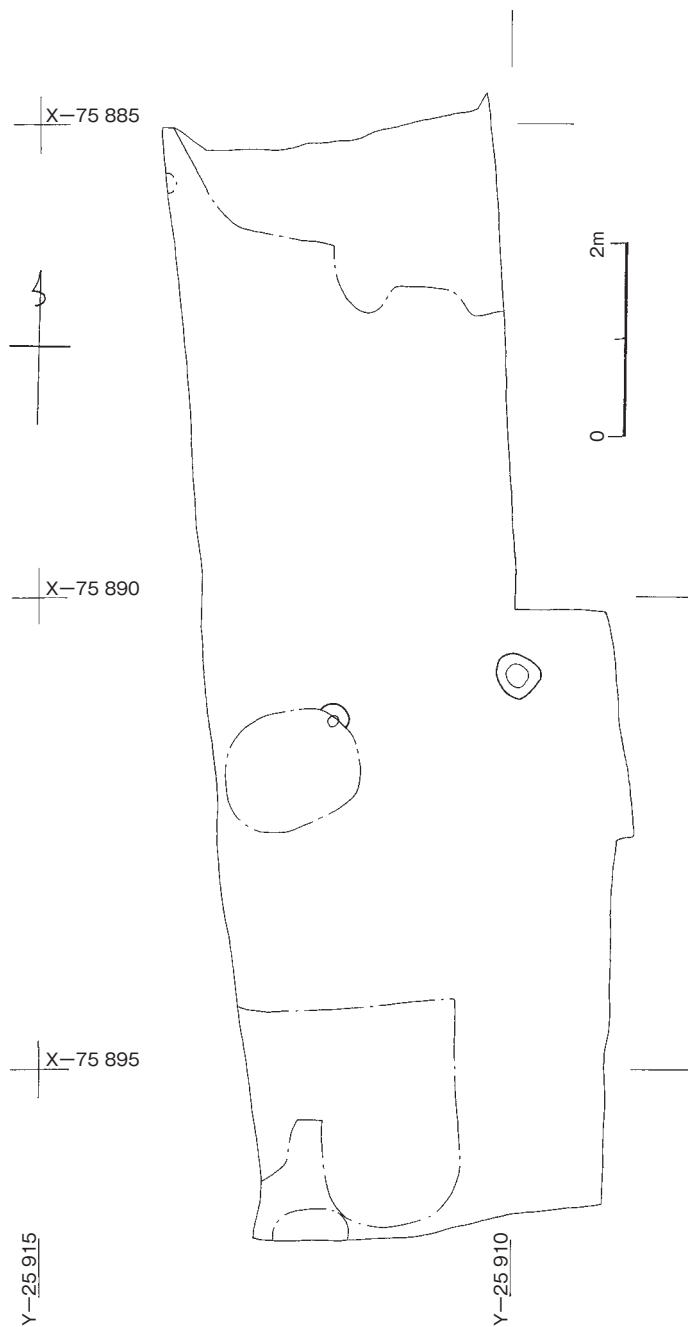


図15 II面遺構全図

cm×南北71cm×深さ29cm(底面高5.22m) 平面形:隅丸方形 断面形:箱形 主軸方位:N-86°-E
 重複関係:土坑14を切る 出土遺物:土師器皿R種小型(16)・景德元宝(17)

土坑16(図13)

位置:X-75 889.68~X-75 890.12 Y-25 908.86~Y-25 908.02 規模:東西(90cm)×南北81cm
 ×深さ50cm 平面形:楕円形 断面形:深鉢形 主軸方位:N-88°-W 重複関係:土坑3・12に切られる
 出土遺物:図化可能遺物なし

土坑17(図13)

位置:X-75 894.14~X-75 894.97 Y-25 910.20~(Y-25 910.53) 規模:東西(32cm)×南北
 88cm 平面形:隅丸方形 断面形:逆台形 主軸方位:N-0°-W 重複関係:竪穴建物4を切る 出
 土遺物:図化可能遺物なし

重複関係:土坑3に切られる 出土遺物:
 鉄釘(25・26)

土坑11(図13)

位置:X-75 891.75~-75 892.56 Y
 -25 909.62~-25 910.51 規模:東西
 89cm×南北80cm×深さ45cm(底面高5.23
 m) 平面形:円形 断面形:深鉢形
 主軸方位:N-87°-E 重複関係:なし
 出土遺物:鉄釘(1)

土坑12(図13)

位置:X-75 888.80~-75 889.53 Y
 -25 907.84~25 908.56 規模:東西71
 cm×南北64cm×深さ54cm(底面高5.42
 m) 平面形:不整楕円形 断面形:深
 鉢形 主軸方位:N-90°-W 重複関係:
 竪穴建物3・土坑3・16を切る 出土
 遺物:常滑甕(2)・鉄釘(3~10)

土坑14(図13)

位置:X-75 885.79~(-75 887.62)
 Y(-25 907.88)~(-25 908.72) 規模:
 東西162cm以上×南北190cm×深さ30cm
 (底面高5.49m) 平面形:隅丸方形か
 断面形:浅皿形 主軸方位:N-8°-W
 重複関係:竪穴建物7・8を切る、土坑
 15・小穴に切られる 出土遺物:石英片
 (11)・鉄釘(12~14)・不明骨製品(15)

土坑15(図13)

位置:X-75 886.16~-75 886.87 Y
 -25 907.66~-25 908.31 規模:東西75

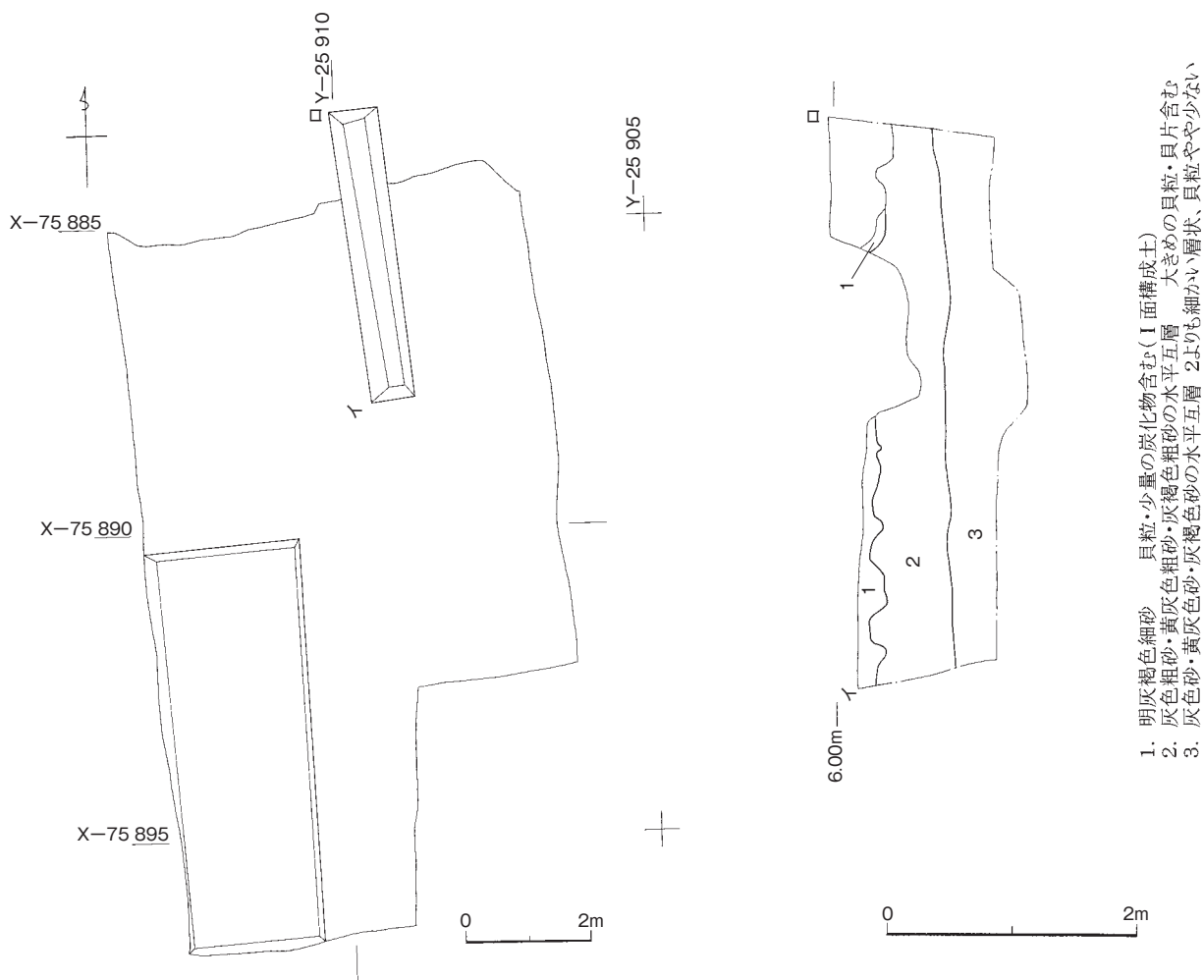


図16 深掘り設定図・深掘り土層断面

I面小穴出土遺物(図14)

(P.2) 鉄釘(1)・(P.4) 鉄釘(2)・(P.7) 常滑片口鉢I類(3)・(P.8) 常滑甕・(P.11) 滑石鍋転用品(5)・
(P.12) 鉄釘(6・7)・(P.17) 鉄釘(8)・(P.22) 貝製品(9)

3. II面(海成砂層面)

面の概要(図15)

検出遺構：小穴2 出土遺物：図化可能遺物なし

4. 最終確認深掘り

面の概要(図16)

検出遺構：なし 出土遺物：図化可能遺物なし

遺構外採集遺物(図17・18)

土師器皿R種小型(1~13)・土師器皿R種大型(14~16)・瓦器火鉢(17)・轆羽口(18~20)・渥美・湖西片口鉢(21)・常滑片口鉢I類(22~25・27・28) 瀬戸窯尾張型片口鉢(26)・常滑片口鉢II類(29・30)・渥美甕(31・40)・常滑甕(32~39・41・42)・瀬戸卸し皿(43)・瀬戸輪花型入子(44)・隅切軒丸瓦(45)・竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗(46~49)・竜泉窯青磁米色鎬蓮弁文碗(50)・元祐通寶(51)・銭種不明(52)・鉄釘(53~56)・砥石仕上げ砥(57・59・60)・砥石中砥(58・61)

(沖元)

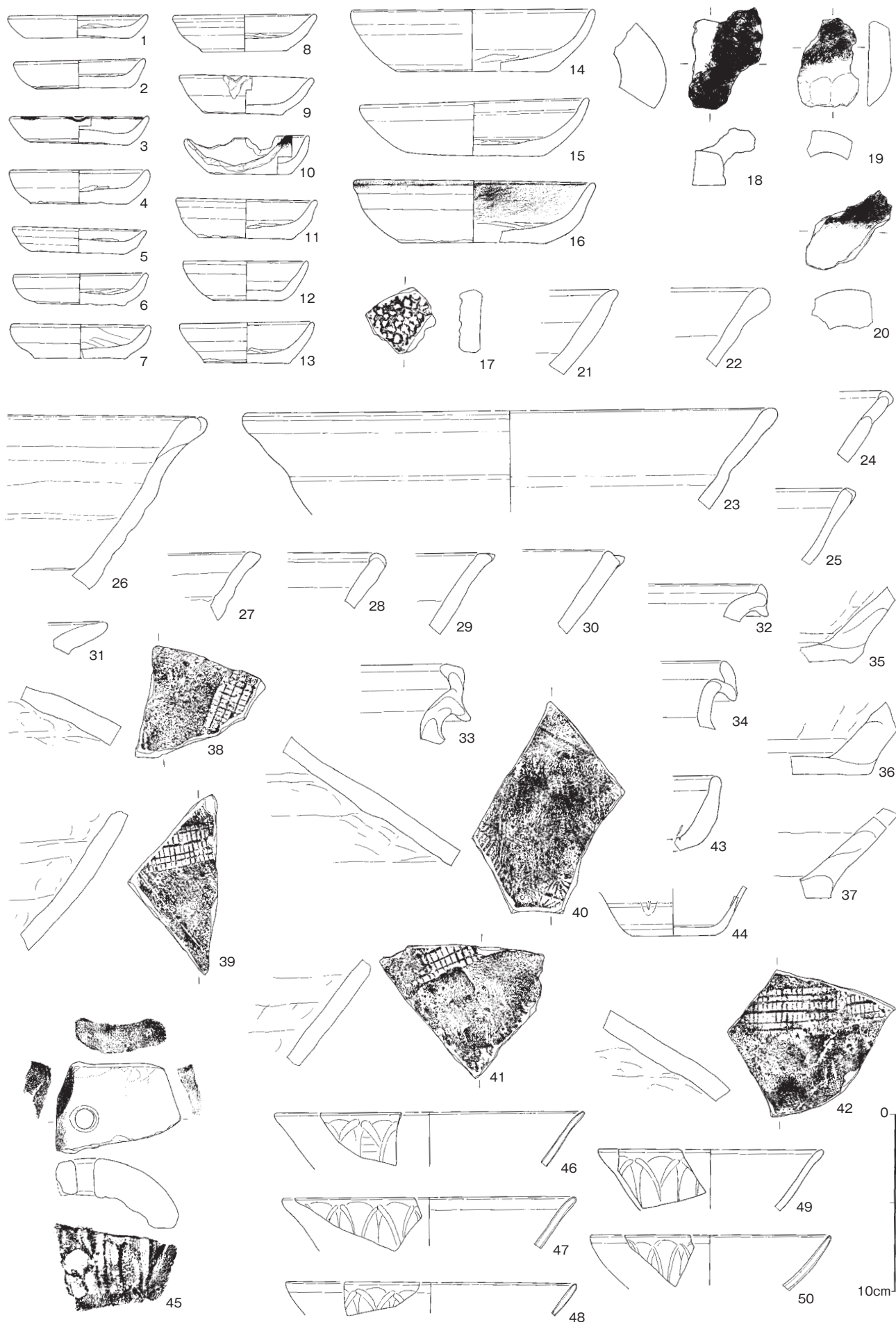


图17 遺構外出土遺物(1)

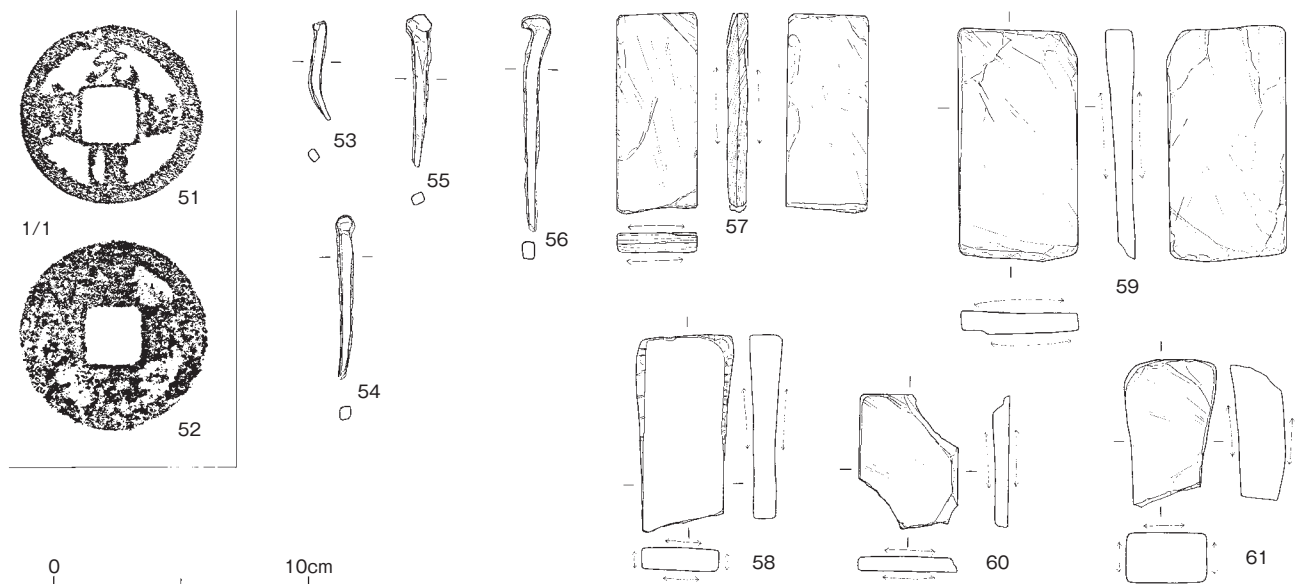


図18 遺構外出土遺物(2)

5. 遺物計量比について(表5)

出土した遺物のほとんどは遺構からの出土である。この内竪穴建物3に伴う土坑9からは土師器皿R種小型の集中出土がみられ、何らかの埋納儀礼が行われたと思われる。釘の出土が多いのは竪穴建物8軒の検出によるものと思われる。

全体の出土遺物を総破片数計量し、グラフにした。1997年に馬淵が試みた総破片数計量による中世都市鎌倉の食器消費の状況から論じた食文化のあり方(1997馬淵)をふまえ、遺跡の傾向を見ていきたい。

馬淵は市内を都市中核部・武家屋敷・町屋地区・海岸部の四つに分け、とりわけ土師器皿の消費のあり方に注目して比較検討している。今回の遺跡は砂丘地帯に位置するので海岸部と呼ぶべきであろう。遺構も海岸部に多い竪穴建物ばかりである。遺物の比較では、土師器皿、国産陶器、中国陶磁器の順で76.1:12.45:1.2となる。土師器皿は馬淵の海岸部の傾向よりやや多く、町屋地区的であり、国産陶磁器は少なくやはり町屋的であるが、中国陶磁器は全体に少なく海岸部的である。これに比べ、遺物の出土状況は先にも触れた土坑9による土師器皿R種の集中出土による埋納遺構があり、海岸部の様相が強い。土師器皿が海岸部の傾向より多いのは土坑9の集中出土によることとみてもいいだろう。国産陶磁器は馬淵の比較によると町屋地区より海岸部は倍多いが本地点では国産陶磁器は逆に少ない。これは、竪穴建物の性格・機能の差からくるのか、また調査地点が比較的町屋地区に近い事による可能性が高い。

(根本)

出土骨分類表

	不明	魚	獣	鳥
表採及び攪乱	29	4	1	
堅穴 3	4			1
堅穴 5			3	
土坑 2	2		3	
土坑 3 - ②			1	
土坑 9	2			9
土坑 12	3	1		
P4	1			
P13				1
1面精査時	1			
総計	42	5	8	11

出土貝類分類表

	シオフキガイ	クボガイ	ウミニナ	イボニシ	アカニシ	サルボウガイ	アカガイ	バイガイ	ハマグリ	イボキサゴ	カガミガイ	ホタテガイ	オオノガイ	ヒロカタビラガイ	ツメタガイ	チョウセンハナグリ	キサゴ	ダンベイキサゴ	アワビ	クロアワビ	サザエ	コシダカガンガラ	イガイ	ヘビガイ	チリボタン	イワガキ	
表採及び攪乱	1	1	1	1	16	1	1	3	55	5				1	11	12	2	13			3						
溝 1下層					3																						
堅穴 1		1							2														1				
堅穴 3		1			3		1		34	1					4			28	12			1					
堅穴 4									6									2									
堅穴 4 根太痕中									2																		
堅穴 5					2				9																		
堅穴 7 覆土									1									2								1	
土坑 2		1							23									20	2							3	
土坑 3		3			1				32									11	3		1						
土坑 3 - ①									1																		
土坑 3 - ②									4									5									
土坑 4									1									3									
土坑 5									3							2				1							
土坑 6					1				1		1							1									
土坑 7																											
土坑 9					2				9			1						16									
土坑 12					2				12					1				44									
土坑 13	1								1									3									
土坑 14									4									22	1								
土坑 15									1									4									
P.1													1														
P.4									6								1	13									
P.7																		2									
P.12																		1									
P.13									1																		
P.21																		1									
I面					1				6										1		3						
II区最終深掘り			1						1			1												1	1		
総計	2	7	2	1	31	1	2	3	215	5	1	1	3	1	16	14	3	191	19	1	7	1	1	1	1	1	4

表1 出土遺物観察表(1)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図8-1	I面	土師器皿 R種 小型	口径(7.4)cm 底径(5.0)cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む やや粗土
2	I面	土師器皿 R種 小型	口径7.4cm 底径5.4cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部に強い板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は赤橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子・白色粒・泥岩粒海面骨針を含む やや粗土
3	溝1	瀬戸 香炉	頸部径7.8cm 底径5.0cm 最大径9.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 底部中央に径0.4cmの穿孔あり 頸部から上は欠損、故意に打ち欠いてある 植木鉢として転用した可能性あり 脚3箇所貼り付け 胴部外面に4箇所印花文(宝相華紋か)を施す 胎土は淡灰黄色 淡緑色の灰釉が胴部下位まで掛かる
4	竪穴1	土師器皿 R種 小型	口径7.4cm 底径5.5cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子含む
5	竪穴1	土師器皿 R種 小型	口径7.4cm 底径5.5cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子・白色粒子含む
6	竪穴1	土師器皿 R種 小型	口径7.4cm 底径5.2cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・雲母・赤色粒子・白色粒子・海綿骨針含みやや砂質 口縁部の一部を打ち欠く
7	竪穴1	土師器皿 R種 小型	口径7.5cm 底径5.2cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・雲母・赤色粒子・泥岩粒を含む砂質土
8	竪穴1	土師器皿 R種 小型	口径7.8cm 底径5.4cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 外底部に強い板状圧痕 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・赤色粒子・白色粒子・泥岩粒を含む
9	竪穴1	土師器皿 R種 小型	口径7.8cm 底径5.8cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 外底部に薄く板状圧痕 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・白色粒子・雲母・泥岩粒を含みやや砂質
10	竪穴1	土師器皿 R種 小型	口径7.7cm 底径5.0cm 器高2.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子・白色粒子・気孔を含む
11	竪穴1	土師器皿 R種 小型	口径8.0cm 底径5.6cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤橙色、砂粒・雲母・赤色粒子・白色粒子・気孔・海綿骨針を含む
12	竪穴1	土師器皿 R種 大型	口径11.4cm 底径6.8cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子・白色粒子・海綿骨針を含む
13	竪穴1	白磁 口はげ皿	口径(9.9)cm ロクロ成形 素地は灰白色、黒色微粒子含む 釉は淡灰緑色乳不透明、気泡含む
14	竪穴1	吉州窯 天目茶碗	胴部下位片 ロクロ成形、外面下位にヘラ削り 胎土は鈍い黄褐色を呈し、やや肌理は粗いが堅緻 内面と外側の途中まで艶のある黒釉が掛かる
15	竪穴1	竜泉窯青磁 鏝蓮弁文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は白色、一部橙色で黒色微粒子含む 釉は水色半透明、貫入あり
16	竪穴1	砥石 中砥	遺存長(16.0)cm 幅5.2cm 厚さ5.5cm 砥面2面 淡緑灰色凝灰岩 上野産 13世紀後半か
図9-1	竪穴3	土師器皿 R種 小型	口径(6.8)cm 底径(5.0)cm 器高2.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨針・大き目の泥岩粒・気孔を含む粗土
2	竪穴3	土師器皿 R種 小型	口径(6.8)cm 底径5.1cm 器高2.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は鈍い橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・白色粒子・気孔を含む砂質粗土
3	竪穴3	土師器皿 R種 小型	口径7.4cm 底径4.8cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子を含む
4	竪穴3	土師器皿 R種 小型	口径(7.9)cm 底径4.4cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤褐色、微砂粒・雲母・赤色粒子・海面骨針を含む
5	竪穴3	土師器皿 R種 中型	口径(9.8)cm 底径(5.8)cm 器高2.9cm 回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は鈍い橙色、砂粒・雲母・赤色粒子・白色粒子・海綿骨針・泥岩粒を含む やや粗土
6	竪穴3	土師器皿 R種 大型	口縁～胴部片 回転ロクロ 底面糸切り 胎土は鈍い淡橙色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨針・砂粒・気孔含む砂質粗土 外側口縁部下に4条の沈線が巡る
7	竪穴3	轆 羽口	胎土は淡橙色～赤褐色、赤色粒子・白色粒子・気孔・多量の砂粒含む粗土
8	竪穴3	轆 羽口	胎土は灰褐色～赤褐色、赤色粒子・白色粒子・多量の砂粒・機構泥岩粒含む粗土
9	竪穴3	尾張型片口鉢	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色 瀬戸窯産の可能性が考えられる
10	竪穴3	常滑 片口鉢1類	口縁部片 輪積み成形後 胎土は灰色、黒色粒子・長石含む 口縁部に降灰
11	竪穴3	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石・石英・気孔を含む 器表は茶褐色 口縁部に降灰
12	竪穴3	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石・大粒石英・黒色粒子を含む 器表は褐色 口縁部に降灰
13	竪穴3	常滑 甕	口縁部～頸部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石・石英を含む 器表は褐色 口縁部上側・頸部外側に降灰
14	竪穴3	竜泉窯青磁米色 花瓶	頸部片 ロクロ成形 外側に縦方向の稜線 胎土は肌色～茶色で堅緻 釉は外側は灰黄色、内側は鈍い褐色で透明、厚めに掛かり、貫入が入る
15	竪穴3	不明鉄製品	紡錘車か? 円盤部分は直径4.6cm 径0.4cmの穿孔に遺存長10.7cmの棒状の軸が刺さる
16	竪穴3	鉄釘	長3.4cm 幅0.6cm 厚さ0.2cm 重さ1.4g
17	竪穴3	鉄釘	長3.2cm 幅0.3cm 厚さ0.3cm 重さ1.5g
18	竪穴3	鉄釘	遺存長(4.3)cm 幅0.4cm 厚さ0.4cm 重さ1.5g
19	竪穴3	鉄釘	長4.4cm 幅0.3cm 厚さ0.3cm 重さ2.1g
20	竪穴3	鉄釘	遺存長(5.3)cm 幅0.3cm 厚さ0.2cm 重さ g
21	竪穴3	鉄釘	遺存長(5.8)cm 幅0.3cm 厚さ0.4cm 重さ2.5g
22	竪穴3	鉄釘	長3.0cm 幅0.3cm 厚さ0.3cm 重さ1.4g
23	竪穴3	鉄釘	遺存長(5.3)cm 幅0.45cm 厚さ0.2cm 重さ2.3g
24	竪穴3	鉄釘	長8.1cm 幅0.2cm 厚さ0.3cm 重さ2.3g
25	竪穴3	鉄釘	遺存長(5.6)cm 幅0.4cm 厚さ0.2cm 重さ1.6g
26	竪穴3	鉄釘	遺存長(5.1)cm 幅0.45cm 厚さ0.4cm 重さ3.6g
27	竪穴3	鉄釘	遺存長(3.7)cm 幅0.4cm 厚さ0.4cm 重さ1.9g
28	竪穴3	鉄釘	遺存長(6.6)cm 幅0.45cm 厚さ0.3cm 重さ2.6g
29	竪穴3	鉄釘	長6.8cm 幅0.6cm 厚さ0.3cm 重さ5.9g
30	竪穴3床下	鉄釘	遺存長(7.0)cm 幅0.6cm 厚さ0.55cm 重さ3.58g
31	竪穴3床下	熙寧元寶	初鑄1068年 北宋 篆書
図10-1	土坑9	土師器皿 R種 小型	口径(7.2)cm 底径(5.0)cm 器高1.4cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・白色粒子・海綿骨針・泥岩粒を含みやや粗土
2	土坑9	土師器皿 R種 小型	口径(7.5)cm 底径(5.0)cm 器高1.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部に薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は鈍い橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・泥岩粒・白色粒子を含む砂質土

表2 出土遺物観察表(2)

挿出番号	出土遺構	種別	備考
3	土坑9	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.5cm 底径5.2cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は鈍い橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・泥岩粒・礫を含むやや砂質の粗土
4	土坑9	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.4cm 底径5.2cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・白色粒子・海綿骨針・泥岩粒を含むやや砂質土
5	土坑9	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.7cm 底径5.1cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は鈍い橙色、砂粒・赤色粒子・白色粒子・海綿骨針・泥岩粒・気孔を含む砂質土
6	土坑9	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.5cm 底径5.8cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針・白色粒子を含むやや砂質土
7	土坑9	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.8cm 底径5.4cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・白色粒子・海綿骨針・泥岩粒を含むやや砂質土
8	土坑9	土師器Ⅲ R種 小型	口径8.1cm 底径6.0cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 外底部板状圧痕 胎土は淡橙色、微粒・海綿骨針・赤色粒子・白色粒子・泥岩粒を含む砂質土
9	土坑9	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.9cm 底径5.9cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は鈍い橙色、砂粒・海綿骨針・赤色粒子・泥岩粒・白色粒子を含む砂質土
10	土坑9	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.7cm 底径5.5cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・泥岩粒を含む砂質土
11	土坑9	土師器Ⅲ R種 小型	口径(7.0)cm 底径4.8cm 器高2.2cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子・白色粒子・泥岩粒を含む
12	土坑9	土師器Ⅲ R種 小型	口径6.9cm 底径4.6cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子・白色粒子・海綿骨針を含む 口縁部の一部を打ち欠く
13	土坑9	土師器Ⅲ R種 小型	口径(6.8)cm 底径(4.0)cm 器高2.4cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・白色粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む
14	土坑9	土師器Ⅲ R種 小型	口径(7.5)cm 底径(5.1)cm 器高2.3cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子・海綿骨針を含む
15	土坑9	土師器Ⅲ R種 小型	口径(7.3)cm 底径5.2cm 器高2.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子・白色粒子を含むやや精良
16	土坑9	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.8cm 底径5.2cm 器高2.3cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤褐色、微砂粒・雲母・赤色粒子・白色粒子・海綿骨針を含む 口縁部の一部を打ち欠く
17	土坑9	土師器Ⅲ R種 中型	口径10.7cm 底径7.0cm 器高2.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨針・砂粒・雲母・白色粒子を含む
18	土坑9	常滑 壺	肩部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石・灰黒色粒子を含む 器表は褐色 浅い沈線が2本巡る
19	土坑9	鉄釘	遺存長(5.8)cm 幅0.7cm 厚さ0.5cm 重さ3.48g
図11-1	竪穴4	土師器Ⅲ R種 小型	口径(6.8)cm 底径(4.6)cm 器高1.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は鈍い黄褐色、砂粒・赤色粒子・白色粒子・礫を含むやや粗土
2	竪穴4	鉄釘	遺存長(6.2)cm 幅0.5cm 厚さ0.25cm 重さ2.7g
3	竪穴4	鉄釘	遺存長(7.3)cm 幅0.6cm 厚さ0.5cm 重さ4.2g
4	竪穴4	鉄製品	鉄釘ないし鉄製火箸 長40.1cm 幅0.55cm 厚さ0.6cm 重さ19.0g
5	竪穴5	土師器Ⅲ R種 小型	口径(7.2)cm 底径(4.6)cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤褐色、砂粒・赤色粒子・白色粒子を含むやや砂質
6	竪穴5	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.2cm 底径4.1cm 器高2.1cm 回転ロクロ 底面糸切り 外底部に薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、微砂粒・白色粒子を含む精良土
7	竪穴5	土師器Ⅲ R種 小型	口径(7.9)cm 底径(5.3)cm 器高2.3cm 回転ロクロ 底面糸切り 外底部に薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・雲母・赤色粒子・白色粒子を含む
8	竪穴5	尾張型片口鉢	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、微砂粒・白色粒を含む 内底面は使用により磨耗
9	竪穴5	瀬戸 折縁深皿	口縁部片 胎土は淡灰褐色、微砂粒・気孔を含みやや粗 灰緑色の灰釉が掛かるが、全体に被熱によりざらつく
10	竪穴5	咸平元寶	初鑄998年 北宋 楷書
11	竪穴5	天禧通寶	初鑄1017 北宋 楷書
12	竪穴5	砥石 仕上砥	遺存長(2.8)cm 幅4.0cm 最大厚0.8cm 砥面1面 切断面に鋸痕がない 淡褐色と淡赤褐色の群雲状石紋がある頁岩 出羽産 14世紀後半か
13	竪穴5	砥石 仕上砥	遺存長(5.5)cm 遺存幅(2.7)cm 最大厚0.8cm 砥面1面 切断面に鋸痕がない 淡褐色と淡赤褐色の群雲状石紋がある頁岩 鳴滝産
図12-1	土坑1	土師器Ⅲ R種 小型	口径(7.7)cm 底径(4.6)cm 器高2.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は鈍い橙色、砂粒・雲母・白色粒子を含む砂質土
2	土坑1	丸瓦	遺存長(7.1)cm 遺存幅(5.4)cm 厚2.0cm 胎土は白色粒子・黒色粒子・礫・気孔を少し含む肌理の細かい灰色土 凸面と側面は縦位へう削り後ナデ、凹面糸切り痕と布目痕あり 側面端から2.5cmほどまで暗灰色に変色し白い付着物あり
3	土坑2	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.3cm 底径4.5cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は鈍い橙色、砂粒・海綿骨針・雲母を含む砂質土
4	土坑2	土師器Ⅲ R種 小型	口径6.9cm 底径4.2cm 器高2.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子・白色粒子を含む
5	土坑2	土師器Ⅲ R種 大型	口径11.8cm 底径6.7cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部に薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨針・砂粒・雲母を含む砂質土
6	土坑2	土師器Ⅲ R種 大型	口径(12.8)cm 底径(7.8)cm 器高2.8cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨針・砂粒・雲母・泥岩粒を含む砂質土
7	土坑2	常滑 片口鉢I類	口縁部片 輪積み成形 胎土は明灰色、石英・長石・砂粒を含む
8	土坑2	常滑 甕	方部片 輪積み成形 胎土は灰色、砂粒・長石・石英・黒色粒子を含む 器表は茶褐色 方形の枠に唐草風文様の叩き目
9	土坑2	竜泉窯青磁 鎗蓮弁文碗	胴部片 ロクロ成形 灰色素地は淡灰色で 釉は青灰色半透明、貫入あり 内底面に擦過痕あり
10	土坑2	鉄釘	遺存長(3.3)cm 幅0.5cm 厚さ0.55cm 重さ1.5g
11	土坑2	鉄釘	長4.4cm 幅0.6cm 厚さ0.5cm 重さ2.3g
12	土坑2	鉄釘	長5.8cm 幅0.8cm 厚さ0.8cm 重さ5.33g
13	土坑2	鉄釘	遺存長(7.1)cm 幅0.8cm 厚さ0.65cm 重さ8.1g
14	土坑2	鹿角加工品	長3.6cm 幅2.2cm 厚さ1.9cm 切断面2面 滑らかに磨耗した面1面
15	土坑3	土師器Ⅲ R種 小型	口径(7.0)cm 底径(6.0)cm 器高1.3cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子を含む

表3 出土遺物観察表(3)

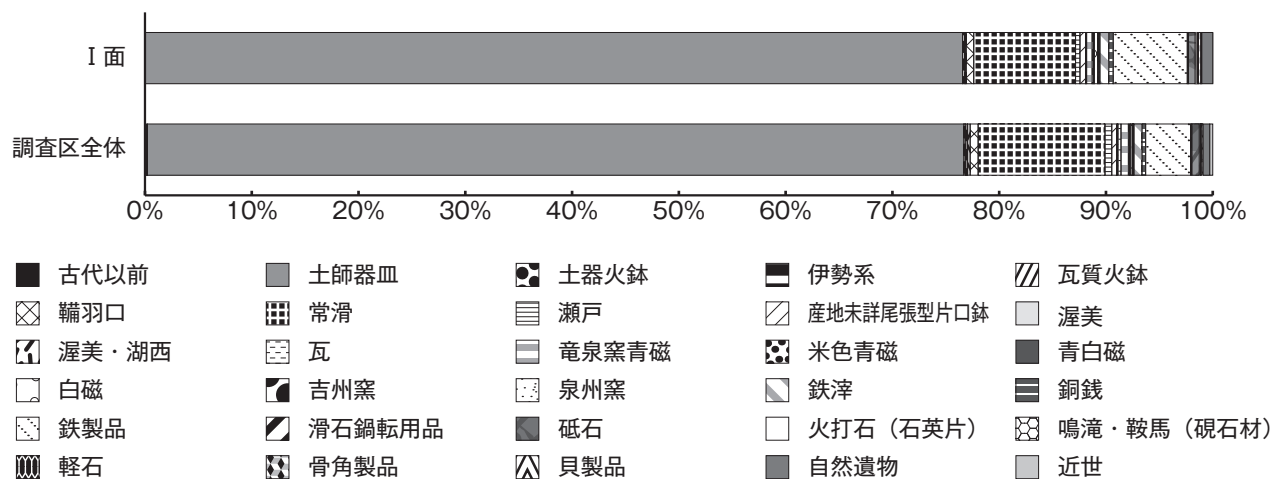
挿図番号	出土遺構	種別	備考
16	土坑3	土師器皿 R種 小型	口径(7.4)cm 底径(5.4)cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、微砂粒・海綿骨針・泥岩粒を含みや粗土
17	土坑3	土師器皿 R種 極小型	口径4.3cm 底径3.6cm 器高0.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は赤橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子・白色粒子を・海綿骨針含む
18	土坑3	輪 羽口	胎土は淡橙色～灰色、砂粒含む粗土
19	土坑3	尾張型片口鉢	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石・砂粒・灰黒色粒・気孔・礫を含む
20	土坑3	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石・石英・砂粒・灰黒色粒を含む 器表は灰色 格子叩き目
21	土坑3	鉄釘	長8.3cm 幅0.5cm 厚さ0.35cm 重さ7.5g
22	土坑3 P.2	鉄釘	遺存長(5.1)cm 幅0.35cm 厚さ0.3cm 重さ1.4g
23	土坑3 P.2	土師器皿 R種 小型	口径7.6cm 底径5.3cm 器高1.7cm 回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、微砂粒・海綿骨針・泥岩粒・白色粒子・赤色粒子を含みや粗土
24	土坑3 P.3	鉄釘	遺存長(4.0)cm 幅0.45cm 厚さ0.3cm 重さ1.6g
25	土坑1 3	鉄釘	遺存長(4.9)cm 幅0.5cm 厚さ0.6cm 重さ2.9g
26	土坑1 3	鉄釘	遺存長(3.3)cm 幅0.5cm 厚さ0.6cm 重さ2.1g
図13-1	土坑1 1	鉄釘	長9.6cm 幅0.9cm 厚さ0.6cm 重さ8.1g
2	土坑1 2	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は鈍い橙色、砂粒・礫・白色粒子・黒色粒子・気孔を含む 器表は灰褐色
3	土坑1 2	鉄釘	遺存長(2.8)cm 幅0.4cm 厚さ0.35cm 重さ1.1g
4	土坑1 2	鉄釘	遺存長(3.5)cm 幅0.4cm 厚さ0.2cm 重さ0.5g
5	土坑1 2	鉄釘	遺存長(4.9)cm 幅0.45cm 厚さ0.2cm 重さ0.7g
6	土坑1 2	鉄釘	遺存長(3.1)cm 幅0.6cm 厚さ0.45cm 重さ1.8g
7	土坑1 2	鉄釘	遺存長(3.1)cm 幅0.6cm 厚さ0.5cm 重さ2.3g
8	土坑1 2	鉄釘	遺存長(2.4)cm 幅0.4cm 厚さ0.15cm 重さ1.0g
9	土坑1 2	鉄釘	遺存長(3.5)cm 幅0.55cm 厚さ0.5cm 重さ2.1g
10	土坑1 2	鉄釘	遺存長(4.8)cm 幅0.5cm 厚さ0.3cm 重さ1.4g
11	土坑1 4	鉄釘	遺存長(4.6)cm 幅0.55cm 厚さ0.5cm 重さ3.3g
12	土坑1 4	鉄釘	遺存長(4.0)cm 幅0.7cm 厚さ0.5cm 重さ4.3g
13	土坑1 4	鉄釘	遺存長(3.2)cm 幅0.3cm 厚さ0.4cm 重さ1.6g
14	土坑1 4	不明骨製品	遺存長(3.0)cm 幅1.5cm 厚さ0.3cm 表面に斜めの研磨痕あり 筭の可能性あり
15	土坑1 4	石英片	最大長2.4cm 最大幅1.8cm 最大厚1.0cm 火打石の剥離片と考えられるが、明確な剥離痕はない
16	土坑1 5	土師器皿 R種 小型	口径8.0cm 底径5.5cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 外底部板状圧痕 胎土は鈍い橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・泥岩粒を含む 口縁部一部打ち欠き
17	土坑1 5	景德元寶	初鑄1004 北宋 楷書
図14-1	P. 2	鉄釘	遺存長(4.2)cm 幅0.6cm 厚さ0.5cm 重さ2.1g
2	P. 4	鉄釘	遺存長(4.7)cm 幅0.55cm 厚さ0.5cm 重さ3.3g
3	P. 7	常滑 片口鉢1類	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、石英・長石多く含む 内側に降灰
4	P. 8	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色、砂粒・石英・白色粒子・黒色粒子を含む 器表は茶褐色 格子に斜線の叩き目
5	P. 1 1	滑石鑄造用品?	遺存長(3.4)cm 遺存幅(4.1)cm 厚さ1.0cm 口縁部使用 穿孔あり 赤味を帯びた銀灰色
6	P. 1 2	鉄釘	遺存長(4.3)cm 幅0.6cm 厚さ0.7cm 重さ3.4g
7	P. 1 2	鉄釘	遺存長(6.5)cm 幅0.5cm 厚さ0.6cm 重さ4.6g
8	P. 1 7	鉄釘	遺存長(5.0)cm 幅0.5cm 厚さ0.45cm 重さ3.8g
9	P. 2 2	貝製品	小型のハマグリか? 殻頂部付近に0.1cmの穿孔あり
図17-1	遺構外	土師器皿 R種 小型	口径(7.8)cm 底径(6.0)cm 器高1.3cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子を含む
2	遺構外	土師器皿 R種 小型	口径7.3cm 底径5.4cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子を含む
3	遺構外	土師器皿 R種 小型	口径7.8cm 底径5.5cm 器高1.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子を含む
4	遺構外	土師器皿 R種 小型	口径(7.8)cm 底径(5.6)cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子を含む
5	遺構外	土師器皿 R種 小型	口径(7.5)cm 底径(5.5)cm 器高1.4cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子を含む
6	遺構外	土師器皿 R種 小型	口径7.5cm 底径5.0cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子を含む
7	遺構外	土師器皿 R種 小型	口径(7.8)cm 底径(5.2)cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子を含む
8	遺構外	土師器皿 R種 小型	口径(8.1)cm 底径(5.0)cm 器高2.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子を含む
9	遺構外	土師器皿 R種 小型	口径7.6cm 底径4.5cm 器高2.2cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子を含む
10	遺構外	土師器皿 R種 小型	口径7.0cm 底径4.6cm 器高2.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子を含む
11	遺構外	土師器皿 R種 小型	口径(7.9)cm 底径(5.4)cm 器高2.2cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子を含む
12	遺構外	土師器皿 R種 小型	口径7.0cm 底径3.9cm 器高2.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子を含む
13	遺構外	土師器皿 R種 小型	口径7.5cm 底径4.9cm 器高2.3cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・雲母・赤色粒子を含む
14	遺構外	土師器皿 R種 大型	口径(13.7)cm 底径(8.8)cm 器高3.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨針・砂粒・雲母・泥岩粒を含む砂質粗土
15	遺構外	土師器皿 R種 大型	口径13.0cm 底径8.1cm 器高3.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨針・砂粒・雲母・泥岩粒を含む砂質粗土
16	遺構外	土師器皿 R種 大型	口径(13.7)cm 底径(8.4)cm 器高3.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨針・砂粒・雲母・泥岩粒を含む砂質粗土
17	遺構外	瓦器 火鉢	胴部から底部片 胎土は灰色、白色粒子・黒色微粒子・雲母・礫含む 胴部下位縦方向櫛状工具痕、最下位は篋削り

表4 出土遺物観察表(4)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
18	遺構外	鞆 羽口	胎土は淡橙色、赤色粒子・雲母・白色粒子・多量の砂粒含む粗土
19	遺構外	鞆 羽口	胎土は淡橙色、赤色粒子・雲母・白色粒子・多量の砂粒含む粗土
20	遺構外	鞆 羽口	胎土は淡橙色、赤色粒子・雲母・白色粒子・多量の砂粒含む粗土
21	遺構外	渥美・湖西片口鉢	底部片 底径(11.2)cm 輪積み成形 貼り付け高台 胎土は明灰色、やや大粒の石英・長石・砂粒を含む 内底面は使用により磨耗
22	遺構外	常滑片口鉢Ⅰ類	底部片 底径(11.3)cm 輪積み成形 貼り付け高台 胎土は明灰色、やや大粒の石英・長石・砂粒を含む 内底面は使用により磨耗
23	遺構外	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部～胴部片 底口(30.2)cm 輪積み成形 貼り付け高台 胎土は明灰色、やや大粒の石英・長石・砂粒を含む 内底面は使用により磨耗
24	遺構外	常滑片口鉢Ⅰ類	底部片 底径(11.5)cm 輪積み成形 貼り付け高台 胎土は明灰色、やや大粒の石英・長石・砂粒を含む 内底面は使用により磨耗
25	遺構外	常滑片口鉢Ⅰ類	底部片 底径(11.6)cm 輪積み成形 貼り付け高台 胎土は明灰色、やや大粒の石英・長石・砂粒を含む 内底面は使用により磨耗
26	遺構外	瀬戸窯尾張型片口鉢	底部片 底径(11.7)cm 輪積み成形 貼り付け高台 胎土は明灰色、やや大粒の石英・長石・砂粒を含む 内底面は使用により磨耗
27	遺構外	常滑片口鉢Ⅰ類	底部片 底径(11.8)cm 輪積み成形 貼り付け高台 胎土は明灰色、やや大粒の石英・長石・砂粒を含む 内底面は使用により磨耗
28	遺構外	常滑片口鉢Ⅰ類	底部片 底径(11.9)cm 輪積み成形 貼り付け高台 胎土は明灰色、やや大粒の石英・長石・砂粒を含む 内底面は使用により磨耗
29	遺構外	常滑片口鉢Ⅱ類	底部片 胎土は灰色、砂粒・長石・石英含む 内側に降灰 内底面使用により磨耗
30	遺構外	常滑片口鉢Ⅱ類	底部片 胎土は灰色、砂粒・長石・石英含む 内側に降灰 内底面使用により磨耗
31	遺構外	渥美 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒子・砂粒含む 格子叩き目あり
32	遺構外	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒子・砂粒含む 格子叩き目あり
33	遺構外	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒子・砂粒含む 格子叩き目あり
34	遺構外	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒子・砂粒含む 格子叩き目あり
35	遺構外	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒子・砂粒含む 格子叩き目あり
36	遺構外	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒子・砂粒含む 格子叩き目あり
37	遺構外	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒子・砂粒含む 格子叩き目あり
38	遺構外	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒子・砂粒含む 格子叩き目あり
39	遺構外	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒子・砂粒含む 格子叩き目あり
40	遺構外	渥美 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒子・砂粒含む 格子叩き目あり
41	遺構外	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒子・砂粒含む 格子叩き目あり
42	遺構外	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒子・砂粒含む 格子叩き目あり
43	遺構外	瀬戸 卸し皿	口縁部片 胎土は灰白色、白色粒子・多量の砂粒・雲母含む
44	遺構外	瀬戸 輪花型入子	胴部から底部片 胎土は灰色、白色粒子・黒色微粒子・雲母・礫含む 胴部下位縦方向輪状工具痕、最下位は篋削り
45	遺構外	隅切軒丸瓦	遺存長(7.0)cm 遺存幅(7.7)cm 厚2.1cm 胎土は白色粒を少し含む肌理の細かく質量のある赤橙色土 凸面は縄目、凹面は平行条叩き文a類をナデ調整で消す 桶巻き作り 古代瓦(8世紀)
46	遺構外	竜泉窯青磁 錦蓮弁文碗	口縁部片 口径(17.7)cm ロクロ成形 素地は灰白色で黒色微粒子含む 釉は水色半透明、細かい貫入あり 内底面に擦過痕あり
47	遺構外	竜泉窯青磁 錦蓮弁文碗	口縁部片 口径(16.7)cm ロクロ成形 素地は灰白色で黒色微粒子含む 釉は水色半透明、細かい貫入あり 内底面に擦過痕あり
48	遺構外	竜泉窯青磁 錦蓮弁文碗	口縁部片 口径(16.7)cm ロクロ成形 素地は灰白色で黒色微粒子含む 釉は水色半透明、細かい貫入あり 内底面に擦過痕あり
49	遺構外	竜泉窯青磁 錦蓮弁文碗	口縁部片 口径(12.7)cm ロクロ成形 素地は灰白色で黒色微粒子含む 釉は水色半透明、細かい貫入あり 内底面に擦過痕あり
50	遺構外	竜泉窯青磁 米色 錦蓮弁文碗	口縁部片 口径(16.7)cm ロクロ成形 素地は灰白色で黒色微粒子含む 釉は水色半透明、細かい貫入あり 内底面に擦過痕あり
図18-51	遺構外	元祐通寶	初鑄108617 北宋 行書
52	遺構外	銭種不明銅銭	
53	遺構外	鉄釘	遺存長(4.0)cm 幅0.6cm 厚さ0.4cm 重さ2.1g
54	遺構外	鉄釘	遺存長(6.5)cm 幅0.55cm 厚さ0.5cm 重さ5.7g
55	遺構外	鉄釘	遺存長(6.0)cm 幅0.5cm 厚さ0.4cm 重さ6.3g
56	遺構外	鉄釘	遺存長(8.4)cm 幅0.75cm 厚さ0.5cm 重さ11.4g
57	遺構外	砥石 仕上砥	遺存長(8.0)cm 幅3.2cm 厚さ0.8cm 砥面2面 黄灰色 鳴滝産 側面の切り出し痕には斜め方向と横方向の2種類が混在、層の固さの違いから鋸を使い分けた可能性あり
58	遺構外	砥石 中砥	遺存長(7.6)cm 最大幅(3.9)cm 最大厚1.35cm 砥面4面 研ぎ灰汁により暗灰色に変色 天草産
59	遺構外	砥石 仕上砥	遺存長(9.1)cm 幅4.8cm 最大厚(1.2)cm 砥面2面 黄灰色 鳴滝産
60	遺構外	砥石 仕上砥	遺存長(5.4)cm 幅4.0cm 厚さ0.5cm 砥面2面 灰黄橙色 鳴滝産
61	遺構外	砥石 中砥	遺存長(5.8)cm 最大幅(3.7)cm 厚さ2.0cm 砥面4面 灰白色 上野産

表5 出土遺物計量表

		I 面		最終確認トレンチ		表採		総計		
古代以前	古墳時代	0	0.00%	0	0.00%	1	0.13%	1	0.06%	
	古代	0	0.00%	0	0.00%	3	0.39%	3	0.17%	
土器	土師器皿	T種	3	0.31%	0	0.00%	3	0.39%	6	0.35%
		R種	736	76.27%	2	100%	582	75.88%	1320	76.12%
	土器質	火鉢	2	0.21%	0	0.00%	1	0.13%	3	0.17%
	伊勢系	南伊勢系土鍋	1	0.10%	0	0.00%	1	0.13%	2	0.12%
		土風呂	0	0.00%	0	0.00%	1	0.13%	1	0.06%
瓦質土器	火鉢	0	0.00%	0	0.00%	4	0.52%	4	0.23%	
土製品	鞆羽口	7	0.73%	0	0.00%	6	0.78%	13	0.75%	
国産陶器	常滑	壺類	1	0.10%	0	0.00%	2	0.26%	3	0.17%
		甗	75	7.77%	0	0.00%	100	13.04%	175	10.09%
		片口鉢Ⅰ類	15	1.55%	0	0.00%	9	1.17%	24	1.38%
		片口鉢Ⅱ類	0	0.00%	0	0.00%	3	0.39%	3	0.17%
		摩耗陶片(甗)	1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
	瀬戸	壺類	2	0.21%	0	0.00%	2	0.26%	4	0.23%
		卸皿	0	0.00%	0	0.00%	1	0.13%	1	0.06%
		折縁深皿	1	0.10%	0	0.00%	1	0.13%	2	0.12%
		香炉	1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
		入子	0	0.00%	0	0.00%	1	0.13%	1	0.06%
	尾張産	尾張型片口鉢	0	0.00%	0	0.00%	2	0.26%	2	0.12%
	尾張産	尾張型片口鉢	5	0.52%	0	0.00%	3	0.39%	8	0.46%
	渥美	甗	0	0.00%	0	0.00%	1	0.13%	1	0.06%
	渥美・湖西	片口鉢	0	0.00%	0	0.00%	1	0.13%	1	0.06%
	瓦	平瓦	0	0.00%	0	0.00%	3	0.39%	3	0.17%
丸瓦		1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%	
隅切軒丸瓦		0	0.00%	0	0.00%	1	0.13%	1	0.06%	
青磁碗類		竜泉窯系Ⅱ類	3	0.31%	0	0.00%	7	0.91%	10	0.58%
船載	米色青磁	蓮弁文碗	0	0.00%	0	0.00%	1	0.13%	1	0.06%
		花瓶	1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
	青白磁	梅瓶	1	0.10%	0	0.00%	1	0.13%	2	0.12%
	白磁	口はげ皿	1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
		四耳壺	2	0.21%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.12%
	吉州窯	天目茶碗	1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
	泉州窯	緑釉洗	1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
	鉄滓	鉄滓	8	0.83%	0	0.00%	5	0.65%	13	0.75%
中国銅銭		4	0.41%	0	0.00%	2	0.26%	6	0.35%	
鉄		釘	65	6.74%	0	0.00%	6	0.78%	71	4.09%
	不明(紡錘車?)	1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%	
石製品	滑石	鍋転用品	1	0.10%	0	0.00%	1	0.13%	2	0.12%
		砥石	鳴滝	1	0.10%	0	0.00%	4	0.52%	5
	砥石	出羽	1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
		天草	3	0.31%	0	0.00%	1	0.13%	4	0.23%
		上野	1	0.10%	0	0.00%	1	0.13%	2	0.12%
	その他	火打石(石英片)	1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
石材・石	鳴滝・鞍馬(硯石材)	1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%	
	軽石	1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%	
骨角製品	鹿角加工品	1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%	
貝製品	不明(筭?)	1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%	
	不明	1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%	
自然遺物	炭化木	3	0.31%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.17%	
	骨	3	0.31%	0	0.00%	1	0.13%	4	0.23%	
	貝	4	0.41%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.23%	
近世	陶器	0	0.00%	0	0.00%	2	0.26%	2	0.12%	
	土器	0	0.00%	0	0.00%	3	0.39%	3	0.17%	
合計		965	100%	2	100%	767	100%	1734	100%	



第四章 まとめと考察

1. 遺跡の変遷と年代

出土遺物は古代を含むが、検出された遺構のほとんどは鎌倉時代中期以後であり、ここではそれを大きく4期に分けて変遷をみてみたい。

第Ⅰ期

本地点で最も豊かに遺構が展開する時期であり、大半の竪穴建物群がこの期に属する。竪穴建物群は切合い、構造、平面的な位置関係によりさらに5時期に細分できる。

I-1期: 調査区中央東寄りで見出された竪穴建物3である。層位・切合い関係からみて溝1・土坑群・竪穴建物5より古く、土坑9を伴う。大型で、床には根太木痕とみられる細い溝がある。

I-2期: 竪穴建物4・8が続く。4は調査区南側にあり、8は狭い空地を挟んで調査区北東にある。竪穴建物2・5・6・7および溝1・土坑群に切られる。竪穴建物4は1辺4.3m以上、8は3.5m以上といずれも大型で、前者が根太等床下構造の痕跡をとどめるのに対し、後者にそれは見られない。

I-3期: 調査区南側の竪穴建物2がこれに当たる。土坑1に切られ、竪穴建物4を切る。竪穴建物5との新旧関係は不明であるが竪穴建物5・6・7の群より大型で根太木等床下構造の痕跡はなく、I-2期寄りであり、後述するI-4期の竪穴建物には該当しづらいので、ここに収めた。遺構の大部分が調査区外にあるため、規模・構造とも不明な点が多い。

I-4期: 竪穴建物5・6・7が挙げられる。それぞれ路地のような空地を置いて調査区に分布する。溝1、土坑群に切られる。竪穴建物5・7とも調査区外に大半が延びるため明らかではないが、規模は小型化する傾向があり、根太木様の床下構造が見られる。

I-5期: 切合い関係からみて、竪穴建物群の中で一番新しいのは調査区南域にある竪穴建物1である。「竪穴建物」とはしたものの、構造の詳細は不明である。

遺構個別の詳細年代は不明だが、竪穴建物群は13世紀後半から14世紀初頭に属する。溝1が14世紀中葉の遺構なので、その頃には廃絶したと考えられる。また、竪穴建物は主軸方位を概ね同じくしており、それは後述する第Ⅲ期の溝1とも共通する。構築物が変わっても土地利用の基軸は踏襲されていたことがわかる。

第Ⅱ期

切合い関係からみて第Ⅰ期の竪穴建物群より新しい遺構群として、土坑があげられる。形態はまちまちであり、用途は特定できない。多くは竪穴建物を切り、調査区東側で溝1に切られる。年代は第Ⅰ期とさほど変わらず、13世紀後半から14世紀初頭の幅が与えられよう。

第Ⅲ期

溝1が相当する。竪穴建物・土坑群を切り、調査区東側で南北方向に走行する。出土した古瀬戸香炉により14世紀中葉頃の年代が与えられる。土坑・竪穴建物を切るが、前述したように遺跡の基本軸は踏襲されていたと考えられる。

第Ⅳ期

近世の竪穴建物1基のみが見出された。切合い関係はほとんどの遺構より新しい。年代を特定できる遺物の出土はみられなかったが、堆積土から年代を判断した。本址と共通の構造を持つ竪穴遺構が六浦道に面した大倉幕府周辺遺跡群の一角で見出されている(馬淵1999)。遺構は過半部が北側調査区外にあるため全貌は明らかではないが、溝1と直交関係にあり、主軸方位は竪穴建物群と変わらない。近世に

においてもこの一帯では中世からの方位規制が踏襲されていることがわかる。

その他の時期

検出遺構についてはおよそ上述のような展開がたどれる。しかし、出土遺物にはほかにも興味深い点が認められるので簡単に指摘しておきたい。

古墳時代後期～律令時代の土器4片が出土している。古墳時代後期の群集墳といわれる「向原古墳群」に至近の位置にあること、調査区の北面する県道に初期東海道(AD.645～771)の可能性が指摘できること、古代の鎌倉評・郡家も指呼の距離にあること、等、本地点一帯が古代に重要な場所であったことは間違いない。

中世でみれば、遺構の主体は13世紀後半から14世紀初頭、すなわち鎌倉時代後期にあることは明白だが、遺物のうちには12世紀末～13世紀初期とみられる渥美窯の甕口縁と、実測に至らない小片ながら手づくね種の土師器皿も6片認められる。鎌倉時代前期からこの一帯が開かれていたことがわかる。また、14世紀後半以降のものもあり、中世後期にも人の往来があったことがうかがえる。

2. まとめに代えて

検出の竪穴建物について

調査地点の周辺はここと同様、竪穴建物が展開する。しかし、隣地でありながら由比ガ浜三丁目18番12地点とはやや様相を異にする。現在でも標高差は0.5m前後あり段差を持つが、この差は南東に向かって落ちていく風成砂の傾斜を反映しているので、中世以来のものとして推測できる。また段を境に遺構の密度に差があることから、地境も中世から続いてきた可能性がある。

由比ガ浜三丁目18番12地点は生活面を3面とらえ、調査区西側では竪穴建物の密度が高く、頻繁な建て替えが認められる。一方調査区の東側では多数の柱穴が検出され、柵列もしくは掘立柱建物の存在が窺われる。年代は13世紀末から15世紀前葉とされているが、13世紀中葉以前と目される手づくね土師器皿の出土も多く、同じく龍泉窯画花文碗の出土も見られる。それに対し今回の調査地点では、手づくね種は小片6片を数えるのみであり、遺跡の年代幅も13世紀後半から14世紀中頃、すなわち鎌倉時代後期にほぼ限定される。生活面も竪穴建物主体の1面が捉えられたにとどまり、土坑の検出が顕著であった。この差異が何によるかは不明であるが都市構造を考える上で重要な差異を示している可能性があるため今後注視していく必要がある。

竪穴建物に対し現在まで多くの人により様々な検討がなされてきた。その機能として、物資収蔵の庫(河野2004)・居住建物(斉木1989)・店棚・工房・収蔵(宗墓1999)が出土遺物や構造分類によりあげられてきた。しかし、竪穴建物そのものの性格把握には立地的環境、付属施設、出土資料などの総合的な判断が必要であり、構造分類で機能は特定できていない。

今回の調査地は海岸砂丘の北辺に位置する。「鎌倉中」の「周縁」に近いが、馬淵和雄は、内にも外にも属さない境界領域として、彼岸と此岸の境を示す浜の大鳥居と、聖域である八幡宮境内との境を示す下馬という二つの標識に挟まれた「両義的な場所」としている(馬淵1994・1998)。しかし過去の発掘事例からそれを推測するのは未だ困難である。

竪穴建物は得宗貿易最盛期にそのピークを同じく迎えるが、竪穴建物1基の存続時期は短く、同じような場所に何度も掘り直され人為的に埋め戻されるとの評価が有力である。このことから見えることは何であろうか、馬淵は竪穴建物を倉庫とし、恒久的なものではなく基本的には貨物の一時的な集積施設であり、転送が終ると壊される、という。そしてその理由の一端としてそれは砂地だから可能としてい

る(馬淵1994・1995)。が果たしてそうだろうか、竪穴建物は粘質土にも何度も建て替えられるし(佐藤1994)、出土資料からみると職能民の存在も無視できない。また堂込秀人は竪穴建物を工房とした上で、民俗的、習俗的な理由から埋め戻された可能性もあると指摘する(堂込2004)。原廣志は建築構造上考えられることとして二階建ての建物を想定し、重層的な建物であり、機能も複数にわたる可能性があるという(原氏教示による)。

竪穴建物には多様な機能が想定される。竪穴建物の群集する海浜部は馬淵の言うとおりの「繁華な場」(馬淵1991)であったことが窺える。度重なる掘り直しは宗墓の言うとおりの、柱のない広い室内区間の獲得を目的とした壁構造建物であり(宗墓1999)、加えて半地下という構造上、湧水による影響も考えられるので、それゆえ耐久性のない建物であるため頻りに建て替えの必要があったのだろう。

竪穴建物が海浜部に林立していたことは明らかである。しかし、野放図に立ち並んでいたわけではなく、土地利用に規制があったことが文献資料から読み取れ(鈴木2007)、調査事例からも地割りの存在が看取される。同じような場所に重ねて構築される理由の一端は、そこにあるのではないだろうか。

ただ、「存続時期が短く、何度も掘り直す」という竪穴建物の定義には一抹の疑問もある。竪穴建物は13世紀第2四半期頃に発生し、14世紀前半頃に終焉を向かえる。概ね百年の間に4、5回の建て直しが考えられ、建物として20年前後の耐久年数を想定できるのではないか。

(根本)

引用・参考文献(本報全体に共通)

- 上本進二 2000「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『池子棧敷戸遺跡』東国歴史考古学研究所
大上周三 2009「鎌倉郡衙と官衛関連遺構について」『神奈川考古』45 神奈川考古同人会
押木弘己 2011「米町遺跡の調査」『かまくら考古』10 鎌倉考古学研究所
河野真知郎 2004「政権都市「鎌倉」－考古学的研究のこの十年－」『政権都市(中世都市研究)』9 新人物往来社
木下良 1997『神奈川の古代道』藤沢市教育委員会
斉木秀雄 1989「長谷小路周辺遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』5 鎌倉市教育委員会
佐藤仁彦 1994「若宮大路周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10 鎌倉市教育委員会
宗墓秀明 1999「方形竪穴建物の機能と変遷」『考古学研究』46 考古学研究会
宗墓秀明 2008「中世鎌倉の都市性」『白門考古論叢』中央大学考古学研究会
鈴木弘太 2007「中世鎌倉における「浜地」と「町屋」」『考古論叢 神奈河』15 神奈川考古学会
田代郁夫 1998「大町大路」と「小町大路」－中世都市の「町」と「路」－『湘南考古学同人会会報』73 湘南考古学同人会
馬淵和雄 2007「若宮大路周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』20 鎌倉市教育委員会
堂込秀人 2003「建穴建物」『季刊考古学』85 (株) 雄山閣
馬淵和雄 1997「食器から見た中世都市鎌倉」『国立歴史民族博物館研究報告』71 国立歴史民俗博物館
馬淵和雄 1991「都市の周縁、または周縁の都市」『青山考古』9 青山考古学会
馬淵和雄 1994「武士の都鎌倉」『中世の風景を読む』2 新人物往来社
馬淵和雄 1998『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社
馬淵和雄 1999『大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目620番5地点発掘調査報告』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団



1-1

六地藏方向から調査地点を望む(▼の下)



1-2 下馬四ツ角方向から調査地点を望む(▼の下)



1-4 近世竪穴(北から)



1-3 近世竪穴(西から)



2-1 1区全景(南から)



2-3 2区全景(東から)



2-2 1区全景(西から)



2-4 2区全景(南から)



2-5 溝1(南から)



2-6 溝1北壁土層断面



3-1 溝1内瀬戸香炉(図8-3)出土状況(西から)



3-2 1区豎穴3(南から)



3-3 2区豎穴3(東から)



3-4 2区豎穴3(南から)



3-5 1区豎穴3内土坑9(南から)



3-6 1区北壁土層断面豎穴3部分



4-1 1区豎穴4 (南から)



4-3 1区豎穴6床面検出状況 (北から)



4-2 1区豎穴4東壁束柱痕 (南西より)



4-4 1区豎穴6掘り方 (北から)



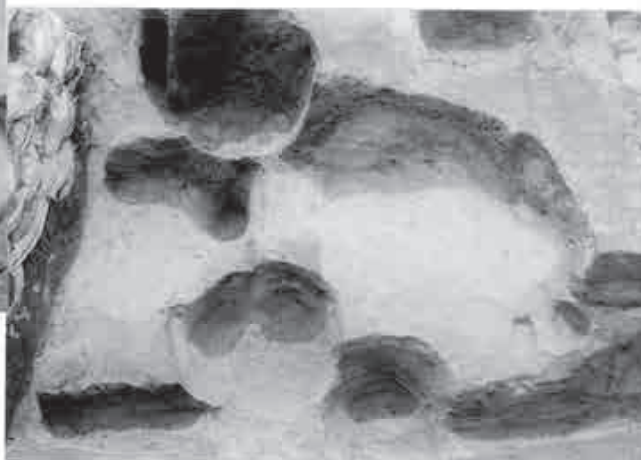
4-5 2区豎穴7柱穴列 (南から)



4-6 2区豎穴7 (東から)



5-1 2区縦穴8 (東から)



5-3 2区土坑3 (東から)



5-2
2区土坑2 (南から)



5-4 土坑3中央ベルト土層断面 (南から)



5-5 (左から) P.12、P.13、P.21 (東から)



5-6 P.14 (左)、土坑15 (東から)



6-1

2区確認深掘り全景(南から)

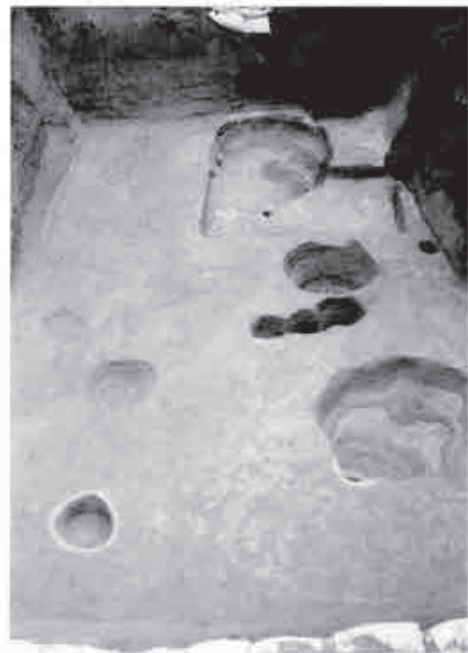


6-3

1区風成砂下の確認面(南から)



6-2 2区確認深掘り西壁土層断面



6-4

1区風成砂下層の小穴(北から)



6-5

1区海成砂層面全景(南から)



6-6 2区海成砂層面全景(南から)

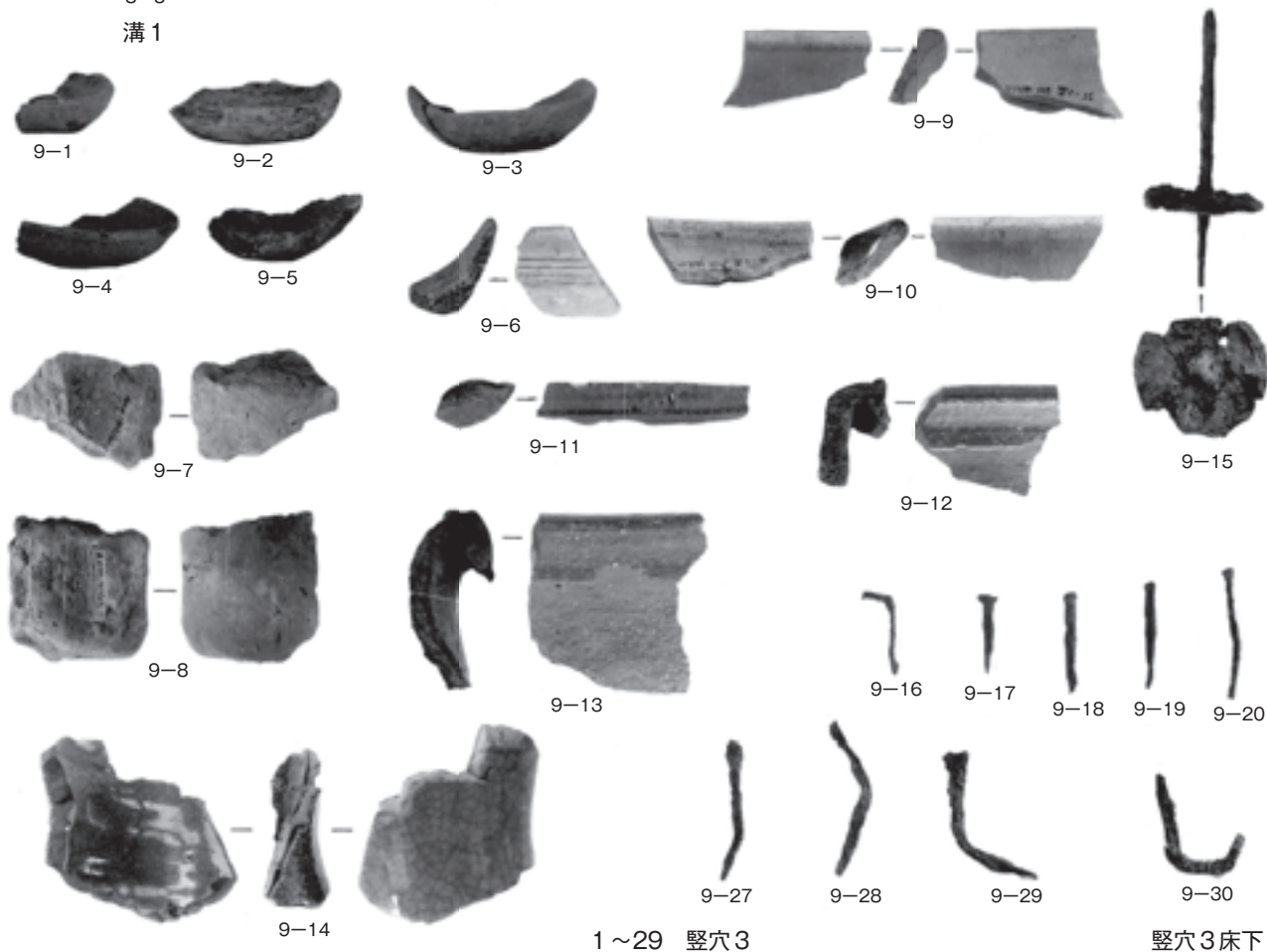
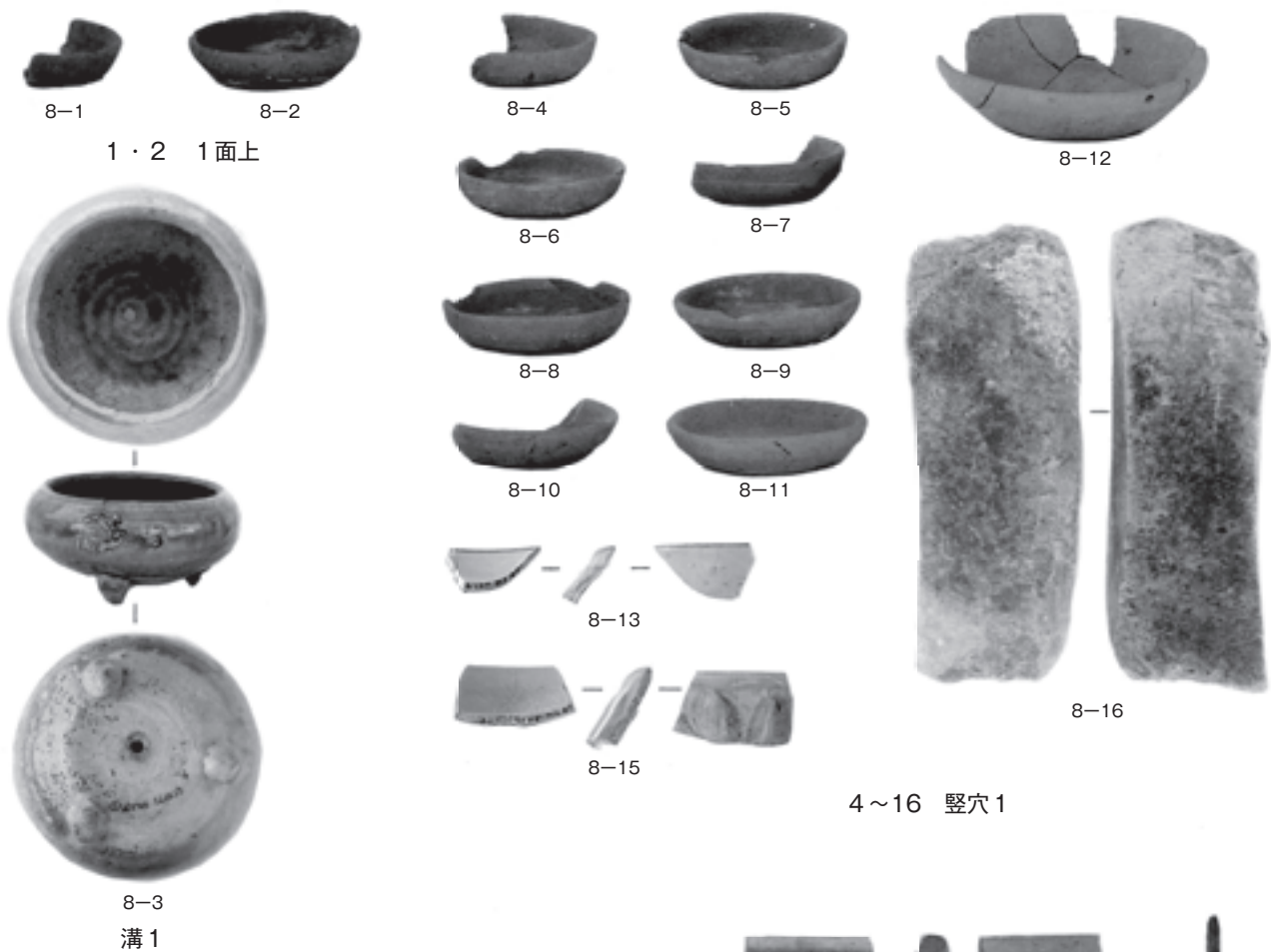


7-1 2区西壁土層断面

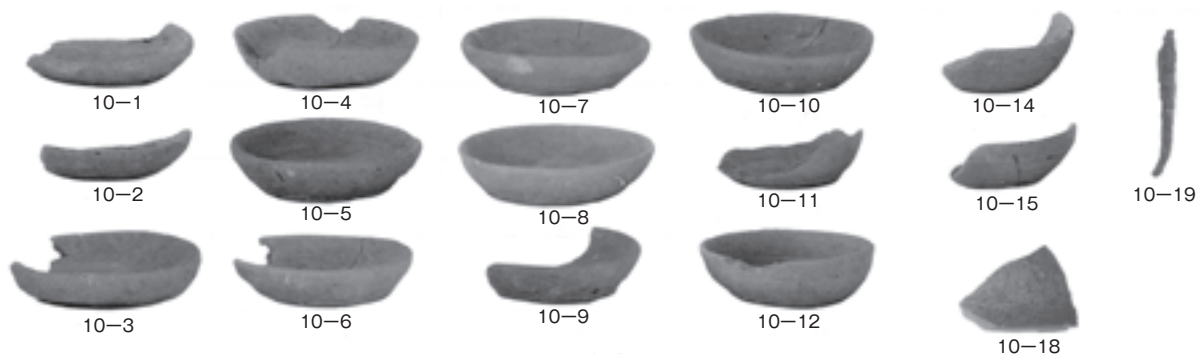


7-2 1区西壁土層断面

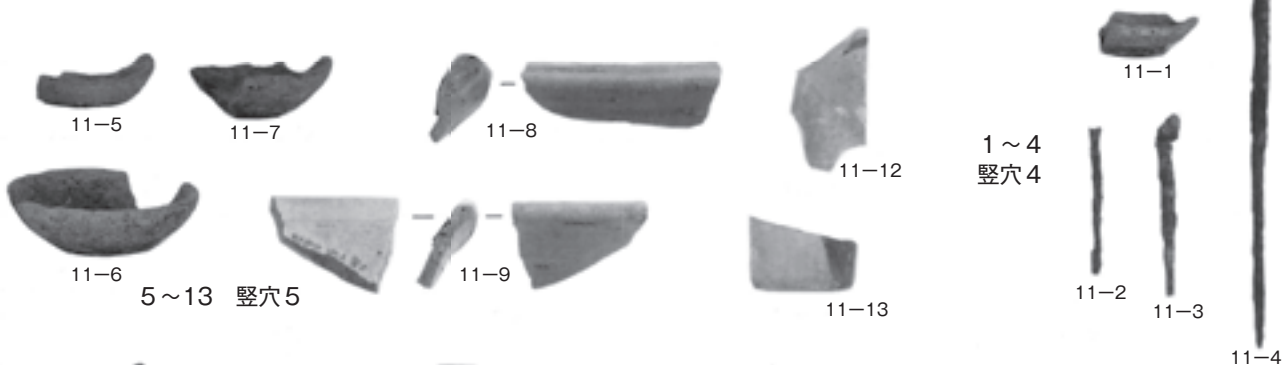
図版8



出土遺物1

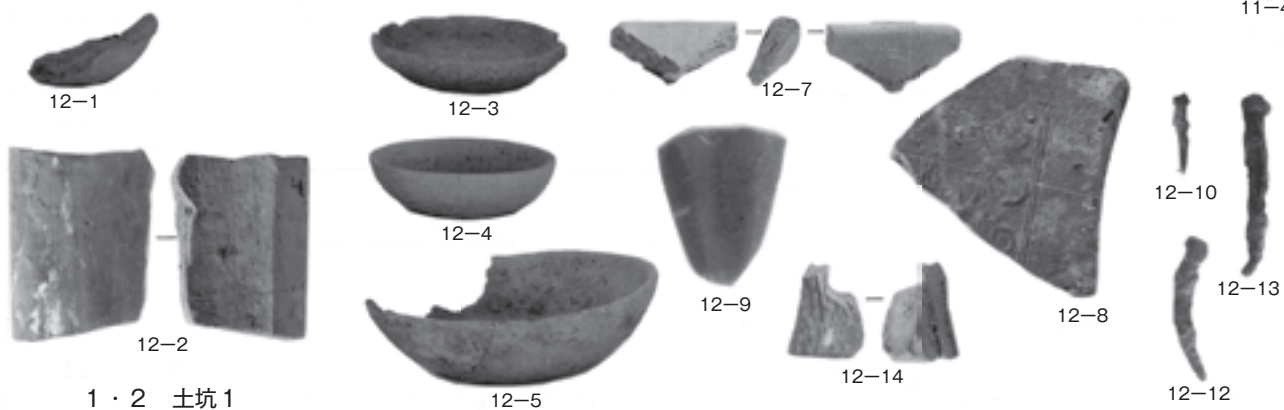


1~19 土坑9



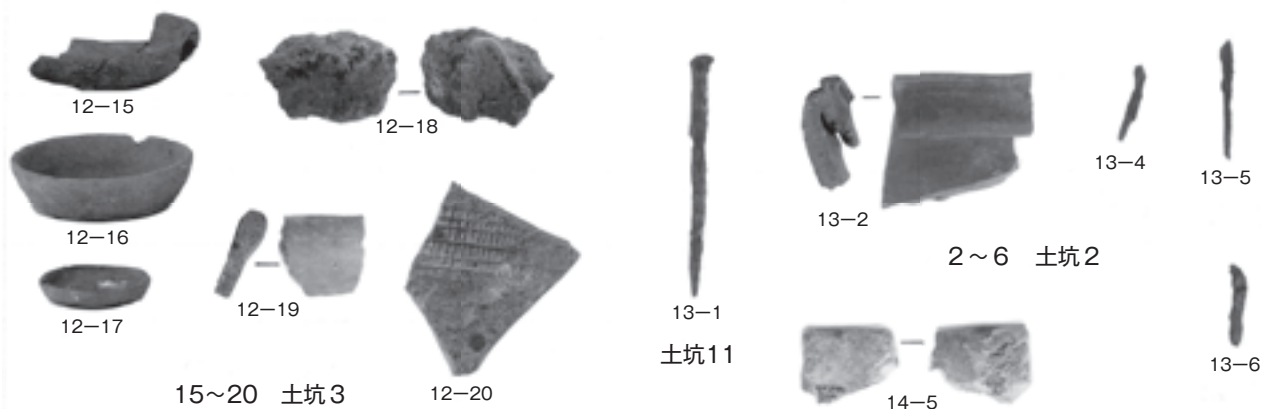
1~4 竖穴4

5~13 竖穴5



1·2 土坑1

3~14 土坑2

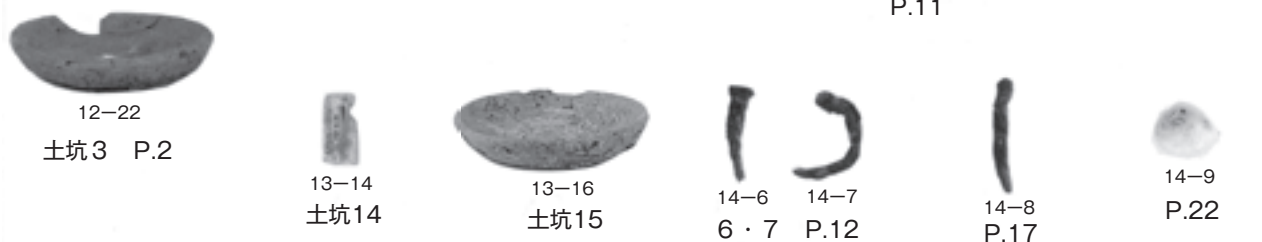


2~6 土坑2

15~20 土坑3

土坑11

14-5 P.11



土坑3 P.2

土坑14

土坑15

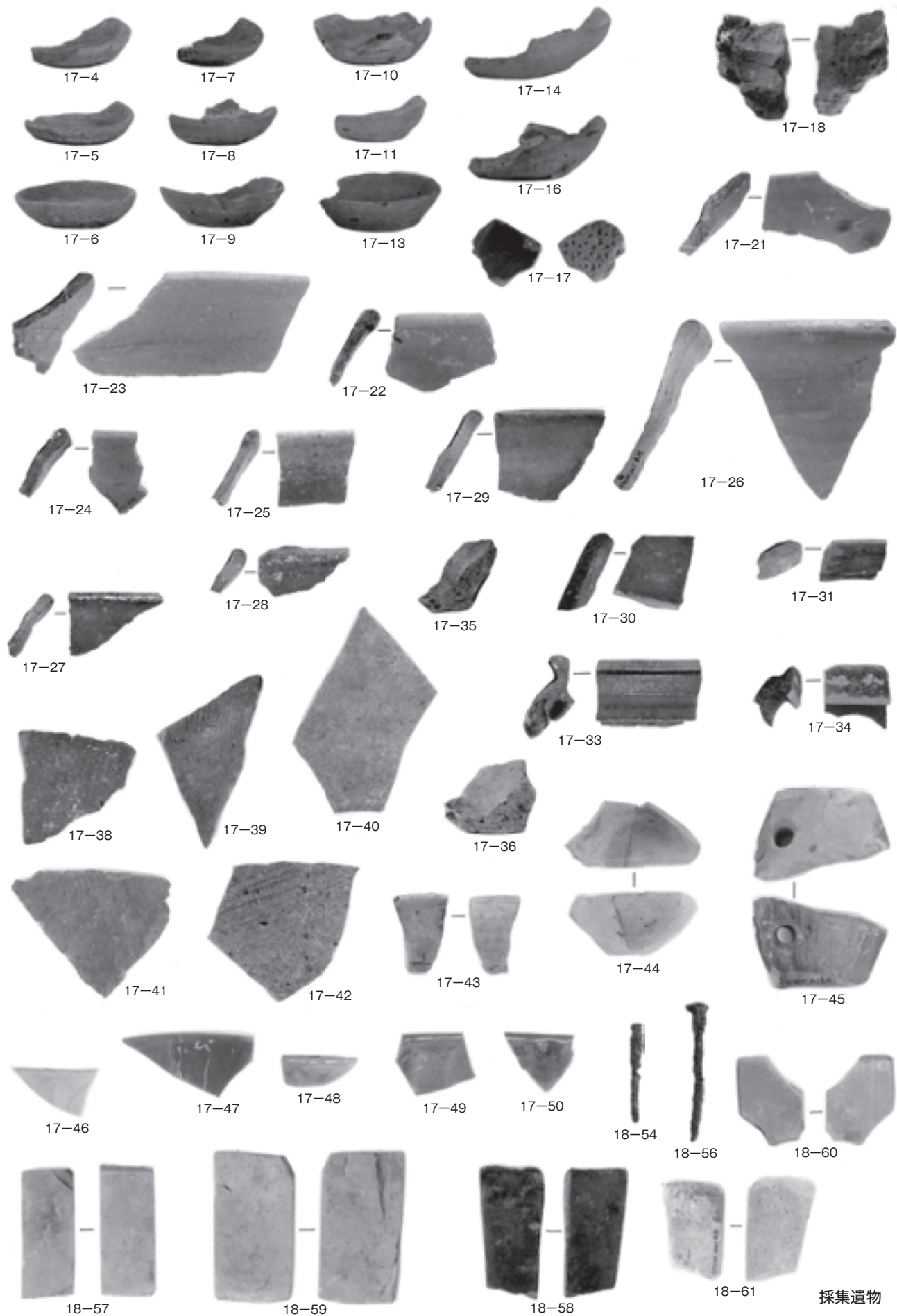
6·7 P.12

P.17

P.22

出土遺物2

图版 10



出土遺物 3

採集遺物

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいぎんきゅうちようさほうこくしよ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成24年度調査報告							
巻次	29 (第1分冊)							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	原 廣志・宇都洋平／伊丹まどか／福田 誠／馬淵和雄							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2013年3月29日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 小町三丁目 425番3	14204	242	35° 19′ 19″	139° 33′ 27″	20041210 ～ 20050221	66.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
こうとくいんしゅうへんいせき 高德院周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 長谷五丁目 382番7の一部	14204	327	35° 19′ 12″	139° 32′ 18″	20040620 ～ 20040819	50.00	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
なごえさんのうどうあと 名越山王堂跡	神奈川県鎌倉市 大町三丁目 1362番1	14204	234	35° 18′ 56″	139° 33′ 35″	20040823 ～ 20041020	27.50	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 小町三丁目 422番2外	14204	242	35° 19′ 43″	139° 33′ 25″	20051031 ～ 20060206	78.00	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
あまなわじんじゃいせきぐん 甘縄神社遺跡群	神奈川県鎌倉市 長谷一丁目 227番24	14204	177	35° 18′ 51″	139° 32′ 18″	20060306 ～ 20060501	60.00	個人専用 住宅 (車庫の築造)
げばしゅうへんいせき 下馬周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜二丁目 19番4	14204	200	35° 18′ 56″	139° 32′ 54″	20060424 ～ 20060613	82.40	個人専用 住宅 (杭基礎構造)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	都市	中世	井戸、土坑、溝、 柱穴、掘立柱建物	かわらけ、舶載陶磁器、 国産陶器、土器、石製品、 金属製品、木製品等	
こうとくいんしゅうへんいせき 高德院周辺遺跡	社寺	中世・近世	土坑、溝、柱穴列、 かわらけ溜り	かわらけ、舶載陶磁器、 国産陶器、金属製品、土 製品等	
なごえさんのうどうあと 名越山王堂跡	社寺	中世	井戸、土坑、柱穴、 板壁建物	かわらけ、舶載陶磁器、 国産陶器、石製品、金属 製品、木製品等	
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	都市	中世	土坑、溝、柱穴、 方形竪穴建築址	かわらけ、舶載磁器、国 産陶器、瓦、石製品、金 属製品、木製品等	
あまなわじんじゃいせきぐん 甘縄神社遺跡群	都市	中世	井戸、柵列、かわ らけ溜り	かわらけ、瓦	
げばしゅうへんいせき 下馬周辺遺跡	都市	中世	竪穴遺構、土坑、 柱穴、溝	土師器皿、舶載陶磁器、 国産陶器、石製品	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29

平成24年度発掘調査報告

(第1分冊)

発行日 平成25年3月29日

編集・発行 鎌倉市教育委員会

印刷 芝浦エンジニアリング株式会社

